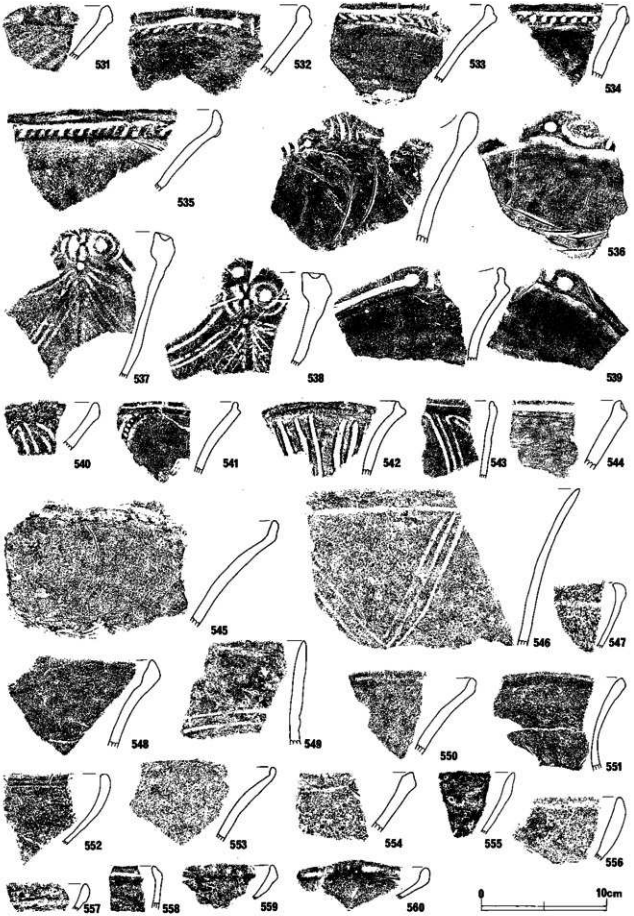
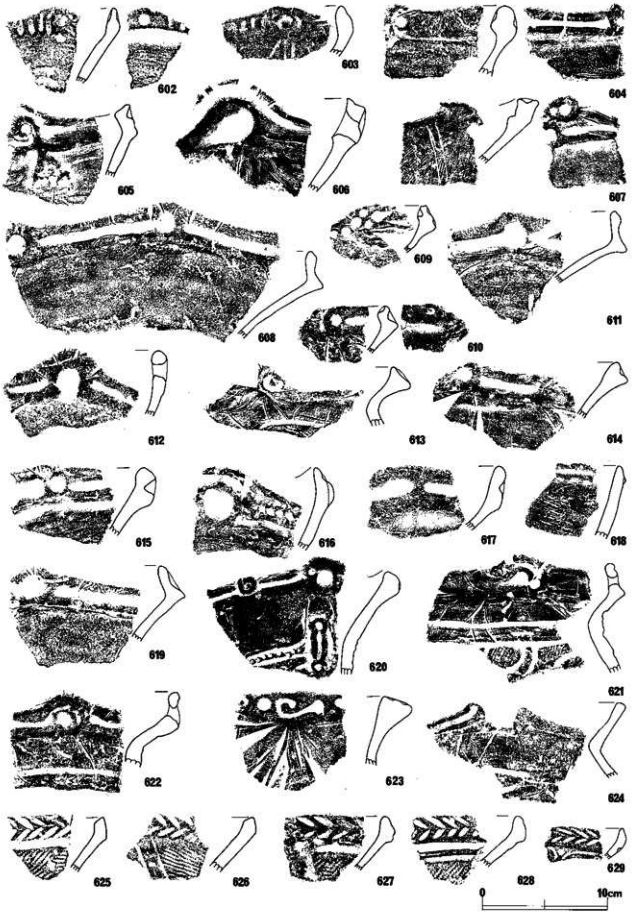
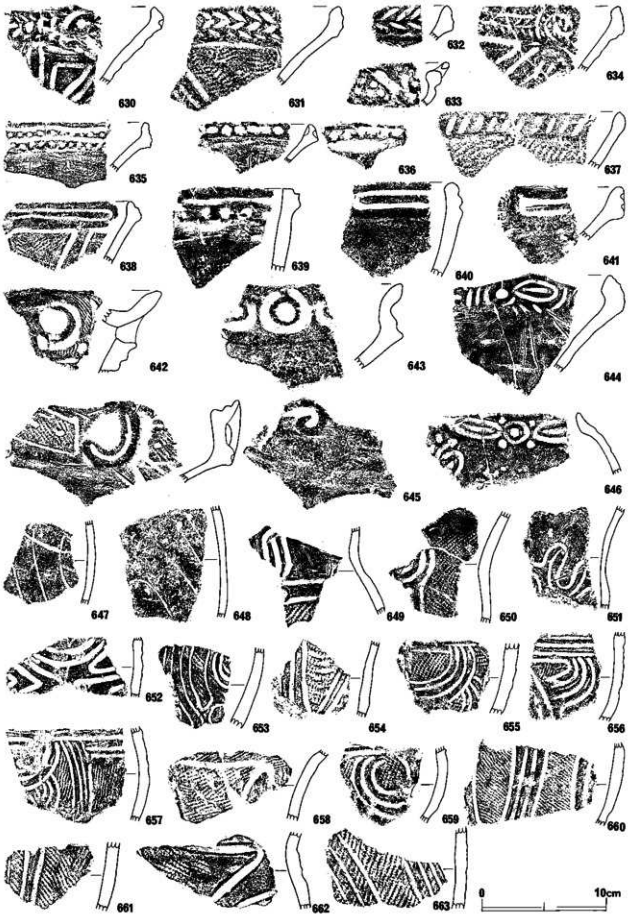


第99図　縄文土器拓影 (14)

第100図　縄文土器拓影 (15)

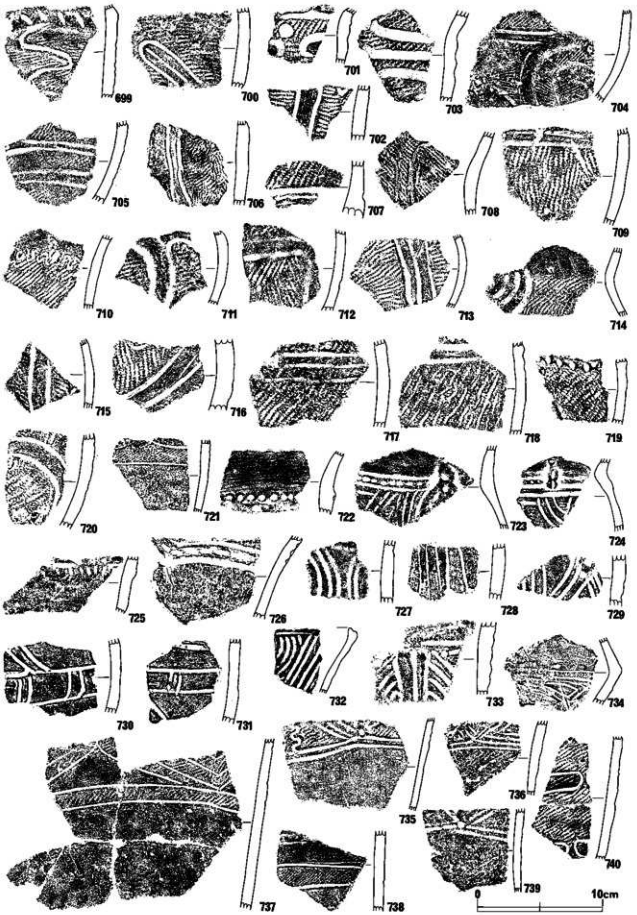


第101図　縄文土器拓影　(9)

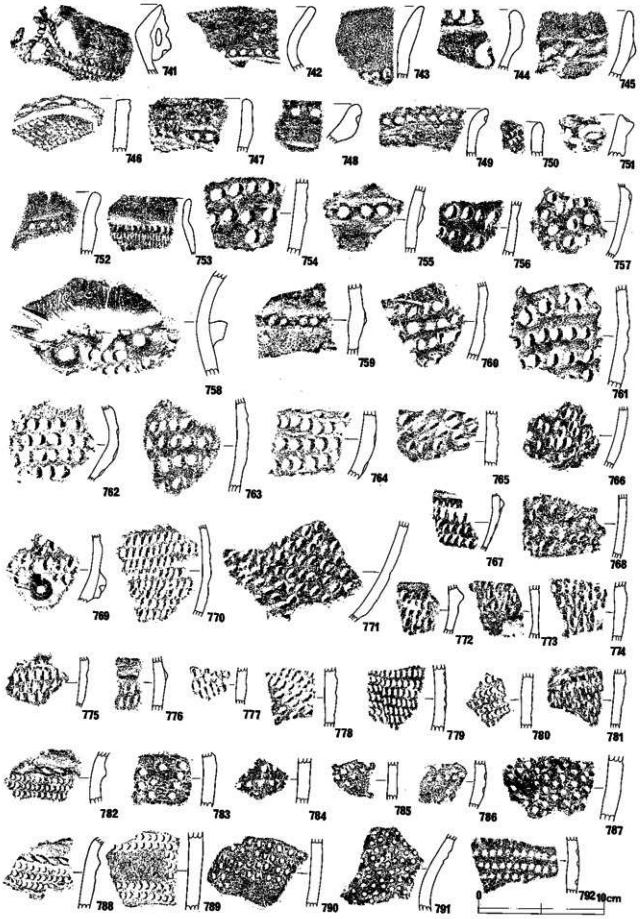


第102図　縄文土器拓影　(7)

第103図　縄文土器拓影　(8)

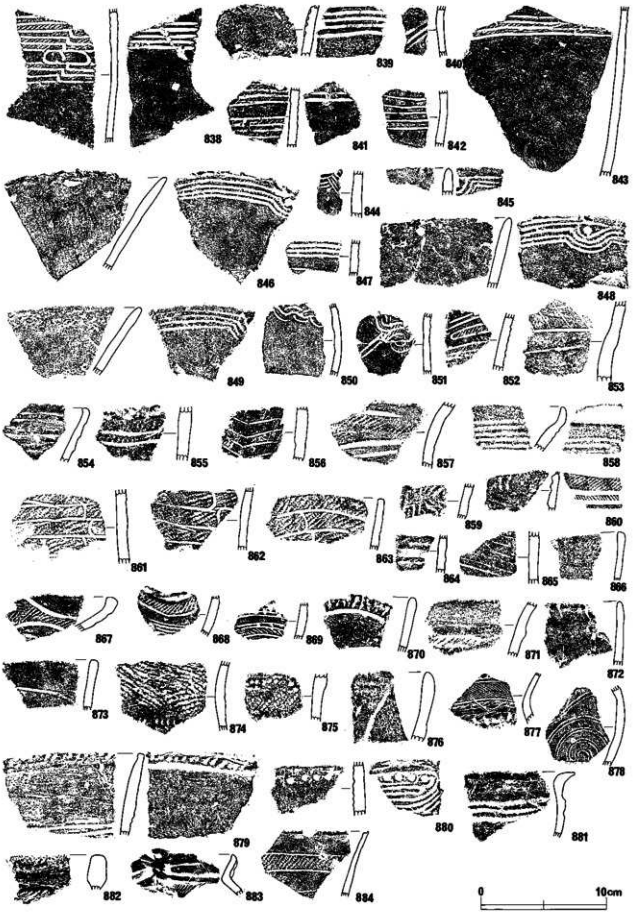


第104図　縄文土器拓影　⑩



第105図　縄文土器拓影　(20)

第106図　縄文土器拓影 (21)



第107図　縄文土器拓影　(2)

第108図　縄文土器拓影　(23)

B－2類：口縁がやや幅広く内側に屈曲するB-2類(580～603)は、屈曲した口縁部に同心円文や渦巻文が沈線で施文される。598をみると、口縁部直下から縄文を地文として沈線で文様が施文される。

全体は不明だが、ゆるい波状口縁を呈し、頸部がくびれる器形と思われる。

C類(第98図504～第101図624)

口縁部がやや広く、内側に屈曲するが、B－2類のように渦巻文や同心円文がなく、太めの沈線が施される類と口唇が肥厚したもの(613・623)を本類とした。後者は別類とすべきかもしれないが、全体の雰囲気が似ているので本類に入れた。

器形全体は不明だが、緩やかな波状口縁を呈し、621や622のように外反する口縁部が短いものがある。

D類(第101図625～第102図637)

内側に屈曲した口縁部に矢羽状の文様が沈線で施文される一群である。口縁部以下はB－2類と同様の文様である。

E類(第85図70、第104図737～739)

帯縄文(737・738)や、それに近い文様のモチーフの一群である。

第XI群土器(第84図65・66　第85図68・69・72、第105図741～第106図810)

三十稲場式土器様式を一括した。独特の球形の胴部と鱗状の刺突文が特色である。

胴部の文様には縄文だけ(65・66)と、独特の刺突文(754～782)、あるいは棒状の工具によるものと思われる径5㎜前後の小さな円形の刺突文(783～792)が施文されるものがある。789や792は刺突文によって、何らかのモチーフを描いたように思える。

第XII群土器(第85図70・71・73～75、第106図816～第107図884)

加曽利B式土器様式に比定されると思われる一群であるが、70は堀之内式土器様式に含めるべきかもしれない。破片が大半であり、器形全体を知ることのできる資料は少ない。

(2) 石　器

打製石斧・磨製石斧・石鏃・石匙・石錐・石錘・磨石・凹石・石棒等がある。いずれも、縄文時代の遺構があるF区から検出された。全体からみれば、遺構出土例は少なく、大半が包含層出土であった。時期的には縄文時代中期後半から、後期中葉の間におさまると考えられるが、それ以上の細かい時期の決定はできなかった。

剥片等を含めた石器総数は10,000点以上におよぶ。その内訳は石器類は破損品も含めて打製石斧約1,400点、磨製石斧約90点、石鏃約410点、石鏃未製品約270点、石錐約15点、石錘約15点、磨石類約600点、石棒約37点ある。剥片類は打製石斧調整剥片約1,130点(刃部再生剥片を含む)、小形石器製作剥片4,200点ある。

打製石斧の所属期が断定できないのが残念であるが、後期に属するとすればその出土量の多さは注目されるであろう。また、石鏃の出土量の多さと多量の未製品の存在は、石鏃が遺跡内で製作されていた可能性を示している。さらに、磨石類もまた出土量が多く遺跡の性格と関連して特記すべきであろう。

打製石斧(第109図1～第130図298)

打製石斧は先述したように破損品も含めて1,400点出土している。破損品と完形と思われる打製石斧の比率は2対1である。

打製石斧は長さ20cmを越える大形から、5cmほどの小形まで相当の幅がある。同時に細身、やや幅広、

短冊形、先端がやや開くものなど、形態的にもバリエーションがある。しかしながら、形態や大きさで明確に分類することはできなかった。

また摩耗痕の観察される例が相当数あった。その大半は刃部で、刃部に対してほぼ垂直の方向に認められた。まれに頭部にあたる部分に観察される例もある。

円形掻器(第131図299～第135図358)

小形の円形の石器である。長さ2.5cm程度の極めて小さいものと、長さ4cmほどの小形の二者がある。形態は整った円形や、長円形にちかいもの、やや先端が尖るものなどがあるが、概ね円形を意識して調整剥離されている。この調整剥離は平坦で、周囲から表裏両面に向かってなされており、とくに急角度な剥離はされていない。石鏃の未製品と区別しがたい部分もあるが、多くが円形で、縄文時代中期後葉から後期前葉にかけての定形的な石器として考えられるであろう。

石　鏃(第135図359～第139図491)

形態は様々である。抉りのない無茎(359～434)・抉りをもつもの(396～434)・強い抉りをもつもの(436～452)・輪郭がやや膨らむ例(457～487)・有茎などもあり、さらに大きさや、細部の形態で細分できる。

尖頭器(第139図492・493)

大形の石鏃あるいはその未製品とも考えられるが、丹念に調整剥離がなされること、形態が石鏃とは異なることから尖頭器としておく。

石鏃未製品(第140図494～第143図564)

これには様々な製作段階のものがある。わずかに一側縁に加工を施したものから、ほぼ完形にちかいものまで多様である。また素材となる剥片にも様々な形態があり、とくに一定の規格はない。多くは剥離されたままの横広剥片を利用しているようである。打点の位置も横にあったり、先端側にあったりして、一定していない。調整剥離も、例えば右側縁は基部から先端にむけてといった傾向はないようである。

石　錐(第143図565～586)

形態から、A類(565・566)はつまみ部分が広く、錐部の長さが短いもの、B類(567～570)はつまみ部が小さく、錐部の長いもの、C類(572～586)はつまみをもたないものの3類に細分できる。

石　匙(第144図587～591)

横形と縦形がある。587は匙部がやや長方形、588・589は扇形を呈している。591は調整加工のやや粗い縦形で、類例は少ない。

両端打撃のあるフレーク(第145図592～599)

剥片の両端から同時に剥離面が形成されている剥片を一括した。

磨製石斧(第145図600～第148図)

やや太めもあるが、原則的には定角式である。大きさは極めて小形のものから、15cmの大きさまで幅がある。

磨石類(第149図～第165図)

ここで磨石類としたものは、一般的分類の敲き石(凹石)・磨石を包括した。出土点数は破損品も含めて563点を数え、破損品が30%と比率は低い。遺構内出土は145点で大半が遺構外であった。前者の内訳は、貯蔵穴と土坑からが108点と8割弱を占め、配石からは30点にとどまった。また、水さらし場状遺構周辺からは7点、住居址からは5点が得られている。本報告の掲載資料は遺構内出土の全資料と一部の遺構外資料に限った。

いわゆる敲き石(凹石)のくぼみは、1～3㎜ほどの浅いものと5㎜以上の深いものがある。浅いものは対象物を直接敲く機能がよくあてはまると考えられ、一方、深いものは、打撃を集中するといった集中敲打による場合と、間接的に打撃する(棒状のものをはさむ)際に使用された場合が想定される。このため、実測表現に関しては約4㎜以上のくぼみを穴として表現し、浅いものとは区分した。機能面のあり方から以下のように8分類される。

1類：打面のみもつもの(688～808)。形態的には棒状・円形・楕円形状など多様である。688～694は端部に剥離痕が認められる資料で、対象物を考慮した場合、他の打面をもつ資料とは区別される一群である。697・699・720・723は欠損した鋭利な端部に刃こぼれ状の剥離痕や打痕がある資料で、欠損品の再利用と考えるよりこの端部がもつ優位性を利用したものであろう。特異であるが出土量は少ない。704は楔状に利用されたと考えられるが、ここで扱った。807は石鍛形。806は台石とも考えられる。打面痕跡については、あばた状を呈するものが大半であり、一部に擦痕状の傷が認められた例もあったがごく少ない。なお、渡辺誠が報告した岐阜県白川村のトチムキ石に類似するような資料はなかった。

2類：磨り面のみもつもの(809～837)。大小はあるものの、円形・楕円形が一般的である。827は間接的に打撃する際に使用されたものと考えられる。

3類：打面と磨り面とをもつもの(838～862・866～887)。大小はあるものの、円形・楕円形のもが一般的である。875・876・878・885は側縁部に磨り面をもつものである。

4類：打面・磨り面・くぼみとをもつもの(863～865・888～892)。

5類：打面とくぼみをもつもの(893～906)。

6類：くぼみのみもつもの(905～911)。

7類：磨り面とくぼみをもつもの(912～913)。

8類：断面三角形状を呈す礫の側縁部に磨り面をもつもの(914～917)。

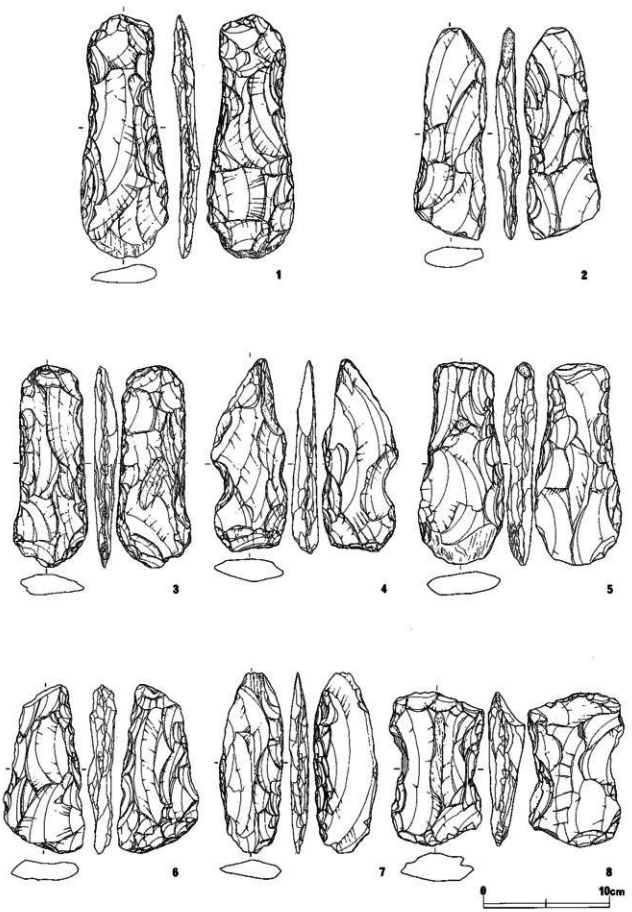
1類が叩き石、2・8類が磨石、6類が敲き石(凹石)にあたり、そのほかはこれらの併用といえる。各類ともに形態の大小はあるものの、いずれも転石の利用といえよう。

石　皿(第166図～第174図)

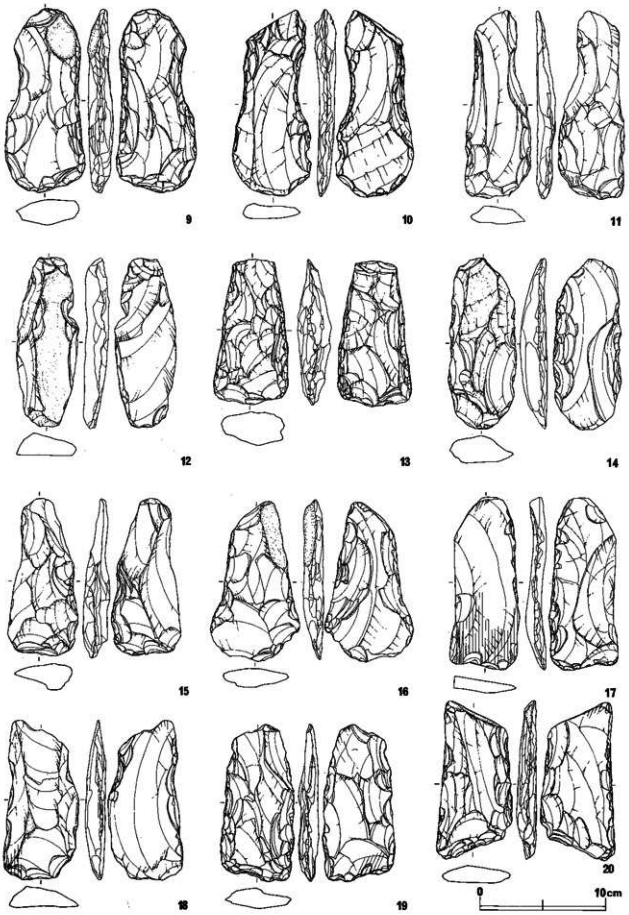
石皿は作業面が大きくくぼんでいるものと、平坦なものに2分されよう。しかしながら、本遺跡では使用面(作業面)をもつ大型の礫が多数認められ、これらのなかに磨り面が認められる例が多く、台石・砥石として考えられるものも多い。両者の分類は困難であり、ここでは主に一般的な作業面がくぼんでいるものについて石皿として報告する。なお、本報告では数点の石皿の破片を除いてはほぼすべて掲載した。総数35点を数える。一般に指摘されるように完形品は7点と少なく、破損品が大半を占める。形態的には長方形を基本とした四つ足付きで、縁を作ったものと、円形を基本としたものとに二分され、前者が全体に占める割合は少ない。

使用面をもつ礫(第175図～第1063図)

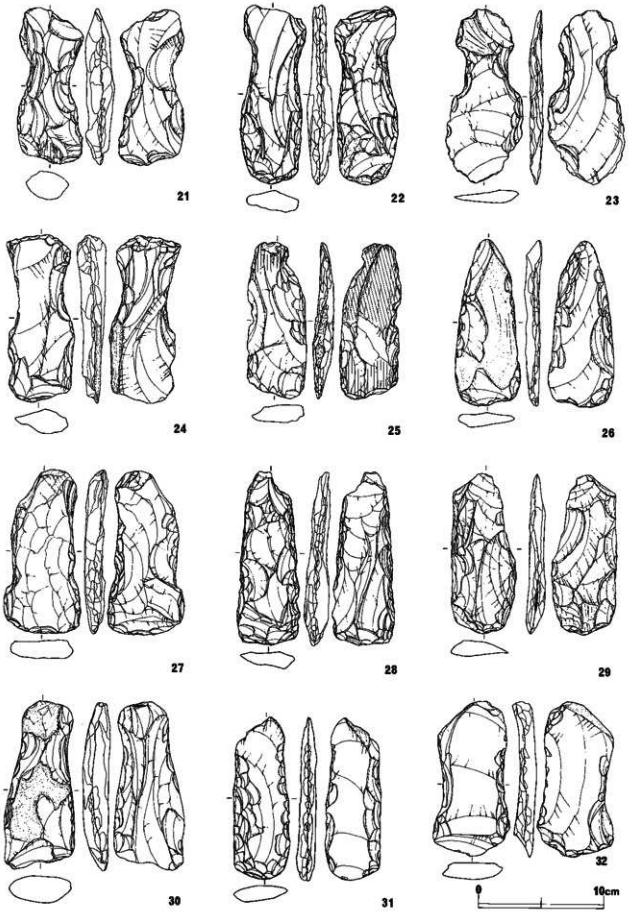
多孔石・石皿・台石・砥石を含んだ総称である。貯蔵穴からの出土が主となっている。作業面として磨り面をもつものは、石皿・砥石といった範疇のどちらに入るか分け難いものが多い。多孔石(951～993・1051～1055など)は石皿同様、磨り面と共存するもの(1049～1050)もある。998・999は立石とも考えられよう。いずれも貯蔵穴内からの出土である。994・1003・1004・1008・1030・1037・1038・1040・1041・1042・1043・1044・1047などは、地表に安定するように直にすえた場合、作業面が地表に対して斜面となるので、一般の石皿のように地表に平行した面を作らない。石皿の一般的な利用法と考えられる製粉作業を考えた場合、粉は地表に溜っていくことになろう。また、1039・1038などのよう



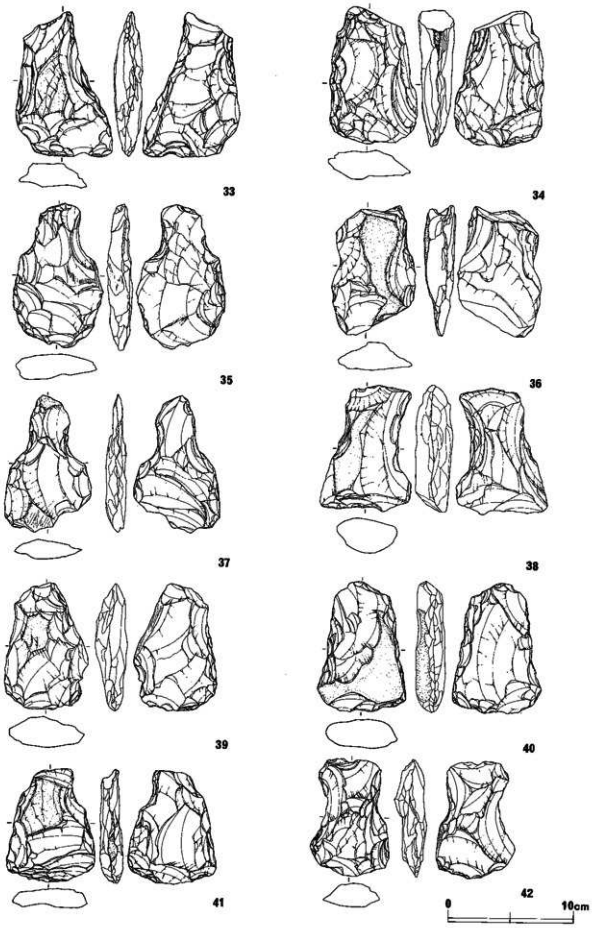
第109図　縄文時代石器(1)－打製石斧　〈1〉



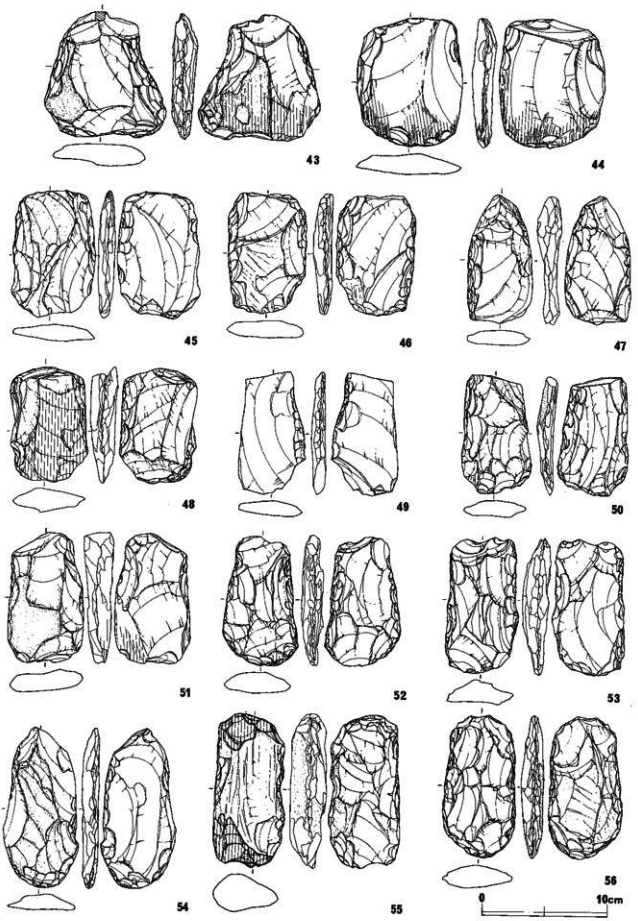
第110図　縄文時代石器(2)－打製石斧　〈２〉



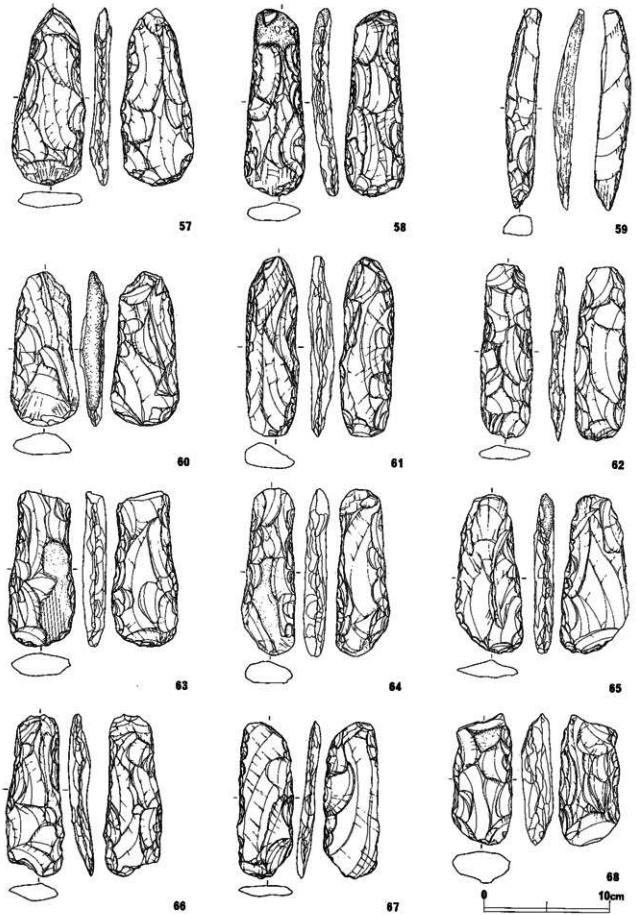
第111図　縄文時代石器(3)－打製石斧　〈3〉



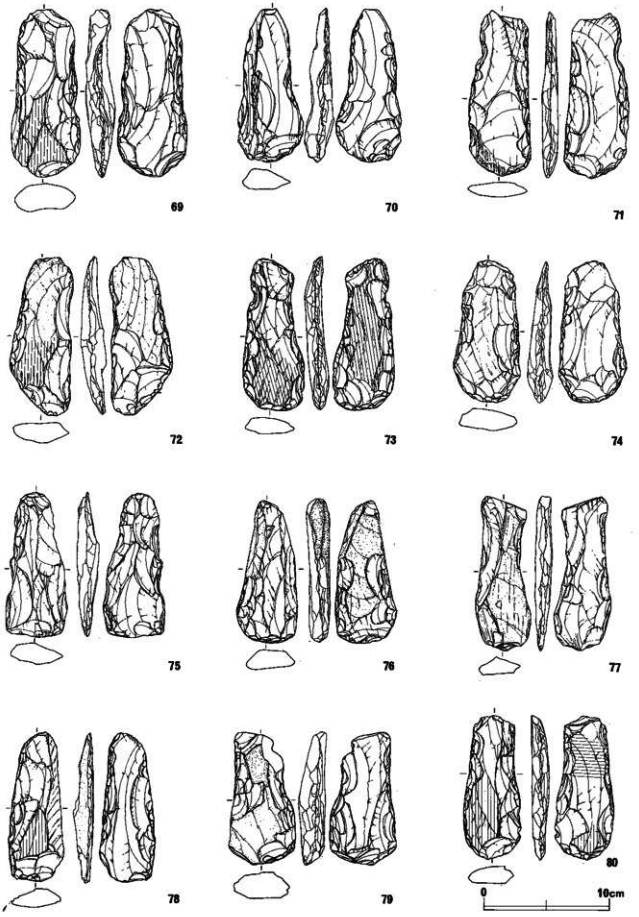
第112図　縄文時代石器(4)－打製石斧　〈4〉



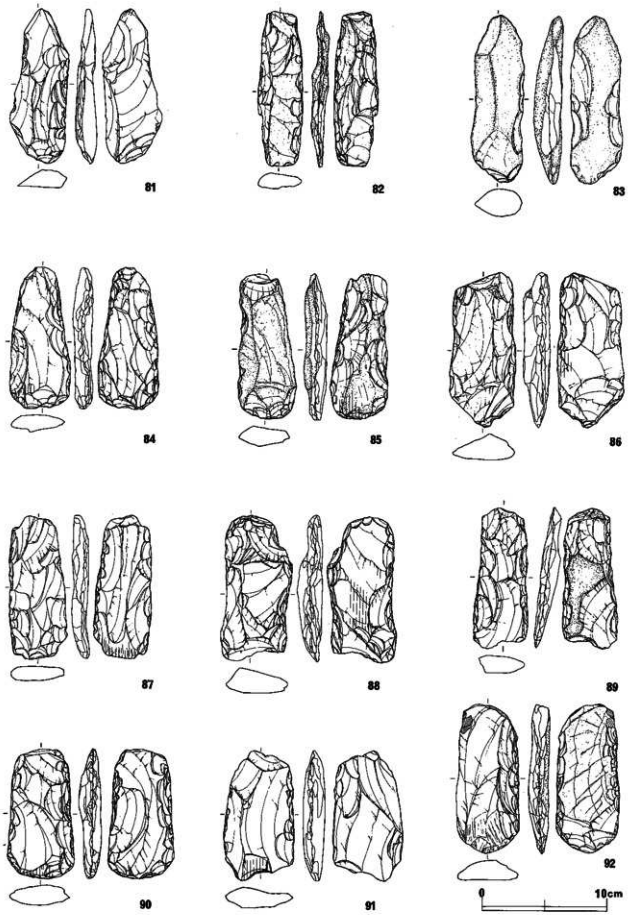
第113図　縄文時代石器(5)－打製石斧　〈5〉



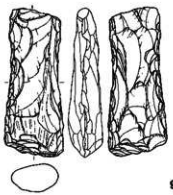
第114図　縄文時代石器(6)－打製石斧　〈6〉

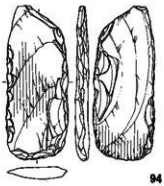


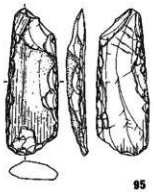
第115図　縄文時代石器(7)ー打製石斧　〈7〉

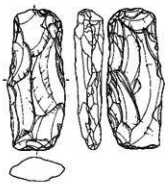


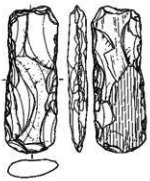
第116図　縄文時代石器(8)－打製石斧　〈8〉

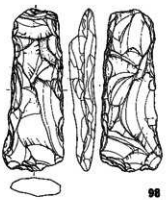


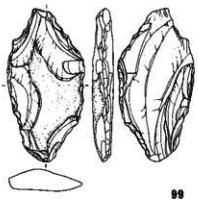


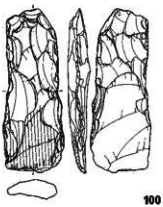


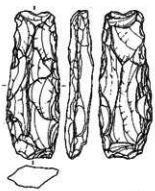


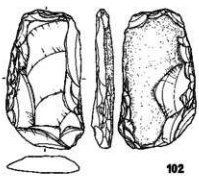


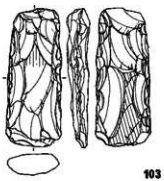


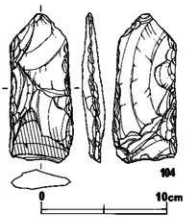




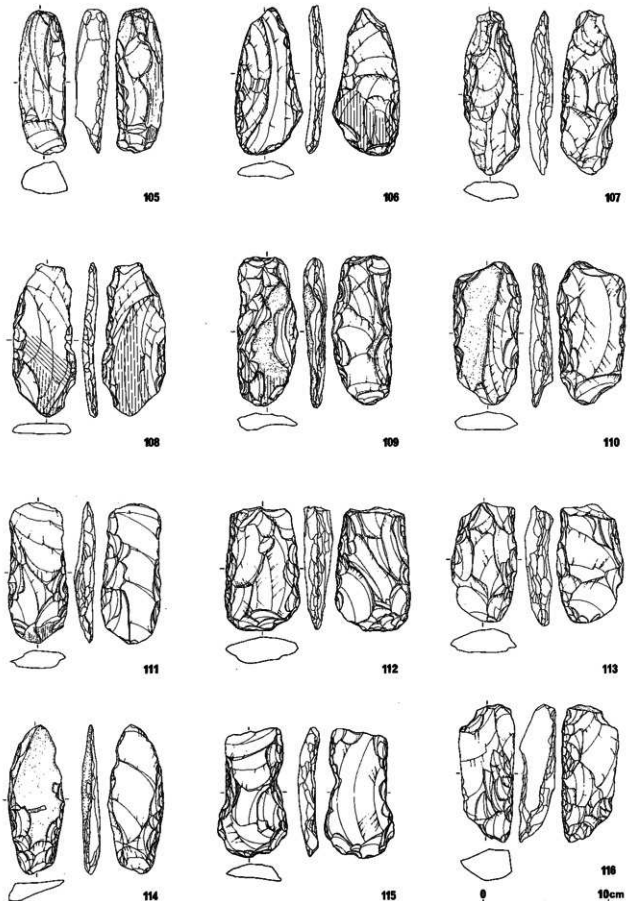




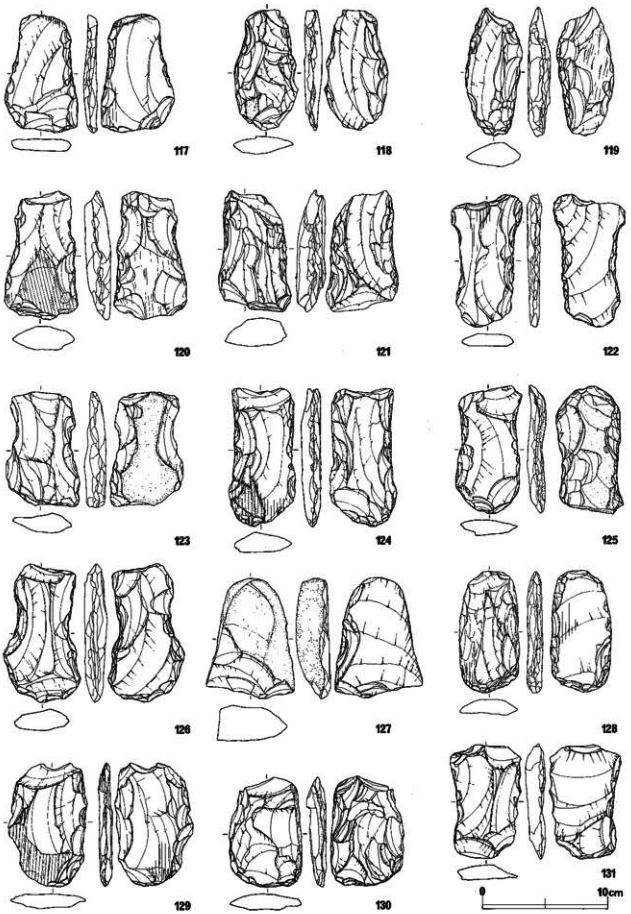




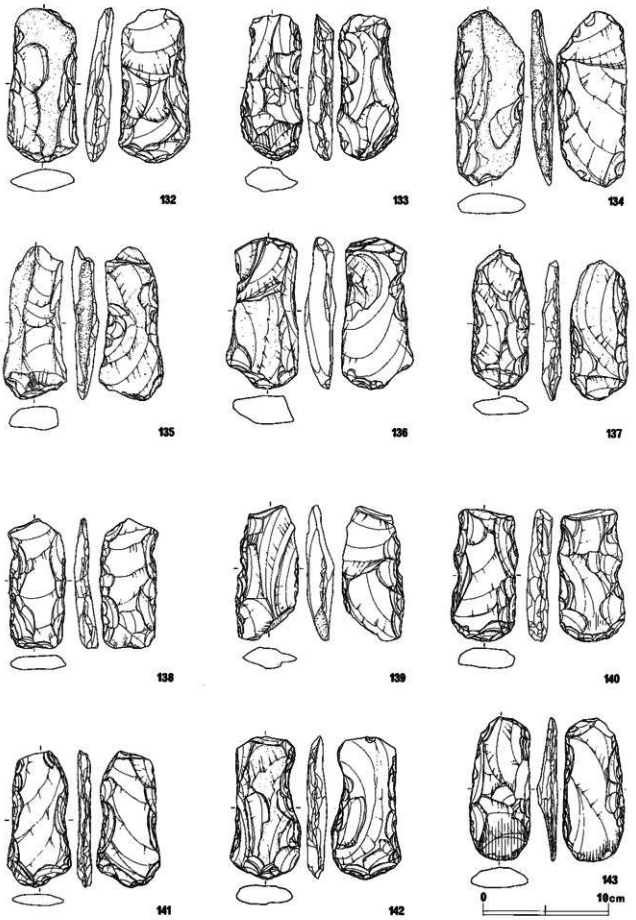
第117図　縄文時代石器(9)－打製石斧　〈9〉



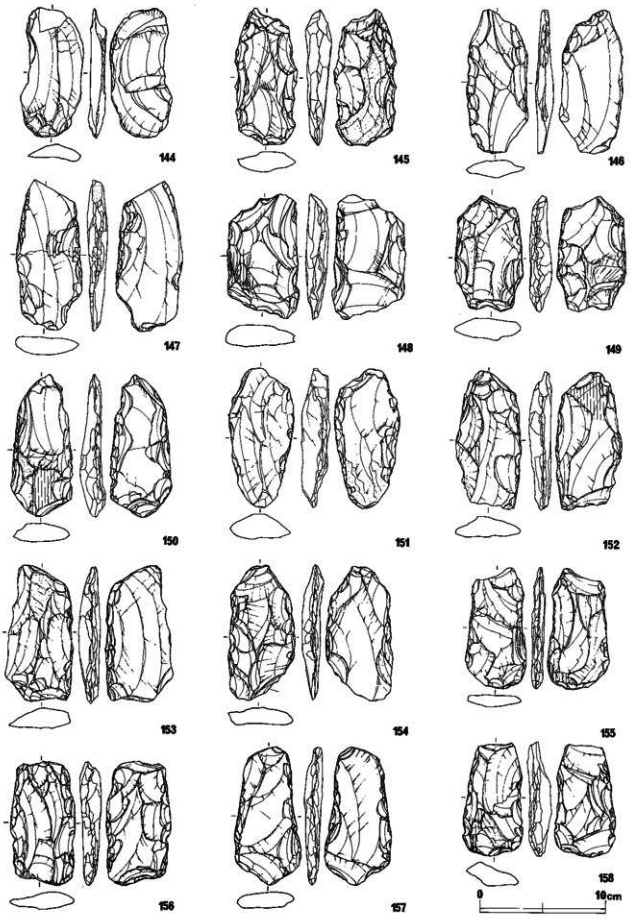
第118図　縄文時代石器群－打製石斧　〈10〉



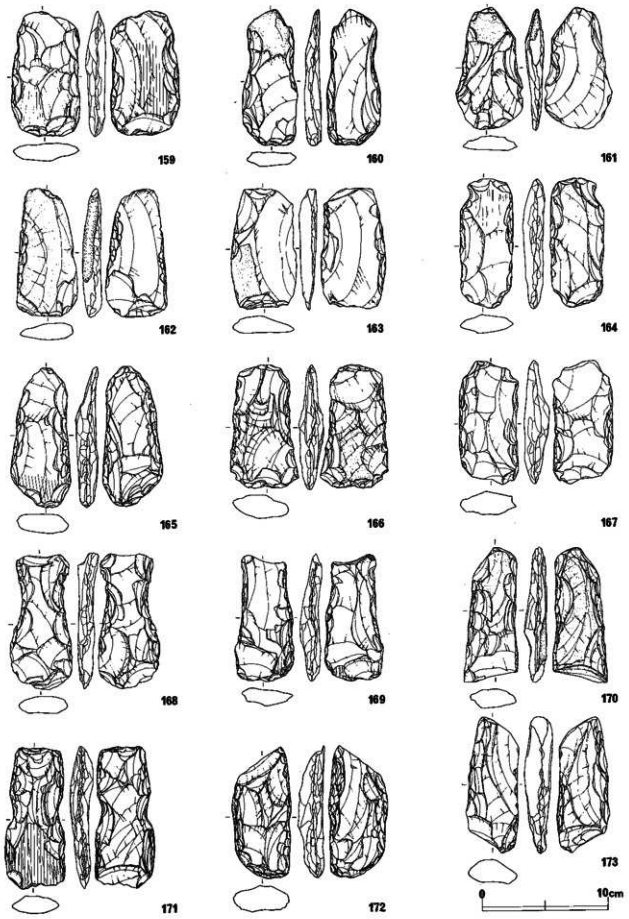
第119図　縄文時代石器(11)－打製石斧　〈11〉



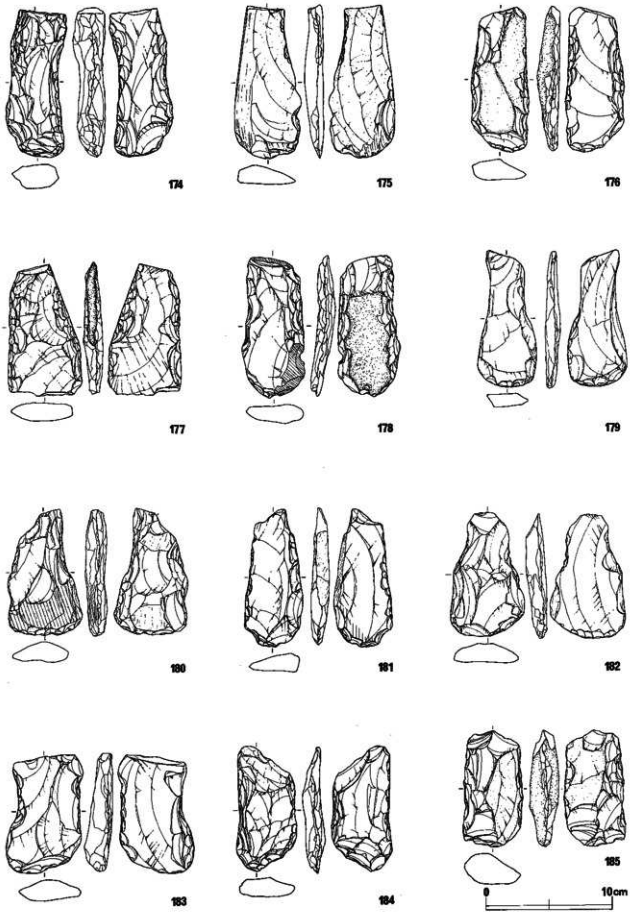
第120図　縄文時代石器(12)－打製石斧　〈12〉



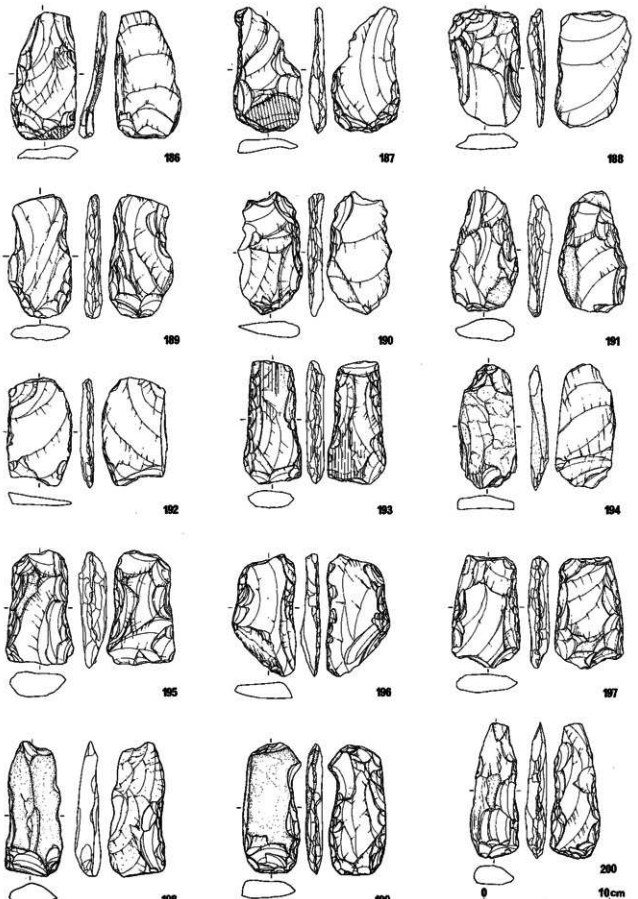
第121図　縄文時代石器(13)－打製石斧　〈13〉



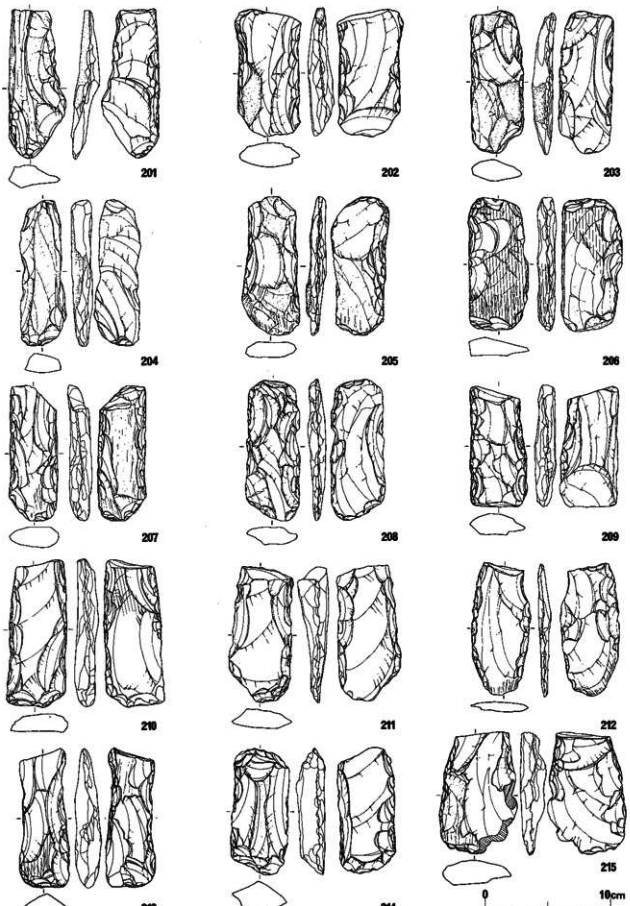
第122図　縄文時代石器(4)－打製石斧　〈14〉



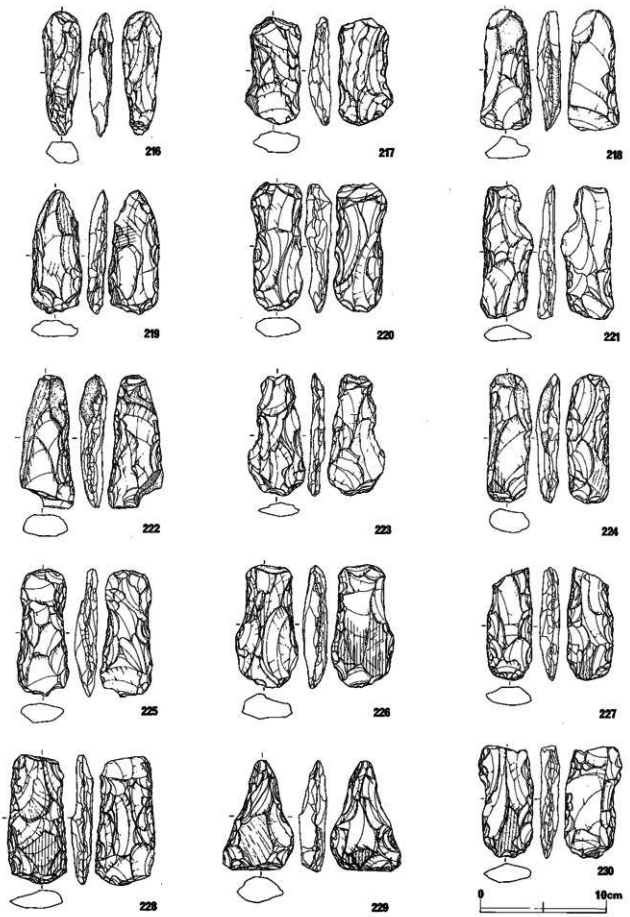
第123図　縄文時代石器09－打製石斧　〈15〉



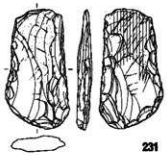
第124図　縄文時代石器09－打製石斧　〈16〉

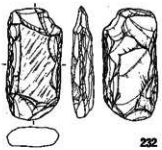


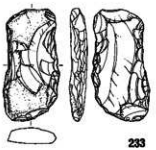
第125図　縄文時代石器(17)－打製石斧　〈17〉

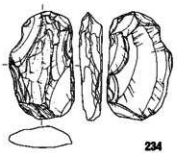


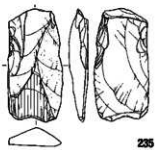
第126図　縄文時代石器(8)－打製石斧　〈18〉

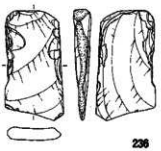


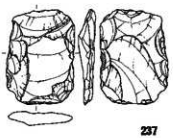


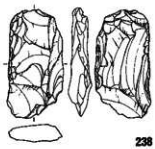


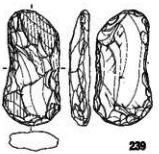


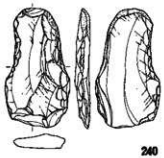


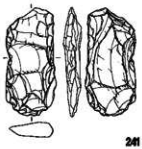


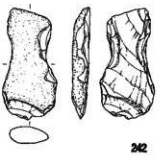


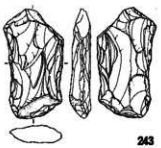


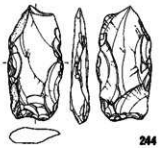


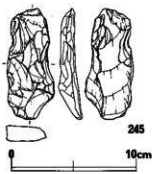




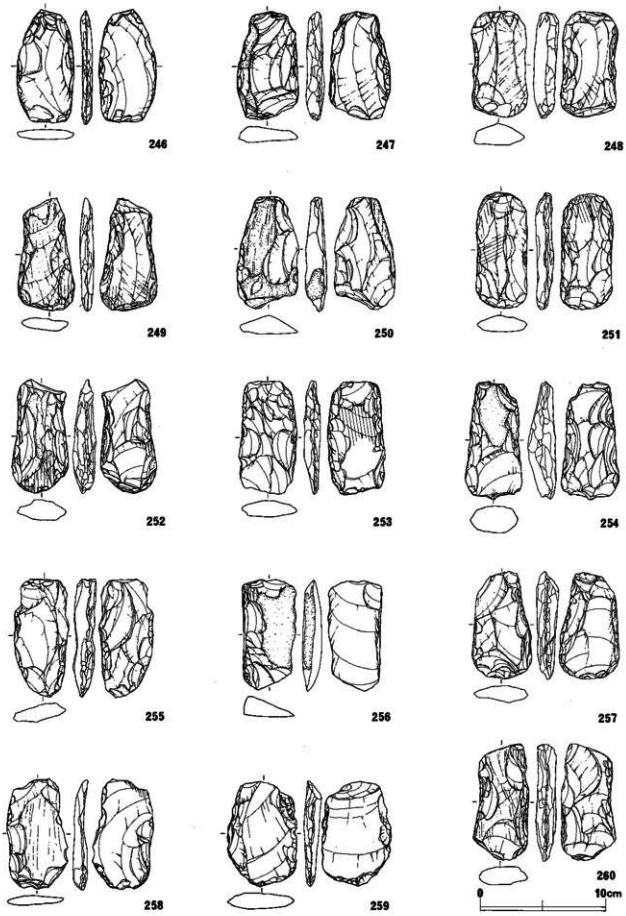




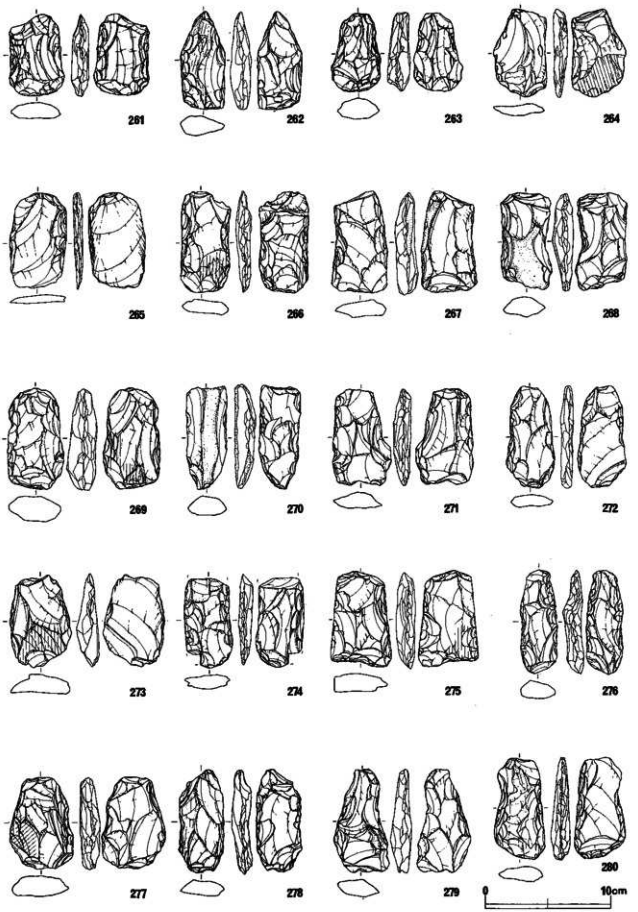




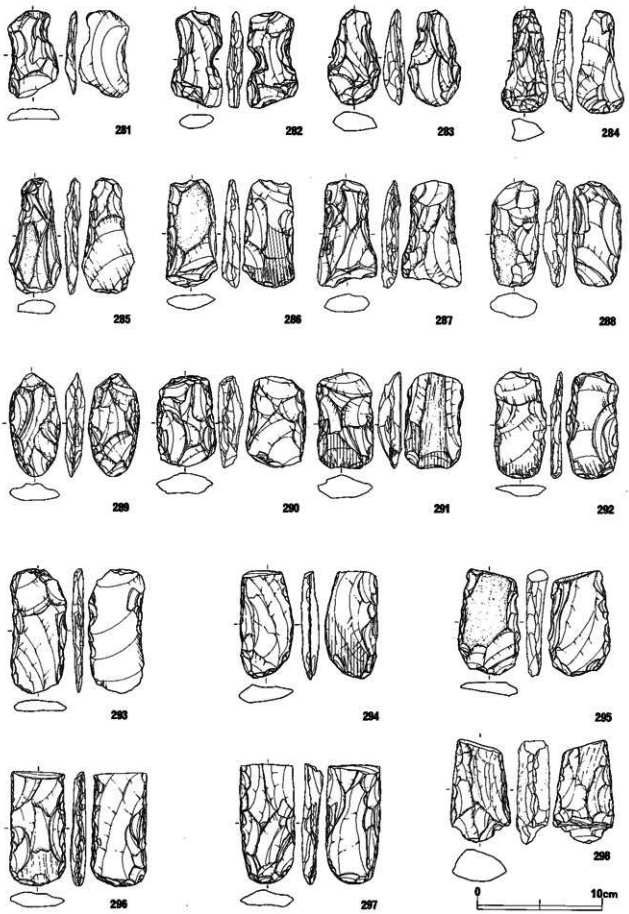
第127図　縄文時代石器群－打製石斧　〈19〉



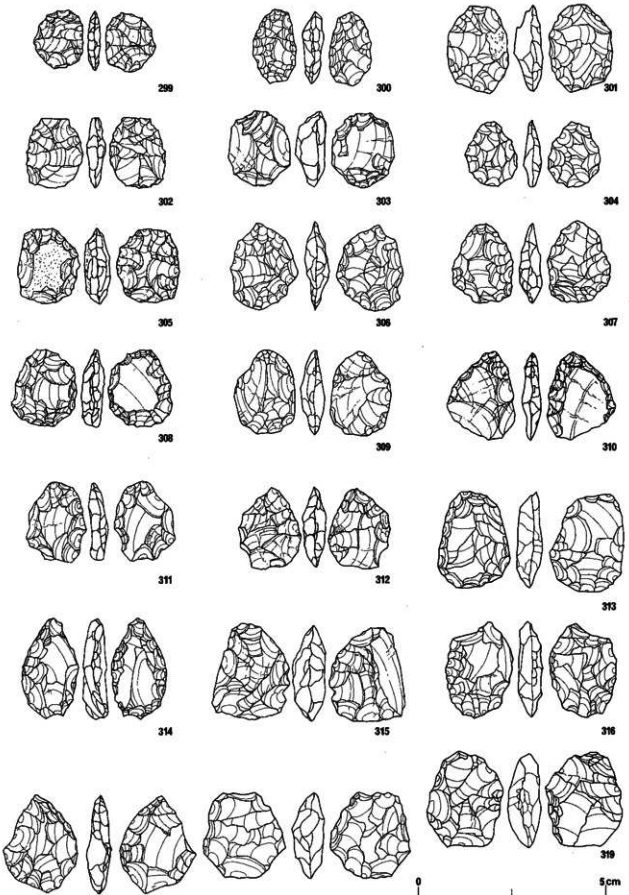
第128図　縄文時代石器㈱－打製石斧　〈20〉



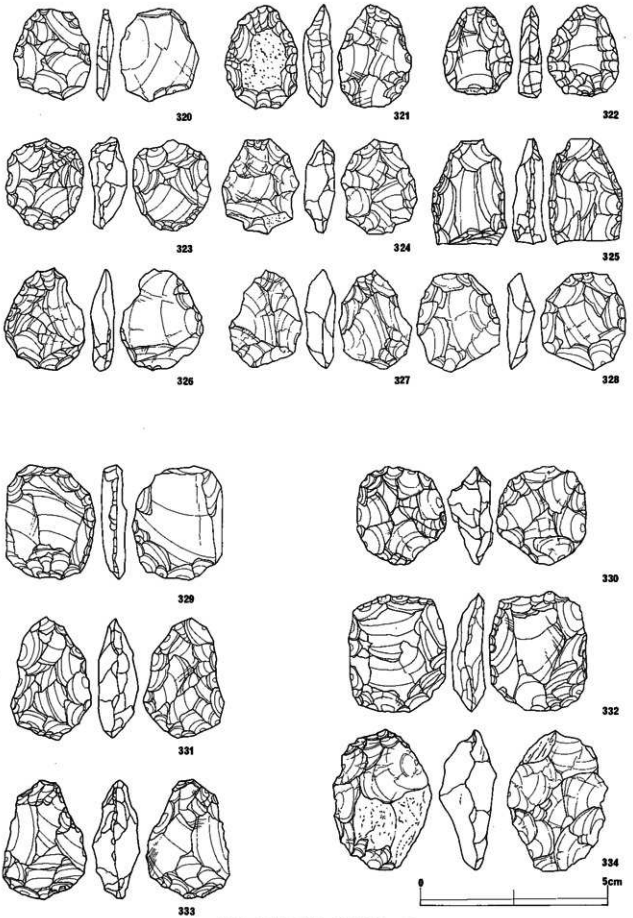
第129図　縄文時代石器(1)－打製石斧　〈21〉



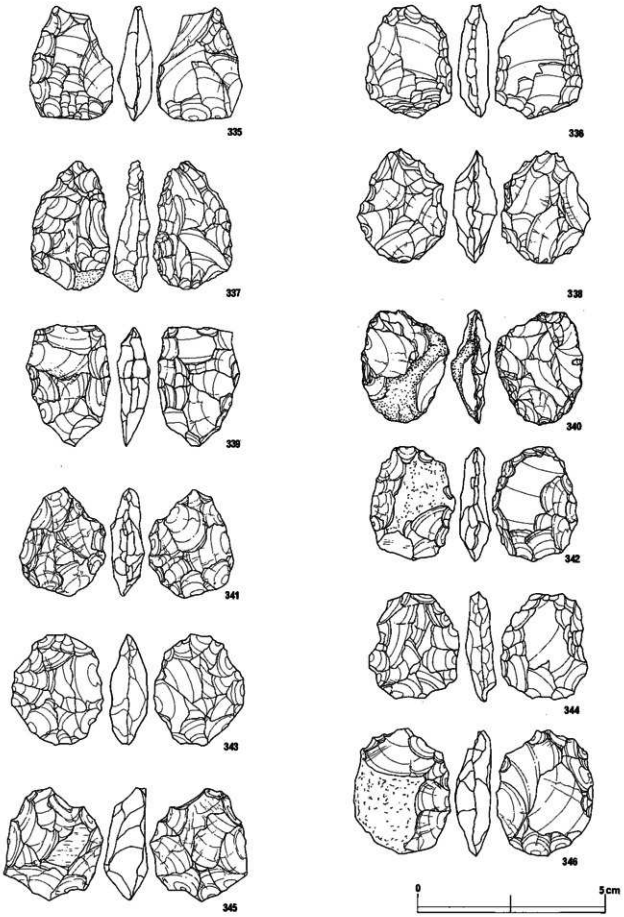
第130図　縄文時代石器(22)－打製石斧　〈22〉



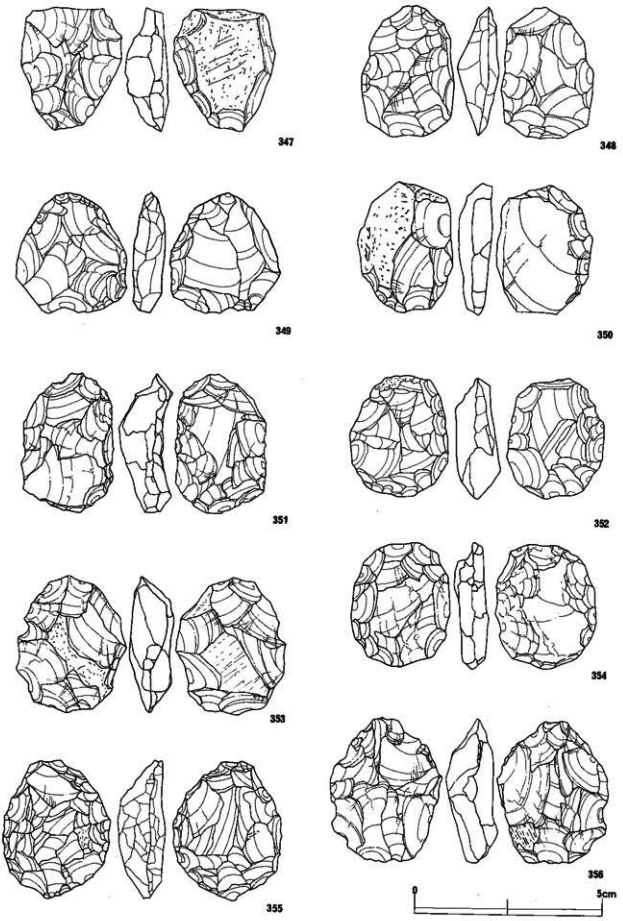
第131図　縄文石器03－円形掻器　〈1〉



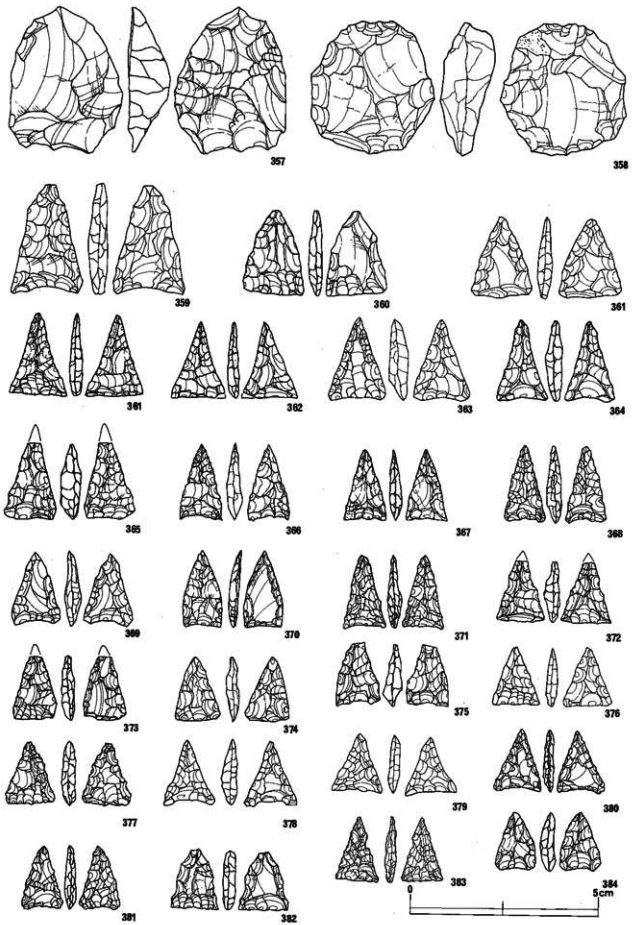
第132図　縄文石器04－円形掻器　〈2〉



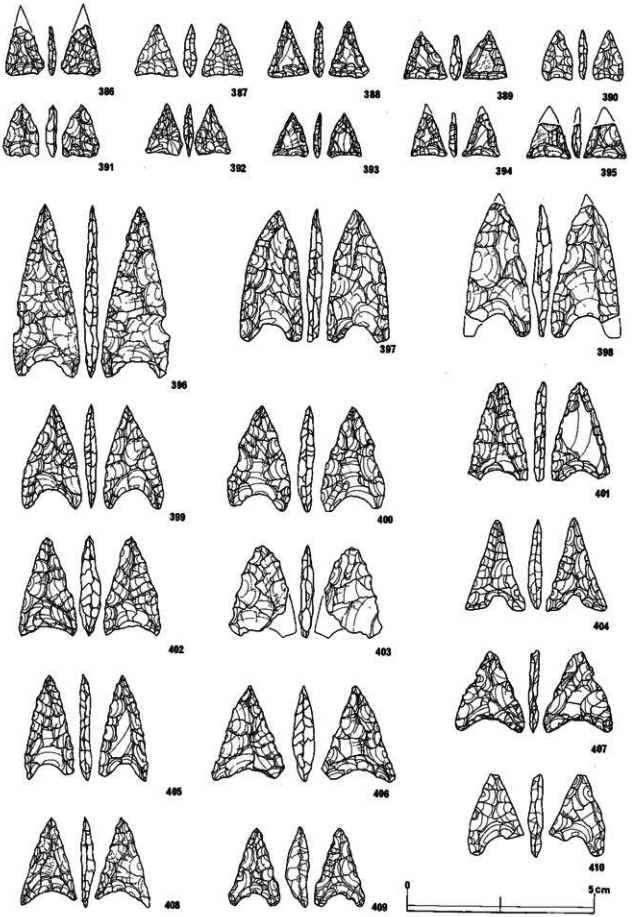
第133図　縄文石器(5)－円形掻器　〈3〉



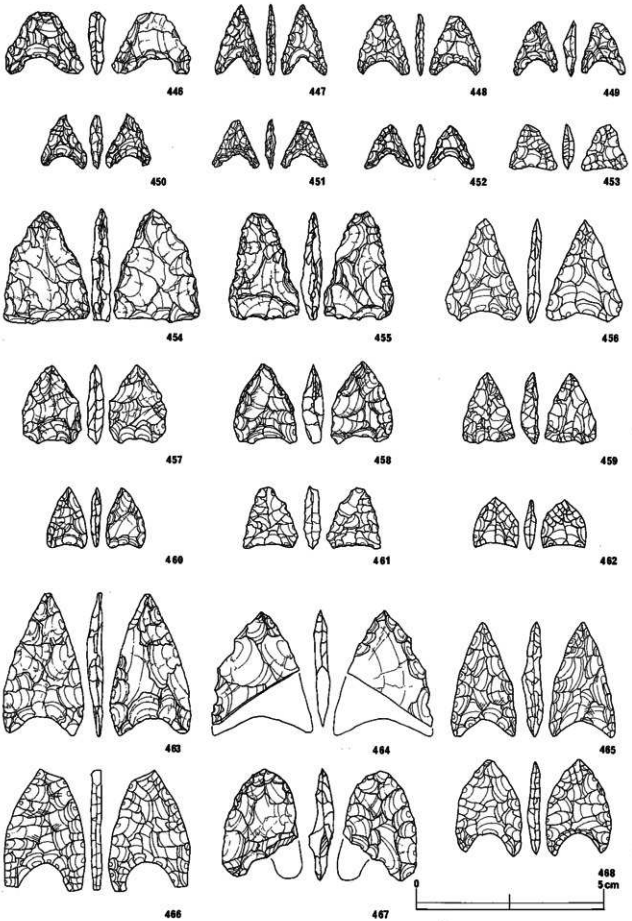
第134図　縄文石器09－円形掻器　〈4〉



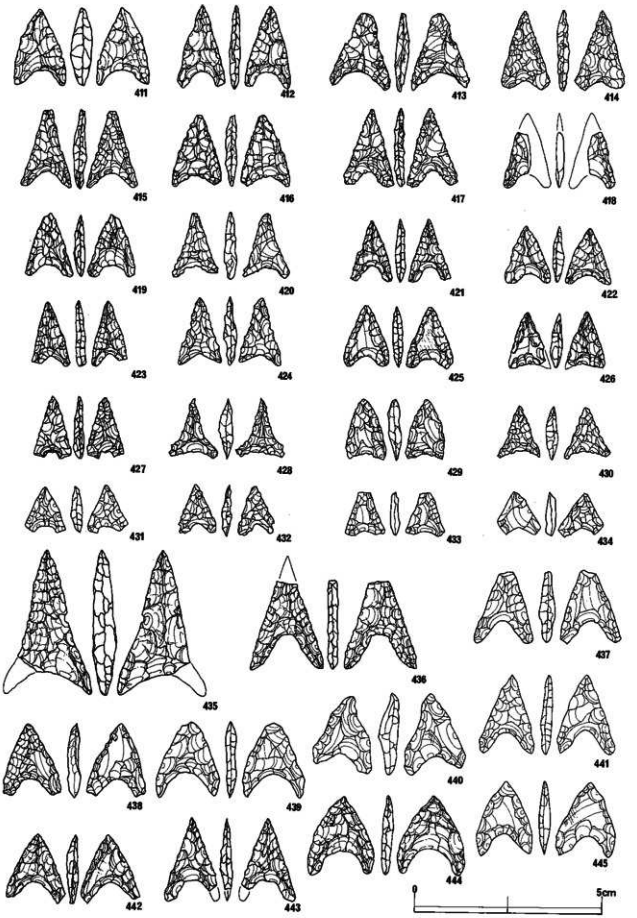
第135図　縄文石器(2)－円形掻器　〈5〉・石鏃　〈1〉



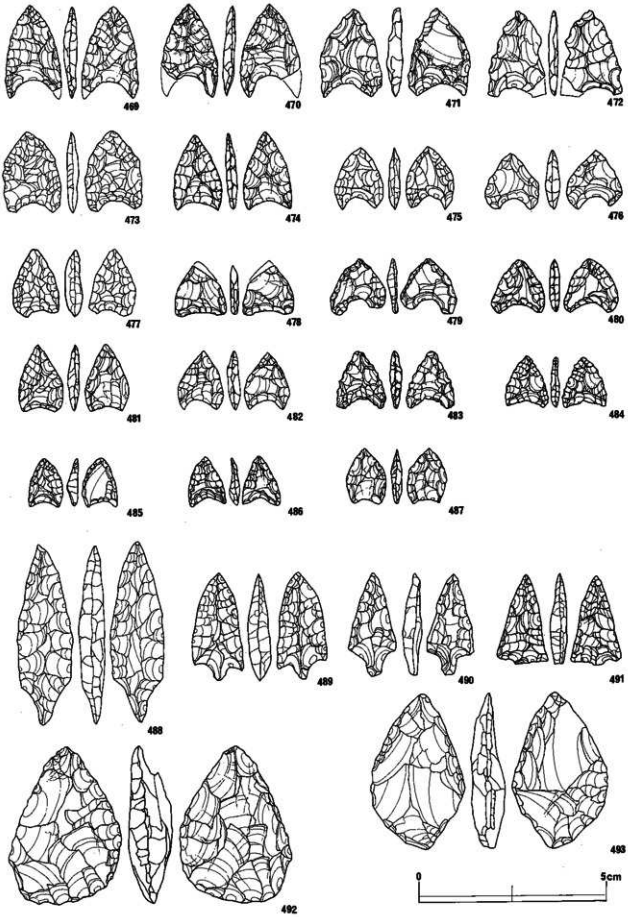
第136図　縄文石器群－石鏃　〈２〉



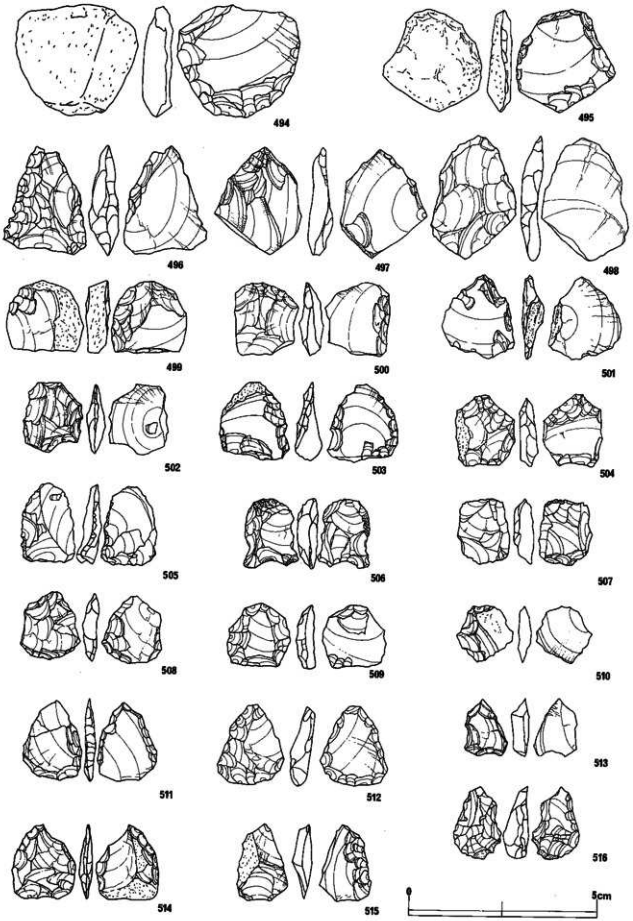
第137図　縄文石器群－石鏃　〈3〉



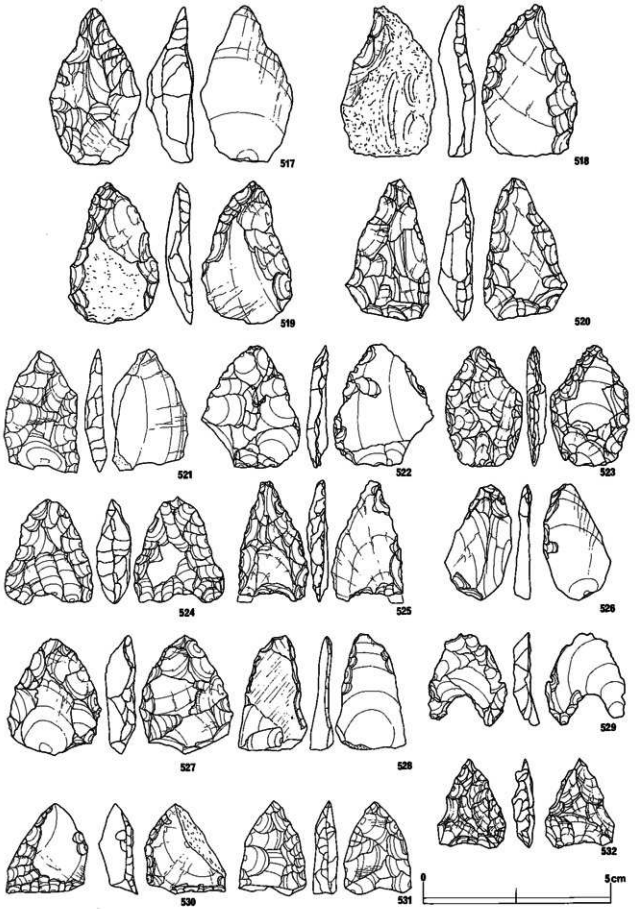
第138図　縄文石器群－石鏃　〈４〉



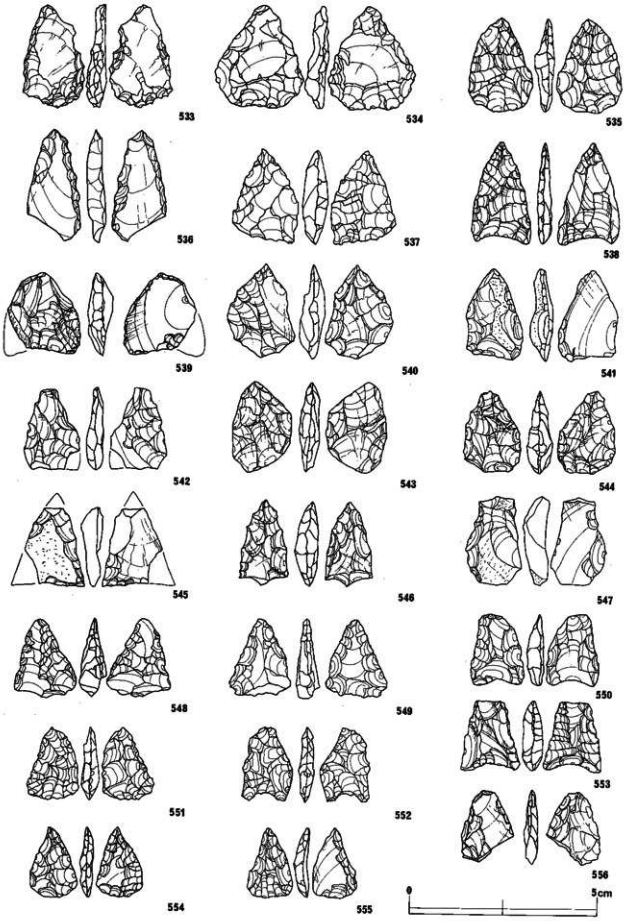
第139図　縄文石器群－石鏃　〈5〉



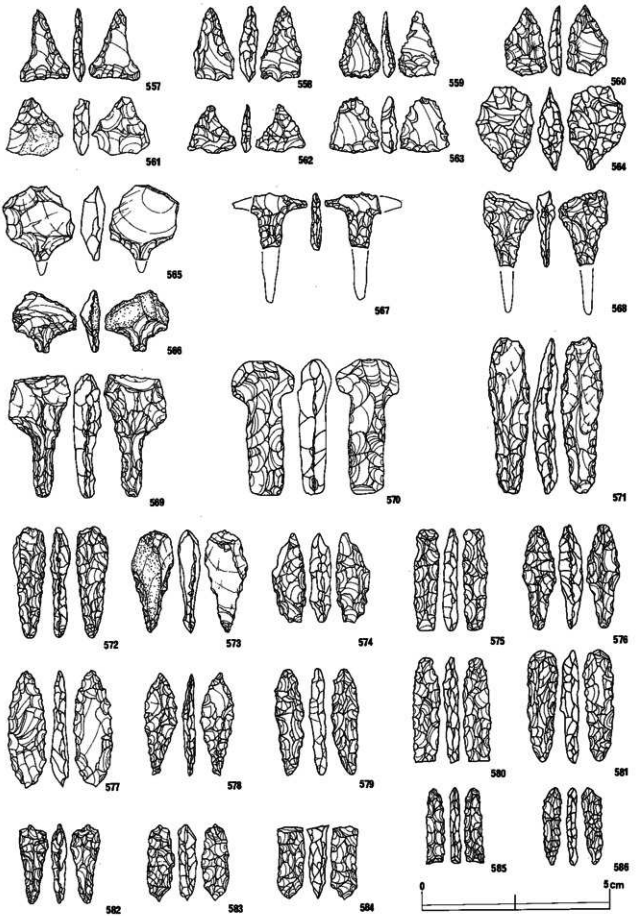
第140図　縄文石器(3)－石鏃未製品　〈1〉



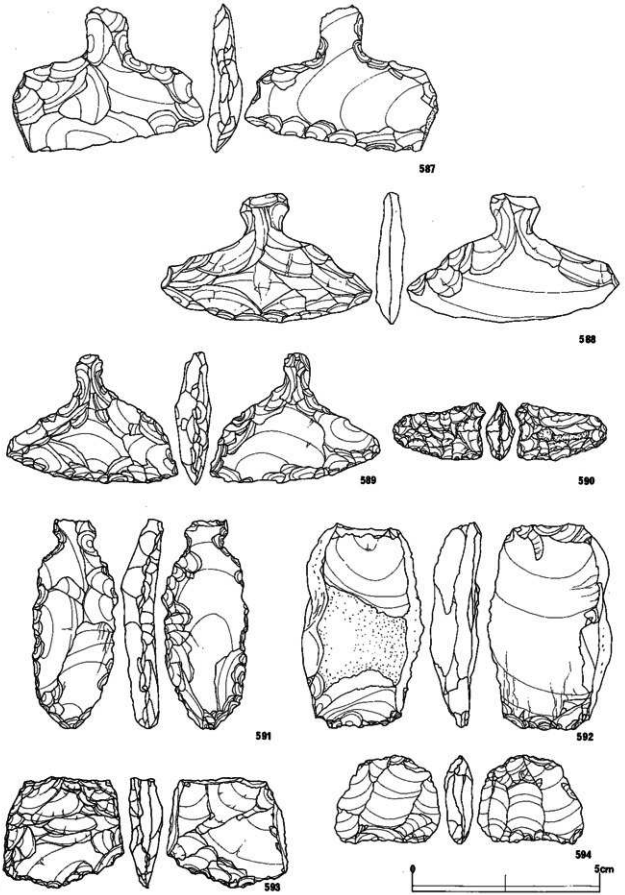
第141図　縄文石器⑩－石鏃未製品　〈2〉



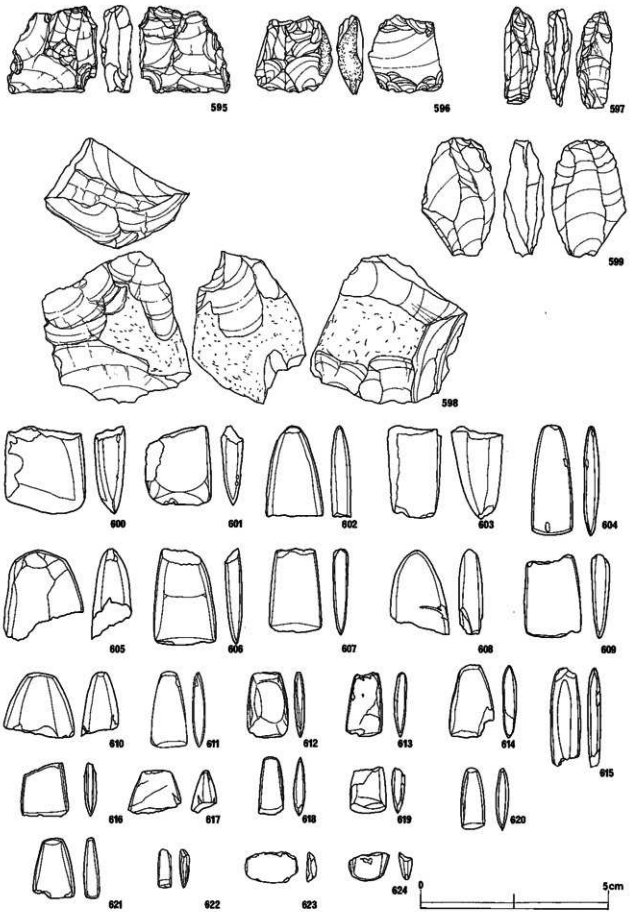
第142図　縄文石器⑩－石鏃未製品　〈３〉



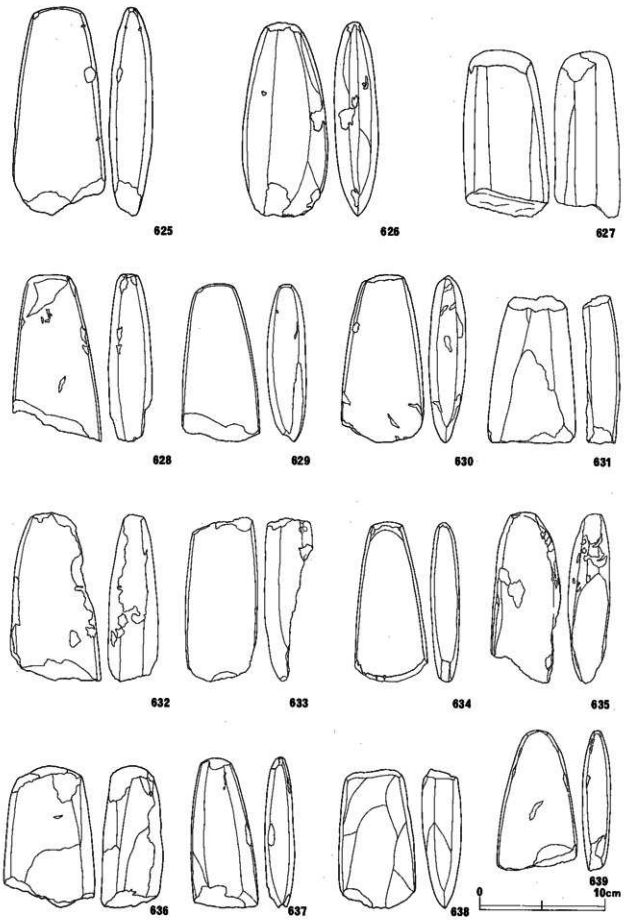
第143図　縄文石器89－石鏃未製品　〈4〉・石鏃



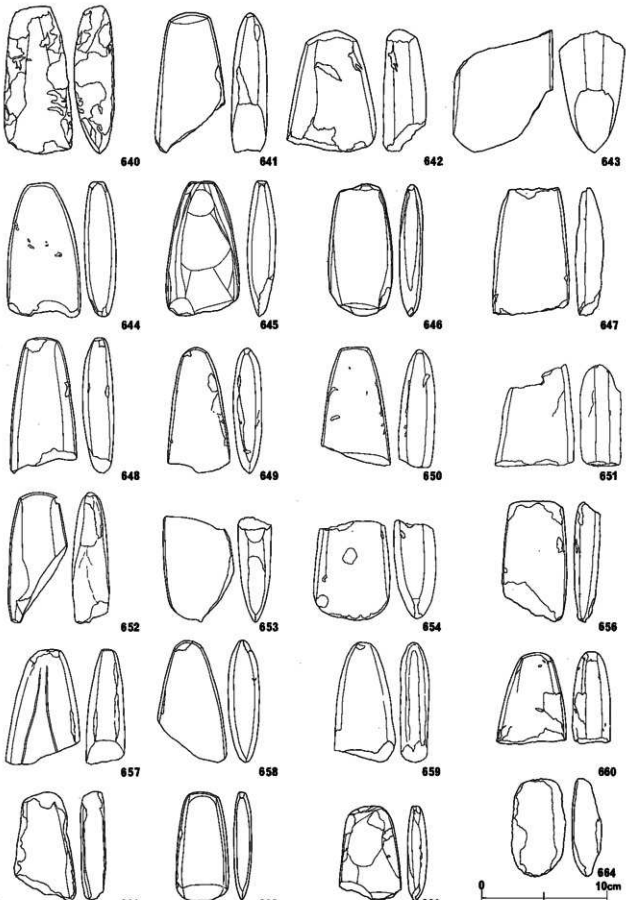
第144図　縄文石器(6)－石匙・ピエスエスキーユ　〈1〉



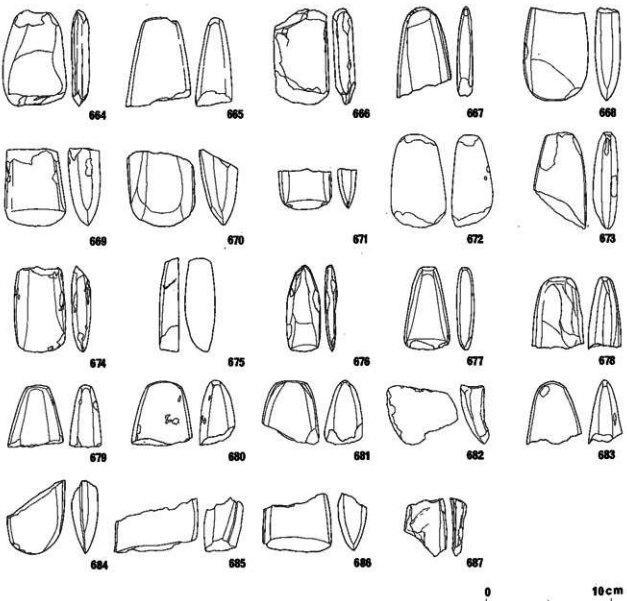
第145図　縄文石器37－ピエスエスキーユ　〈2〉・磨製石斧　〈1〉



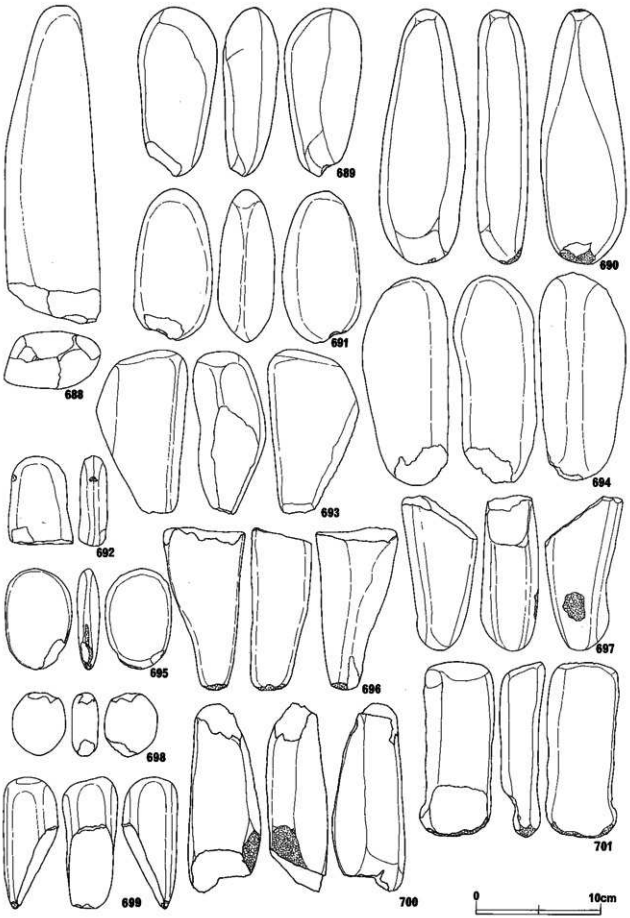
第146図　縄文石器群－磨製石斧　〈2〉



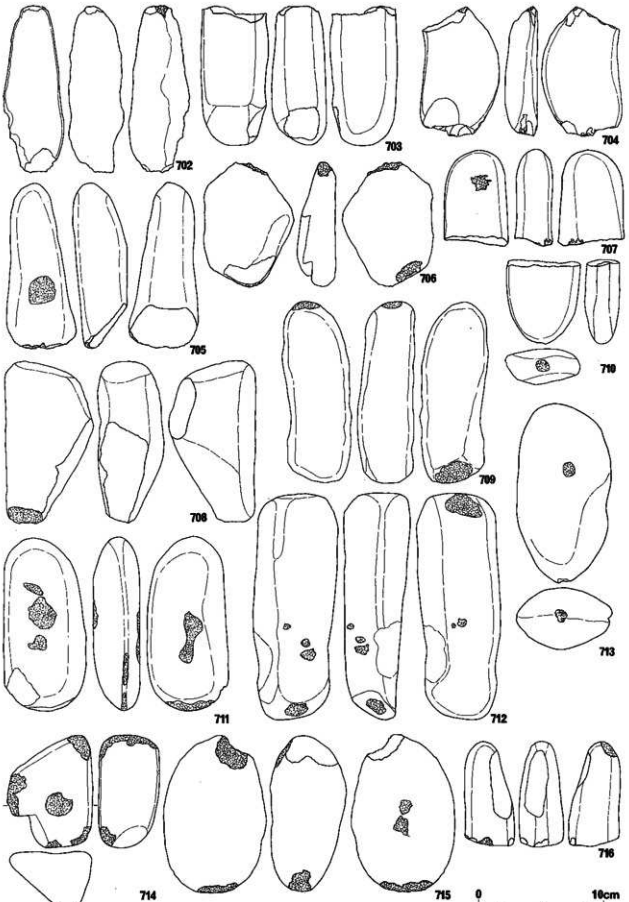
第147図　縄文石器群－磨製石斧　〈3〉



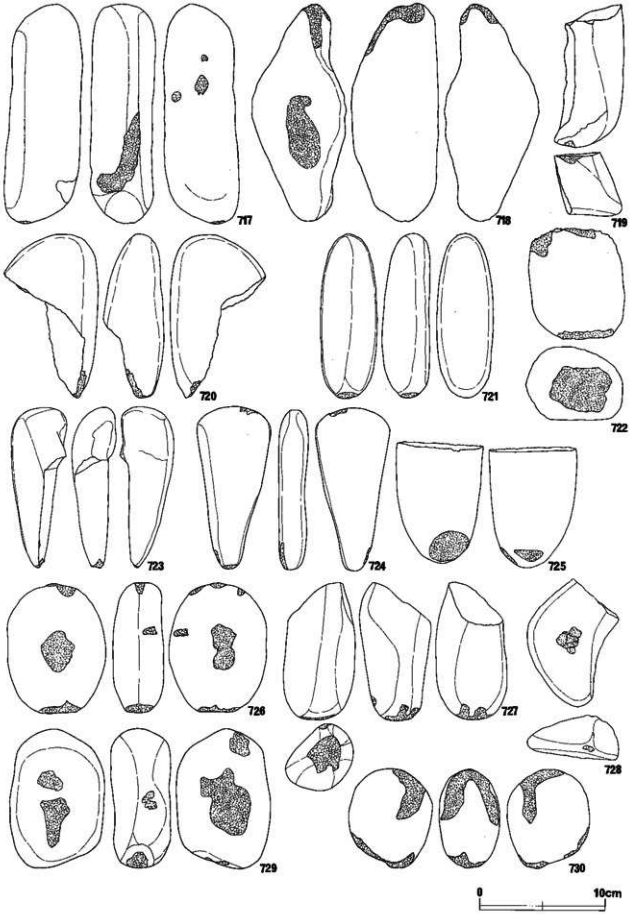
第148図　縄文石器(40)－磨製石斧　〈４〉



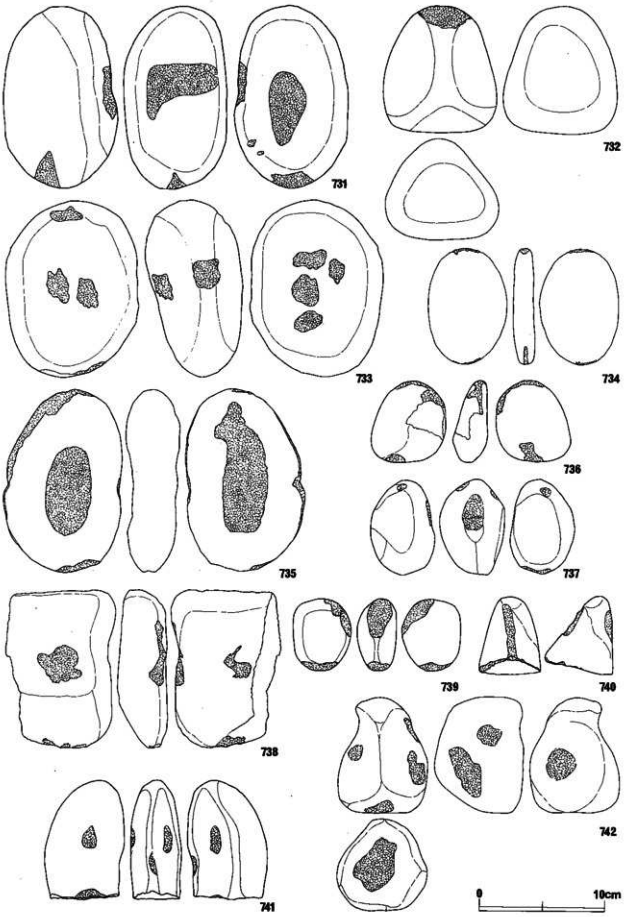
第149図　縄文石器(41)－磨石類　〈1〉



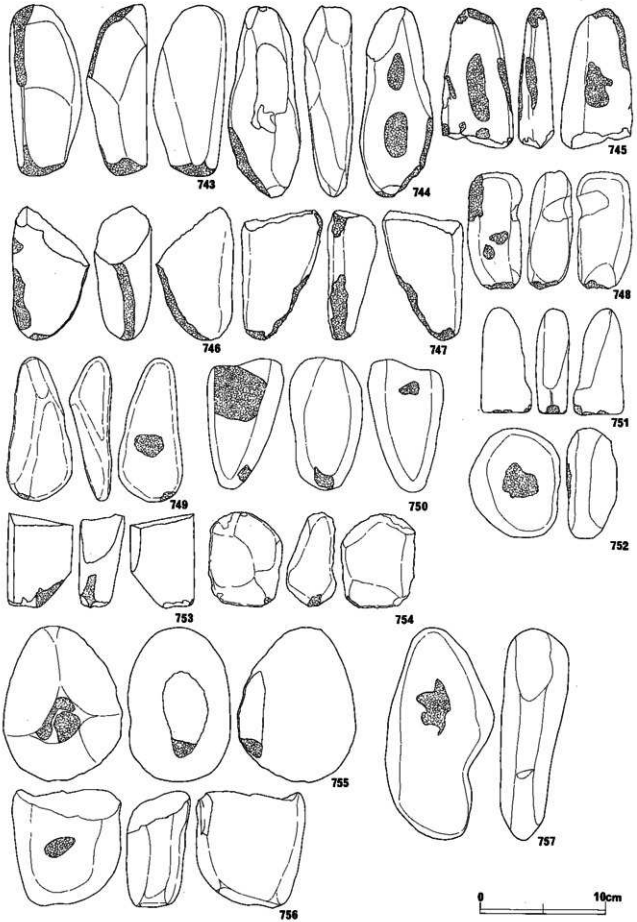
第150図　縄文石器(4)－磨石類　〈2〉



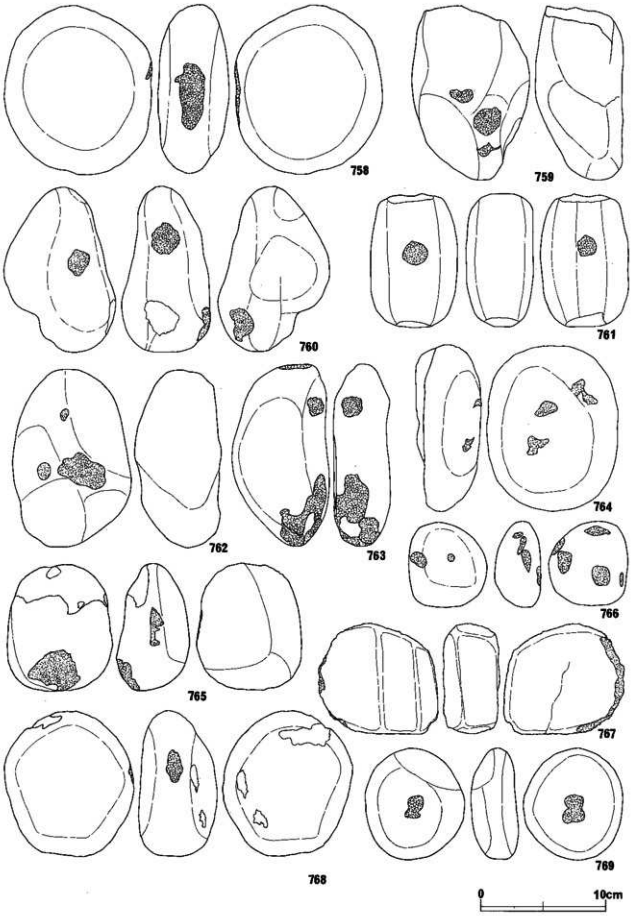
第151図　縄文石器(3)－磨石類　〈3〉



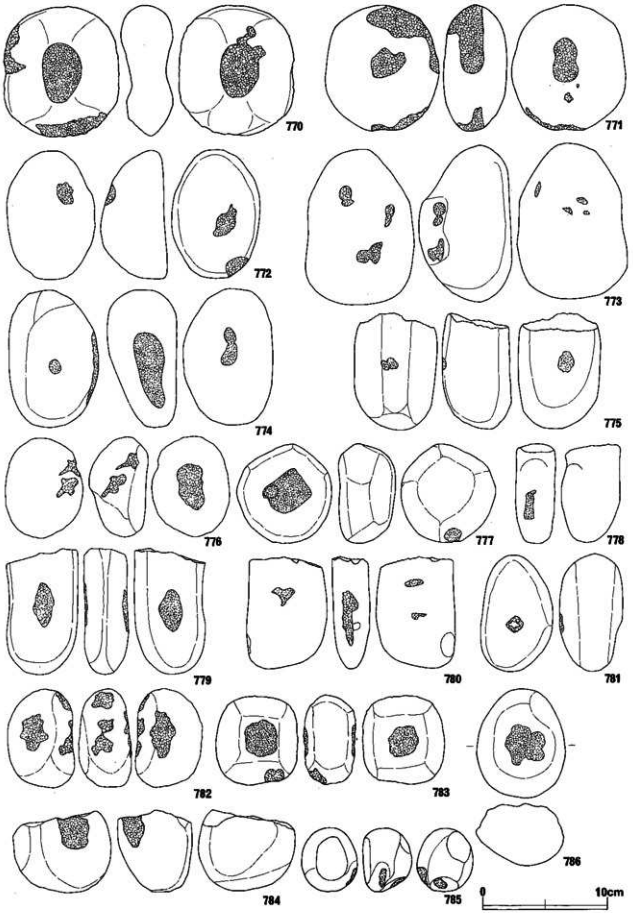
第152図　縄文石器(4)－磨石類　〈4〉



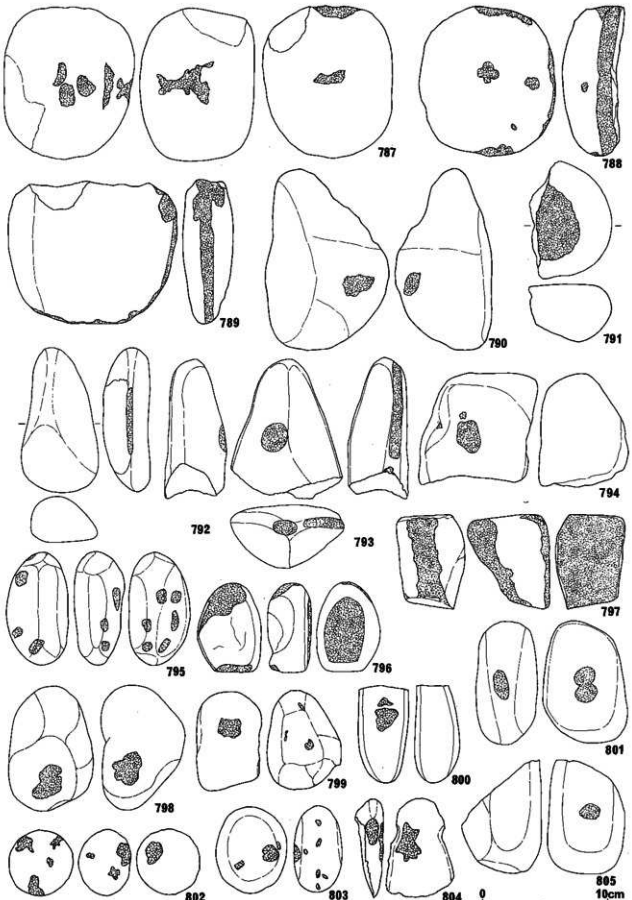
第153図　縄文石器49－磨石類　〈5〉



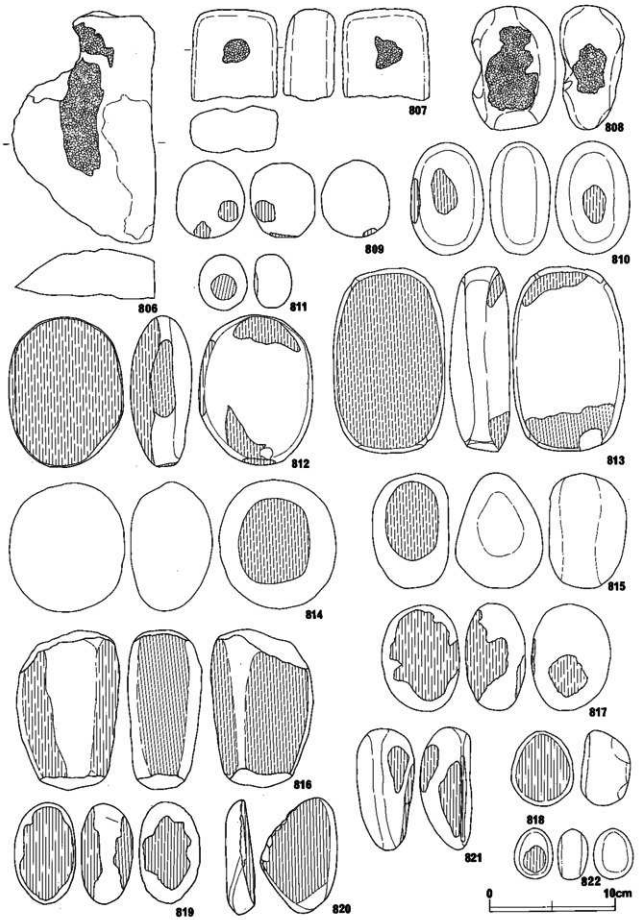
第154図　縄文石器49－磨石類　〈6〉



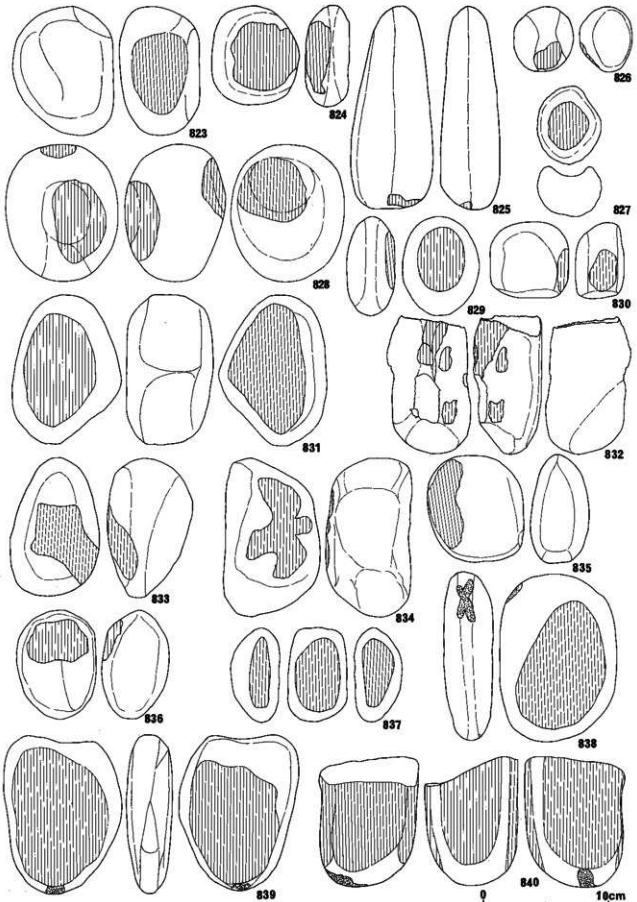
第155図　縄文石器(7)－磨石類　〈7〉



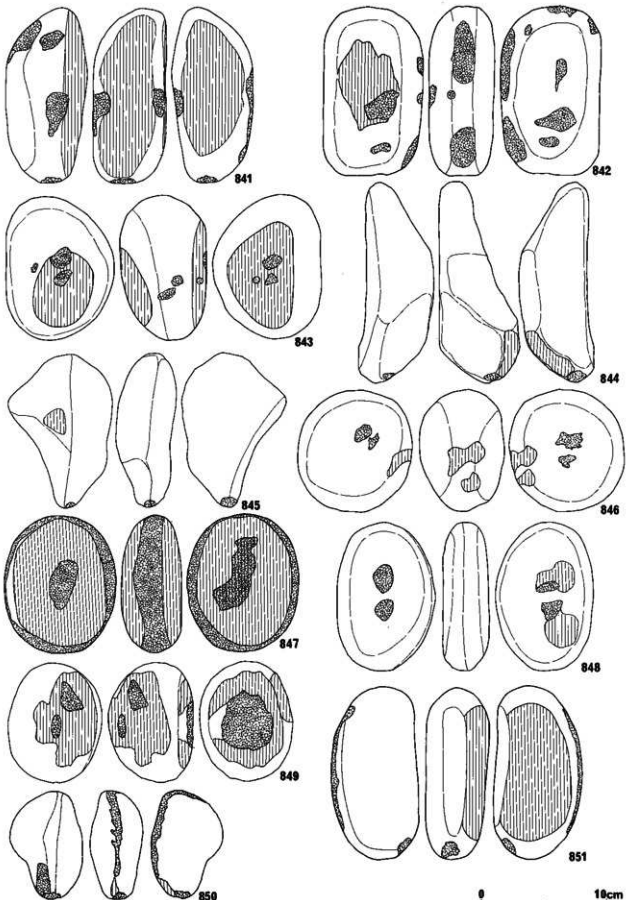
第156図　縄文石器(4)－磨石類　〈8〉



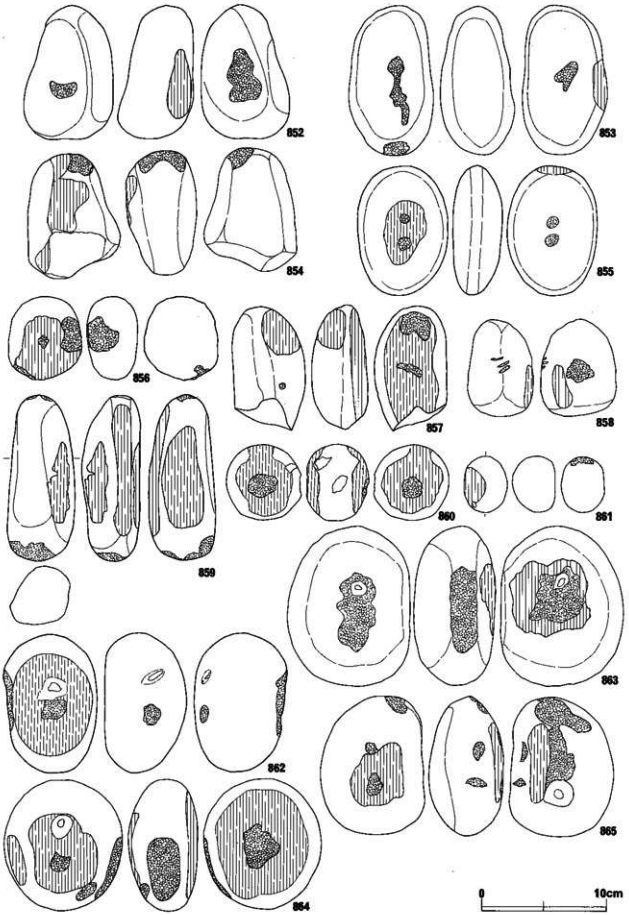
第157図　縄文石器④－磨石類　〈9〉



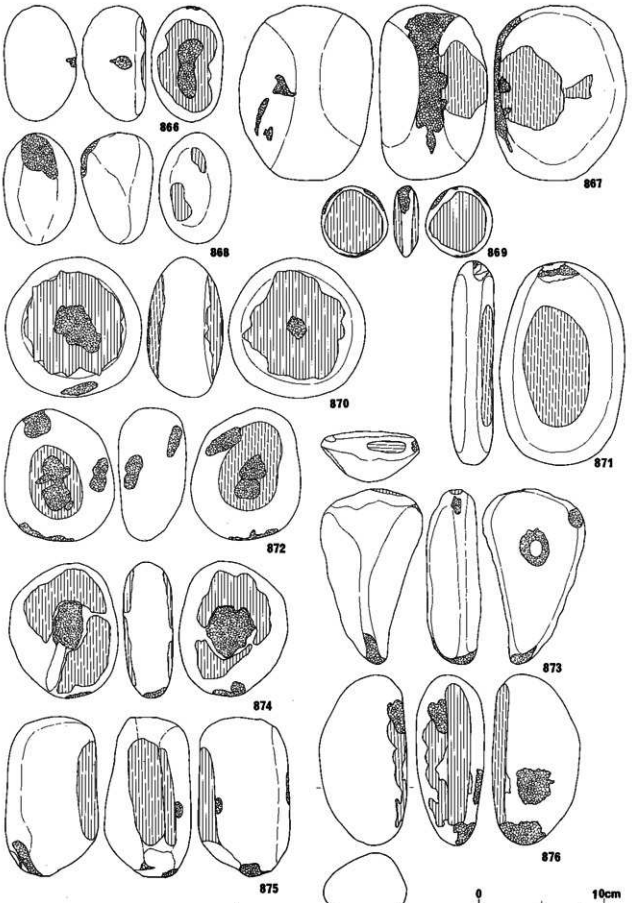
第158図　縄文石器68－磨石類　〈10〉



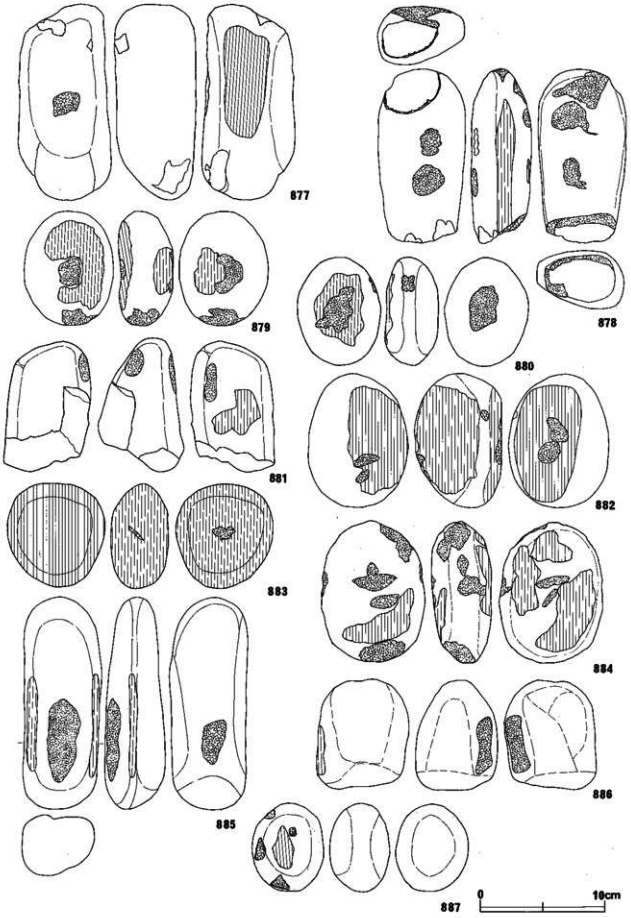
第159図　縄文石器60－磨石類　〈11〉



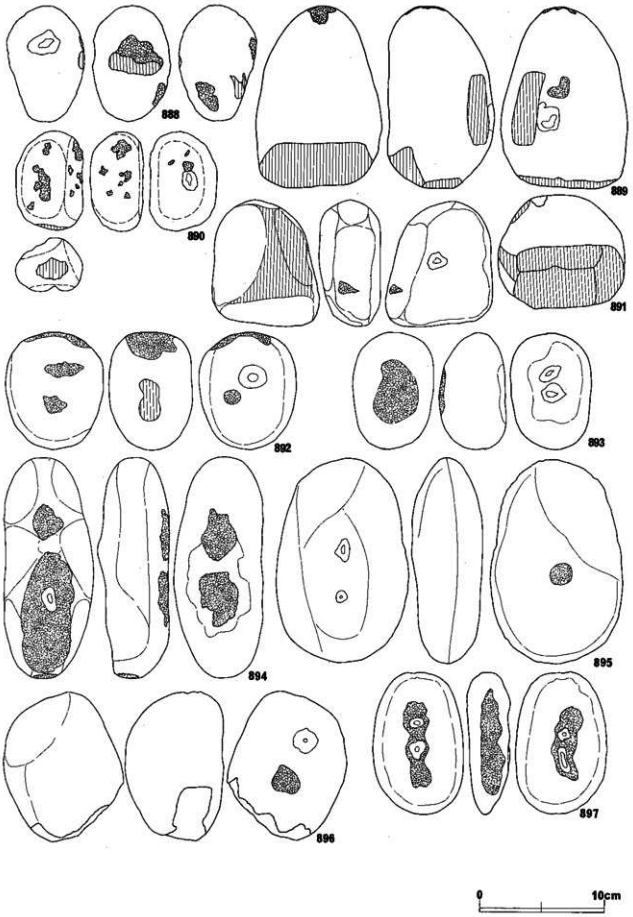
第160図　縄文石器63－磨石類　〈12〉



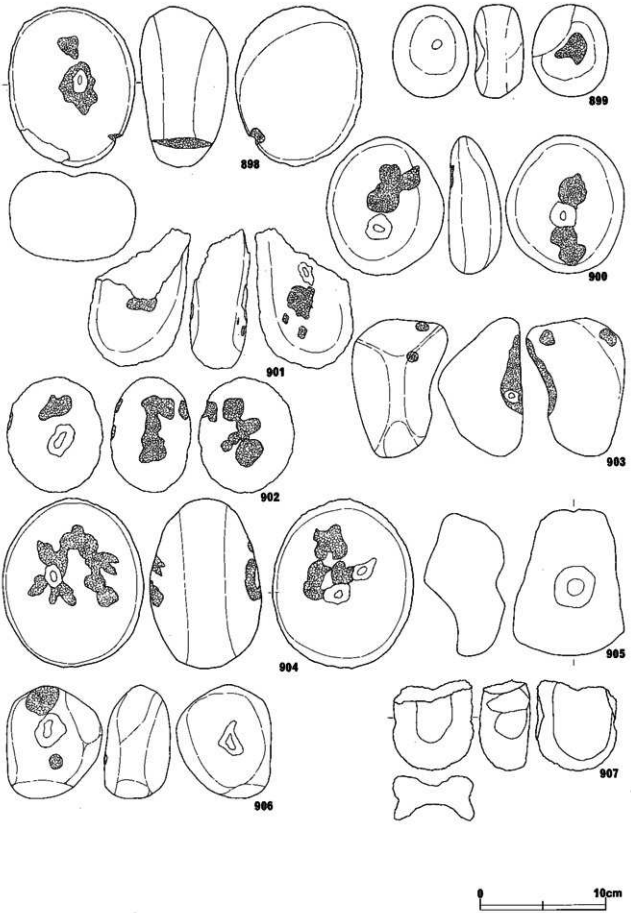
第161図　縄文石器63－磨石類　〈13〉



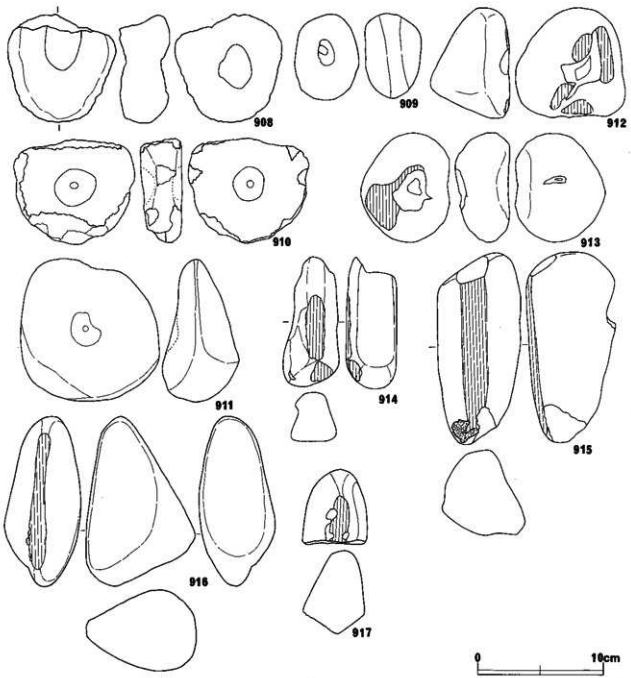
第162図　縄文石器60－磨石類　〈14〉



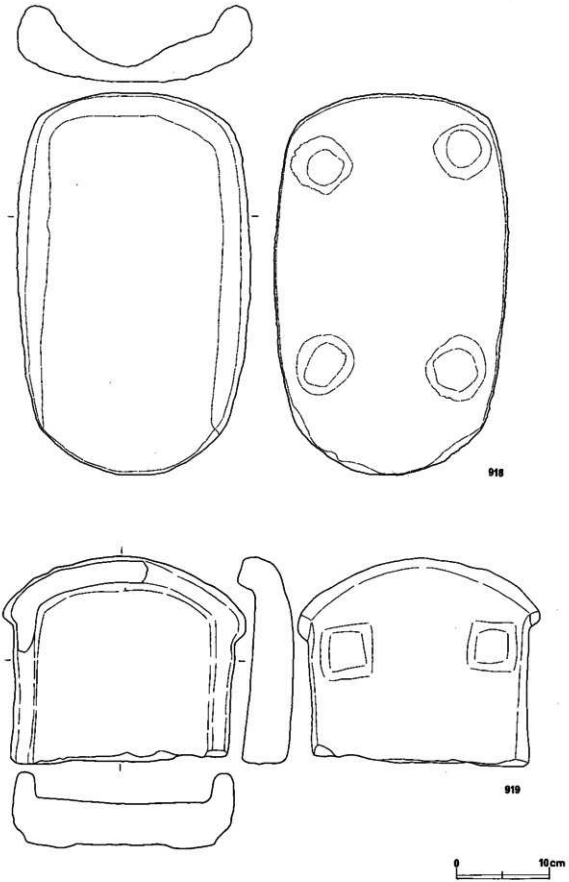
第163図 縄文石器69－磨石類 〈15〉



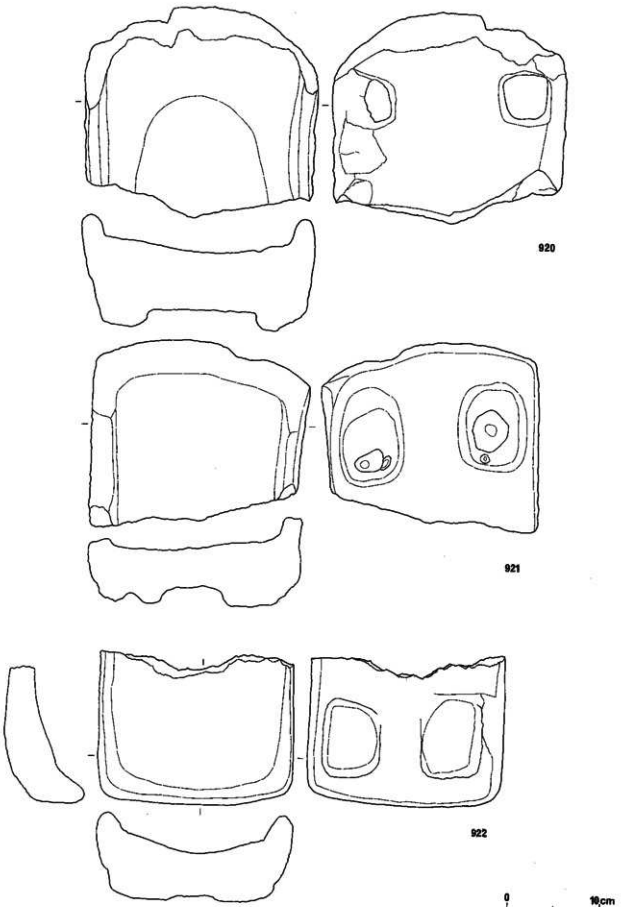
第164図　縄文石器砲ー磨石類　〈16〉



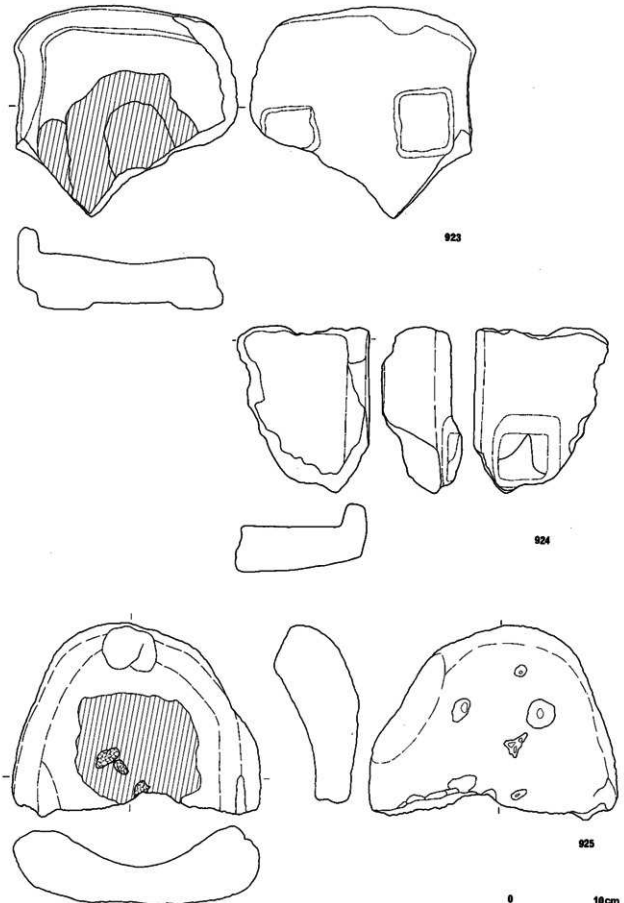
第165図　縄文石器6ハ－磨石類　〈17〉



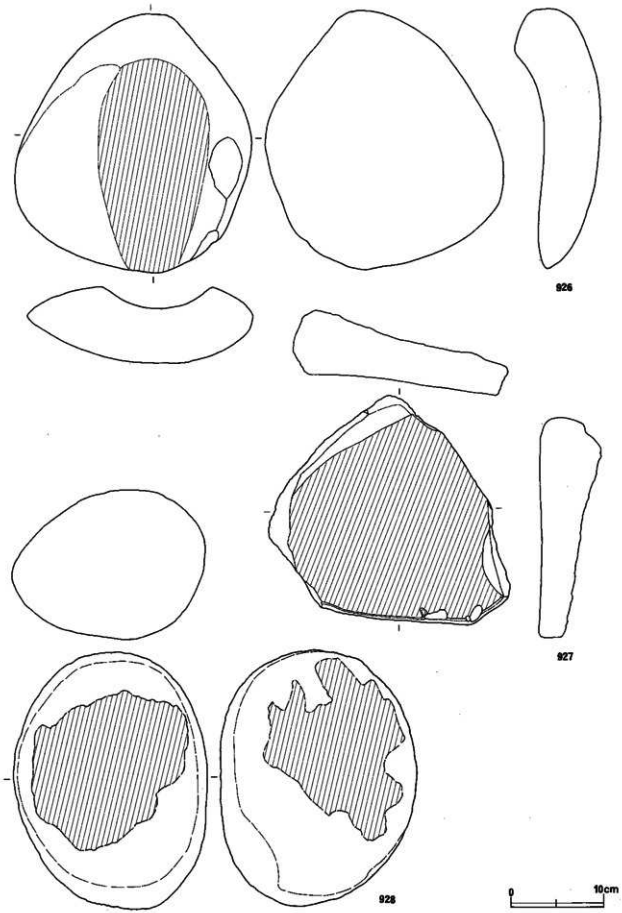
第166図　縄文石器類－石皿　〈1〉



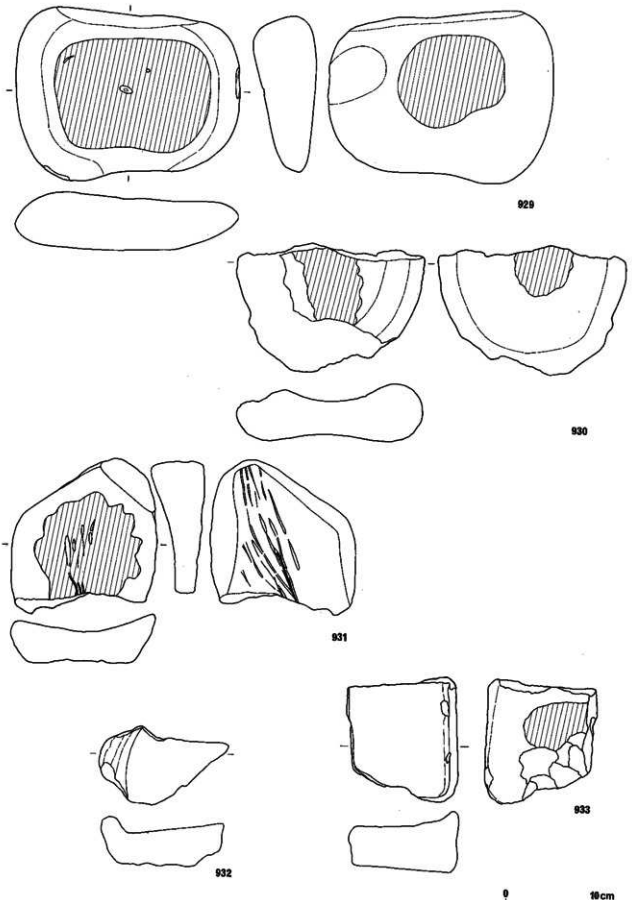
第167図　縄文石器⑥－石皿　〈2〉



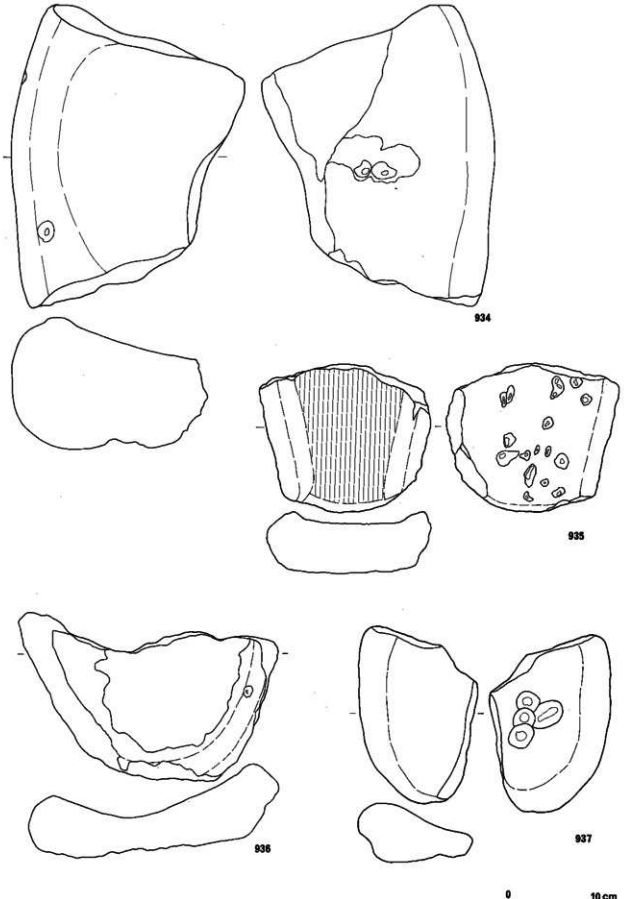
第168図　縄文石器類－石皿　〈3〉



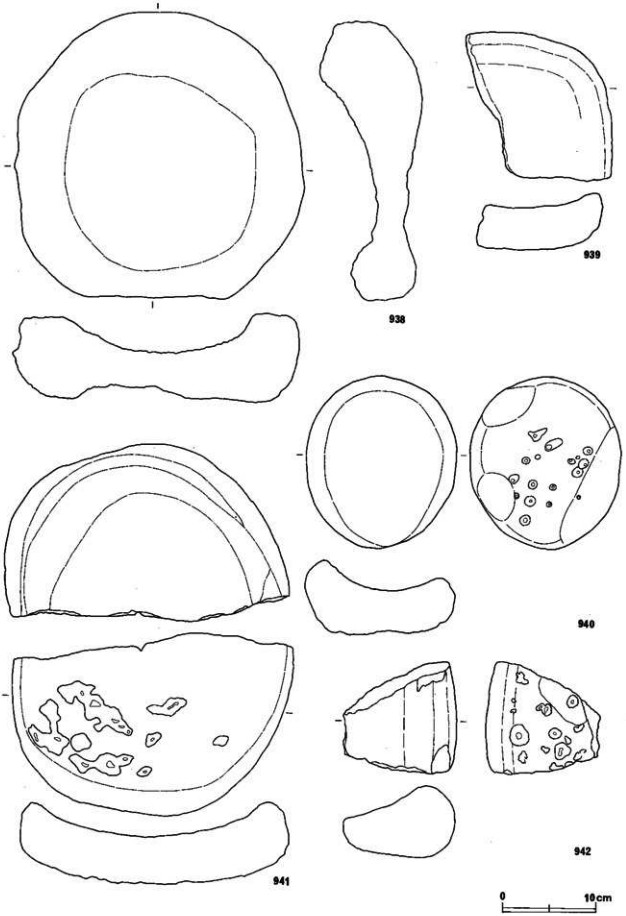
第169図　縄文石器群－石皿　〈4〉



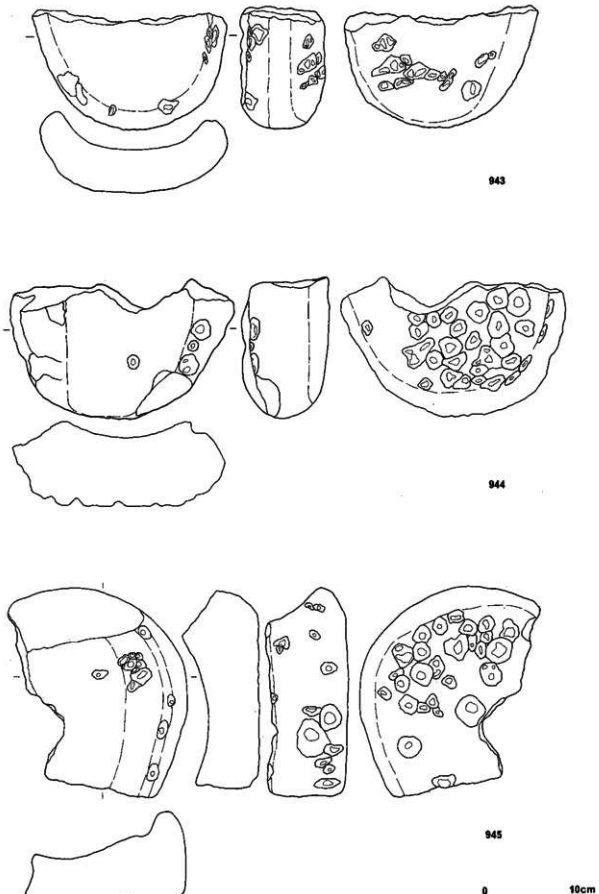
第170図　縄文石器62－石皿　〈５〉



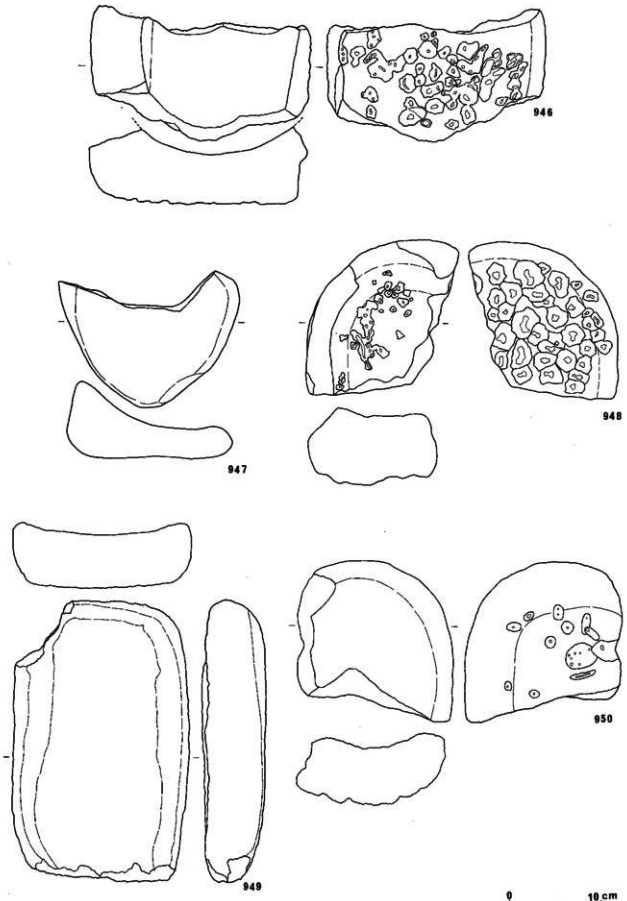
第171図　縄文石器群－石皿　〈6〉



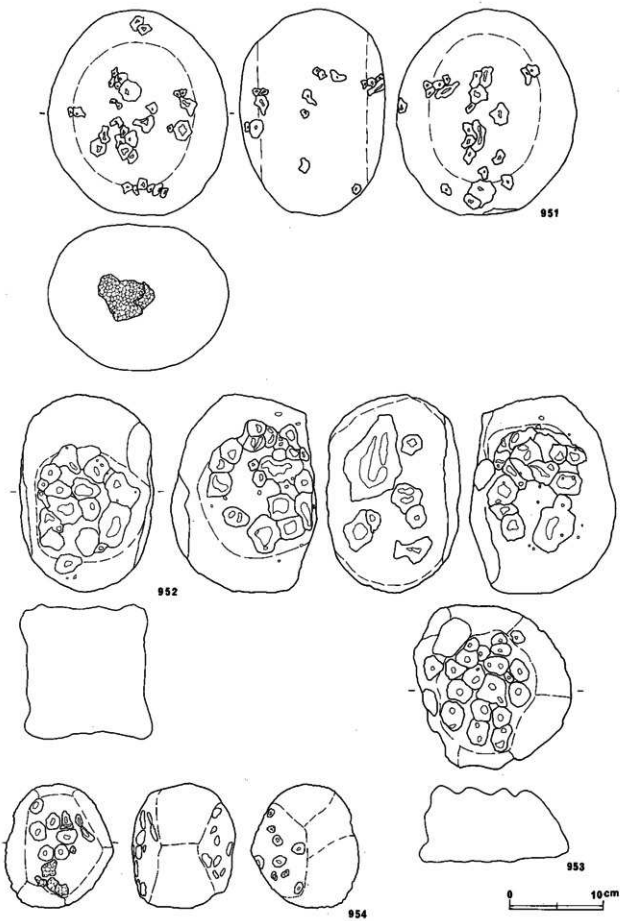
第172図　縄文石器64－石皿　〈7〉



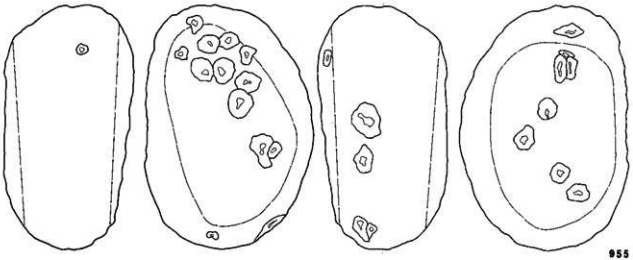
第173図　縄文石器⑨－石皿　〈8〉

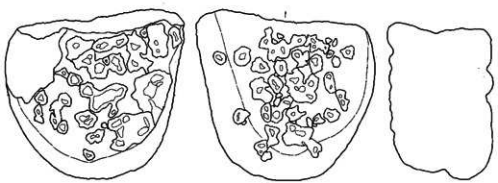


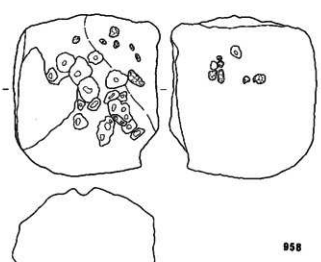
第174図　縄文石器⑷－石皿　〈9〉

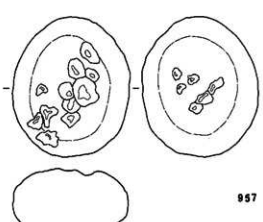


第175図　縄文石器㈱－多孔石　〈1〉

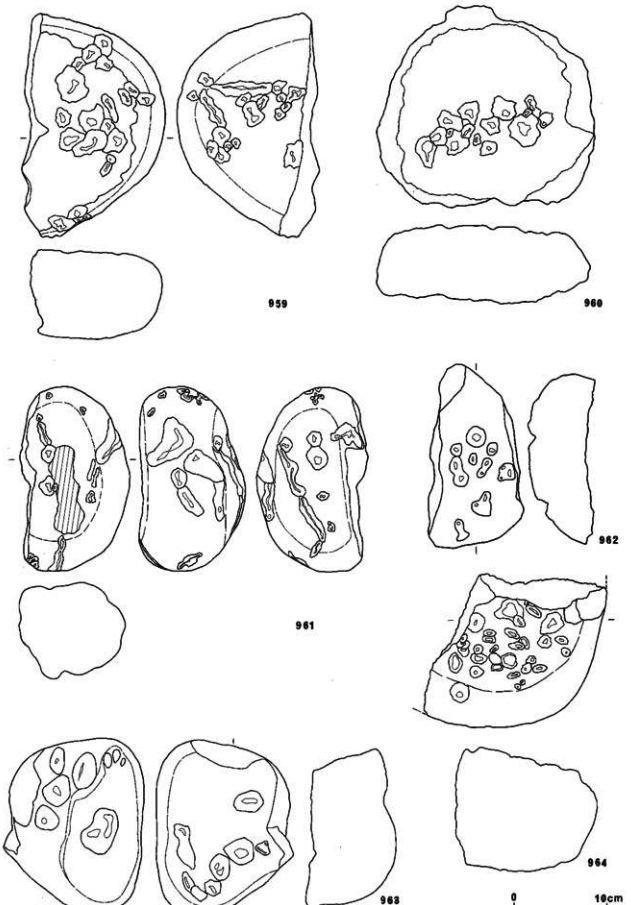




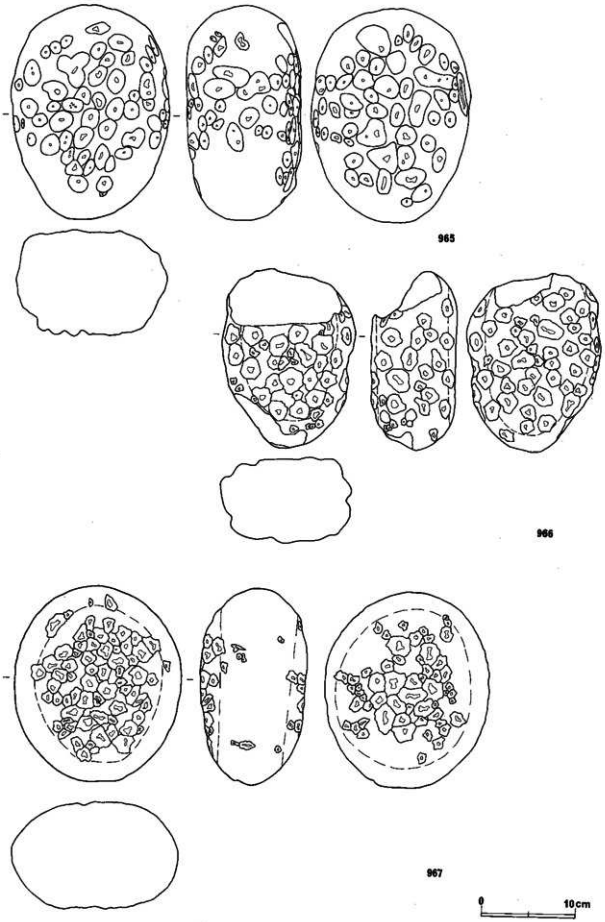




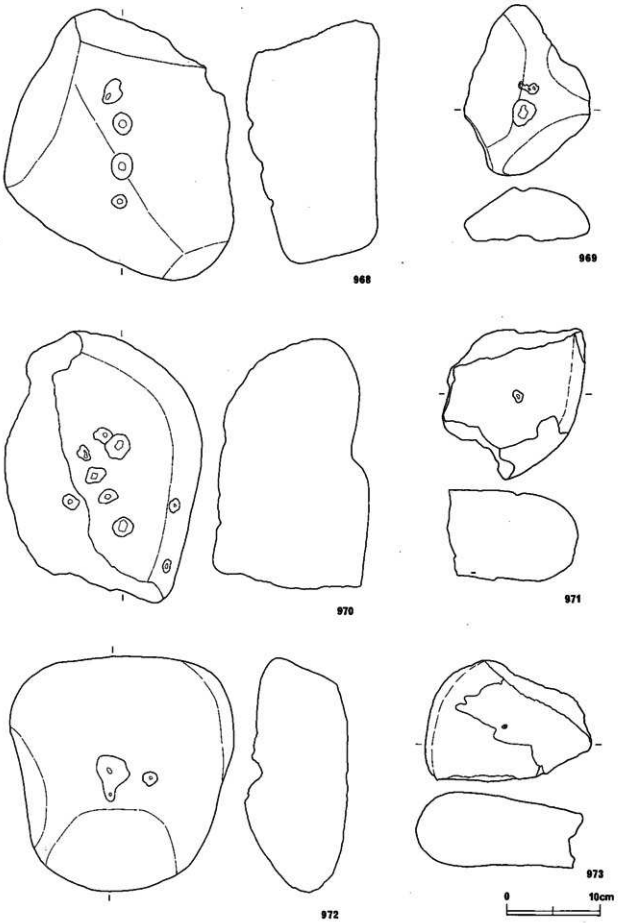
第176図　縄文石器類－多孔石　〈2〉



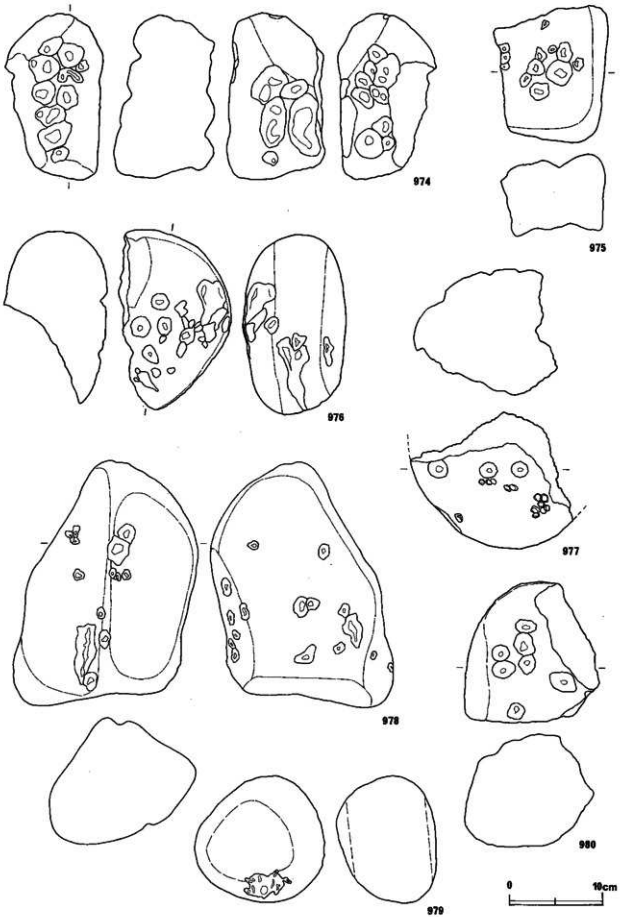
第177図　縄文石器類－多孔石　〈3〉



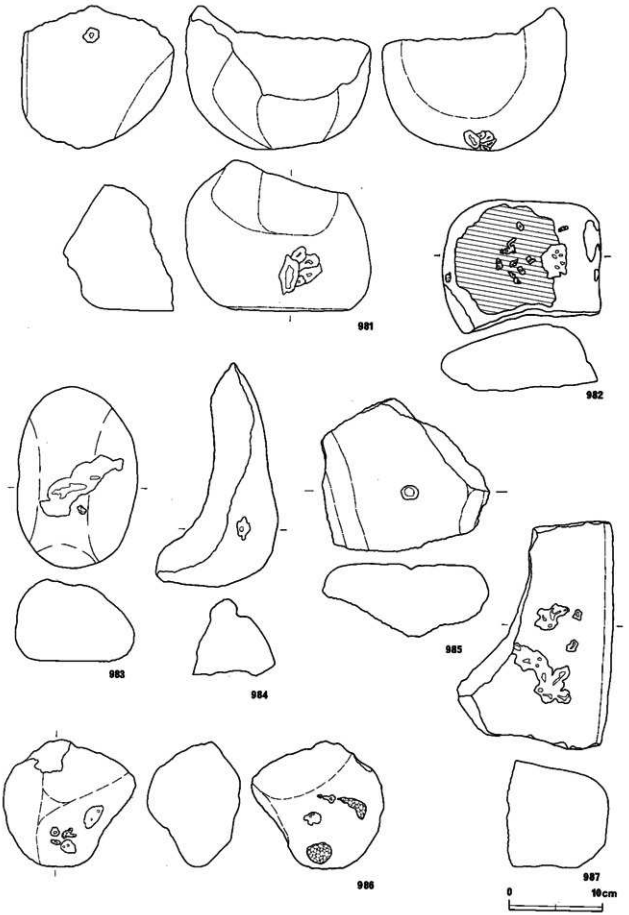
第178図　縄文石器⑦－多孔石　〈４〉



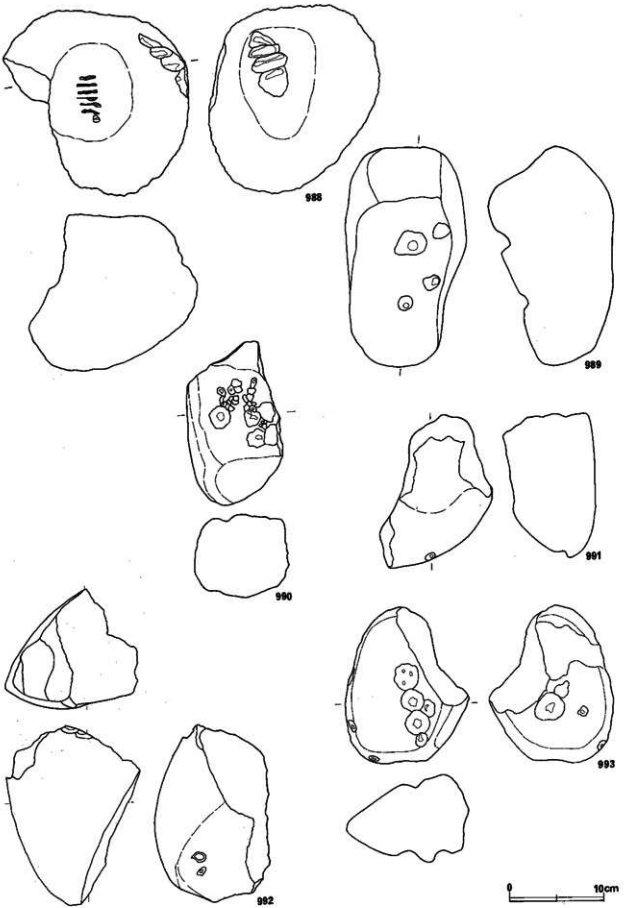
第179図　縄文石器(7)－多孔石　〈5〉



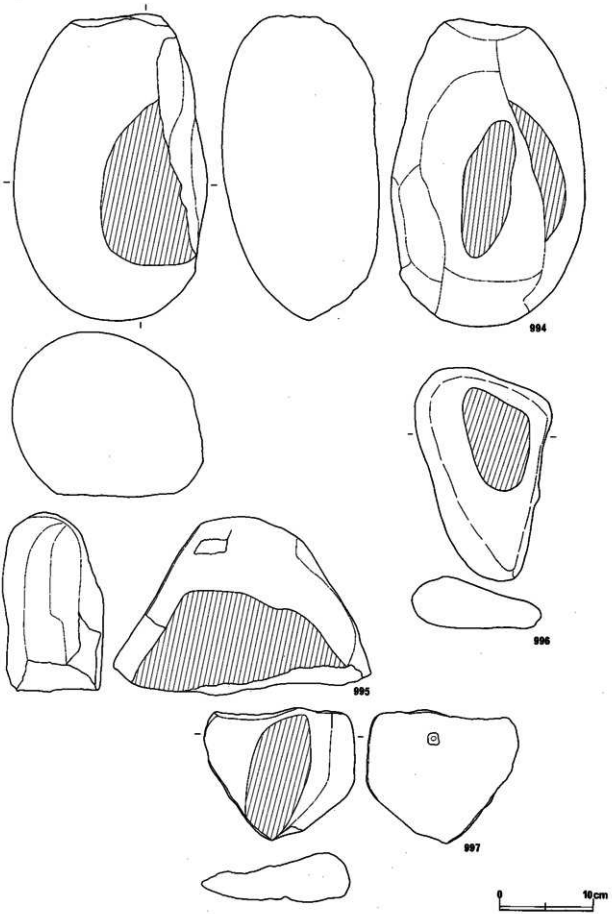
第180図　縄文石器(72)－多孔石　〈6〉



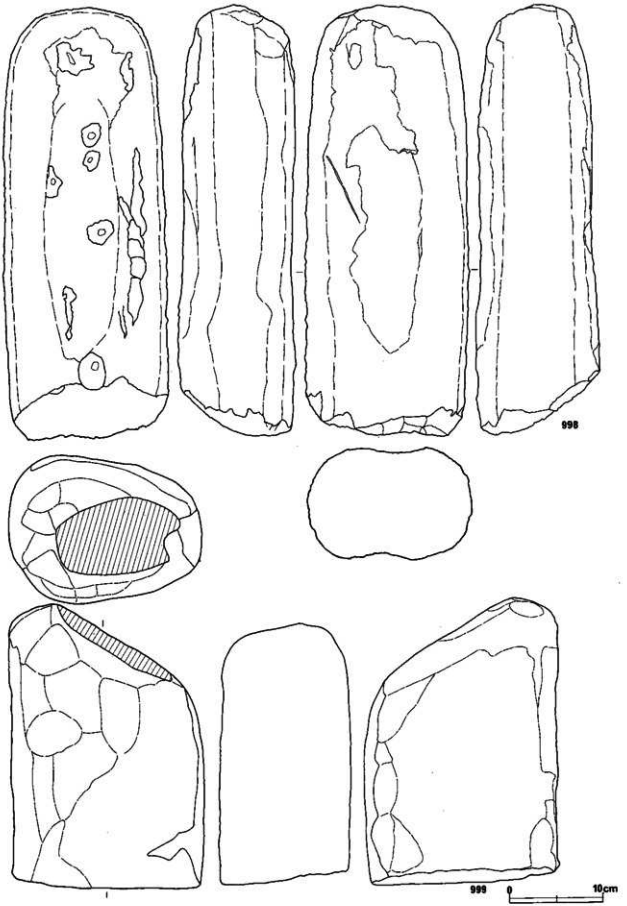
第181図　縄文石器(73)－多孔石　〈7〉



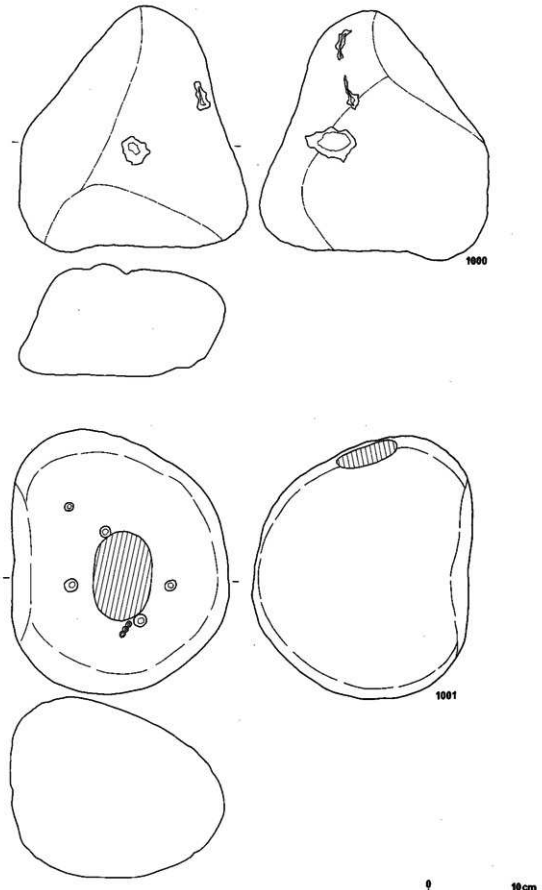
第182図　縄文石器群－多孔石　〈8〉



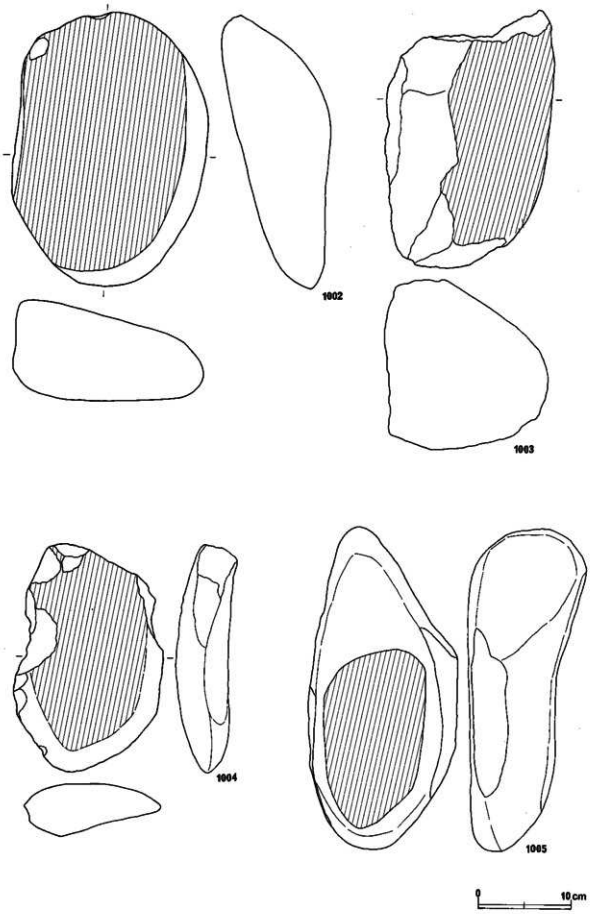
第183図　縄文石器(9)－多孔石　〈9〉



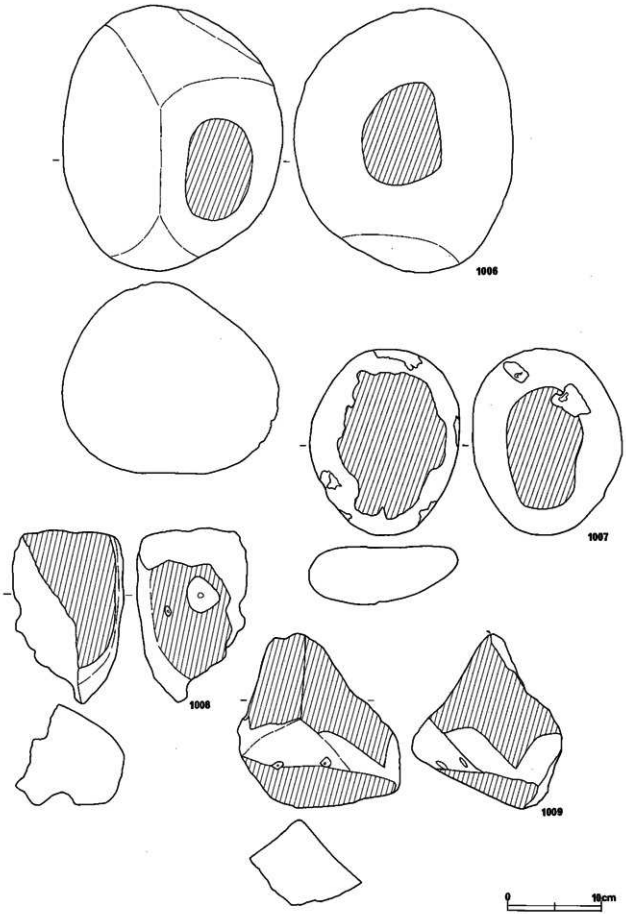
第184図　縄文石器(9)－立石



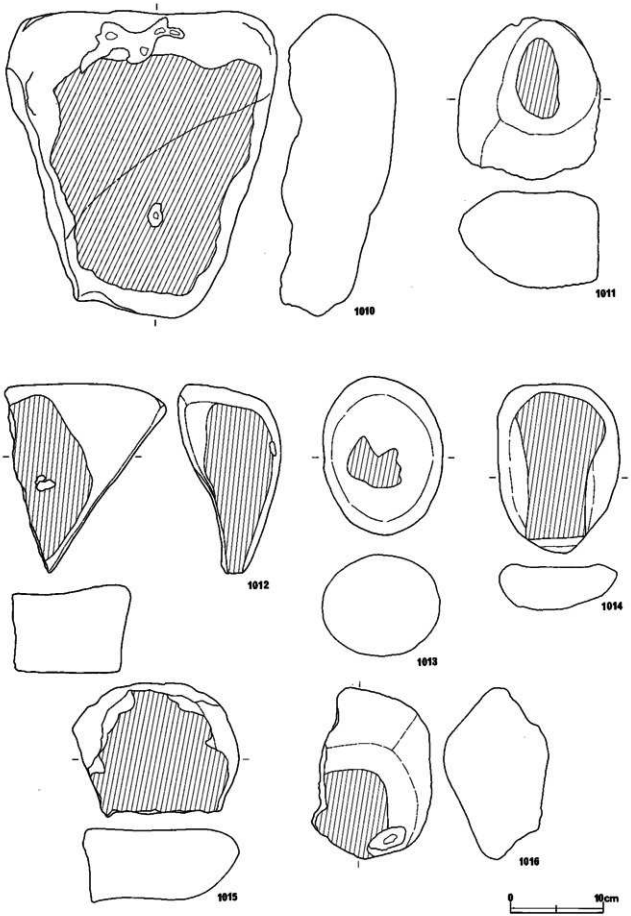
第185図　縄文石器(7)－使用面をもつ礫　〈1〉



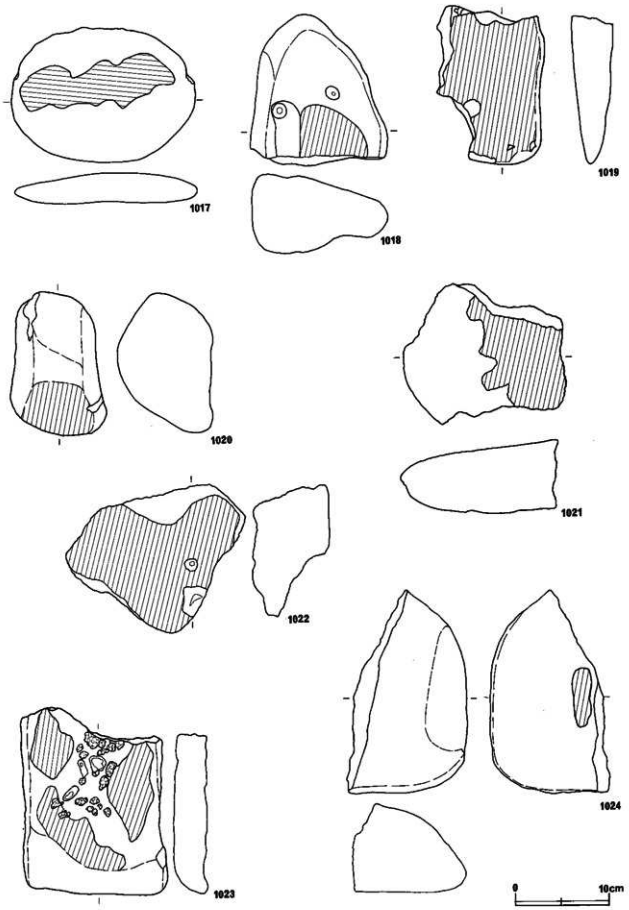
第186図　縄文石器⑱－使用面をもつ礫　〈2〉



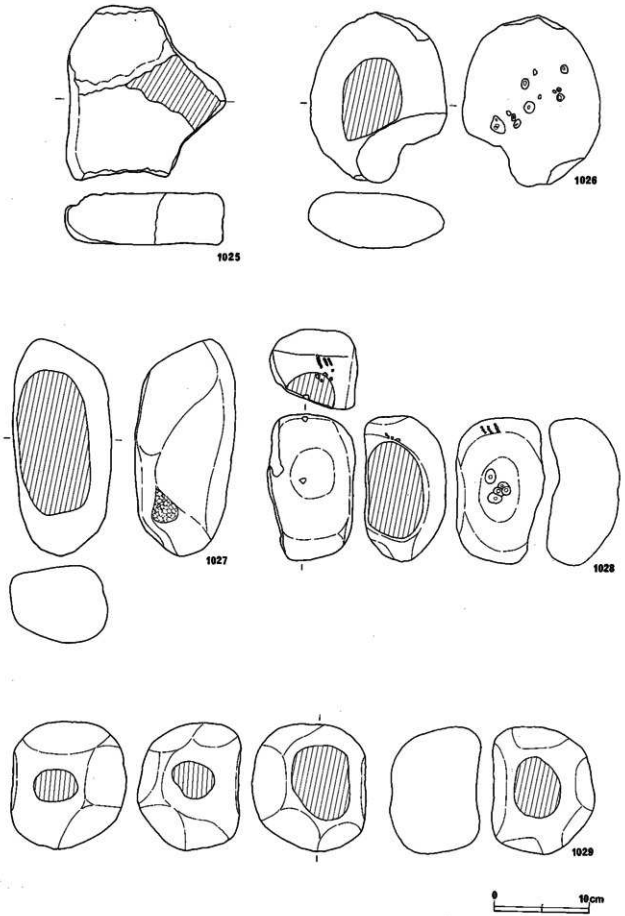
第187図　縄文石器⑨－使用面をもつ礫　〈3〉



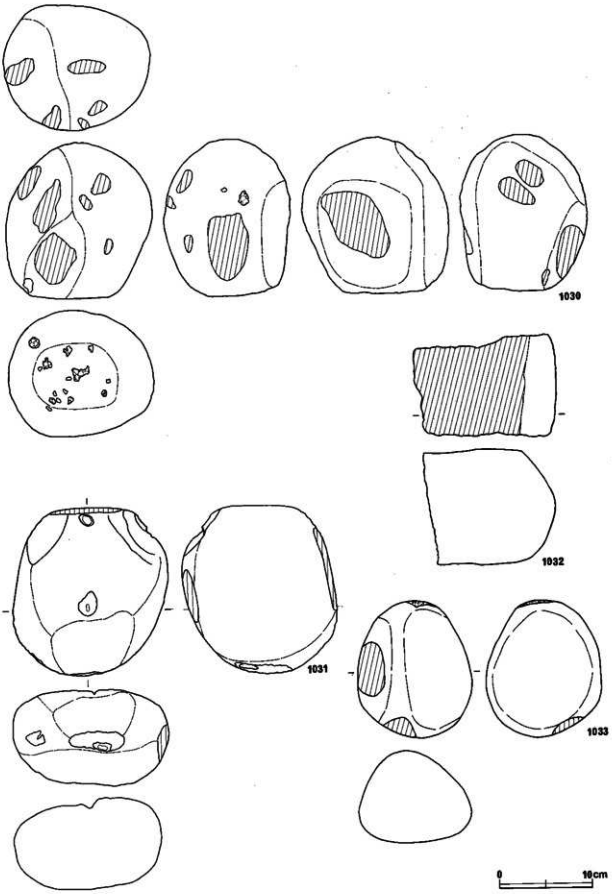
第188図　縄文石器類ー使用面をもつ礫　〈4〉



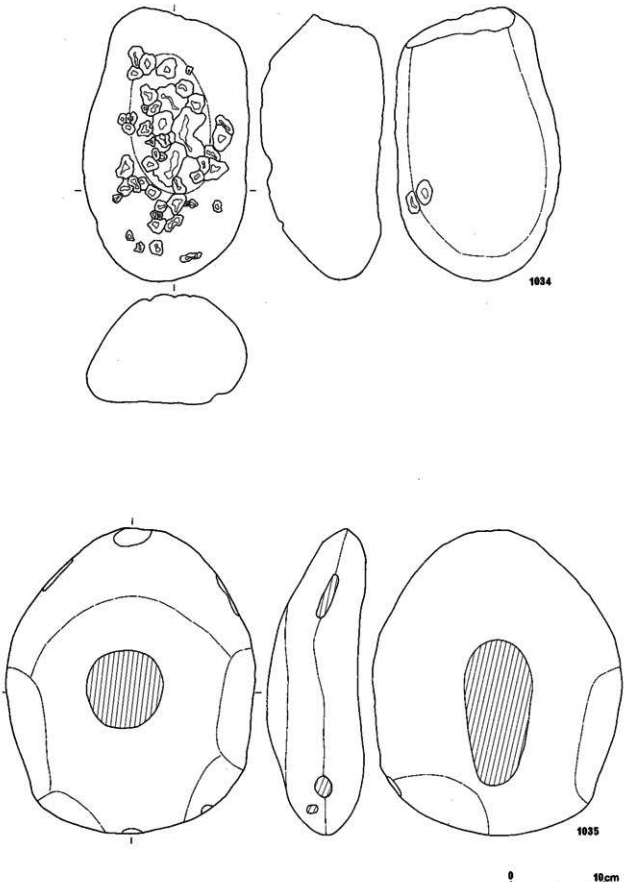
第189図　縄文石器(II)－使用面をもつ礫　〈5〉



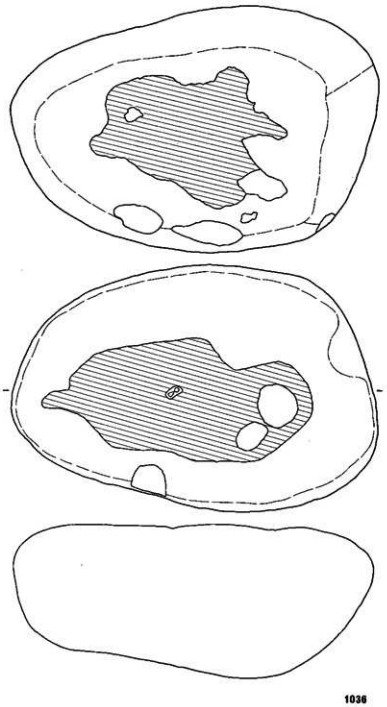
第190図　縄文石器(2)—使用面をもつ礫　〈6〉



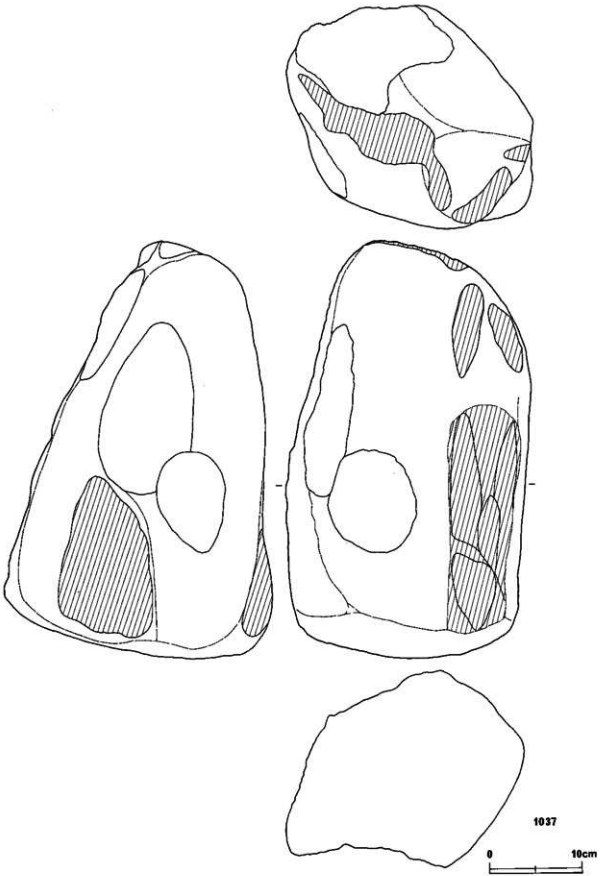
第191図　縄文石器⑬－使用面をもつ礫　〈7〉



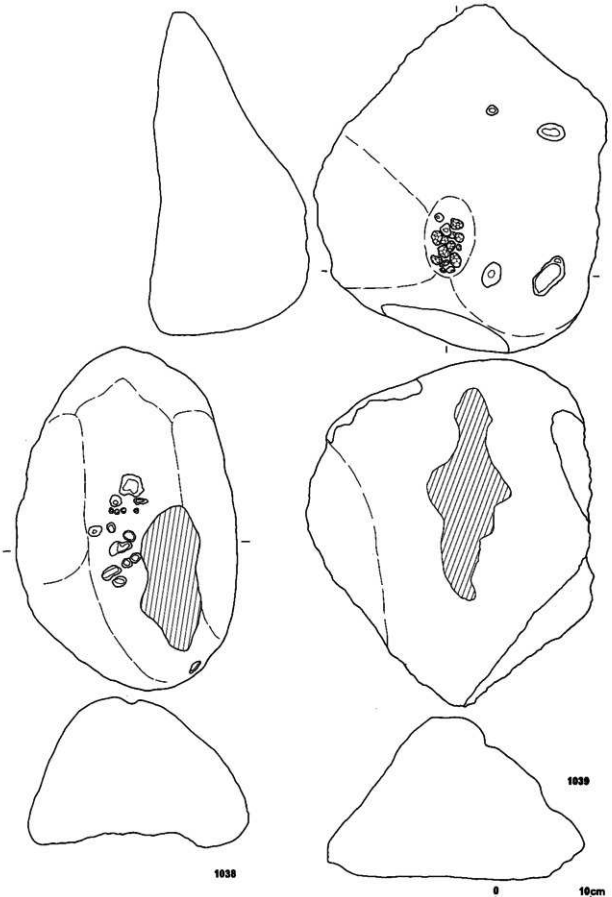
第192図　縄文石器(4)－使用面をもつ礫　〈8〉



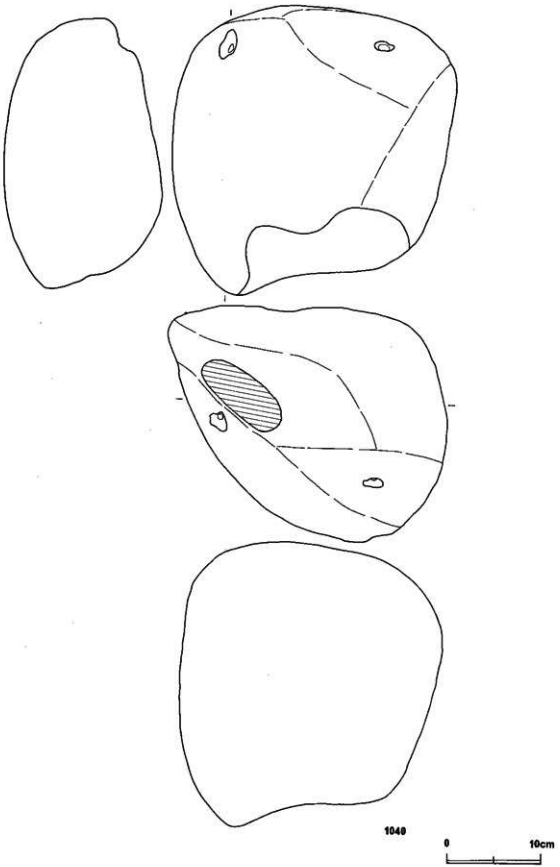
第193図　縄文石器(9)－使用面をもつ礫　〈9〉



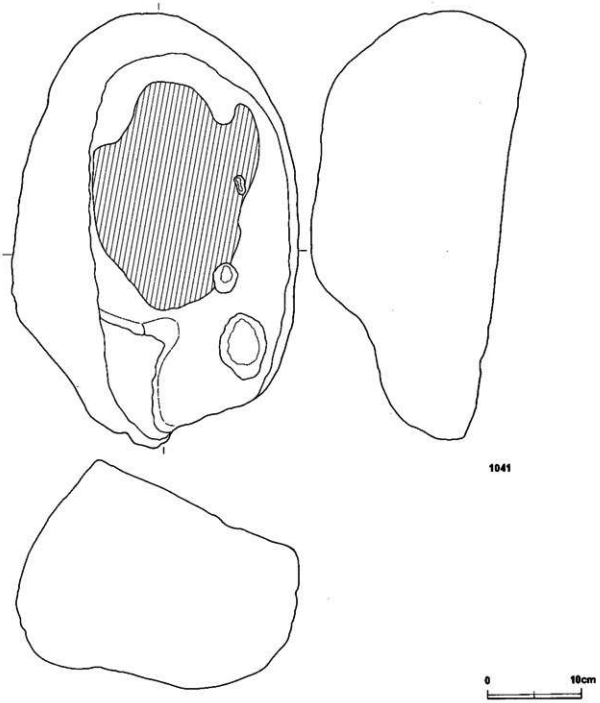
第194図　縄文石器(9)－使用面をもつ礫　〈10〉



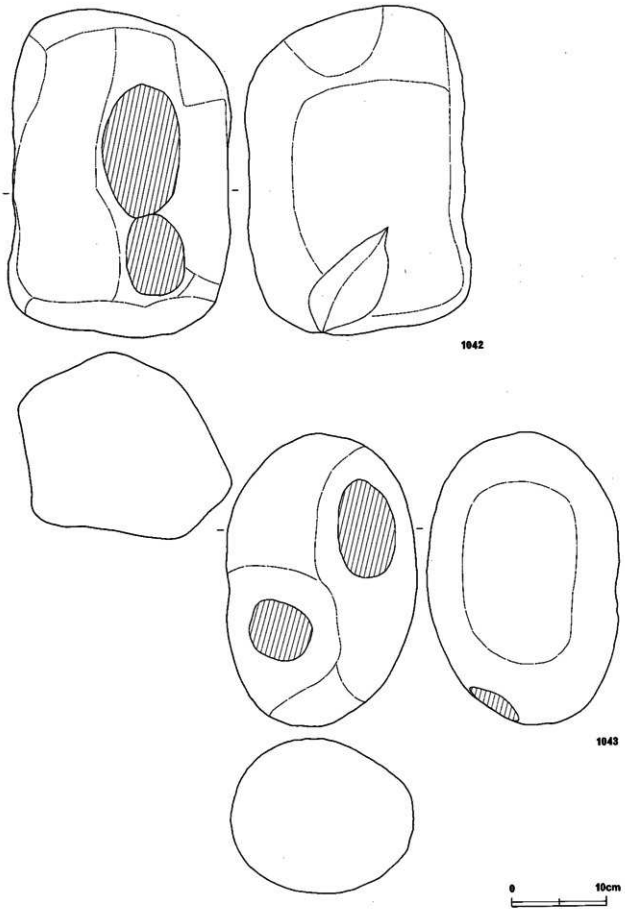
第195図　縄文石器群一使用面をもつ礫　〈11〉



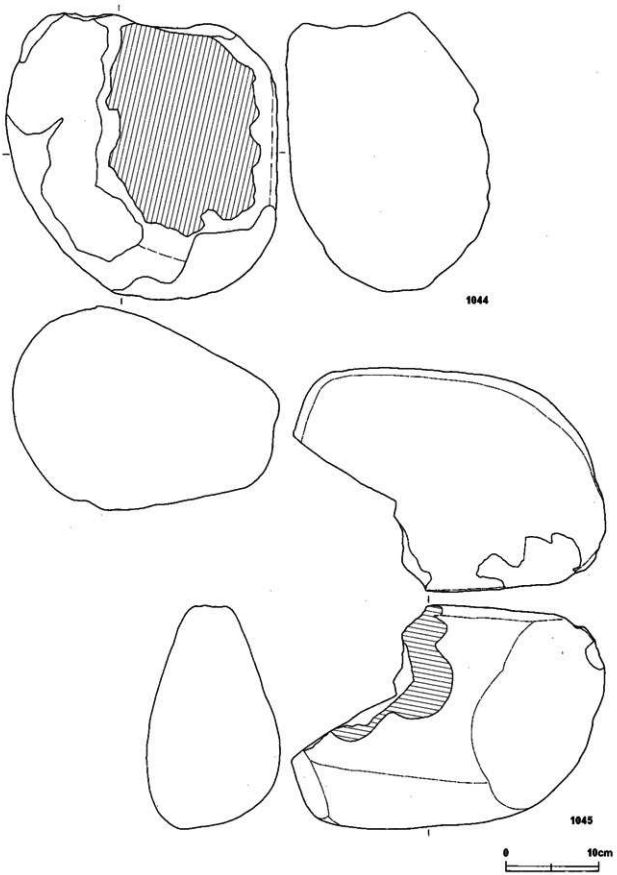
第196図　縄文石器類－使用面をもつ礫　〈12〉



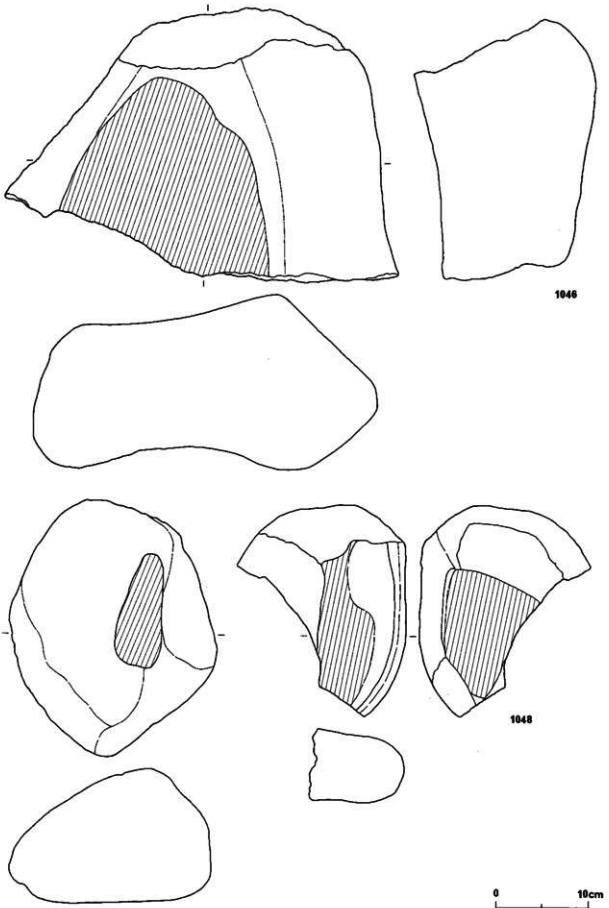
第197図　縄文石器類－使用面をもつ礫　〈13〉



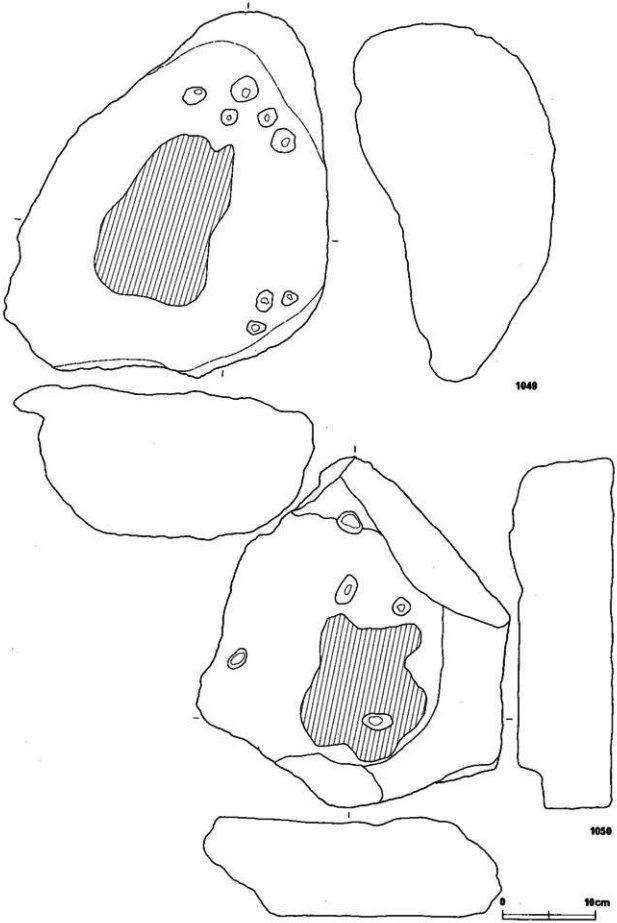
第198図　縄文石器㈱－使用面をもつ礫　〈14〉



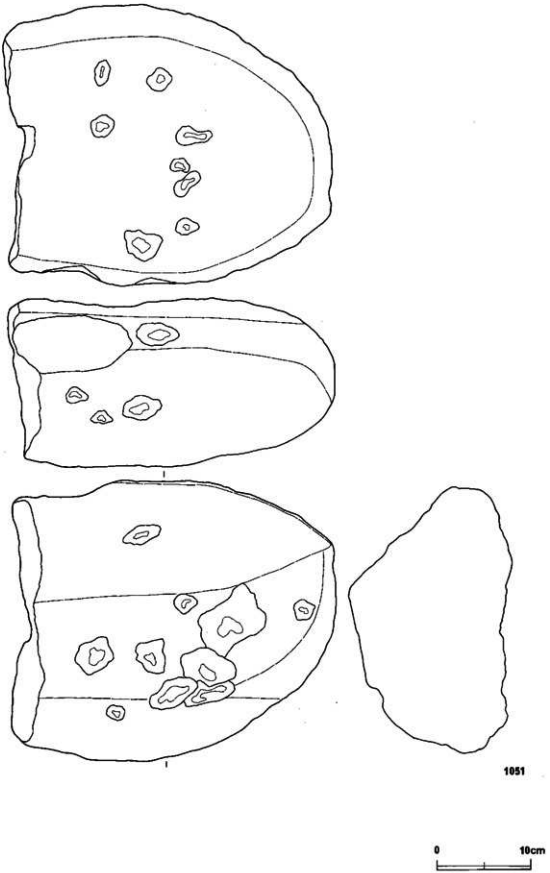
第199図　縄文石器⑮－使用面をもつ礫　〈15〉



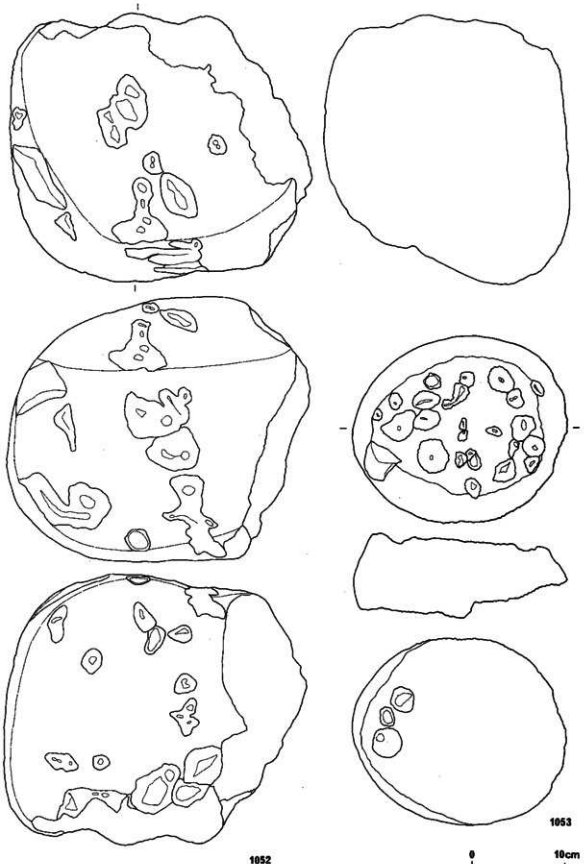
第200図　縄文石器(8)－使用面をもつ礫　〈16〉



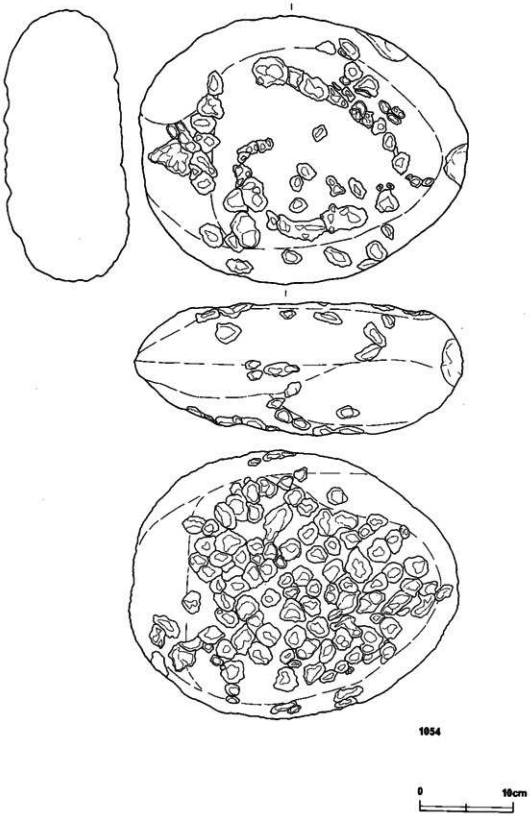
第201図　縄文石器(3)－使用面をもつ礫　〈17〉



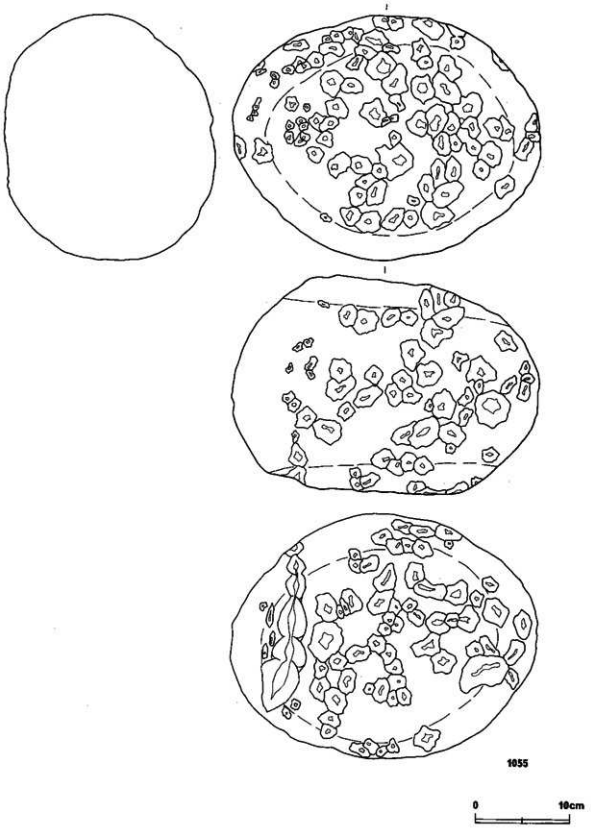
第202図　縄文石器⑩—使用面をもつ礫　〈18〉



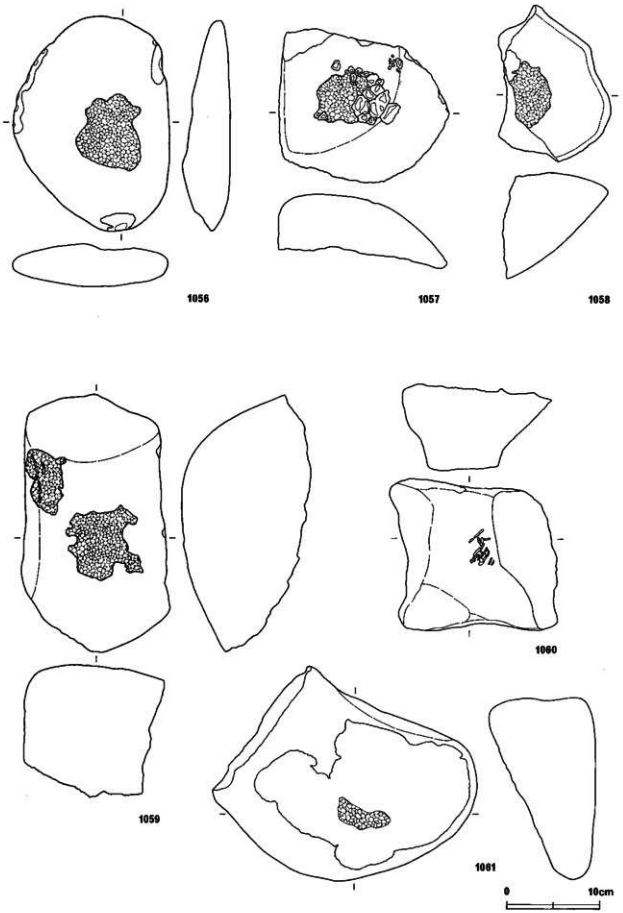
第203図　縄文石器69－使用面をもつ礫　〈19〉



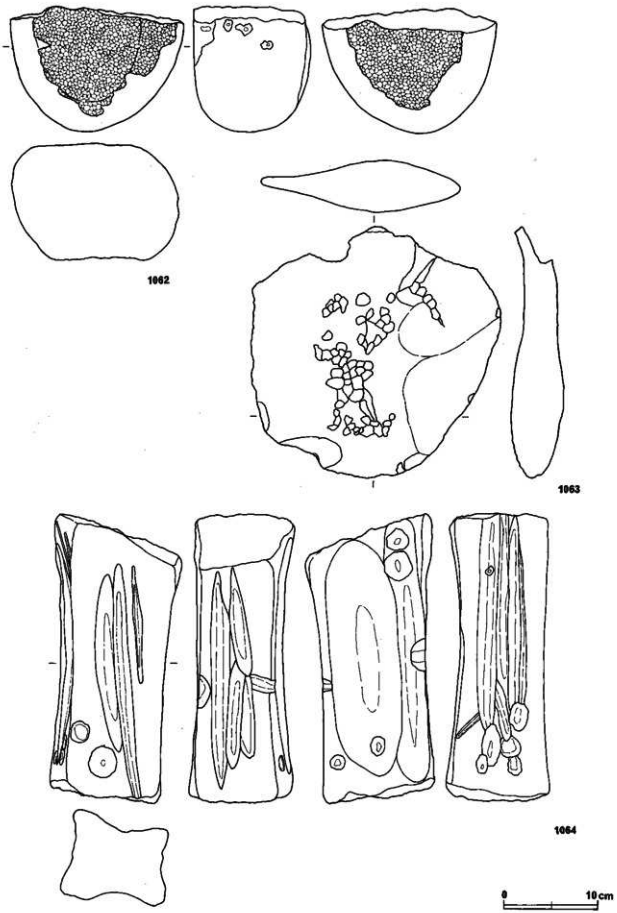
第204図　縄文石器㈱－使用面をもつ礫　〈20〉



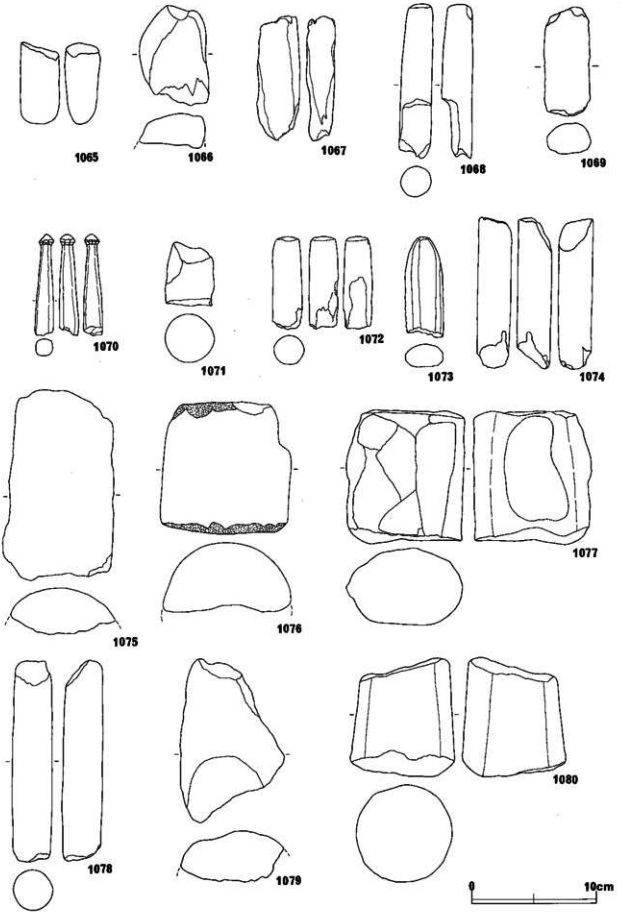
第205図　縄文石器(8)－使用面をもつ礫　〈21〉



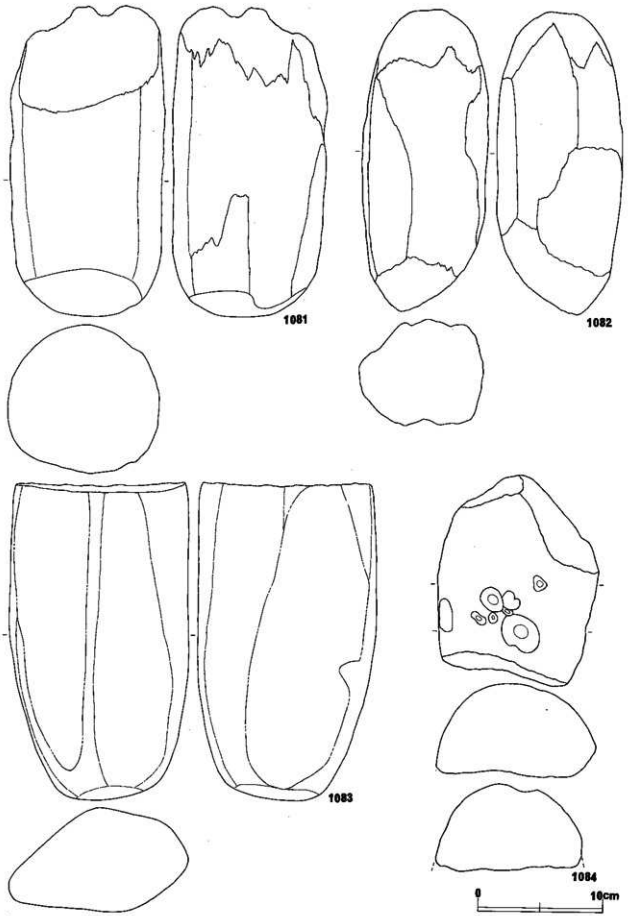
第206図　縄文石器⑯－使用面をもつ礫　〈22〉



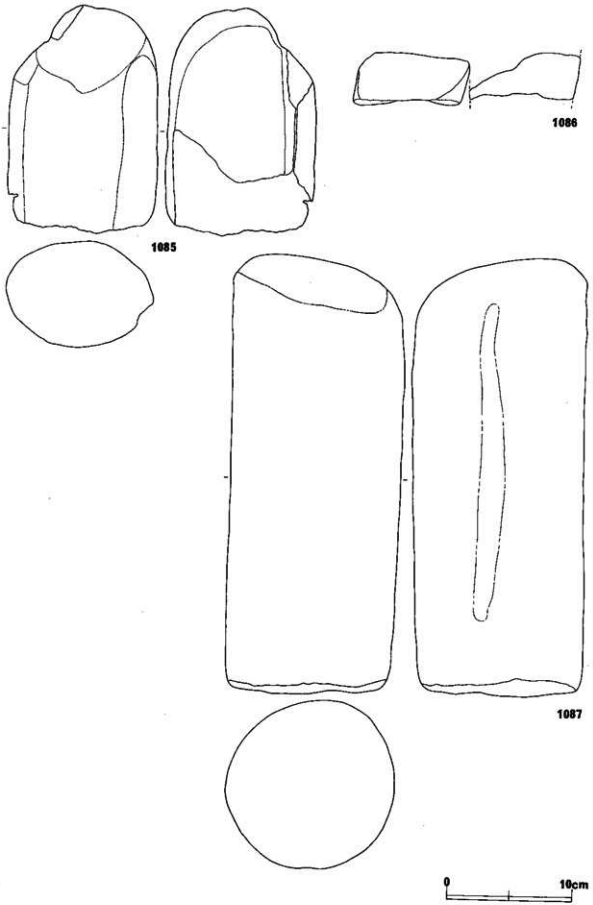
第207図　縄文石器類－使用面をもつ礫　〈23〉



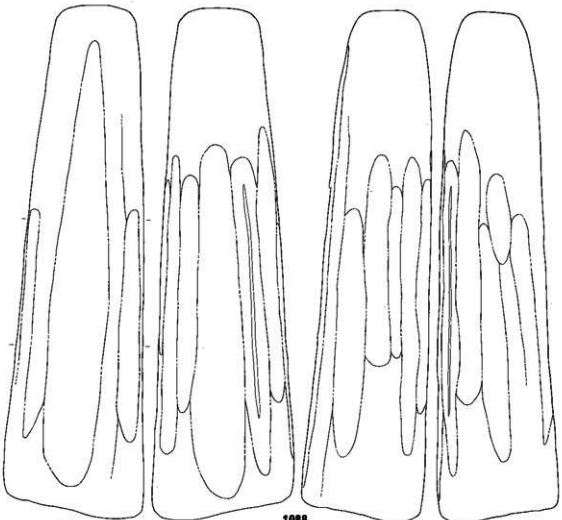
第208図　縄文石器(100)－石棒　〈1〉



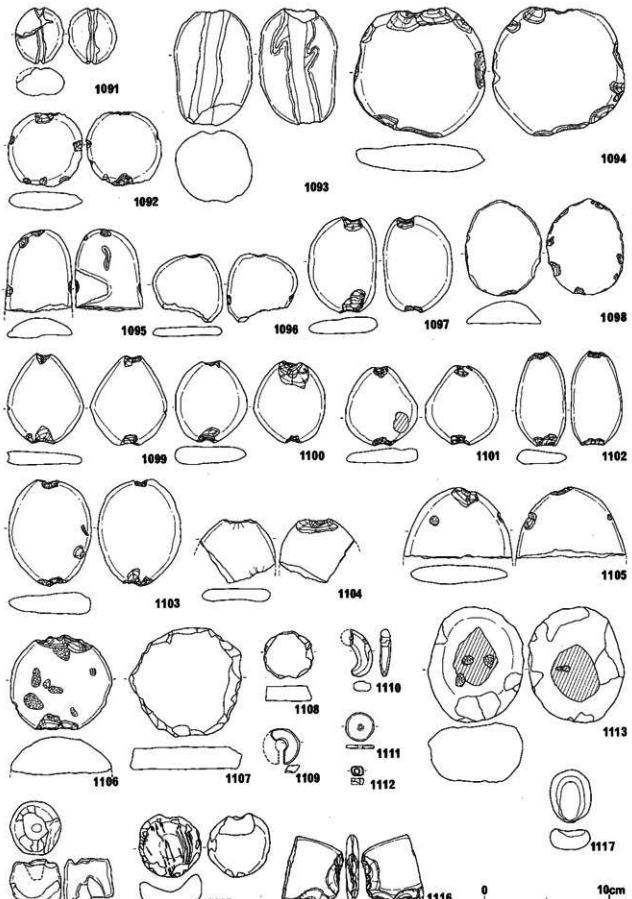
第209図　縄文石器(Ⅲ)－石棒　〈2〉



第210図　縄文石器(102)－石棒　〈3〉



第211図　縄文石器(狐)－石棒　(4)・丸石



第212図　縄文時代の石製品他

第4表　石棒一覧

図版番号	整理番号	遺構番号	地区	層位	形態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
208-1065	5432	第16号溝			無頭	6.5	3.2	2.6	89.1	半分欠損
208-1066	10646	第10号配石			無頭	8.0	5.2	2.5	121.6	
208-1067	6775	第2号溝			無頭	9.9	3.4	2.2	83.4	
208-1068	10647	第1号配石	XII－V－20		無頭	12.3	2.4	2.4	107.9	
208-1069	10650	遺構外	XV－B－10－2	IIIa層	無頭	8.7	3.6	2.4	141.1	
208-1070	4170	遺構外	XIV－J－17		有頭	8.1	1.3	1.4	27.0	一部欠損　単頭
208-1071	10652	遺構外	XIV－J－25		無頭	5.1	3.9	3.8	117.4	
208-1072	4166	遺構外	XIV－J－16	Vb層	無頭	7.3	2.4	2.3	77.8	一部欠損
208-1073	8890	遺構外	XV－B－12	撹乱中	無頭	8.0	3.0	1.8	70.9	欠損　長軸の端少しタタキ
208-1074	4234	遺構外	XV－A－1		無頭	12.0	2.2	2.2	157.5	両端欠損
208-1075	10649	第16号溝		VI層	無頭	15.2	8.7	3.7	838.2	半分欠損
208-1076	9686	遺構外	XV－B－3－3	II層	無頭	10.5	10.2	5.5	900.0	長軸の両端タタキ
208-1077	9928	第37号貯蔵穴			無頭	10.7	9.3	6.1	1100.0	スリ面あり
208-1078	10648	遺構外	XII－W－21	VII層	無頭	16.0	3.2	3.2	299.5	
208-1079	10651	遺構外	XV－B－10		無頭	13.0	8.2	4.0	451.6	
208-1080	7005	遺構外	XV－B－7		無頭	9.5	8.3	7.7	800.0	
209-1081	9374	不明	不明		無頭	24.7	12.0	11.8	5600.0	長軸の一端が研磨
209-1082	9929	第53号貯蔵穴			無頭	24.0	9.9	8.5	3000.0	
209-1083	9469	第9号貯蔵穴			無頭	25.0	14.3	8.2	5000.0	スリ面あり
209-1084	9466	第64号貯蔵穴			無頭	16.8	12.8	7.4	1800.0	凹みあり
210-1085	9430	第72号貯蔵穴			無頭	18.2	11.7	8.5	2500.0	
210-1086	9770	遺構外	XV－B－3	VII層	無頭	4.2	9.3	3.7	400.0	欠損
210-1087	9930	第9号貯蔵穴			無頭	34.9	13.5	13.4	11100.	
211-1088	9272	第12号貯蔵穴			無頭	40.8	11.1	8.5		スリ面あり 砥石として再利用
	9199	不明	不明	不明	無頭	7.1	2.1	0.9	23.4	欠損
		遺構外	XIV－J－25		無頭	10.7	3.0	1.2	81.3	一部欠損
	5149	遺構外	XV－F－14		無頭	3.2	2.4	1.9		欠損

に地表に安定してすえた場合、礫の頂部に使用面がくるものもある。1064は4面使用の砥石である。

石　棒(第208図～第211図1065～1088)

37点出土している。その中の10点は小破片である。ここでは24点のみ図示する。出土位置は貯蔵穴が7点、集石が4点、溝が3点、遺構外が18点、不明が3点である。遺構外出土の18点のうち9点はXV－B区より出土している。石棒は小形と大形の2種に分類できる。小形品は13点、大形品は14点である。大形品のなかには磨面や凹みが認められるものがあり、砥石や敲き石として再利用していた可能性がある。詳細については第4表のとおりである。

丸　石(第211図1089・1090)

4点ある。そのうち2点のみ図示する。1089はXIV－J－24から出土。円形で直径4.8cm・厚さ3.9cmある。1090は第51号貯蔵穴から出土している。楕円形で、長径9.3cm・短径7.8cm・厚さ7.5cm・重さ700.0gある。図示しないが、第11号貯蔵穴から小形品が、第3号土坑より大形品が出土。

石　錘(第212図1091～1106)

第5表　石錘一覧

図版番号	整理番号	遺構番号	地　区	層　位	形態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備　考
212-1091	2195	遺構外	XII－V－9	VII層	有溝	4.5	3.8	2.2	43.4	長軸一周の溝一部破損
212-1092	3562	不明	不明		打欠	5.9	5.8	1.5	57.4	長軸・短軸の両端を打欠
212-1093	9690	遺構外	XV－A－4		有溝	9.1	6.1	5.7	385.6	長軸一周の溝一部破損
212-1094	8274	遺構外	XV－A－11		打欠	10.2	10.3	2.2	338.3	長軸・短軸の両端を打欠
212-1095	7011	遺構外	XII－V－15	VII層	打欠	6.6	5.1	1.7	80.2	長軸の端を打欠 短軸の両端を敲打 半分破損
212-1096	7017	第71号貯蔵穴		覆土一括	打欠	5.3	5.5	0.7	33.6	長軸の端を敲打一部破損
212-1097	10663	遺構外	XIV－J－17		打欠	7.6	5.4	1.3	80.8	長軸の両端を打欠
212-1098	9838	遺構外	XII－V－18	VII層	打欠	7.5	6.0	1.7	90.8	長軸の両端を打欠 半分破損
212-1099	9607	遺構外	XII－U－24	VII層	打欠	7.1	6.0	1.1	63.6	長軸の両端を打欠
212-1100	7015	遺構外	XII－W－18	VII層	打欠	6.4	5.6	1.5	69.9	長軸の両端を打欠
212-1101	7014	遺構外	XII－W－14	VII層	打欠	6.3	5.7	1.2	63.5	長軸の両端を打欠
212-1102	7008	遺構外	XV－B－6－1		打欠	7.4	4.1	1.2	51.1	長軸の両端を打欠
212-1103	5413	第61号貯蔵穴		覆土一括	打欠	8.4	6.5	1.8	135.6	長軸の両端を打欠
212-1104	10558	遺構外	XV－B－4		打欠	5.0	5.2	1.0	43.2	長軸の端を打欠 半分破損
212-1105	7029	遺構外	XV－A－5		打欠	5.6	8.6	1.5	105.2	長軸の端を打欠 半分破損
212-1106	8094	遺構外	XII－W－6		打欠	7.4	8.0	3.0	202.9	長軸の両端を打欠

16点ある。貯蔵穴2点、遺構外14点である。

渡辺誠は縄文時代の石錘を形態から切目石錘・有溝石錘・揚子江型石錘の3種類に分類している。渡辺は漁網錘には含めていないが、4類として礫の両端を打欠いただけの礫石錘も含めている。本遺跡は2類の有溝石錘が2点、4類の礫石錘が14点である。詳細は第5表のとおりである。

(3)　石製品

石製円板・玦状耳飾・玉類・軽石製品・その他がある。

石製円板(第212図1107・1108)

2点ある。周縁部を打ち欠いて研磨せずに円形に整形しただけである。1107はXV－A－4IV層から出土。最大径9.1cm・厚さ1.75cm・重さ246.3gと大形である。1108はXII－V－21より出土。最大径4.0cm・厚さ1.2cm・重さ34.3gある。

玦状耳飾(第212図1109)

1点ある。1109はXV－A－4から出土。形状は円形で、長さ2.8cm・厚さ0.6cmある。

玉　類(第212図1110～1112)

勾玉状飾玉が1点と丸玉が2点ある。1110は勾玉状飾玉で、XV－K－8から出土。玦状耳飾の欠損品を再利用して製作されたと思われるが、縄文時代前期の遺物が包含層から出土していないので、縄文時代前期とする明確な根拠はない。孔の部分から欠損しており、長さ3.7cm・幅1.3cm・厚さ0.8cmある。

1111は丸玉で、XV－K－7III層から出土。一部欠損している。長さ0.5cm・幅1.0cm・厚さ0.5cmあ

る。1112も丸玉である。ＸＶ－Ｋ－８から出土。完形品。形状は碁石に似ている。直径2.2cm・厚さ0.25cmある。

軽石製品(第212図1113・1114)

２点ある。1113はＸⅡ－Ｕ－14Ⅶ層から出土。長さ9.1cm・幅7.5cm・厚さ4.7cm・重さ300.0gある。中央部が少し凹み研磨されている。側辺部には敲打痕が認められ、敲打により成形されている。1114はＸⅡ－Ｕ－９Ⅶ層から出土。半分欠損。現存部の長さ4.0cm・幅4.2cm・厚さ4.0cm・重さ26.4gある。長軸方向に未貫通の孔が１つある。浮子の欠損品の可能性がある。

その他の石製品(第212図1115～1117)

小形の砥石と石皿、自然石を打欠いたもの各１点ずつある。

1115はXIV－Ｊ－25から出土。長さ5cm・幅4.9cm・厚さ2.7cm。中央部がくぼみ研磨され、0.1cm位の幅の刻みがあるので砥石であろう。

1116はXIV－Ｊ－24－12Ｖｂ層から出土。長さ4.2cm・幅3.2cm・厚さ1.6cm・重さ25.0g。片面中央部が3.4×2.2cmの楕円形に凹み研磨される。形状は石皿に似ている。。

1117はＸⅡ－Ｖ－10　Ⅶ層から出土。長さ5.3cm・幅4.9cm・厚さ1.0cm・重さ34.7gである。半分欠損。長軸の一端を平らになるように打欠いている。打製石斧の欠損品の可能性もあるが、明確でない。

(4)　土製品

土偶・動物形把手・匙形土製品・耳飾り・玉・土錘・土製円板・ミニチュア土器がある。

土　偶(第213図１～14)

14点ある。完形品はない。すべて中実土偶である。第77号貯蔵穴と水さらし場状遺構から各１点、遺構外から12点が出土。遺構出土の２点は大形土偶の脚部である。接合関係はＸＶ－Ｃ－１の胴部と、ＸⅡ－Ｖ－25の脚部の１組のみがある。以下、部位から頭部・腕部・胴部・脚部の４つに分けて記述する。

頭部(１～４)：４点ある。１は段丘斜面から出土。顔面は楕円形を呈す。顔の輪郭を沈線で強調して仮面を表現したものであろうか。頭部は髪を結んだように丸く表現。眉から鼻にかけてはＹ字形の隆帯で、目は太めの沈線で、口は粘土をはりつけた上に刺突で表現。後頭部に未貫通の穴がある。顔面は赤色塗彩。２はＸⅡ－Ｖ－17Ⅶ層から出土。顔面は楕円形を呈し、上向きである。眉から鼻にかけてはＶ字形の隆帯で、目は粘土をはりつけた上に刺突で、口は刺突孔で表現。頭部はかなり破損しているが、向かって左側の眉の下に穴がある。３はXIV－Ｊ－３から出土。顔面は逆三角形を呈す。眉から鼻にかけてはＹ字形の隆帯で、目と口は刺突で表現。首は長く顔面が前につき出している。首の破損面に凹みがあり、胴部を差しこむように製作されたことがうかがえる。４はＸⅡ－Ｗ－11のⅦ層から出土。顔面は楕円形を呈し、四角い帽子あるいは仮面をつけているように頭部が四角い。眉から鼻にかけてはＹ字形の隆帯で、目は太めの沈線、口は刺突で表現。顔面が前に浮き上がっているようにみえる。首筋に沈線の渦巻文がある。

腕部(5)：１点ある。５はＸⅡ－Ｕ－25から出土。大形品で、沈線による文様が施される。

胴部(６～８)：３点ある。６はＸＶ－Ａ－５から出土。長方形を呈す。乳房を表わす突起がある。腕はない。胴下半部には浅い凹みがある。７は段丘斜面から出土。逆三角形を呈す。肩がはる。腕はない。乳房を表わす突起があり、胴下半部には浅いくぼみがある。８はＸＶ－Ｃ－１から出土。逆三角形を呈す。腕が少しあり、斜め上にのびる。わきの下から腰にかけてと後胴上半部に沈線による文様が施される。６・７同様乳房を表わす突起があり、胴下半部には浅いくぼみがある。直接接合しないが、ＸⅡ－Ｖ－25出土物と同一個体と考えられる。

脚部(9～14)：6点ある。9はXⅡ－V－25から出土。O脚である。太めの沈線による文様が施される。底部は楕円形で安定性よく作られている。10は段丘斜面より出土。沈線による鋸歯状の三角形の平行線文が施され、衣服を身につけているようにみえる。腰の部分の上面には沈線による渦巻文が施される。脚は片方が破損。自然に開いた感じである。底部が不安定である。11は第77号貯蔵穴から出土。直線的である。踝(くるぶし)を表現すると思われる突起が下部にある。前面から側面にかけて2mmくらいの隆帯で三角形が表現される。土偶製作時に棒などを芯にしていたことを示す圧痕がみられる。12はXⅡ－U－25Ⅶ層から出土。太めの沈線が施される。11と同じく踝を表現すると思われる突起があり，11同様の圧痕がみられる。脚部だけで9cm以上もあり、大形である。13は水さらし場状遺構より出土。沈線による文様が施される。底部は破損しているが楕円形を呈すと思われ、安定性がある。大形である。14はXV－K－9Ⅲ層から出土。摩耗していて遺存状態が悪い。

動物形把手(第213図15・16)

深鉢土器の口縁部や、頸部の把手の先端に動物形の装飾を施したものである。本遺跡では鳥の頭の形をしたものが2点出土している。15は第1号土坑より出土。くちばしは沈線で、目は刺突で表現。16と比較すると粗雑な作りで、摩耗している。何に付けられていたのかは不明。16はXV－B－8－4Ⅲa層から出土。くちばしは沈線で、目は沈線の渦巻文で表現。全面に赤色塗彩された非常に丁寧な作りである。これも何につけられていたのかは不明。

匙形土製品(第213図17)

17がXⅡ－V－13Ⅶ層から1点だけ出土。身の径2.4×2.5cm・深さ1.4cm・柄の長さ1.8cm・幅2.2cm。柄は身に対し水平につく。破損している。

耳　飾(第213図18～22)

5点ある。形状から次のA～C類の3つに分類する。

A類(18～20)：内外両面が凸面を呈するもの。18はXV－B－5－2Ⅲa層から出土。くびれ部の直径は1.5cm。刺突による渦巻文が施される。19はXV－B－3Ⅳ層から出土。くびれ部の直径は2.2cm。刺突による重圏文が施される。20はXV－A－4から出土。くびれ部の直径は1.8cm。刺突による重圏文が施される。

B類(21)：内外面が平坦、もしくは凹面を呈するもの。21はXV－B－5－4Ⅲa層から出土。くびれ部分の直径は1.8cm。全面赤彩塗彩。無文。

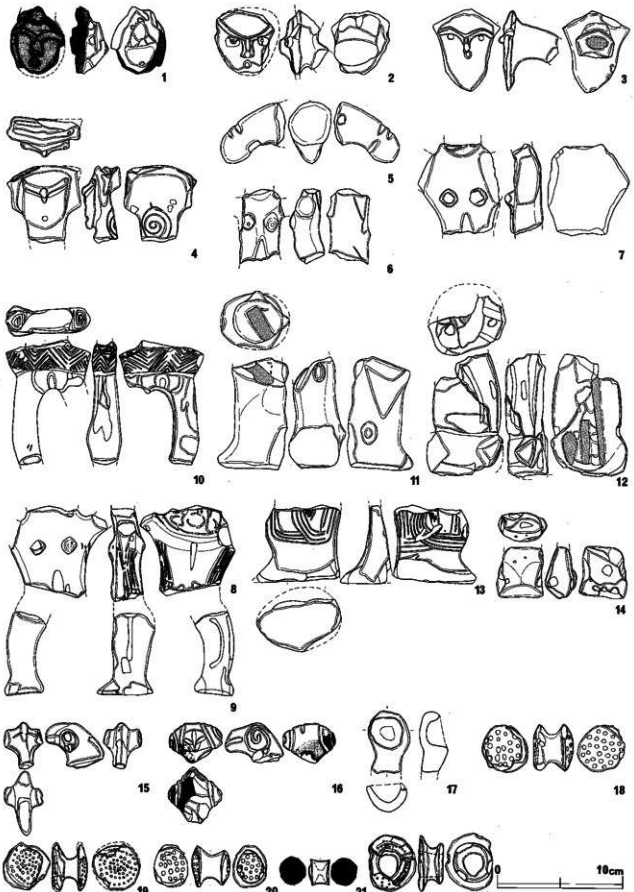
C類(22)：内外面の径が著しく異なるもの。22はXV－A－4から出土。くびれ部分の直径は2.5cm。沈線文が施される。

玉(第214図23・24)

2点ある。23はXⅡ－V－24～XV－B－4から出土。断面は紡錘形を呈す。長径1.7cm・短径1.7cm・厚さ0.55cm・孔の直径0.2cmである。全体にミガキがかかり、ていねいに整形されている。24は出土位置が不明。孔が2つあけられている。断面は紡錘形を呈す。長径6.2cm・短径3.05cm・厚さ1.8cm・孔の直径0.4cmと0.4cmである。形状が硬玉製大珠に似ており、それを模倣したものかもしれない。

土　錘(第214図25・26)

2点ある。渡辺誠は縄文時代の土錘を形態から土器片錘・有溝土錘・管状土錘・揚子江型土錘の4種類に分類しているが、本遺跡の2点はⅢ類のうちのA種、つまり管状土錘のうち断面形が円形を呈するものに相当する。25はXV－B－7－2Ⅲ層から出土。形態は楕円形で、全面に細かい刺突文が施される。26はXⅣ－J－3から出土。形態は楕円形で、表面に一部ミガキがみられる。欠損しているが、全面にミガキがかけられていたと思われる。ここでは形態から管状土錘として扱ったが、細かい刺突文や



第213図　縄文時代の土製品 (1)

第6表　土製円板一覧

図版番号	整理番号	遺構番号	地　区	層　位	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	研磨状況	備　考
214-27	105	遺構外	XIV－J－2		4.3	0.9	18.8	1	縄文
214-28	18	第3号住居址		覆土一括	4.0	0.8	10.6	1	沈線2本＋縄文
214-29	36	第52号貯蔵穴		覆土一括	5.3	1.1	26.9	2	沈線文
214-30	19	遺構外	XV－B－10－1	Ⅲa層	5.1	1.5	34.6	2	無文
214-31	20	遺構外	XV－B－10		4.8	1.3	29.2	2	縄文
214-32	88	遺構外	XV－A－4		4.7	0.9	17.7	2	無文
214-33	17	遺構外	XV－B－6－4	Ⅲ層	4.6	1.5	25.5	2	無文、未貫通の孔
214-34	106	遺構外	XIV－J－25		4.5	0.7	16.2	2	縄文
214-35	21	第72号貯蔵穴		覆土一括	4.5	0.8	16.1	2	縄文
214-36	45	遺構外	XIV－J－24－16	Ⅴc層	4.3	0.8	11.0	2	沈線文
214-37	37	第63号貯蔵穴		覆土一括	4.2	0.7	14.5	2	縄文
214-38	46	遺構外	XIV－J－18	4層下部	4.2	0.9	16.6	2	無文
214-39	33	第4号貯蔵穴		覆土一括	4.1	1.2	17.3	2	無文
214-40	91	遺構外	XV－A－5		4.1	1.0	14.0	2	無文
214-41	39	第62号貯蔵穴		覆土一括	4.0	0.8	14.7	2	無文
214-42	48	遺構外	XIV－E－15	Ⅶ層	3.9	0.8	15.2	2	無文
214-43	35	第1号土坑		覆土一括	3.9	0.8	10.0	2	縄文
214-44	47	遺構外	XIV－E－18－8		3.9	1.2	20.0	2	無文
214-45	90	遺構外	XV－A－9		3.4	1.0	11.4	2	無文
214-46	99	遺構外	XII－V－14	Ⅶ層	4.5	1.0	18.4	3	沈線文
214-47	81	第72号貯蔵穴		覆土一括	4.4	0.9	17.8	3	無文
214-48	65	遺構外	XIV－J－16－8		3.8	1.0	11.8	3	沈線文
214-49	38	第62号貯蔵穴		覆土一括	3.8	0.8	13.7	3	無文
214-50	101	遺構外	XII－V－14	Ⅶ層	3.6	0.8	10.8	3	無文
214-51	85	遺構外	XV－B－10		3.5	0.9	13.8	3	縄文
214-52	34	第28号貯蔵穴		覆土一括	3.4	0.8	8.8	3	無文
214-53	49	遺構外	XIV－E－5	Ⅵ層	3.1	0.8	7.6	3	沈線文？
214-54	93	遺構外	XV－A－5	Ⅶ層	3.8	1.0	13.8	4	無文
214-55	94	遺構外	XIV－J－24		3.1	1.0	10.1	4	無文
214-56	22	遺構外	段丘斜面		3.0	0.7	6.6	4	縄文
214-57	89	遺構外	XII－U－24	Ⅶ層	2.8	0.6	3.5	4	無文
214-58	100	遺構外	XII－V－14	Ⅶ層	2.7	0.8	4.7	4	無文
214-59	23	遺構外	XV－B－6－4	Ⅲ層	2.6	1.1	7.8	4	無文
214-60	102	遺構外	XII－V－13	Ⅶ層	2.5	0.8	3.4	4	無文

ミガキがかけられている点などから、玉などの装飾品の可能性も考えられる。

土製円板(第214図27～59)

34点ある。住居址1、土坑9、遺構外24点である。直径は2.5cm～5.3cmで、最頻値は3.8cm～4.2cm程度にピークがある。厚さは0.6cm～1.9cmで、最頻値は0.8cm～1.0cm程度にピークがある。重さは3.4g～34.6gある。側辺部を観察し、研磨状況から次のように分類した。

1類：全周敲打による成形だけで、研磨痕をほとんど残さない。

2類：全周の1／4程に研磨痕を残す。

3類：全周の1／2程に研磨痕を残す。

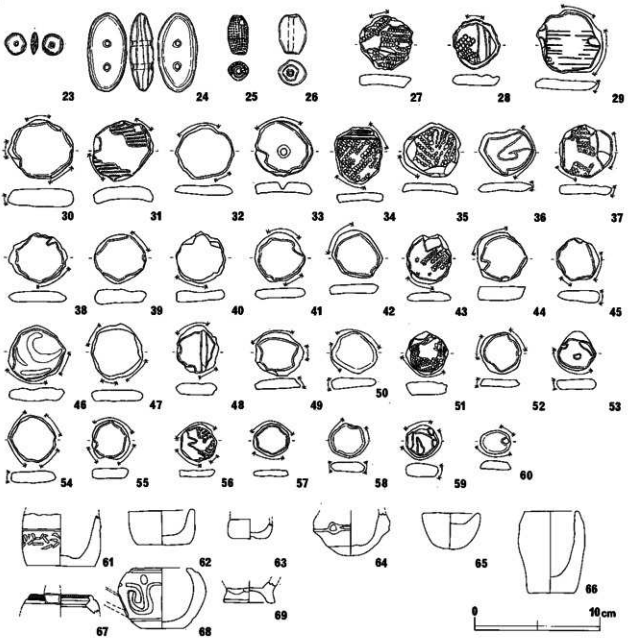
4類：全周の3／4程に研磨痕を残す。

5類：全周に研磨痕を残す。

1類は2点(27・28)、2類は17点(29～45)、3類は7点(46～52)、4類は7点(53～59)、5類はない。詳細は第6表のとおりである。

第7表　ミニチュア土器一覧

図版番号	整理番号	遺構番号	地　区	層　位	器　種	出土部位	焼　成	備　考
214-61	52	遺構外	XII－V－16	VII層	鉢	胴～底部	やや良好	沈線文
214-62	30	第54号貯蔵穴		覆土一括	鉢	ほぼ完形	良好	無文
214-63	86	遺構外	XV－B－10		鉢	胴～底部	やや良好	無文
214-64	80	遺構外	XIV－E－18		鉢	胴～底部	やや良好	胴部に隆帯がめぐる
214-65	29	第2号貯蔵穴		覆土一括	鉢	ほぼ完形	良好	無文
214-66	66	遺構外	XIV－J－17		深鉢	ほぼ完形	やや良好	無文
214-67	55	遺構外	XII－R－13	VII層	注口	ほぼ完形	良好	堀ノ内式期　注口部欠損
214-68	28	水さらし場状遺構			注口	口縁のみ	良好	加曽利B式期
214-69	51	遺構外	XII－V－25		不明	底部のみ	良好	無文



第214図　縄文時代の土製品 (2)

ミニチュア土器(第214図60～68)

9点ある。土坑2点、水さらし場状遺構1点、遺構外6点である。器種から鉢・深鉢・注口土器・不明の4つに分類する。

鉢は5点(60～64)。64は第2号貯蔵穴出土。無文でほぼ完形。深鉢は1点(65)。注口土器は2点(66・67)。66は水さらし場状遺構出土。口縁部のみ。文様から加曽利B様式と思われる。67はXII－R－13VII層から出土。文様から堀之内I様式であろう。不明は1点(68)。詳細は第7表にのとおりである。

註

註1：1992『長野県中野市栗林遺跡』『日本考古学年報』44など

第 4 節　弥 生 時 代

1　概　要

本遺跡から弥生時代中期と後期の遺構・遺物が検出されている。A区・B区・D区の三地区で、それぞれの地区が別の遺跡と考えることができる。

なお、遺構は各区ごとに中期と後期に分けて記述し、遺物は三地区をまとめて説明する。また、弥生時代を便宜的に次のように区分することができる。

第１期　弥生時代中期後半前葉

第２期　弥生時代中期後半後葉

第３期　弥生時代後期

第１期の遺構は調査区の北の部分、A区にのみ認められ、住居址19棟と土坑が検出されている。住居址群はA区でもより南側の部分に位置し、弥生後期の住居址群が北側に偏るのと好対照をなしている。また、700mほど南に位置する県指定史跡部分で、この期の遺構が確認されており、両所が並存していた時期があったといえる。

第２期の遺構はB区とD区で確認されている。B区では住居址はなく、井戸状土坑を確認したのみであったが、周辺の地形や表採資料から、集落址の可能性はある。D区では住居址１棟と掘立柱建物址13棟が検出されている。B区とD区の距離は約450mほどの距離がある。

また、県指定史跡部分ではこの期の住居址が検出され、集落の存在が知られている。県史跡とD区は接していることや、県指定史跡では掘立柱建物址が確認されず、それに対してD地区では住居址が１棟のみである点を考慮すれば、両地区は同じ集落であり、相互補完的な地区であったとも考えられる。

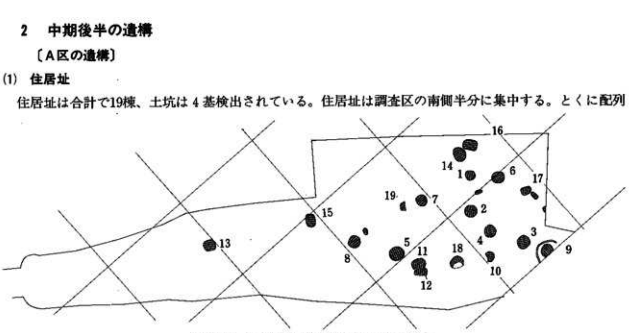
第３期は、住居址がA区およびB区で検出されている。両地区は隣接しており、ひとつの集落とも考えられるが、A区では住居址群が北側に偏ることや、段丘面上の両区の間を小さな谷が横切ること、両住居址群の距離が250m程離れていることなどから、それぞれ別の集落と考えたい。

2　中期後半の遺構

〔A区の遺構〕

(1)　住居址

住居址は合計で19棟、土坑は４基検出されている。住居址は調査区の南側半分に集中する。とくに配列



第215図　弥生時代中期後半の遺構配置（A区）

に規則性は認められない(第215図)。平面形は円形とやや規模の小さい隅円長方形の二つがあり、後者の遺物出土量は少なく、断定できないがやや新しい様相をもっている。

第1号住居址(第216図)

位　　置：A　Ⅷ-A-11・12

規模と形態：径4mのやや不整円形。

遺物出土状況：覆土中より出土。いずれも破片。

覆土堆積状況：覆土が浅く不明。

壁　　：西半分は不明瞭であった。

床　　面：第3層を床面とした。

柱　　痕：7箇所を確認している。南隅には確認できなかった。

周　　溝：認められない。

炉　　址：住居址のほぼ中央に径約30cmの地床炉を検出。

第2号住居址(第216図)

位　　置：A　Ⅶ-E-5・10

規模と形態：径約5mの円形。

遺物出土状況：北西部分床面直上に並ぶように6個体、同じく東側に1個体の土器が出土した。

覆土堆積状況：流れこみ堆積と思われる。覆土中に土器片を含む。

壁　　：検出面が南東に傾くため、西半分は検出できなかった。

床　　面：とくに貼床や堅い部分は確認されなかった。

柱　　痕：壁に沿うように小さな柱痕が検出されている。

周　　溝：東壁の内側に途切れた浅い周溝が半周する。

炉　　址：中央やや北側に径約40cmの地床炉がある。

遺　　物：床面に壺5、小形の鉢1の計6個体がほぼ完形で検出された。

切　　合：古墳時代中期の第13号住居址に切られている。

備　　考：確認された壁の外側にも遺物が分布し、周溝も壁の内側にあることから、何回かの拡張があったものと思われる。

第3号住居址(第217図)

位　　置：A　Ⅶ-E-12

規模と形態：径約5mの円形。

遺物出土状況：覆土中より破片で出土した。

覆土堆積状況：流れこみ堆積である。

壁　　：比較的明瞭に立ち上がる。

床　　面：全体に柔らかであった。

柱　　痕：小さなものが壁にそって確認された。

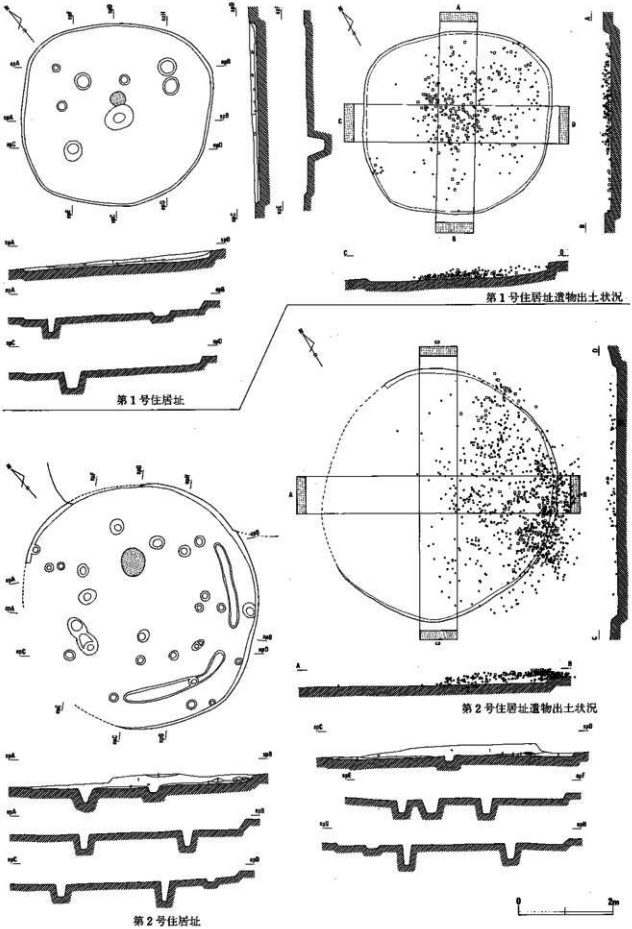
周　　溝：確認されなかった。

炉　　址：中央やや東側に長径40cmほどの地床炉が検出された。

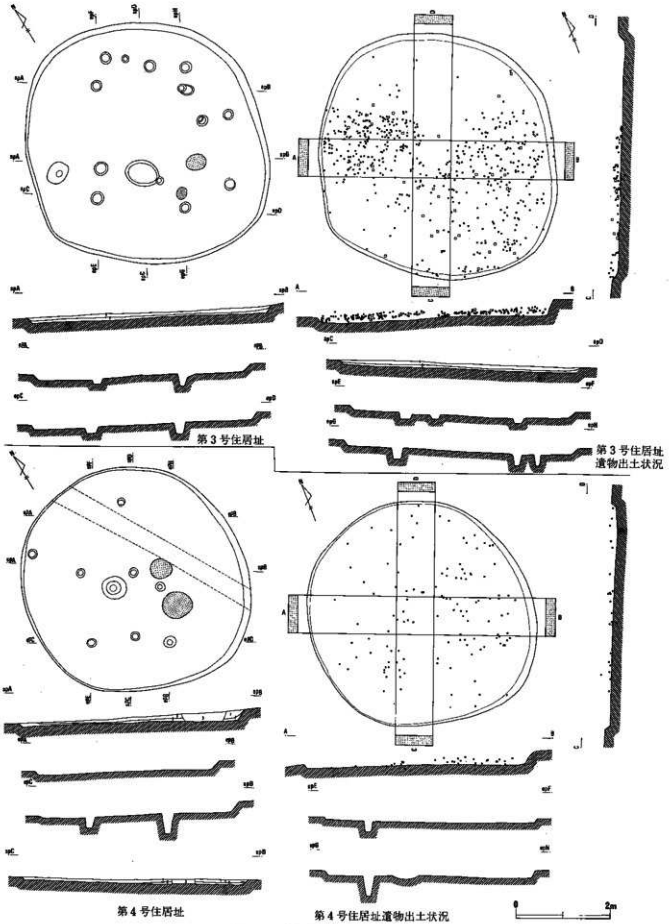
備　　考：ほぼ中央に80cm×60cmの浅い土坑がある。

第4号住居址(第217図)

位　　置：A　Ⅶ-E-8・9



第216図　弥生時代中期後半の住居址 (1)



第217図　弥生時代中期後半の住居址　(2)

規模と形態：径約4.8mの円形。

遺物出土状況：覆土中より破片で出土。

覆土堆積状況：流れこみ堆積である。

壁　　：やや不明瞭であった。

床　　面：貼床やとくに堅い面は確認できず不明瞭であった。

柱　　痕：ほぼ中央に径約50cmの大きなピットがあるほかは小さく、数も少ない。

周　　溝：認められない。

炉　　址：中央やや東に偏った位置に、地床炉が隣接して2箇所確認された。

第5号住居址(第218図)

位　　置：A　V-U－6

規模と形態：径約6mの円形。

遺物出土状況：覆土中から破片で出土。

覆土堆積状況：流れこみ堆積である。

壁　　：ほぼ明瞭に立ち上がる。

床　　面：貼床やとくに堅い部分はなかった。

柱　　痕：壁に沿って不規則に検出された。

周　　溝：なし。

炉　　址：6箇所の焼土が検出されている。いずれも同程度の加熱を受けており、地床炉であろう。

備　　考：地床炉が多数検出されているが、出土遺物やその他の点についてもとくに変わった点は認められなかった。

第6号住居址(第218図)

位　　置：A　Ⅶ-E-20

規模と形態：径約5mの円形。

遺物出土状況：覆土中より破片で出土した。

覆土堆積状況：流れこみ堆積である。

壁　　：掘りこみ面から浅く、やや不明瞭であった。

床　　面：貼床やとくに堅い部分は認められなかった。

柱　　痕：壁に沿って不規則に検出された。

周　　溝：検出されなかった。

炉　　址：北寄りの部分と南側の2箇所で検出された。北側は径約40cmの円形、南側は長さ60cmの不整形である。

切　　合：第9号土坑と切り合う。前後関係は確認できなかった。

第7号住居址(第219図)

位　　置：A　V-U-22

規模と形態：径約4.5mの円形。

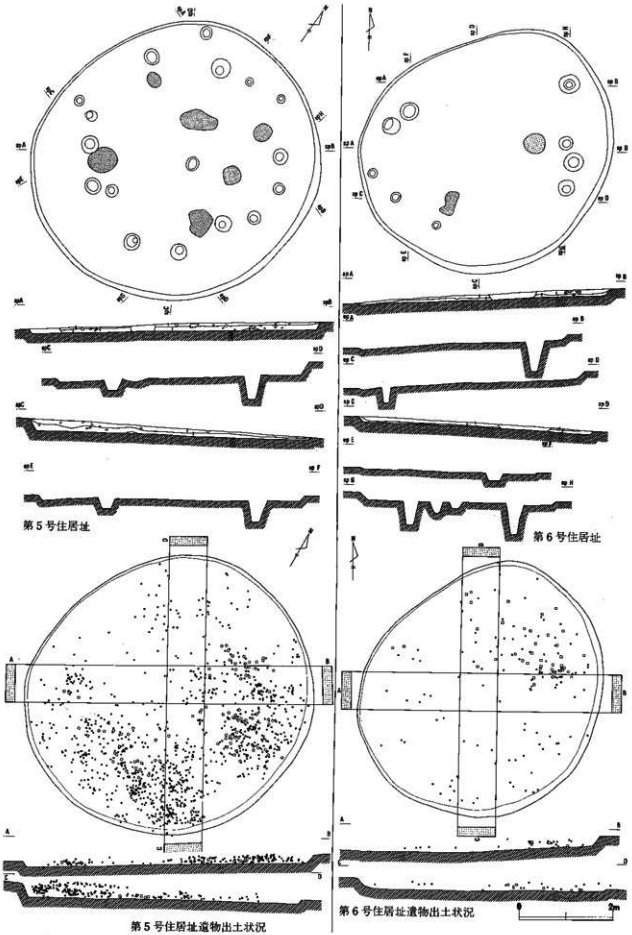
遺物出土状況：覆土中から破片で出土した。

覆土堆積状況：流れこみ堆積である。

壁　　：明瞭に立ち上がる。

床　　面：貼床やとくに堅い部分は認められなかった。

柱　　痕：不規則ではあるが、検出された柱痕は四隅に集中している。



第218図　弥生時代中期後半の住居址　(3)

周　　溝：北壁にそって1／4周ほどの長さで検出されている。
炉　　址：中央やや東寄りに径約40cmの円形の地床炉がある。

第8号住居址(第219図)

位　　置：A　V-U-3
規模と形態：径約5mの不整円形。
遺物出土状況：遺物は1点出土したのみである。
覆土堆積状況：検出面から浅く、覆土の堆積状況は不明瞭であった。
壁　　：不明瞭。
床　　面：不明瞭。
柱　　痕：不規則に小形のピットが確認された。
周　　溝：認められない。
備　　考：不整円形と柱痕の存在から住居址としたが、それ以外の落ちこみである可能性も否定できない。

第9号住居址(第220図)

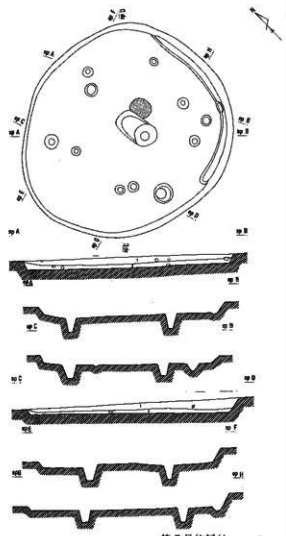
位　　置：A　Ⅶ-E-11
規模と形態：径約5.5mの不整円形。
遺物出土状況：覆土中から土器が少量破片で出土した。
覆土堆積状況：流れこみ堆積である。
壁　　：検出面が西に傾いているため、西壁は確認されなかった。掘りこみは浅い。
床　　面：礫混じりの地山を掘りこんでおり、不明瞭であった。
柱　　痕：壁に沿って、不規則に検出された。
周　　溝：認められない。
炉　　址：中央東よりに瓢箪形の地床炉が確認された。長径60cm・短径30cmある。
備　　考：ほぼ中央に80×50cmの方形の土坑が検出されている。また、住居址周囲をめぐるように円形の溝が確認されたが、本址との関係は明らかにできなかった。

第10号住居址(第220図)

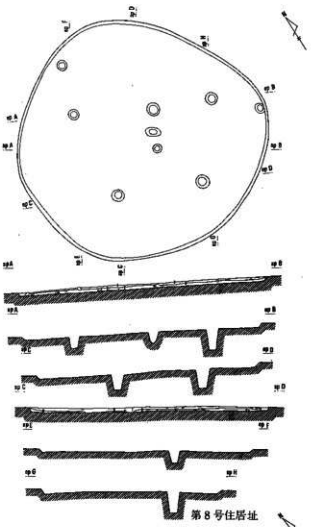
位　　置：A　Ⅶ-E-2･3
規模と形態：径4mの不整円形である。
遺物出土状況：覆土中から土器が少量破片で出土した。
覆土堆積状況：検出面からの掘りこみが浅く不明である。
壁　　：検出面が西に傾くため、西壁は検出できなかった。
床　　面：不明瞭。
柱　　痕：小さいものが3箇所等間隔に検出された。
周　　溝：認められない。
炉　　址：中央北寄りに径50cmの地床炉がある。
切　　合：平安時代の第42号住居址に切られている。

第11号住居址(第221図)

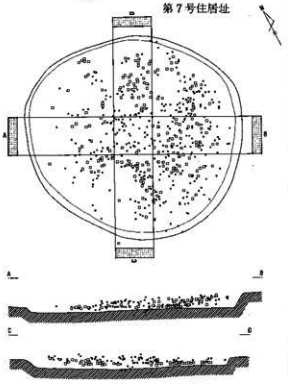
位　　置：A　Ⅳ-Y-15
規模と形態：径約5mの不整円形である。
遺物出土状況：覆土中から土器が破片で出土した。



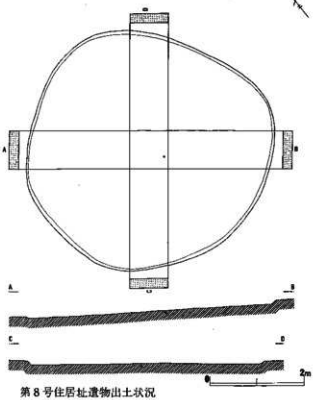
第７号住居址



第８号住居址

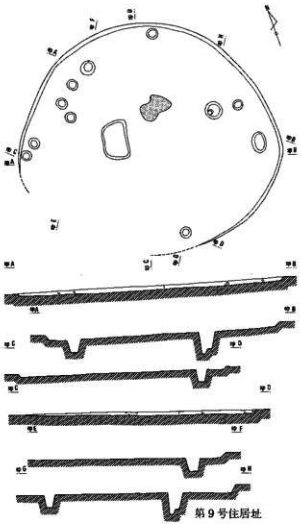


第７号住居址遺物出土状況

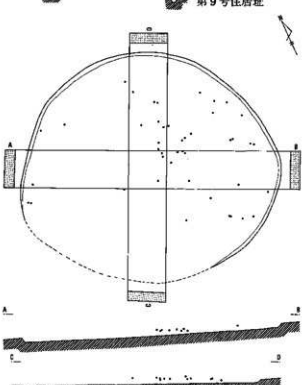


第８号住居址遺物出土状況

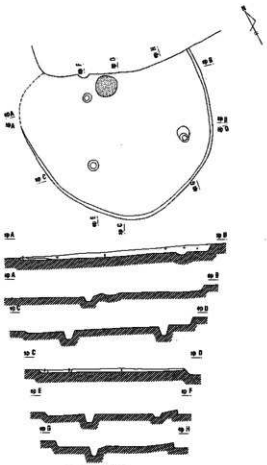
第219図　弥生時代中期後半の住居址　(4)



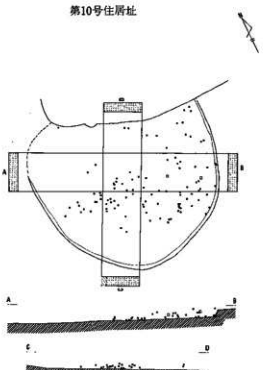
第９号住居址



第９号住居址遺物出土状況



第10号住居址



第10号住居址遺物出土状況

0　2m

第220図　弥生時代中期後半の住居址　(5)

覆土堆積状況：流れこみ堆積である。
壁　　：明瞭に立ちあがる。
床　　面：不明瞭。
柱　　痕：不規則に大小の柱痕が検出されている。
周　　溝：東壁に沿って、1／4周ほど確認された。
炉　　址：検出されなかった。
切　　合：第11号住居址を切る。

第12号住居址(第221図)

位　　置：A　Ⅶ-Y－14
規模と形態：径約5mの不整円形である。
遺物出土状況：覆土中から土器が破片で出土した。
覆土堆積状況：掘りこみが浅く不明である。
壁　　：わずかに確認したのみである。
床　　面：不明瞭であった。
柱　　痕：不規則ではあるが、壁に沿うように検出されている。
周　　溝：認められない。
炉　　址：検出されなかった。
切　　合：第11号住居址に切られる。

第13号住居址(第222図)

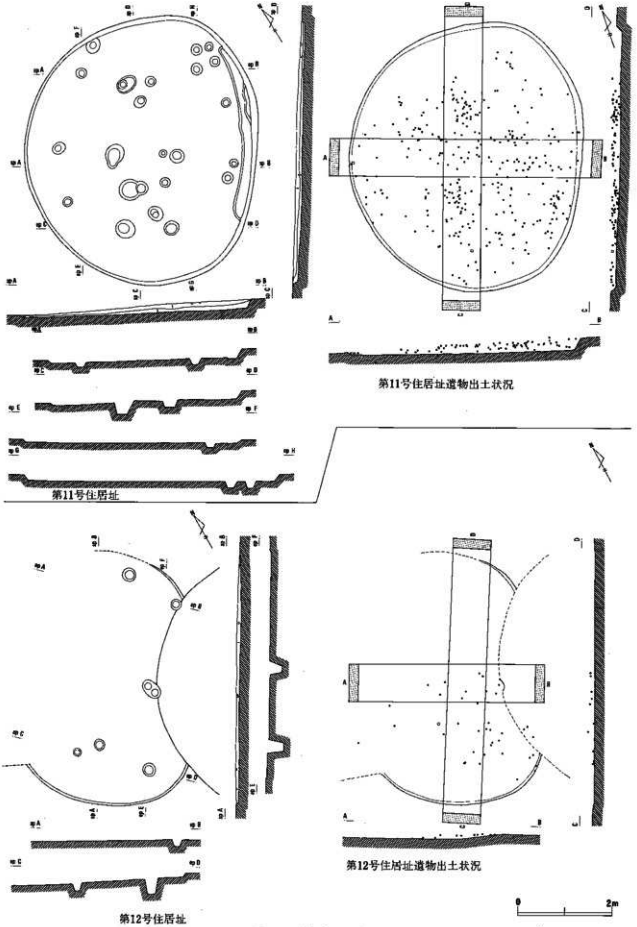
位　　置：A　V-L-23
規模と形態：径約4.5mの不整円形。
遺物出土状況：覆土中から土器が少量破片で出土した。
覆土堆積状況：掘こみが浅く不明である。
壁　　：明瞭である。
床　　面：不明瞭。とくに貼床や堅い部分は認められない。
柱　　痕：12箇所ほど検出されているが、柱穴を特定できない。
周　　溝：認められない。
炉　　址：検出されなかった。

第14号住居址(第222図)

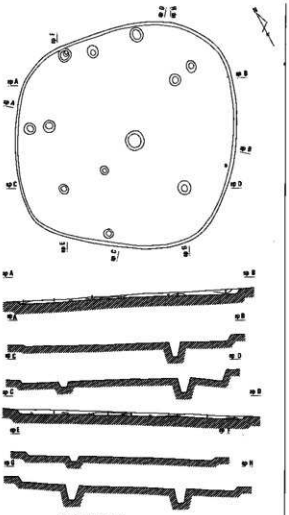
位　　置：A　Ⅷ-A-12･13
規模と形態：長径6m、短径5mの長円形である。
遺物出土状況：覆土中から破片で出土した。量は少ない。
覆土堆積状況：流れこみ堆積と考えられる。
壁　　：明瞭であった。
床　　面：貼床、とくに堅い部分は認められなかった。
柱　　痕：床面ほぼ全体に不規則に20箇所ほど検出された。
周　　溝：認められない。
炉　　址：認められない。

第15号住居址(第223図)

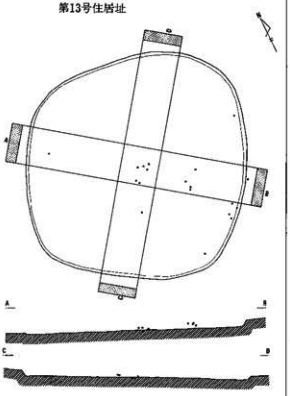
位　　置：A　V-P-25



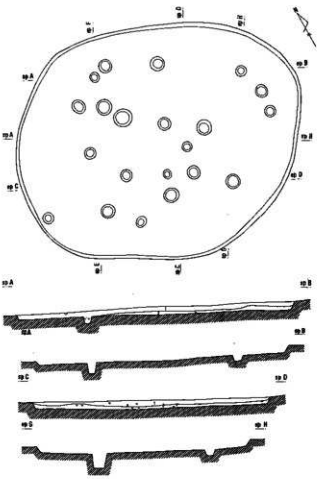
第221図　弥生時代中期後半の住居址　(6)



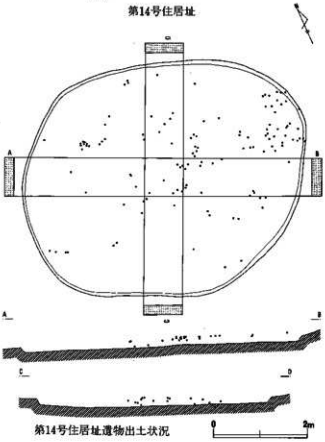
第13号住居址



第13号住居址遺物出土状況

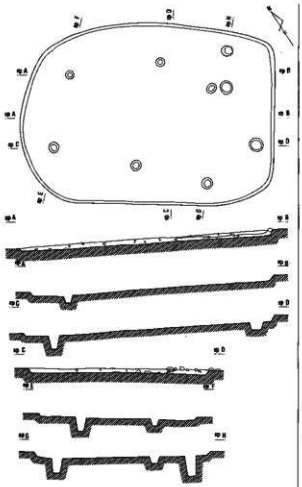


第14号住居址

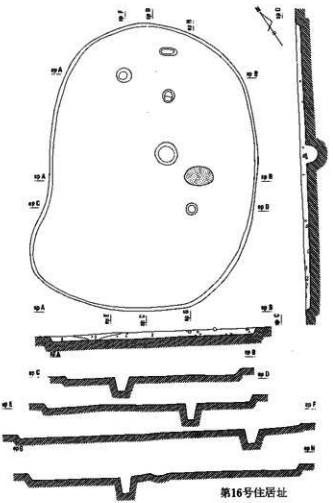


第14号住居址遺物出土状況

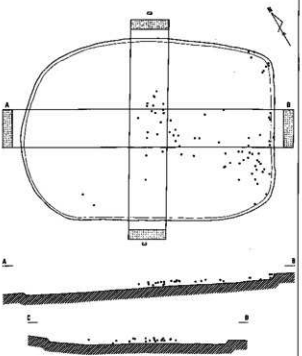
第222図　弥生時代中期後半の住居址　(7)



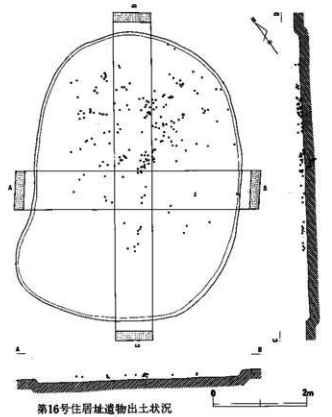
第15号住居址



第16号住居址



第15号住居址遺物出土状況



第16号住居址遺物出土状況

第223図　弥生時代中期後半の住居址　(8)

規模と形態：4×5mの不整長方形。
遺物出土状況：覆土から土器が少量破片で出土した。
覆土堆積状況：掘りこみが浅く不明である。
壁　　：不明瞭であった。
床　　面：貼床、とくに堅い部分は認められなかった。
柱　　痕：不規則であるが、壁面に沿うように検出されている。
周　　溝：認められない。
炉　　址：検出されなかった。

第16号住居址(第223図)

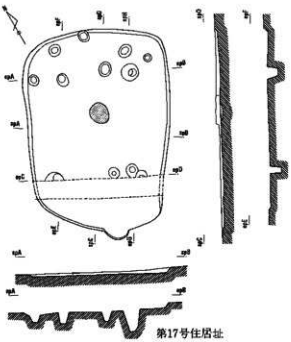
位　　置：A　Ⅷ-A-17･18
規模と形態：長径約6m×短径約4.5mの長円形である。
遺物出土状況：覆土中から土器が少量破片で出土した。
覆土堆積状況：掘りこみが浅く不明である。
壁　　：ほぼ明瞭に立ち上がるが、東南部分は不明瞭であった。
床　　面：貼床やとくに堅い部分は認められなかった。
柱　　痕：北側の中央にに偏って、5箇所検出された。
周　　溝：認められない。
炉　　址：中央東よりに60cm×40cmの長円形の地床炉が検出された。
備　　考：西南壁は不明瞭であった。掘りすぎた可能性もある。

第17号住居址(第224図)

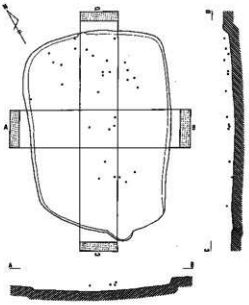
位　　置：A　Ⅶ-E-19･24
規模と形態：4m×5mの隅円長方形である。
遺物出土状況：覆土中から土器が少量破片で出土した。
覆土堆積状況：掘りこみが浅く、不明である。
壁　　：掘りこみは浅いが明瞭に立ち上がる。
床　　面：貼床やとくに堅い部分は認められなかった。
柱　　痕：柱痕は10箇所以上あるが、ほぼ四隅に集中する。
周　　溝：認められない。
炉　　址：中央北側に30cm×50cmの長円形の地床炉が検出された。

第18号住居址(第224図)

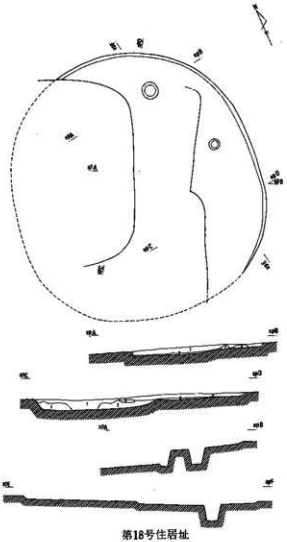
位　　置：A　Ⅳ-Y-18
規模と形態：径5m前後の円形か。
遺物出土状況：覆土中から土器が破片で出土した。
覆土堆積状況：掘りこみが浅く不明瞭である。
壁　　：北壁の一部と東壁を確認したのみである。
床　　面：大半を第39号住居址に切られる。
柱　　痕：北東部分に2箇所検出されたのみである。
周　　溝：認められない。
炉　　址：検出されなかった。
切　　合：古墳時代の第39号住居址に大半が切られる。



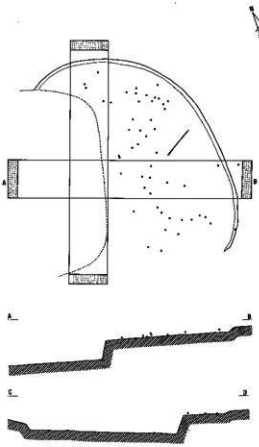
第17号住居址



第17号住居址遺物出土状況



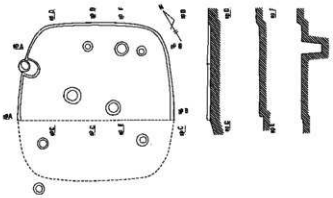
第18号住居址

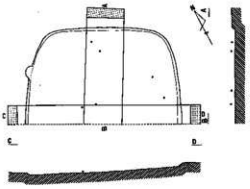


第18号住居址遺物出土状況

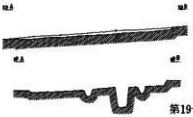
0　2m

第224図　弥生時代中期後半の住居址　(9)

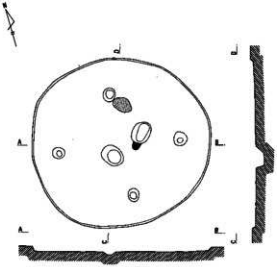




第19号住居址遺物出土状況

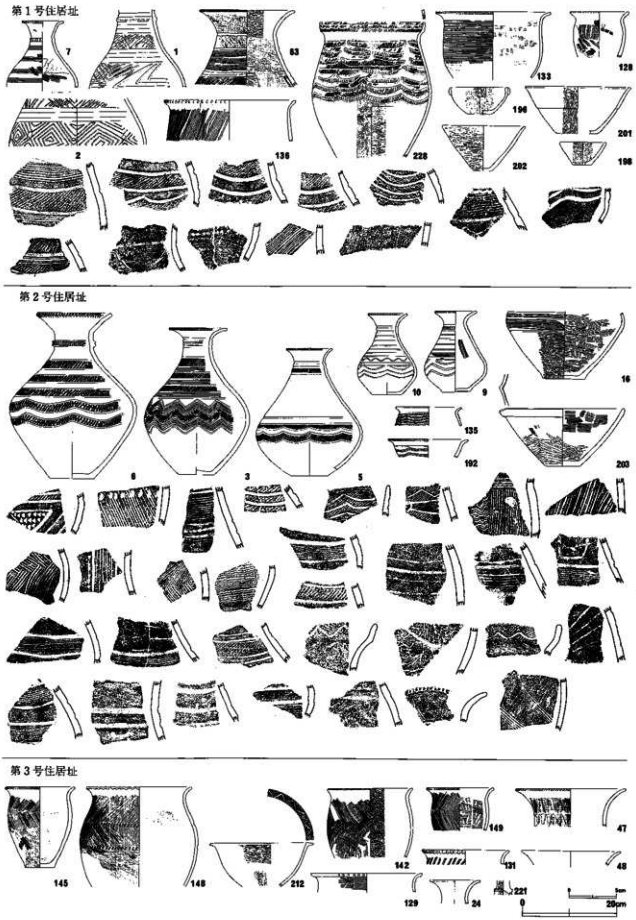


第19号住居址

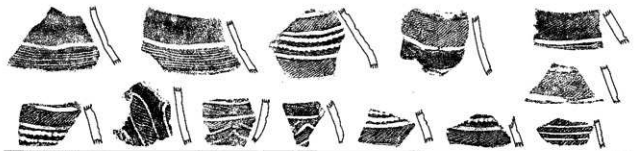


第20号住居址

第225図　弥生時代中期の住居址　(10)

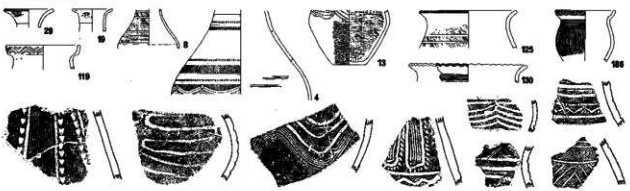


第226図　弥生時代中期後半遺構出土の土器　(1)



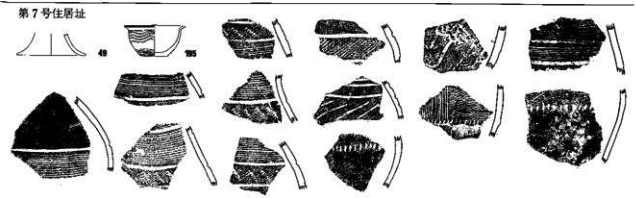
第4号住居址

第5号住居址



第6号住居址

第7号住居址

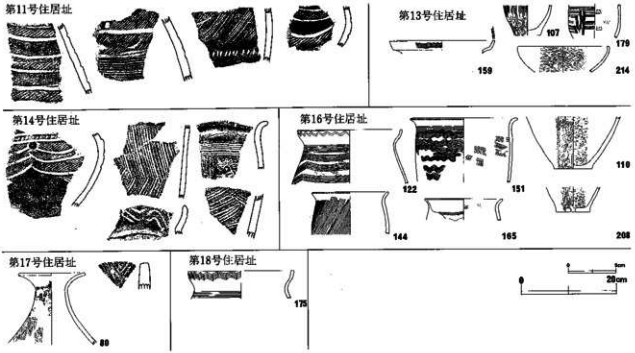


第8号住居址

第9号住居址

第10号住居址

第227図　弥生時代中期後半遺構出土の土器 (2)



第228図　弥生時代中期後半遺構出土の土器 (3)

第19号住居址(第225図)

位　　置：A　V-U-22

規模と形態：約半分を欠くが、3m×3mの隅円方形である。

遺物出土状況：覆土中から土器が極めて少量破片で出土した。

覆土堆積状況：覆土が浅く不明。

壁　　：掘りこみは浅いが明瞭に確認される。

床　　面：貼床やとくに堅い部分は認められない。

柱　　痕：9箇所検出されている。

周　　溝：認められない。

炉　　址：確認できなかった。

(2) 土　坑

第7号土坑を除き、遺物が出土していないので時期は明確ではないが、A区内なので中期後半前葉と考えたい。

第27号土坑(第229図)

位　　置：A　Ⅶ-E-15・Ⅷ-A-7

形態と規模：長軸3.4m×短軸1.4m×深さ0.2mの隅円長方形である。

覆　　土：2層に分層されたが、とくに埋め戻し等の痕跡は認められなかった。

第28号土坑(第229図)

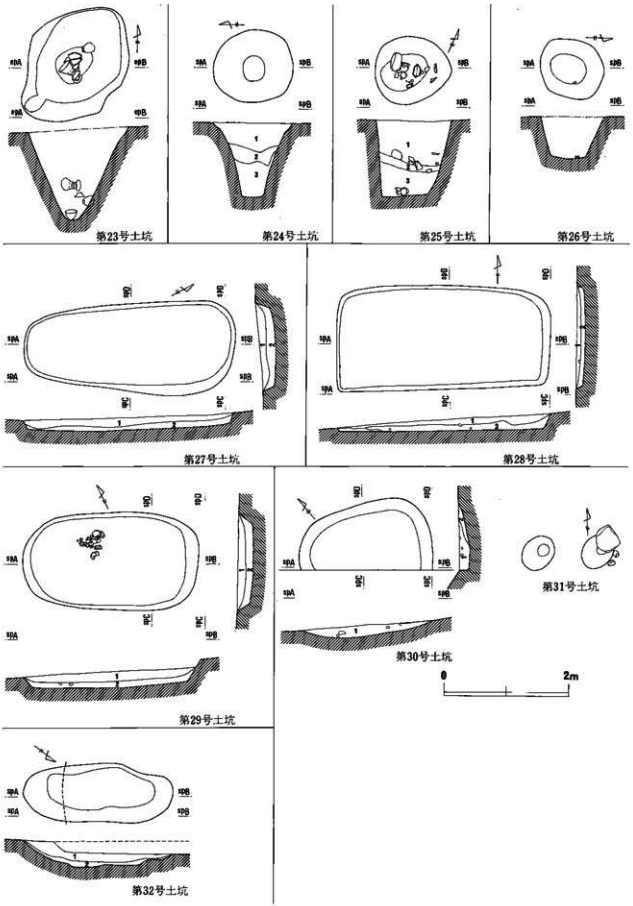
位　　置：A　Ⅶ-E-23

形態と規模：長軸3.3m×短軸1.3cm×深さ0.2の隅円長方形である。

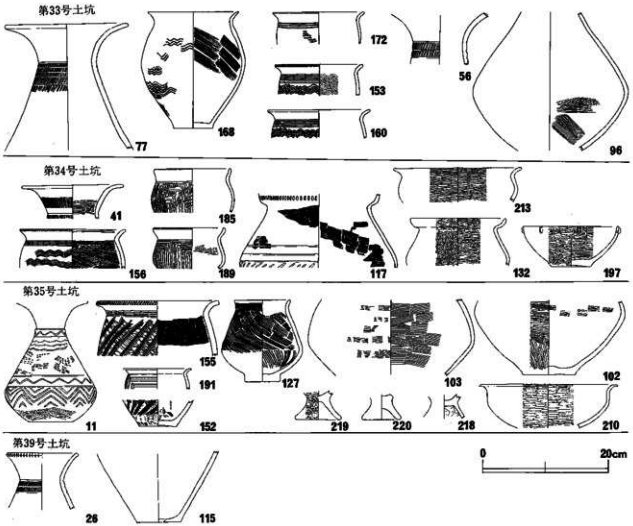
覆　　土：2層に分層されたが、とくに埋め戻し等の痕跡は認められなかった。

第29号土坑(第229図)

位　　置：A　V-U-8



第229図　弥生時代中期後半の土坑



第230図　弥生時代中期後半遺構出土の土器 (4)

形態と規模：長軸2.8m×短軸1.5m×深さ0.3mの隅円長方形である。

遺　　物：土坑底直上に壺形土器の頸部と底部が一個体づつ出土した。

覆　　土：2層に分層されたが、とくに埋め戻し等の痕跡は認められなかった。

第30号土坑(第229図)

位　　置：A　Ⅷ-E-22

形態と規模：半分が調査区外に広がる。長軸2.2m・深さ約20cmある。

覆　　土：単層であった。

備　　考：半分が調査区外にあるので形状は不明である。

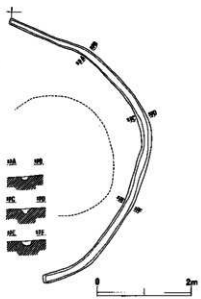
第32号土坑(第229図)

位　　置：A　Ⅶ-E-23、第6号住居址と切り合う。

形態と規模：長軸2.2m×短軸0.9m×深さ30cmの長円形である。

覆　　土：2層に分層されたが、とくに埋め戻し等の痕跡は認められなかった。

備　　考：第6号住居址と切り合っていたが、新旧関係は確認できなかった。



第231図　弥生時代中期後半の円形周溝

(3)　円形周溝(第231図)

位　　置：A　Ⅶ-E-8・9

形態と規模：幅約20cm・深さ約25cmの溝が、直径約5mで半周する。

覆　　土：弥生時代中期後半の住居址の覆土と同じ。

備　　考：第4号住居址の外側を半周する。両者の関係はわからない。中期後半の土器がわずかに出土した。

〔B区の遺構〕

B区には中期後半の土坑が4基あるが、住居址は検出されなかった。

(1)　土　坑

第23号土坑(第229図)

位　　置：Ⅵ-T-25

形 態 と 規 模：長径2.2m×短径1.6m×深さ1.4mの逆円錐形状である。

覆土の堆積状況：覆土の堆積状況は観察できなかった。

遺物の出土状況：土坑の底部から約30cm上方の覆土内に、半完形の土器が積み重なるように出土した。

第24号土坑(第230図)

位　　置：Ⅶ-Q－01

形 態 と 規 模：径約1.1m、深さ約1.2mの坑口部が開いた円筒形である。

覆土の堆積状況：3層に分層された。いずれの層もほぼ水平に堆積している。

遺物の出土状況：土坑の底部ちかくで、大形の破片が出土した。

第25号土坑(第230図)

位　　置：Ⅶ-P-05

形 態 と 規 模：径約1.1m、深さ120cmのほぼ円筒形である。

覆土の堆積状況：3層に分層された。2層は地山とよく似た黄褐色土であった。

遺物の出土状況：2層上面と土坑底部の2箇所から検出されている。2層上面からは大形の土器片と礫が、土坑底部からはほぼ完形の壺形土器と無頸壺形土器が並んで検出された。

備　　考：覆土の2層は地山とよく似ており、自然に堆積したとは考えにくい。意図的に埋め戻された可能性が高い。

第26号土坑(第230図)

位　　置：Ⅶ-U-01

形 態 と 規 模：径約95cm、深さ60cmの坑口部が開く円筒形である。

覆土の堆積状況：観察できなかった。

遺物の出土状況：土坑底ちかくから、ミニチュア土器が1点出土した。

第31号土坑(第230図)

位　　置：Ⅶ-U-06

形 態 と 規 模：径約60cmの小円形。

覆土の堆積状況：観察できなかった。

遺物の出土状況：出土しなかった。

〔D区の遺構〕

(1)　掘立柱建物址（第233図～第238図）

15棟の掘立柱建物址が耕作土直下から検出された。そのあり方が特異な点興味深い。遺構分布の中心から離れる15号を除いて以下のように2分される。

1群－2・7・14号を結ぶ弧状を呈し、7棟で構成されるもの。

2群－11・12・3号を結ぶ弧状を呈し、7棟で構成されるもの。

1群の2・4・6号周辺が遺構密度が高いほかは、各遺構は一定の間隔で配置され、両群は20mほどの間隔をもって重なるような弧状を呈す。さらに両群間の空間には本遺跡で特徴的であった井戸状の土坑が2基ずつ規則的に6基検出されている点が注目される。

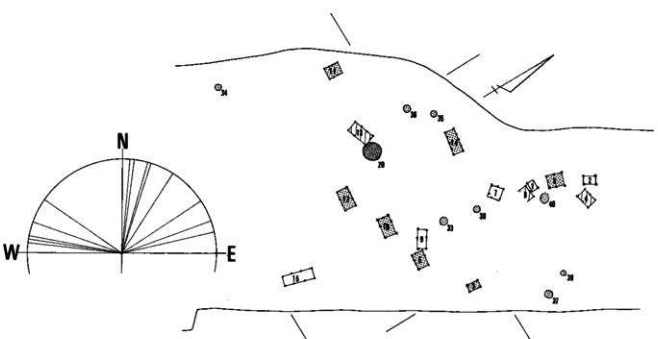
構造は全容不明な8号を除いて、1間×1間・1間×2間・1間×3間・1間×4間がみられ、棟数は順に4棟・5棟・4棟・1棟となる。桁行きと考えられる柱間数がいずれも1間であることが特徴としてあげられる。

棟または桁方向からは、南北軸に対し右か左に傾くの二者がある。いずれも1群・2群に存在する。右に傾くものは、3・5・6・10～12・14号で、左は4・13号である。

掘立柱建物址の軸方向の傾きの相違が時間的差異を示すと考えれば、少なくともこれら15棟は2段階以上の構築時期差をもっているといえよう。さらに、分布が両群にまたがることから、1・2群の間の空間は意図的に避けられたもの、換言すれば掘立柱建物址の構築場所がある程度規制されていたことが推察される。また、13号は20号住居址と近接しており、4号・13号の建物址は住居址とは同時存在していなかったといえる。南北軸に対し右に傾く一群のうち、11・12号の遺構間の距離が他と比べ大きいことは住居址の位置に関係が深いと考えられ、住居址がこれらの掘立柱建物址と同時期に存在した可能性が指摘できる。

帰属時期については出土遺物や前述した周囲の状況から、大半がD区で検出された住居址や土坑とほぼ併行すると判断される。

以下その概要を記述するが、検出面については住居址などと同じく基本土層Ⅷ層上面である。



第232図　弥生時代中期後半の掘立柱建物址の配置（D区）

第１号掘立柱建物址(第233図)

位置と検出：Ｘ－Ｐ－14。Ⅷ層上面。南北列西側に柱穴になりそうなピットが検出されたが、全体がやや台形になるため、現状で報告する。

主軸と規模：主軸Ｎ－90°－Ｅ。規模は206cm×146cmをはかり、１間×１間の東西に長い建物である。柱痕は確認されていない。掘り方は不揃いである。面積30m²。

覆土の堆積状況：単層。

備　　考：建物址内外の小ピットは本址にともなうものか判断しがたい。

第２号掘立柱建物址(第233図)

位置と検出：Ｘ－Ｐ－10。Ⅷ層上面。

主軸と規模：主軸Ｎ－32°－Ｅ。規模は254cm×166cmをはかり、１間×１間の東西に長い建物である。柱間は均一である。柱痕は確認されていない。掘り方は不揃いである。面積421m²。

覆土の堆積状況：単層。

第３号掘立柱建物址(第233図)

位置と検出：Ｘ－Ｖ－１。Ⅷ層上面。

主軸と規模：主軸Ｎ－６°－Ｅ。規模は262cm×150cmをはかり、１間×１間の南北に長い建物で、やや菱形を呈す。柱間はほぼ均一である。柱痕は確認されていない。掘り方は不揃いである。面積39m²。

覆土の堆積状況：単層。

備　　考：南側のピットは支柱穴と考えられる。

第４号掘立柱建物址(第234図)

位置と検出：Ｘ－Ｐ－10・15。Ⅷ層上面。

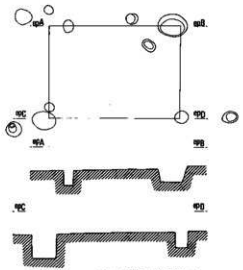
主軸と規模：主軸Ｎ－86°－Ｅ。規模は316cm×220cmをはかり、１間×２間の東西に長い建物である。東西柱間は149cm～162cmとほぼ均一である。柱痕は確認されていない。柱穴の掘り方は不揃いである。面積70m²をはかる。

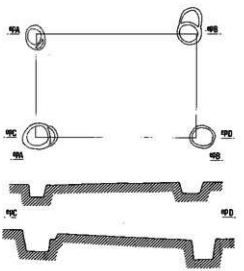
覆土の堆積状況：単層。

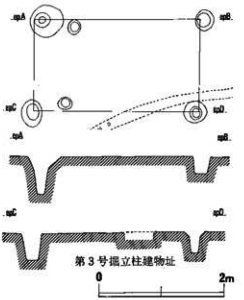
第５号掘立柱建物址(第234図)

位置と検出：Ｘ－Ｕ－９・10。Ⅷ層上面。

主軸と規模：主軸Ｎ－82°－Ｗ。規模は344cm×236cmをはかり、１間×２間の東西に長い建物。東







第233図　弥生時代中期後半の掘立柱建物址(1)

西柱間は120cm前後と220cmをはかり、西側が狭い。柱痕は確認されていない。掘り方はほぼ均一である。面積81m²。

覆土の堆積状況：単層。

備　　考：建物内の土坑は時期不明で、本址に関連するものとは考えがたい。

第6号掘立柱建物址(第234図)

位置と検出：X－P－14・15。Ⅶ層上面。

主軸と規模：主軸N－17°－E。規模は334cm×264cmをはかり、1間×2間の南北に長い建物。南北柱間は152cm～182cmとややばらつきをみせる。柱痕は確認されていない。掘り方は不揃いである。面積88m²。

覆土の堆積状況：単層。

第7号掘立柱建物址(第235図)

位置と検出：X－P－19・24。Ⅶ層上面。南側の柱穴が不揃いであるが掘立柱建物とした。

主軸と規模：主軸N－55°－E。規模は280cm×258cmをはかり、1間×1間の若干東西に長い建物。柱痕は確認されていない。掘り方は不揃いである。面積72m²。

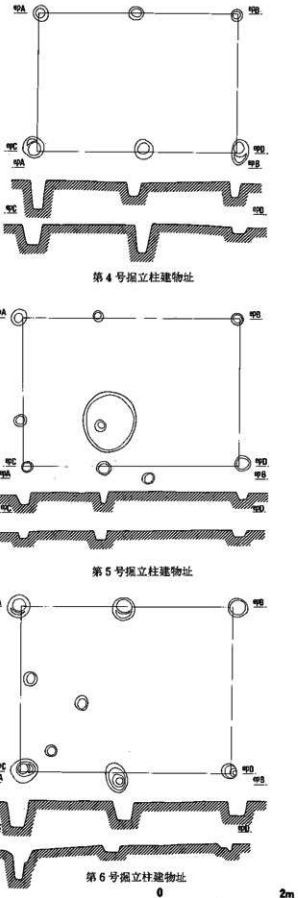
覆土の堆積状況：単層。

備　　考：建物内外のピットは本址にともなうものか判断しがたい。

第8号掘立柱建物址(第235図)

位置と検出：X－P－19。Ⅶ層上面。南側は市道下にあたり不明瞭であったが、本址周辺の遺構のあり方から掘立柱建物と判断した。

主軸と規模：主軸不明。規模は東西290cmをはかる。東西柱間は均一で、柱痕は確認されていない。掘



第234図　弥生時代中期後半の掘立柱建物址　(2)

り方はほぼ均一である。

覆土の堆積状況：単層。

第9号掘立柱建物址(第235図)

位置と検出：X－U－4・9。Ⅷ層上面。

主軸と規模：主軸N－57°－W。規模は426cm×188cmをはかり、1間×2間の東西に長い建物。東西列南側がやや長く、柱間は162cm～240cmとばらつきをみせる。柱痕は確認されていない。掘り方はほぼ均一である。面積80m²。

覆土の堆積状況：単層。

第10号掘立柱建物址(第236図)

位置と検出：X－U－8。Ⅷ層上面。

主軸と規模：主軸N－80°－W。規模は432cm×262cmをはかり、1間×2間の東西に長い建物。東西柱間は150cm前後と280cm前後があり、西側で狭い。柱痕は確認されていない。掘り方は均一である。面積113m²。

覆土の堆積状況：単層。

第11号掘立柱建物址(第236図)

位置と検出：IX－Y－4。Ⅷ層上面。

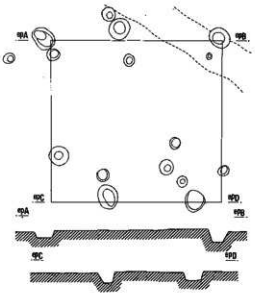
主軸と規模：主軸N－5°－E。規模は312cm×256cmをはかり、1間×3間の南北に長い建物。南北柱間が96cm～116cmとややばらつきをみせる。柱痕は確認されていない。掘り方はほぼ均一である。面積79m²。

覆土の堆積状況：単層。

第12号掘立柱建物址(第236図)

位置と検出：X－U－12。Ⅷ層上面。

主軸と規模：主軸N－85°－W。規模



第235図　弥生時代中期後半の掘立柱建物址 (3)

は454cm×242cmをはかり、1間×3間の東西に長い建物。東西柱間が133cm～166cmとややばらつきをみせる。柱痕は確認されていない。掘り方はほぼ均一である。面積110㎡。

覆土の堆積状況：単層。

第13号掘立柱建物址(第237図)

位置と検出：IX－Y－5・10－U－1・P－6。Ⅷ層上面。

主軸と規模：主軸N－70°－E。規模は497cm×240cmをはかり、1間×3間の東西に長い建物。東西柱間は南列で北列に対応する柱穴が1基ないが、柱間間隔は均一である。柱痕は確認されていない。掘り方はほぼ均一である。面積119㎡。

覆土の堆積状況：単層。

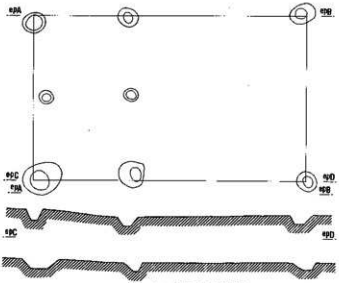
備　　考：南側南北列のピットは本址にともなうものか判断しがたい。

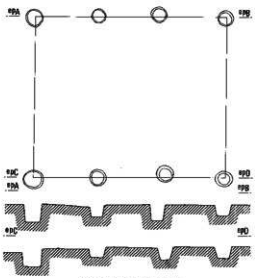
第14号掘立柱建物址(第237図)

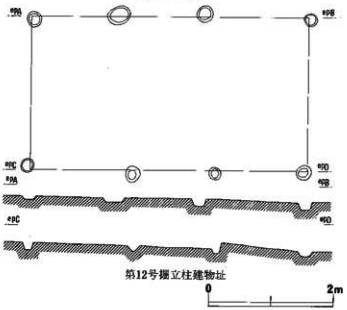
位置と検出：X－P－17・22。Ⅷ層上面。

主軸と規模：主軸N－71°－W。規模は533cm×220cmをはかり、1間×4間の東西に長い建物。東西柱間が116cm～140cmとややばらつきをみせる。柱痕は確認されていない。掘り方はほぼ均一である。面積117㎡。

覆土の堆積状況：単層。土塊が混入する。







第236図　弥生時代中期後半の掘立柱建物址　(4)

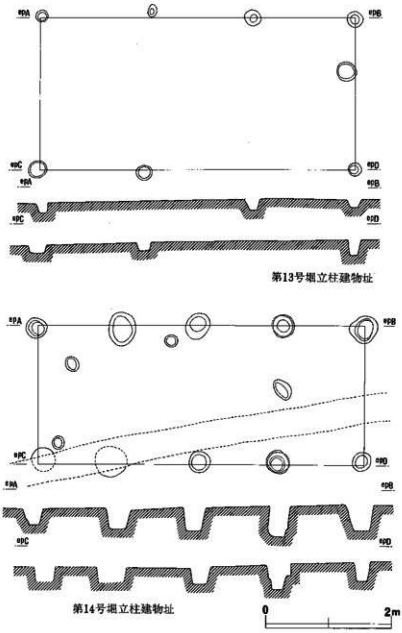
第15号掘立柱建物址(第238図)

位置と検出：X－U－23。Ⅷ層上面。

主軸と規模：主軸N－15°－E。規模は636cm×223cmをはかり、1間×3間の南北に長い建物。南北柱間は190cm～246cmとややばらつきをみせる。柱痕は確認されていない。掘り方はほぼ均一である。面積142m²。

覆土の堆積状況：単層。

備　　考：他と比較してやや大きく、位置も離れている。



第237図　弥生時代中期後半の掘立柱建物址　(5)

(2)　土　坑(第239図～第240図)

D区には23基の土坑がある。弥生時代遺物包含流路中の第41号など7基を除いて、掘立柱建物址同様耕作土直下の検出である。これら土坑のうち8基は井戸状のものである。土坑は形態から以下の4群に分かれる。

1群－平面円形、断面すり鉢状・漏斗状を呈し、掘り方が深いもの。

2群－平面隅円長方形、断面タライ状を呈し、掘り方の浅いもの。

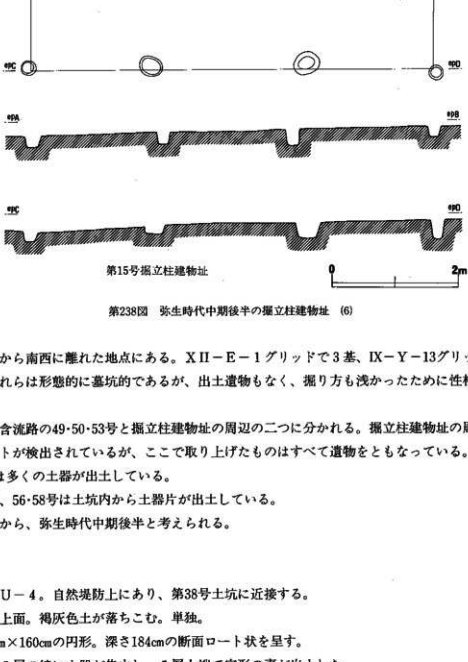
3群－ピット状をなすもの。

4群－そのほか。

1群のうち、41・42号を除いて井戸状の一群である。その分布は、34号を除いた7基が掘立柱建物址1・2群の間で検出され、35・36号、34・37号、37・39号がそれぞれ7m前後の距離を置いて並び、組み合うような位置関係を示す。このようなあり方はB区の土坑にも認められ、特徴的である。さらに、これら3組は20mほどの間隔で東西に弧を描くように配置されていた。この配置は掘立柱建物址の配置に整合し、それと互いに関連することを示唆している。

井戸状の土坑の中には、底および底付近から完形の壺などが検出されるもの(34・35・38号)、覆土中に土

器が折り重なって非常に密度の濃い出土をしたもの(36･39号)などがある。これら土坑の性格は、壺などの出土状況からみて再葬墓が推測されたが、掘り方の形態などから一概に断定できない。35・36号の覆土資料により、リン酸・カルシウム分析を実施した結果、遺構内外の資料に有意な値の差が認められ、これらが墓坑である可能性を示している。



第238図　弥生時代中期後半の掘立柱建物址　(6)

2群は掘立柱建物址や井戸状の土坑の分布から南西に離れた地点にある。XII－E－1グリッドで3基、IX－Y－13グリッドで1基確認された。これらは形態的に墓坑的であるが、出土遺物もなく、掘り方も浅かったために性格は不明である。

3群は弥生時代遺物包含流路の49･50･53号と掘立柱建物址の周辺の二つに分かれる。掘立柱建物址の周辺には他にも多数のピットが検出されているが、ここで取り上げたものはすべて遺物をともなっている。このうち、48･47号からは多くの土器が出土している。

4群は不整形な一群で、56･58号は土坑内から土器片が出土している。

各群の時期は出土遺物から、弥生時代中期後半と考えられる。

第33号土坑(第239図)

位　　置：X－U－4。自然堤防上にあり、第38号土坑に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。褐灰色土が落ちこむ。単独。
規模と形態：168cm×160cmの円形。深さ184cmの断面ロート状を呈す。
遺物出土状況：1・2層の境に土器が集中し、5層上端で完形の壺が出土した。
覆土の堆積状況：2層中位に炭化粒が多く含まれる。4層は埋め戻しと解釈される。
備　　考：リン酸・カルシウム分析の結果では、土坑内資料が土坑外のそれより値が高い。とくに3層上部に顕著であった。

第34号土坑(第239図)

位　　置：IX－Y－18。自然堤防上にあり、40号土坑に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。黒褐色土が落ちこむ。単独。
規模と形態：132cm×118cmの円形。深さ81cmの断面すり鉢状を呈す。

遺物出土状況：土器の出土は全層にわたる。底から10cmほど上層で完形の壷が出土した。
覆土の堆積状況：3層に分かれる。3層下部、壷の下の土は黒色分が強く砂質土・小礫が混じる。
備　　考：土層観察からは埋め戻された状況が認められない。

第35号土坑(第239図)

位　　置：X－P－21。自然堤防上にあり、36号土坑に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。
規模と形態：108cm×106cmの円形、深さ112cmの断面ロート状を呈す。
遺物出土状況：覆土上層・中層・土坑底の3箇所から出土し、とくに底には完形の壷が重なっていた。
覆土の堆積状況：単層。33号2層・34号1層と類似する。

第36号土坑(第239図)

位　　置：X－P－21。自然堤防上にあり、35号土坑に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。暗褐色土が落ちこむ。検出面で土器が散在していた。単独。
規模と形態：138cm×133cmの円形、深さ150cmの断面ロート状を呈す。
遺物出土状況：検出面下40cmほどから下層へ約30cmの厚さで土坑内全面に、多量の土器が折り重なるように密集して出土した。3層下部に数点の土器があったが、底付近での完形品の出土はない。
覆土の堆積状況：1層は他の土坑と土質が異なる。3層は埋め戻しと推測される。
備　　考：リン酸・カルシウム分析の結果では、土坑内3層の数値が高い。本址のような土器溜りをもつ土坑として、39号があげられる。

第37号土坑(第239図)

位　　置：X－Q－17・22。自然堤防上にあり、39号土坑に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。黒褐色土が落ちこむ。
規模と形態：146cm×138cmの円形、深さ80cmの断面すり鉢状を呈す。
遺物出土状況：土器の出土は1層上部からであった。
覆土の堆積状況：2層に分かれる。

第38号土坑(第239図)

位　　置：X－P－24。自然堤防上にあり、33号土坑に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。黒褐色土が落ちこむ。
規模と形態：124cm×123cmの円形、深さ93cmの断面ロート状を呈す。
遺物出土状況：土器の出土量は少ない。
覆土の堆積状況：1・2層の境に薄く炭化粒・砂をはさむ。
出土遺物：ミニチュア土器など。
備　　考：自然堤防上の他の遺構に比べ遺物の出土量が少ない。

第39号土坑(第239図)

位　　置：X－Q－17。自然堤防上にあり、37号土坑に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。排水溝により南側を失っていた。上部に排水溝の砂利が入りこむ。
規模と形態：110cm×108cmの円形、深さ94cmの断面すり鉢状を呈す。
遺物出土状況：2層中で土器が折り重なるように密集して出土した。4層中・底からは数点の土器が出土した。
覆土の堆積状況：4層は埋め戻しと解釈される。

備　　考：本址のような土器溜りをもつ土坑に36号土坑があげられる。

第40号土坑(第239図)

位　　置：X－P－20。自然堤防上にあり、43号土坑に近接する。

検　　出：Ⅷ層上面。排水溝により北側を失っていた。

規模と形態：184cm×156cmの円形と推測される。深さ82cmの断面すり鉢状を呈す。底面西側に深さ12cmほどの落ちこみがある。

遺物出土状況：3・5層に土器の出土が多い。底の土器は他と比べ破片が大きい。

覆土の堆積状況：7層に分かれる。7層は埋め戻しと考えられる。1・2・3層、4・5層、6・7層に3大別される。

第41号土坑(第239図)

位　　置：X－L－19・20。弥生時代遺物包含流路内にある。

検　　出：層上面、遺物包含層下。黒褐色土が落ちこむ。単独。

規模と形態：162cm×150cmの円形。深さ106cmの断面タライ状を呈す。

遺物出土状況：底から土器が出土した。

覆土の堆積状況：4層に分かれる。3層は埋め戻しと考えられる。

第42号土坑(第239図)

位　　置：X－L－13。弥生時代遺物包含層流路内にある。

検　　出：包含層下のシルト層上面。黒褐色土が落ちこむ。単独。

規模と形態：130cm×126cmの円形。深さ84cmの断面椀状を呈す。

覆土の堆積状況：3層に分かれる。

第43号土坑(第240図)

位　　置：IX－Y－13・18。

検　　出：Ⅷ層上面。耕作土が部分的に入りこむ。単独。

規模と形態：244cm×110cmの隅円長方形。深さ40cmの断面たらい状を呈す。

覆土の堆積状況：単層。耕作土が混じる。

第44号土坑(第240図)

位　　置：XⅡ－E－1。45号土坑に近接する。

検　　出：Ⅷ層上面。耕作土が部分的に入りこむ。単独。

規模と形態：178cm×84cmの隅円長方形。深さ24cmの断面たらい状を呈す。

覆土の堆積状況：単層。耕作土が混じる。

第45号土坑(第240図)

位　　置：XⅡ－E－1。44号土坑に近接する。

検　　出：Ⅷ層上面。耕作土が部分的に入りこむ。単独。

規模と形態：140cm×78cmの隅円長方形。深さ14cmの断面たらい状を呈す。

覆土の堆積状況：単層。耕作土が混じる。

第46号土坑(第240図)

位　　置：XⅡ－E－6。やや離れて44号土坑がある。

検　　出：Ⅷ層上面。黄灰色土が落ちこむ。単独。

規模と形態：124cm×77cmの楕円形。深さ12cmの断面たらい状を呈す。

覆土の堆積状況：砂の混入が著しい。

備　　考：洪水砂によって被覆されたと考えられる。

第47号土坑（第240図）

位　　置：X－P－17。

検　　出：Ⅷ層上面。黒褐色土が落ちこむ。検出面で土器が見られた。

規模と形態：径28cm・深さ22cmのピット状を呈す。

遺物出土状況：底よりやや上層で出土した。

覆土の堆積状況：単層。33号土坑の覆土と近似する。

第48号土坑（第240図）

位　　置：X－V－1。10号掘立柱建物址南東隅柱穴に隣接する。

検　　出：Ⅷ層上面。褐色土が落ちこむ。

規模と形態：82cm×64cmの楕円形。深さ42cmの断面筒状を呈す。

遺物出土状況：土器は底まで折り重なって出土した。

覆土の堆積状況：単層。炭化物を含む。

第49号土坑（第240図）

位　　置：X－L－14・15・19・20。弥生時代遺物包含層流路内にある。

検　　出：包含層下のシルト層上面。黒色土が落ちこむ。単独。

規模と形態：径52cm・深さ14cmのピット状を呈す。

覆土の堆積状況：単層。炭を多く混入する。

第50号土坑（第240図）

位　　置：X－L－12。弥生時代遺物包含層流路内にある。

検　　出：包含層下のシルト層上面。黒色土が落ちこむ。単独。

規模と形態：106cm×62cmの楕円形。深さ24cmの断面すり鉢状を呈す。

遺物出土状況：1層で数点の土器が出土した。

覆土の堆積状況：2層に分かれる。

第51号土坑（第240図）

位　　置：X－U－5。自然堤防上にあり。

検　　出：Ⅷ層上面。褐灰色土が落ちこむ。

規模と形態：73cm×70cmの円形を呈し、深さ34cmをはかる。北壁が屈曲する断面形状である。

遺物出土状況：1層では土器が多いが、2層になると数点だった。

覆土の堆積状況：2層に分かれる。1層は炭化物が多い。

備　　考：ピット状を呈す。

第52号土坑（第240図）

位　　置：X－U－1。自然堤防上にあり。

検　　出：Ⅷ層上面。褐灰色土が落ちこむ。

規模と形態：68cm×60cmの円形を呈し、深さ26cmをはかる。南壁が屈曲する断面形状である。

覆土の堆積状況：単層。

備　　考：ピット状を呈す。

第53号土坑（第240図）

位　　置：X－L－13。弥生時代遺物包含層流路内にある。

検　　出：包含層のシルト層上面。黒色土が落ちこむ。単独。

規 模 と 形 態：90cm×88cmの円形。深さ30cmの断面すり鉢状を呈す。

遺物出土状況：底から20cmほど上層に土器が出土した。密度は高い。

覆土の堆積状況：単層。土塊の混入があり、埋め戻しが推測される。

第54号土坑（第240図）

位　　置：X－P－20。自然堤防上にあり。

検　　出：Ⅶ層上面。排水溝により南側を失っていた。上部に排水溝の砂利が入りこむ。

規 模 と 形 態：170cm×85cmの円形を呈し、深さ65cmをはかる。断面は不整形で、底は溝状の落ちこみをもつ。

覆土の堆積状況：撹乱土を除き単層。

第55号土坑（第240図）

位　　置：Ⅸ－Y－14。自然堤防上にあり、59号土坑に近接する。

検　　出：Ⅶ層上面。黒褐色土が落ちこむ。

規 模 と 形 態：124cm×54cmの楕円形。深さ14cmの断面皿状を呈す。

覆土の堆積状況：２層に分かれる。

第56号土坑（第240図）

位　　置：X－P－25。自然堤防上にあり、58号土坑に近接する。

検　　出：Ⅶ層上面。暗褐色土が落ちこむ。検出面で土器が散見された。

規 模 と 形 態：130cm×110cmの不整円形。深さ６cmの断面皿状を呈す。

遺物出土状況：土器が全層から出土した。

覆土の堆積状況：単層。

備　　考：住居址とするには規模が小さい。

第57号土坑（第240図）

位　　置：X－L－14。弥生時代遺物包含層流路内にある。

検　　出：包含層下のシルト層上面。黒褐色土が落ちこむ。

規 模 と 形 態：365cm×130cmの楕円形。深さ24cmの断面皿状を呈す。北東側は掘り過ぎたため、底の状況は不明となった。

覆土の堆積状況：３層に分かれる。炭粒を含む。

第58号土坑（第240図）

位　　置：X－P－25。自然堤防上にあり。56号土坑に近接する。

検　　出：Ⅶ層上面。暗褐色土が落ちこむ。検出面で土器が散見された。

規 模 と 形 態：108cm×43cmの楕円形。深さ19cmの断面たらい状を呈す。東端にピット状の落ちこみがある。

遺物出土状況：土器が全層から出土した。

覆土の堆積状況：単層。

備　　考：住居址とするには規模が小さい。

第59号土坑（第240図）

位　　置：Ⅸ－Y－13・14。自然堤防上にあり、55号土坑に近接する。

検　　出：Ⅶ層上面。黒褐色土が落ちこむ。

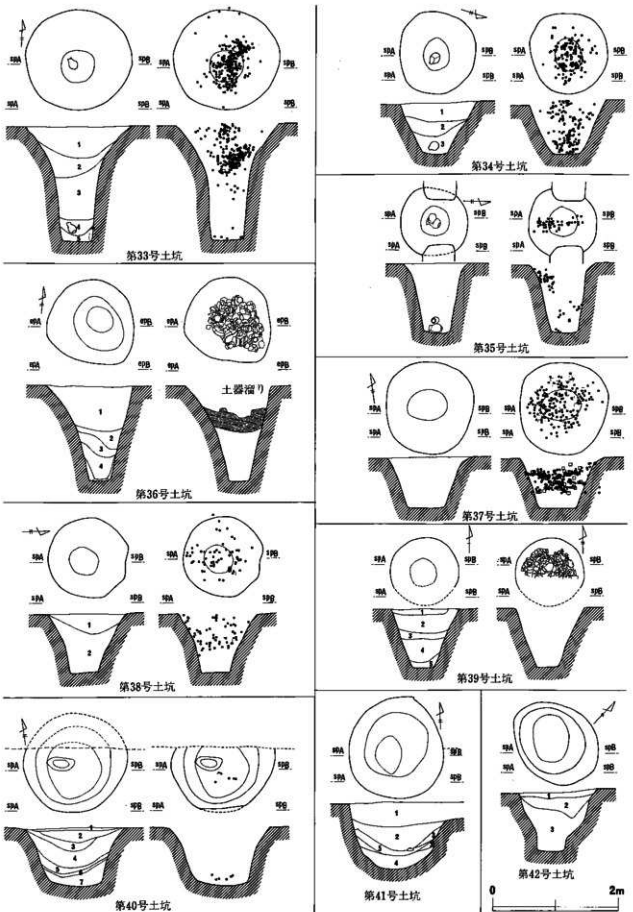
規 模 と 形 態：140cm×58cmの不整形。深さ８cmの断面皿状を呈す。

覆土の堆積状況：単層。

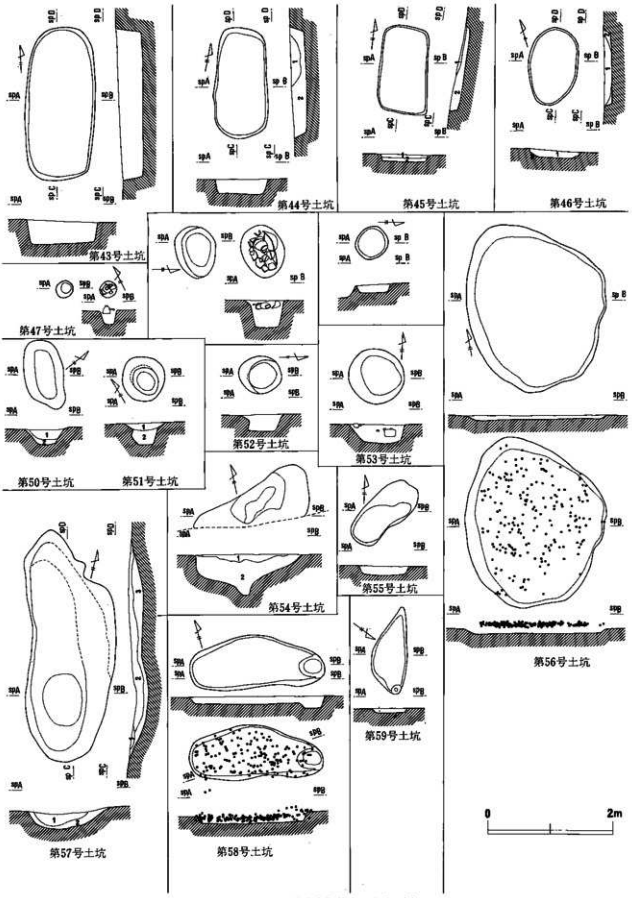
(3) 住居址

第20号住居址(第120図)

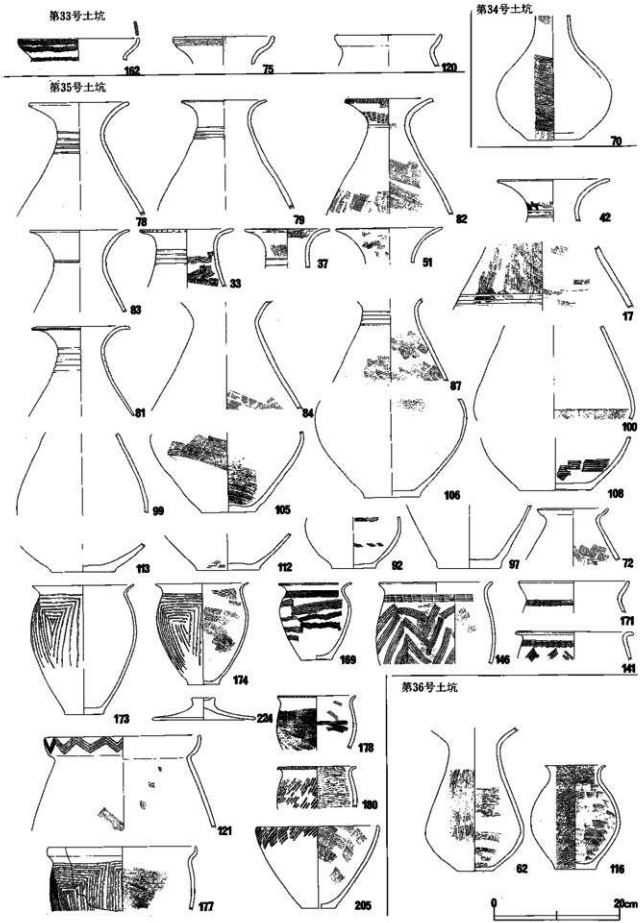
位　　置：X－U－1・6
規模と形態：径3.6mの円形。
遺物の出土状況：北側からの出土が多く、床面から若干あがった状態である。
覆土の堆積状況：暗灰黄色土の単層。炭・焼土が含まれる。
壁　　：浅いが、比較的明瞭に立ち上がる。
床　　面：堅緻な面などは認められなかった。
柱　　痕：4基確認されている。ほぼ方形を呈する。
周　　溝：確認されていない。
炉　　址：北の柱穴沿いに焼土の広がりがあるが、明瞭でない。
遺　　物：土器・管玉・磨製石斧。
備　　考：床面から覆土中位にかけて炭・焼土の広がりが確認されているが、焼失住居と断定できるものではなかった。



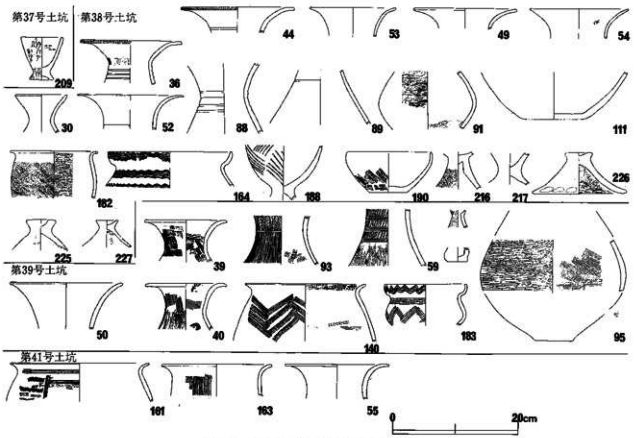
第239図　弥生時代中期後半の土坑　(1)



第240図　弥生時代中期後半の土坑　(2)



第241図　弥生時代中期後半遺構出土の土器 (1)



第242図　弥生時代中期後半遺構出土の土器　(2)

3　中期後半の遺物

(1) 土　器

分　類

弥生時代中期後半の土器には壷・甕・台付甕・浅鉢・片口・有孔浅鉢・高杯・蓋がある。それぞれの土器は器形や文様に若干の変化があり、各器種ごとに器形・文様の順で説明する。

壷形土器(第243図1～第243図123)

器形には１類－細頸壷、２類－太頸壷、３類－無頸壷があり、それぞれに口縁部がＬ字状に折れ曲がるものとそうでない二者とがある。口縁がそのまま開くものを１－ａ類、段をもちＬ字状の受け口を１－ｂ類とする。

１類　細頸壷　(第243図１～第247図115)

細頸壷は最大径が胴部上半と、胴下半にある二つに分かれる。両者は一線を画して、明確に分類されるのではなく、その変化は漸移的である。前後の土器型式との連続性を考慮すれば、最大径が胴部上半にあるものが古く、胴下半例が新しいと考えられる。また、最大径の位置の変化とともに、口縁部の形状と全体のプロポーションにも若干の変化が認められる。最大径が胴部上半部にあるものは、口縁部の開きが少なく、全体にどっしりとしたプロポーションであるのに対して、下半部にあるものは口縁部が朝顔の花のようにやや反り気味に開き、細身で華奢な感じに変化している。

なお、口縁部の形態はそのまま開く１－ａ類が多く、受口状の１－ｂ類は少ない。

胴部上半に最大径があるものは、多くの部分に文様が施文され、胴下半部にあるものは少なかったり、文様がない傾向にある。文様施文部位から分類すると、胴下半部から頸部まで、胴下半部と頸部、頸部のみ、無文の４つに分けることができる。このことから、頸部、胴部上半、胴部下半がそれぞれひとつの施文単位となっていることがわかる。

１－ａ類の文様は次のようである。頸部には突帯文・沈線と縄文・櫛描直線文などがめぐらされる。胴上半部は、横方向に帯状をなして文様が施文される。帯状の文様を形成する要素には、沈線と縄文・櫛歯刺突文・沈線と半月形刺突文・沈線と横走櫛描直線文の各組み合わせや、沈線のみ、横走櫛描直線文のみなどバラエティーにとむ。また、少ない例であるが、山形あるいは三角形が横方向の帯状に施文されるものもある。胴下半部は半月形と弧線文が組み合わされるものや、大きく波うつ横走帯状文が主となる。

一方、口縁部断面がＬ字状を呈する１－ｂ類は、１－ａ類とは異なった文様構成をもっている。その違いは胴上半部の文様が横走せず、縦方向の帯状文となる点である。文様の表出方法には沈線と縦走櫛描直線文、半月形刺突文と縦走櫛描直線文の組み合わせがある。また、口縁部には縄文を地文に山形文や沈線による波状文が施文される。

２類　太頸壷(第245図63、第248図117～第248図122・125)

頸部に沈線と横走する櫛描直線文が施文される。頸部以下のモチーフは明らかでないが、櫛歯による横走羽状文ではないかと考えられる。

３類　無形壷(第245図72～76・第248図116・123)

口縁部が受口状になるものとそうでないものがある。全体の形態を知り得る資料はないが、117・122例等をみると最大径が胴部中位にある寸づまりのどっしりした形態が想定できる。

文様のあるものとない例があり、前者は口縁部に沈線による山形文と、胴部には大きな弧線文が沈線や櫛状工具で施文される。

甕形土器(第248図128～第250図182)

甕形土器にも器形や文様に変化が認められ、分類することができる。器形は、①頸部がほとんどくびれずに、口縁部から胴部にいたるもの(129・133)、②頸部が若干くびれ、胴上半部に最大径をもち、直線的に底部へ向かうもの(147・154等)、③胴部中位に最大径があり、全体に丸味をおびるもの(167・168等)などがある。

口縁部の形態は指頭圧痕、あるいは櫛状工具の歯によって、小さな波状にしたり、刻目をつけたり、受口状になるものがある。口縁部の刻目や波状は、上述①と、②の器形に見られる。しかし、壷の器形と同様明確に分離することはできず、その変化は漸移的である。

文様構成をみると、頸部に頸部固有の文様を施文するものとそうでない二者がある。また、胴部には横走櫛描直線文(133)・櫛描横走羽状文(136・142等)・櫛描縦羽状文(154)・縦走櫛描直線文と櫛描縦羽状文を組み合わせたもの(150)・櫛描波状文(167)・櫛描波状文と縦走櫛描波状文を組み合わせたもの(151)・コの字重ね文(173、174)・櫛描によるコの字重ね文(179)・縄文(181)・無文(178・182)など多種多様な文様がみられる。

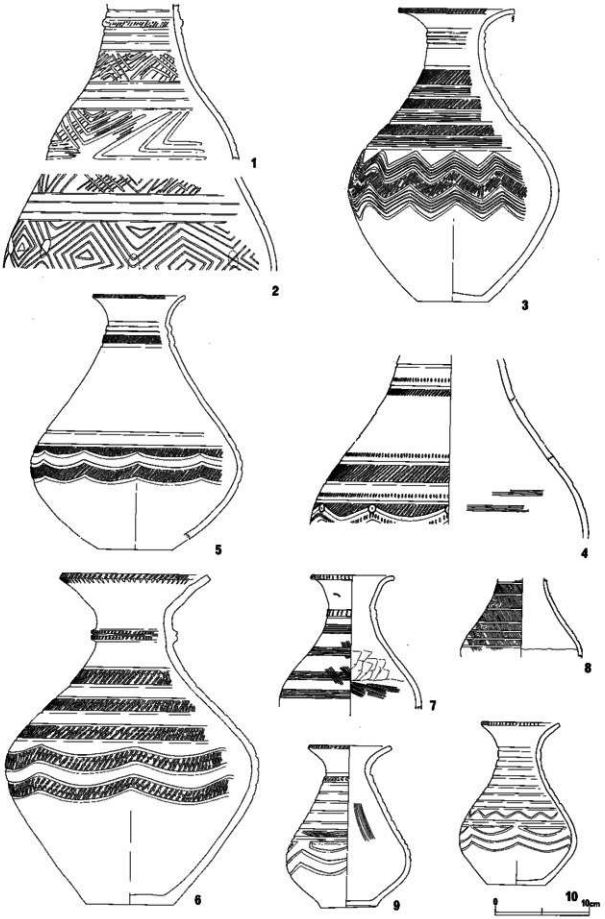
頸部の文様には横走櫛描直線文と簾状文があり、器形と文様の組み合わせで次のように細分できる。上述①の器形と横走櫛描直線文(133)、同②と櫛描横走羽状文(147)、同③と櫛描波状文(167)が、それぞれ結びつきやすい傾向にある。なお、櫛描縦羽状文は②・③との結び付きが強い。

台付甕形土器(第250図183・185～189)

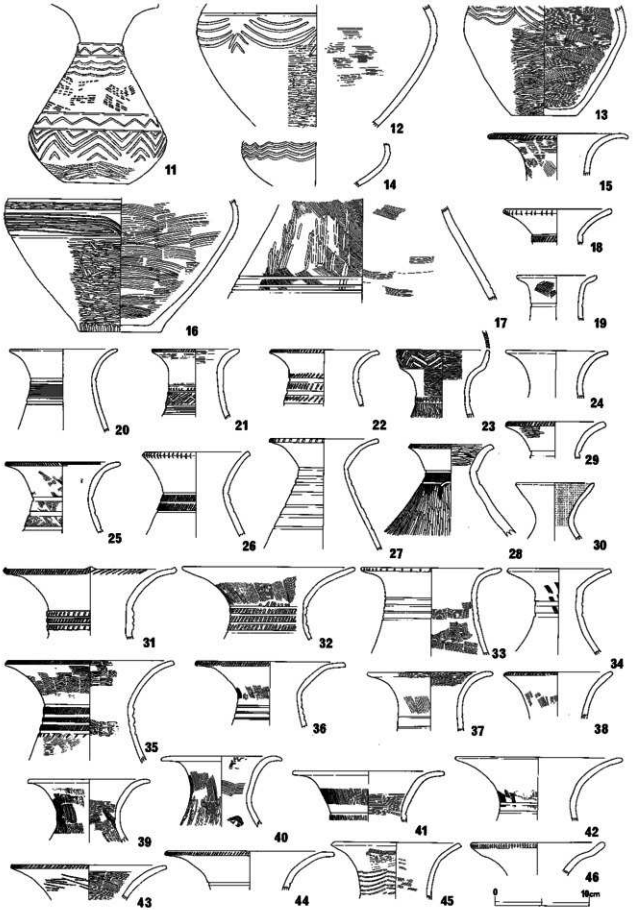
口縁部形態には素縁と受口状の二者がある。胴部はやや膨れ、どっしりとしたプロポーションである。口縁部には櫛状工具や沈線による波状文が施文され、胴部にも同様の工具で三角形のモチーフや沈線によるコの字重ね文が施文されるものがある。

浅鉢形土器(第250図184・192～197・200～202・204・205)

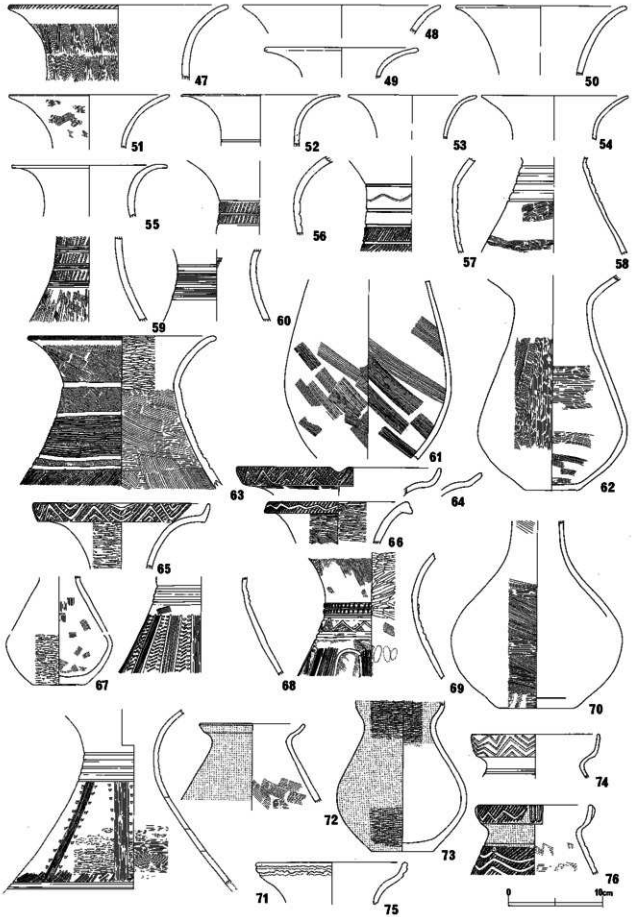
浅鉢の器形には３種ある。①口縁部が短く外反し、胴部に弧状文が施文される例(193・195)。後述する②に比較して、縄文時代的な傾向が強い。②口縁がやや内湾し、無文で赤色塗彩される(194・196・197)。



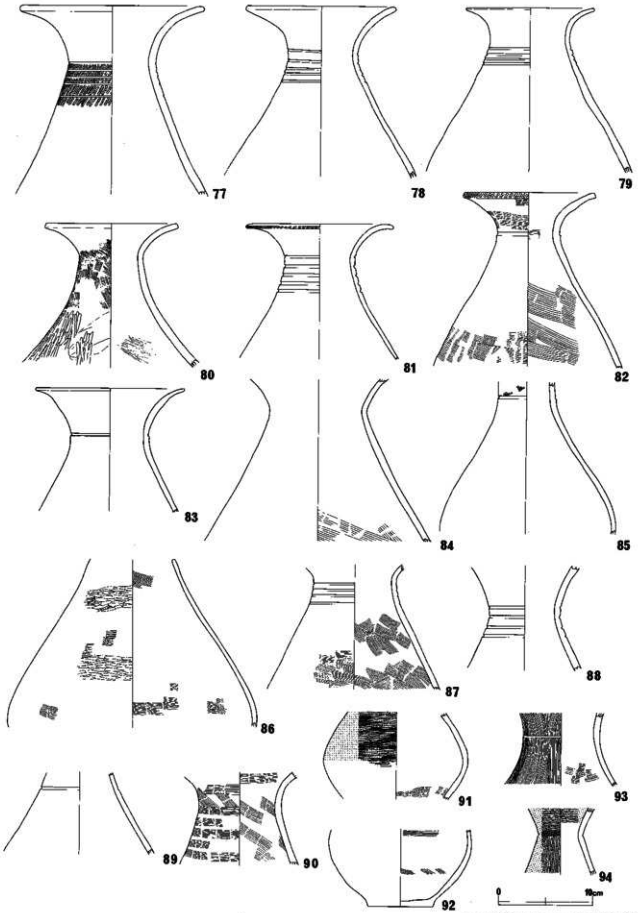
第243図　弥生時代中期後半の土器　(1)



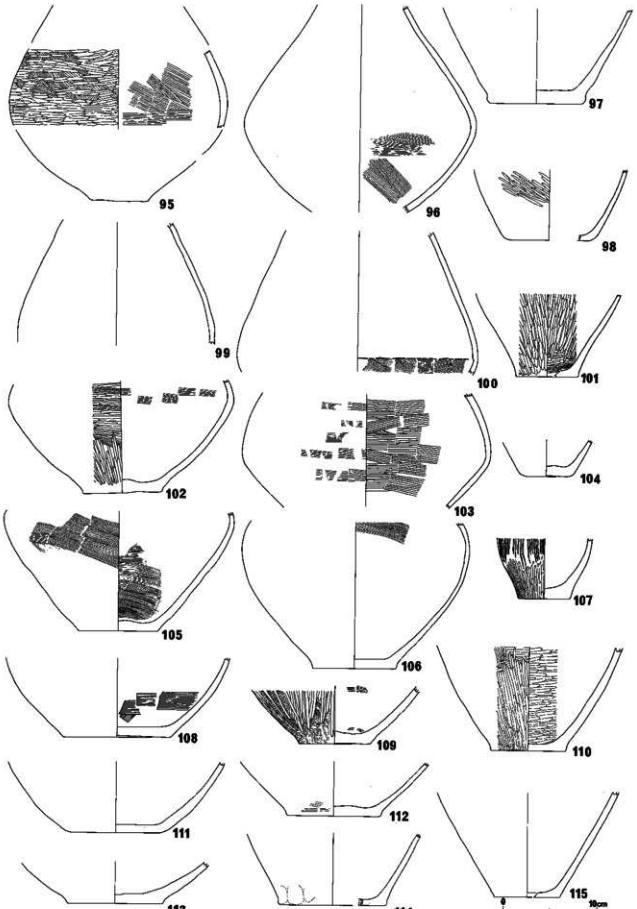
第244図　弥生時代中期後半の土器　(2)



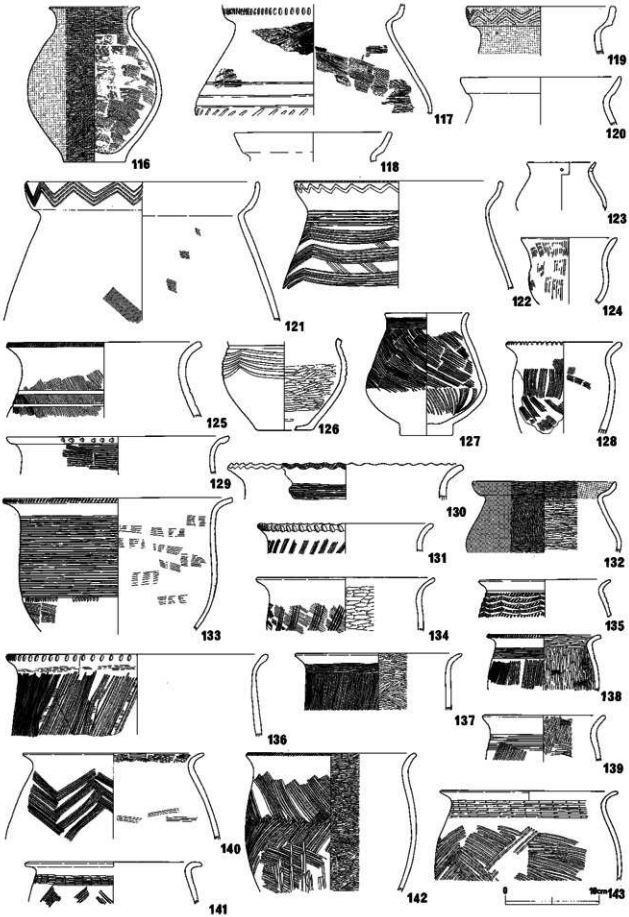
第245図　弥生時代中期後半の土器 (3)



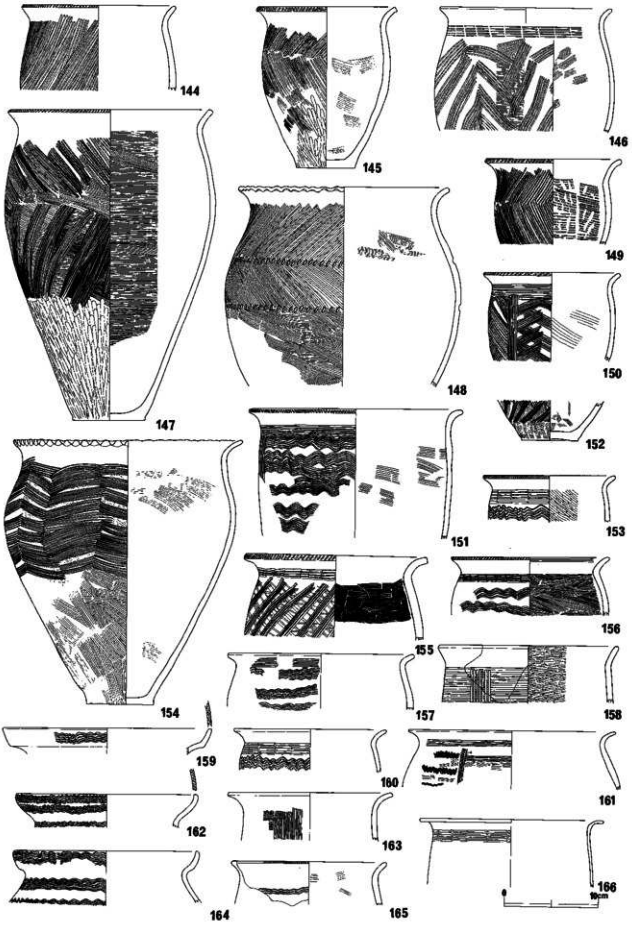
第246図　弥生時代中期後半の土器 (4)



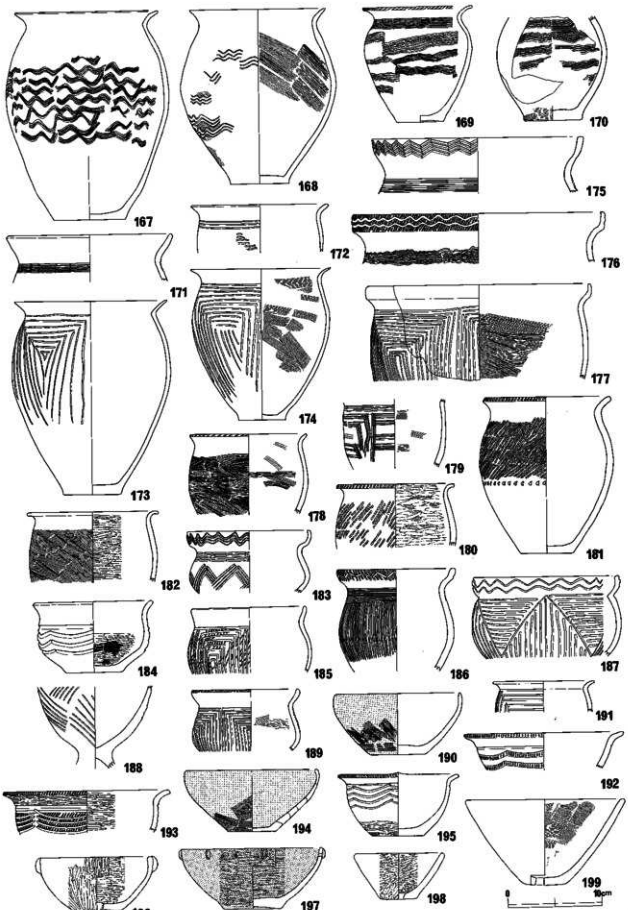
第247図　弥生時代中期後半の土器　(5)



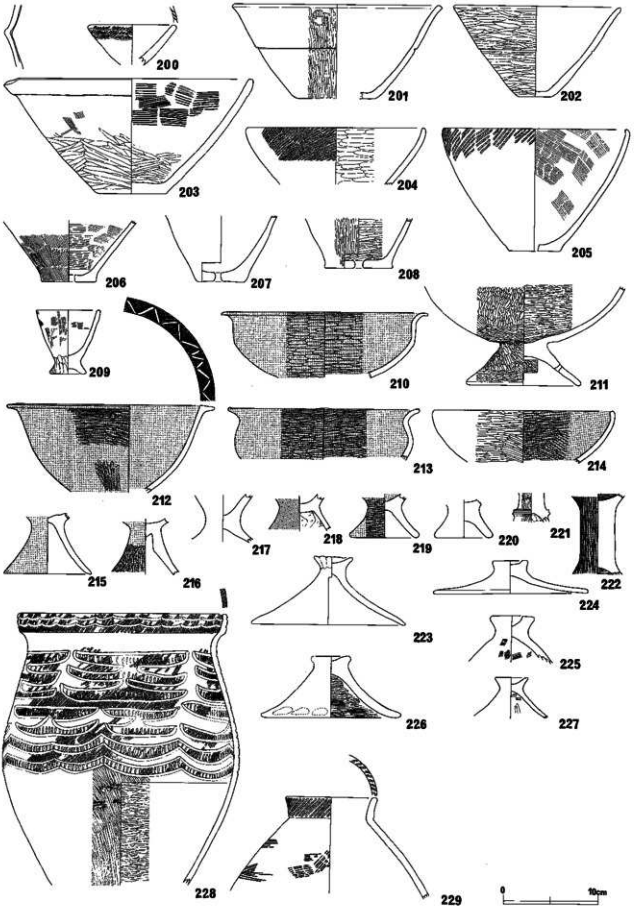
第248図　弥生時代中期後半の土器　(6)



第249図　弥生時代中期後半の土器　(7)



第250図　弥生時代中期後半の土器　(8)



第251図　弥生時代中期後半の土器　(9)

③口縁部が外反気味に立ち上がり、胴部中位に段をもつ(201)。④口縁がやや内湾気味に立ち上がり、口縁部付近に縄文が施文される(204・205)。

片口形土器(第251図　203)

一例のみであるが、浅鉢形で、口縁部に段がある。

有孔浅鉢形土器(第250図198・199)

大形と小形がある。小形は赤色塗彩され、よく研磨されている(198)。大形品は底部から直線的に立ち上がり内面ハケメが残る(199)

高坏形土器(第251図　209～222)

①口径が小さく、坏部は急角度に立ち上がり、脚部が低い(209)、②口縁が水平に開き、口縁部に山形文が施文される(212)、③口縁部が水平に外反し、その下位がややくびれ、丸味を帯びた体部をもつ(210～213)、④全体の形状は不明だが、杯部が内湾するもの、⑤全体の形状は不明であるが、細く長い脚部をもつ(222)などがある。

蓋形土器(第251図　223～227)

頂部につまみ状のくびれがあり、下に向かって笠状に開く器形である。

その他(第251図)

228は受口状口縁の甕であるが、これまであまり類例を見ない器形である。口縁部には縄文を地文に、沈線による波状文が施文され、胴部上半には変形工字文風のモチーフがみられる。工字文間に櫛歯状工具による刺突文があり、胴部下半には弧状文が施文される。229は口縁が狭く、胴部に最大径のある壺の器形をとり、口縁部には帯状に縄文がある。

(2)　石　器

この期の石器には、磨製石斧・環状石斧・石包丁・小形石器・磨石・敲石・石錘・その他がある。

磨製石斧(第252図1～22)

住居址出土7点、遺構外が14点、不明が1点である。出土部位からほぼ完形・刃部・胴部の3つに分類できる。ほぼ完形品が9点(1～9)、刃部9点(10～18)、胴部4点(19～22)である。刃部形態には太型蛤刃石斧と扁平片刃石斧の2つがあり、前者は14点、後者は7点である。とくに注目すべきものとして、扁平片刃石斧に装着痕が明確に残る例(6)がある。詳細は第8表のとおりである。

環状石斧(第253図23)

1点のみである。X－L－18から出土。直径11.2cm・厚さ3.6cm・重さ166.9g。半分欠損。表面は非常によく研磨されている。断面は円盤形である。片面中央部が直径4.6cm・高さ1.7cmの円筒状にはり出している。灰黒褐色を呈している。

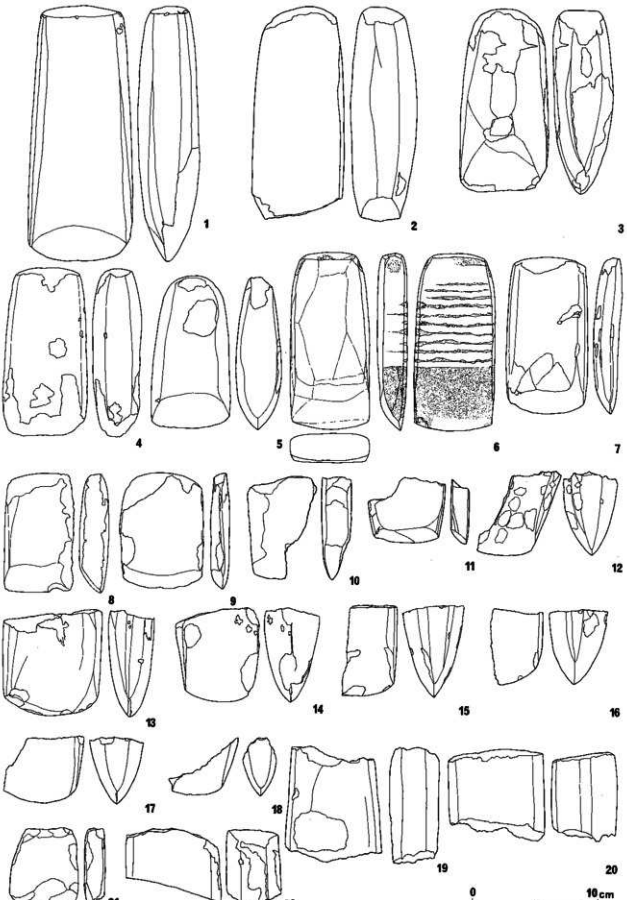
石包丁(第253図24・25)

2点出土している。24は第21号住居址から。ほぼ完形。長さ12cm・幅4.1cm・厚さ0.9cmある。孔は上部に2つあけられている。25は第11号住居址出土。半分破損。現存部の長さ6.5cm・幅5cm・厚さ1.4cm。孔は上部中央に1つ開けられている。

小形石器(第253図26～29)

石鏃が3点と円形スクレイパーが1点ある。

26はX－P－25出土。無茎鏃で基部が少し抉れている。長さ2.6cm・幅1.6cm・厚さ0.4cm・重さ1.4g。27はX－L区Ⅲ層下部。無茎鏃で基部は平らである。長さ2.3cm・幅1.5cm・厚さ0.6cm・重さ1.4g。28はX－L－14。無茎鏃で基部はわずかに抉れている。長さ1.7cm・幅1.0cm・厚さ0.3cm・重さ0.4g。29



第252図　弥生時代中期後半の石器 (1)

第8表　磨製石斧一覧

図版番号	遺構番号	地　区	層　位	形　態	出土部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備　考
252-1	第2号住居址			太型蛤刃	ほぼ完形	20.2	8.2	4.8	1490.0	
252-2	第14号住居址			太型蛤刃	ほぼ完形	17.0	7.2	5.3	1135.5	刃部欠損
252-3	第34号住居址			太型蛤刃	ほぼ完形	10.5	6.9	4.6	815.3	
252-4	第2号住居址			太型蛤刃	ほぼ完形	13.3	6.6	3.6	639.8	刃部欠損
252-5	遺構外	Ⅳ－Y－23		太型蛤刃	ほぼ完形	10.1	6.2	3.6	444.1	
252-6	遺構外	Ⅴ－U－14		扁平片刃	ほぼ完形	14.1	6.2	2.2	426.2	装着痕あり
252-7	第10号住居址			扁平片刃	ほぼ完形	12.4	6.4	2.0	316.0	
252-8	第34号住居址			扁平片刃	ほぼ完形	9.4	5.4	2.2	199.4	
252-9	遺構外	X－L－14		扁平片刃	ほぼ完形	9.2	6.6	1.5	153.1	
252-10	遺構外	X－L－12	Ⅲ層下部	扁平片刃	刃部のみ	8.2	5.5	2.3	116.5	
252-11	遺構外	X－L－20		扁平片刃	刃部のみ	5.2	6.0	1.5	70.1	
252-12	遺構外	Ⅸ－Y－20		太型蛤刃	刃部のみ	6.7	6.2	4.1	181.6	
252-13	遺構外	Ⅳ－Y－20		太型蛤刃	刃部のみ	8.5	7.5	3.5	375.2	
252-14	第14号住居址			太型蛤刃	刃部2/3	7.5	6.6	4.2	280.6	
252-15	遺構外	Ⅴ－U－18		太型蛤刃	刃部1/2	7.2	4.1	4.8	200.1	
252-16	遺構外	X－L－18－6	Ⅲ層	太型蛤刃	刃部1/2	6.1	4.0	4.6	154.1	
252-17	遺構外	X－L－19		太型蛤刃	刃部2/3	5.1	6.0	4.3	162.3	
252-18	遺構外	X－L－18－7	Ⅲ層	太型蛤刃	刃部1/4	4.6	5.4	2.7	44.7	
252-19	遺構外	X－L－12		太型蛤刃	胴部のみ	9.2	7.7	3.9	556.8	
252-20	遺構外	X－L－13		太型蛤刃	胴部のみ	7.2	7.6	5.2	501.5	
252-21	遺構外			扁平片刃	胴部のみ	6.0	5.4	1.6	100.1	
252-22	遺構外	表採		太型蛤刃	胴部のみ	5.7	7.4	4.3	304.4	刃部欠損

はX－P－25。長さ3.0cm・幅2.4cm・厚さ1.0cm・重さ7.5g。

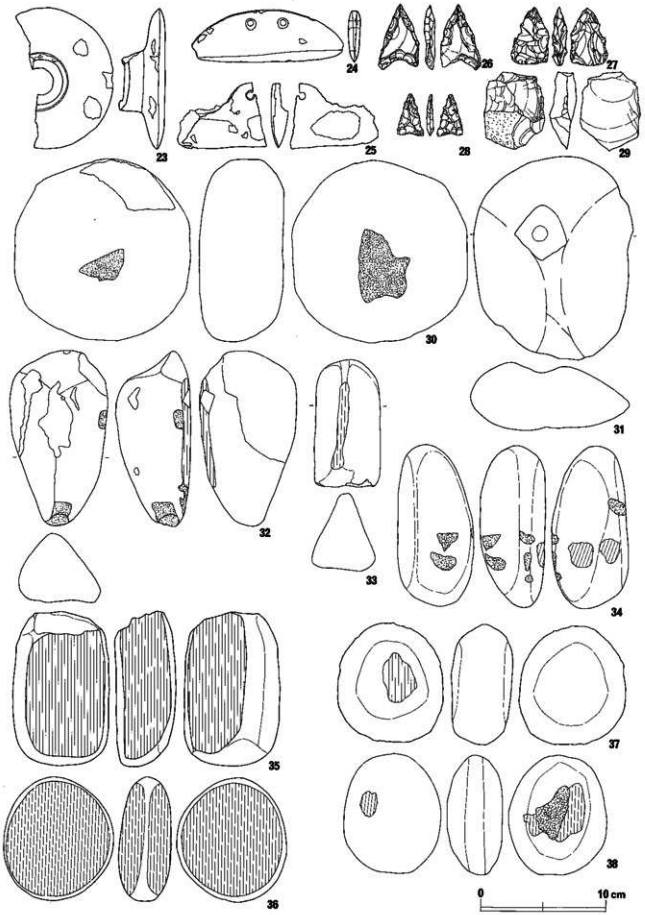
出土位置から弥生中期後半の遺物として扱ったが、4点とも縄文時代の遺物の可能性もある。

磨石・敲石(第253図～第254図30～48)

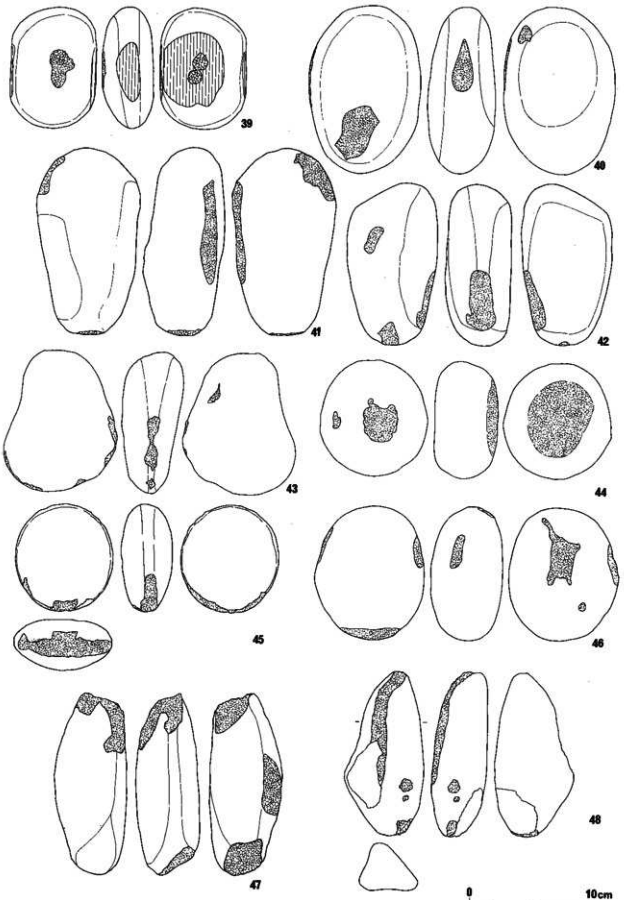
磨石が13点、敲石が20点がある。スリ痕があるものを磨石、タタキの痕があるものを敲石とし、スリとタタキの両方が認められる例は磨石とした。特殊磨石と思われるものが2点ある。出土状況からみると敲石の1点が土坑から出土している他はすべて遺構外である。敲石の中に少し大きめのものが2点あ

第9表　磨石一覧

図版番号	整理番号	遺構番号	地　区	層　位	形態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備　考
253-32	10613	遺構外	X－L	Ⅲ層	楕円	14.0	7.8	5.9	772.6	特殊磨石　断面形が三角形
253-33	9759	遺構外	X－L－12－15		長円	10.1	5.3	6.1	485.8	特殊磨石　断面形が三角形
253-34	9881	遺構外	X－L－12－7	Ⅲ層下部	長円	12.8	6.0	5.2	552.3	全面一部づつタタキとスリ
253-35	8257	遺構外	X－L－14－11	Ⅲ層	楕円	12.2	7.7	4.8	624.2	ほぼ全面にスリ
253-36	9238	遺構外	X－L－20－3		円形	9.8	8.7	4.2	501.7	ほぼ全面にスリ
253-37	8190	遺構外	X－L－18－6	Ⅲ層	円形	9.5	8.4	4.4	437.2	片面中央部にスリ
253-38	9299	自然流路			円形	9.5	7.8	4.4	440.7	両面一部スリ 片面中央部タタキ
254-39	9298	自然流路		Ⅲ層	円形	9.6	6.8	4.0	407.5	両面の中央部にタタキ 片面タタキの周りスリ
	9877	遺構外	X－L	Ⅲ層	円形	10.7	9.3	5.7	776.6	全面スリ 片面中央部にタタキ
	9386	遺構外	X－L	Ⅲ層	長円	10.2	4.4	2.6	161.6	一側面にスリ　一部欠損
	8294	遺構外	X－L－13－11	Ⅲ層	円形	7.3	8.3	2.9	211.9	半分欠損
	9762	遺構外	X－L－17		楕円	7.5	7.7	5.6	383.6	半分欠損　片面スリ



第253図　弥生時代中期後半の石器　(2)



第254図　弥生時代中期後半の石器　(3)

第10表　敲石一覧

図版番号	整理番号	遺構番号	地区	層位	形態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
253-30	9761	遺構外	X－L－13		円形	14.4	13.9	6.7	1930.0	両面中央部タタキ
253-31	9262	遺構外	X－L－19		楕円	16.2	12.6	5.4	1250.0	片面タタキによる凹み
254-40	9887	遺構外	X－L－19－3	Ⅲ層下部	楕円	13.4	8.8	5.4	848.6	全面一部にタタキ
254-41	9325	遺構外	X－L－20	Ⅲ層	長円	14.9	8.2	6.3	1069.0	側面にタタキ
254-42	9352	遺構外	X－L	Ⅲ層下部	長円	12.9	7.2	5.2	742.6	側面にタタキ
254-43	9353	遺構外	X－L	Ⅲ層下部	三角	11.4	9.0	4.8	599.8	側面にタタキ
254-44	9357	遺構外	X－L	Ⅲ層下部	円形	9.3	8.6	5.0	548.2	両面中央にタタキ
254-45	9265	遺構外	X－L－17		円形	8.6	7.6	4.1	366.7	一側面にタタキ
254-46	9354	遺構外	X－L	Ⅲ層下部	円形	10.6	8.7	5.7	599.0	側面にタタキ 片面中央にタタキ
254-47	9879	遺構外	X－L－12－7	Ⅲ層下部	長円	14.4	5.8	5.0	598.8	長軸の両端をタタキ
254-48	9765	遺構外	X－L－19－12	Ⅲ層下部	長円	13.0	6.3	4.4	391.3	片面にタタキ 断面形が三角形
	9351	遺構外	X－L－14－11	Ⅲ層上部	楕円	11.3	8.5	7.1	808.0	一側面にタタキ
	9267	遺構外	X－L－18		円形	5.5	5.1	3.4	128.6	片面の2か所にタタキ
	9335	第56号土坑	X－L－25		楕円	8.3	6.3	5.8	377.3	長軸の両端をタタキ
	8128	遺構外	X－L－18		楕円	9.5	7.3	4.0	372.4	片面にタタキ 一部欠損
	9387	遺構外	X－L	Ⅲ層	長円	12.2	6.5	5.8	652.1	長軸の一端タタキ 一部欠損
	9329	遺構外	X－L－17－4	Ⅲ層下部	円形	14.0	9.1	4.4	595.8	一部にタタキ 半分欠損
	9884	遺構外	X－L－19－5	Ⅲ層下部	長円	11.8	6.8	5.7	678.7	片面にタタキによる凹み 一部欠損
	9324	遺構外	X－L－20－13	Ⅲ層下部	円形	11.5	9.2	5.0	620.1	両面中央やや上部にタタキ 一側面にタタキ 側面一部欠損
	9328	遺構外	X－L－13－9	Ⅲ層下部	円形	9.1	8.2	4.5	453.2	両面中央タタキ　一部欠損
	9888	遺構外	X－L－10	Ⅲ層	円形	13.3	11.4	7.2	1310.0	側面にタタキ

る。これは大きさから手にもって使用したのではなく、下に置いて使用された石器であろう。33点のうち19点のみ図示する。詳細は第9・10表。

石　錘(第255図49～59)

11点ある。住居址出土2点の他は遺構外である。縄文時代の石錘と同様に形態により分類した。2類の有溝石錘の未製品が1点、その他の10点はすべて礫の両端を打欠いただけの礫石錘である。詳細は第11表。

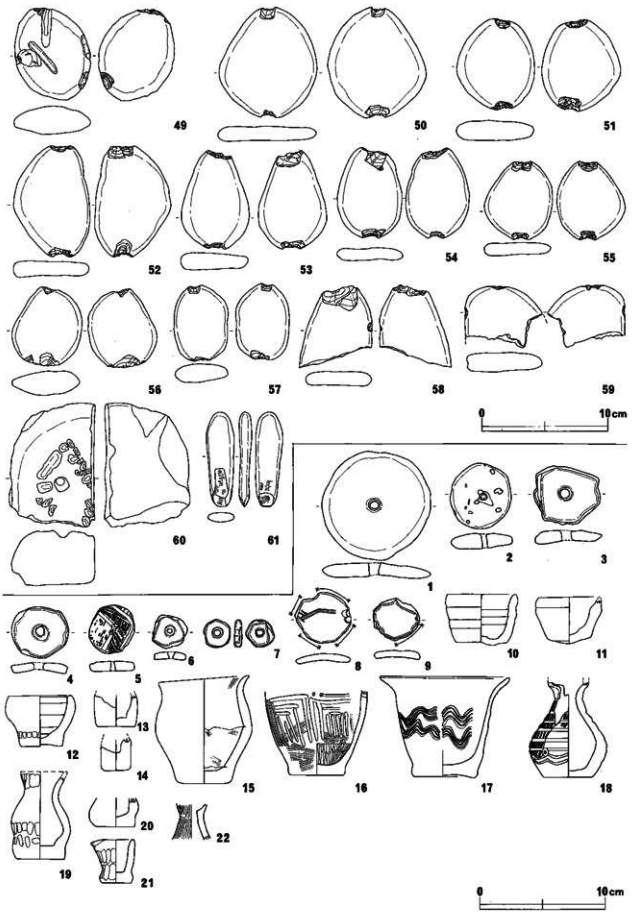
(3)　石製品

軽石製品(第255図60)

60は第39号土坑から出土。半分欠損。現存部の長さ9.9cm・幅6.7cm・厚さ4.3cm・重さ255.2g。中央に未貫通の孔が1つある。

その他(第255図61)

自然石に刃が作られている例が1点ある。61は第39号土坑の下部から出土している。刃部の形状は蛤刃で、非常によく研磨されている。長さ7.5cm・幅2.2cm・厚さ0.75cm。色は黒色である。



第255図　弥生時代中期後半の石器　(4)・石製品・土製品

第11表　石錘一覧

図版番号	整理番号	遺構番号	地　区	層　位	形態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備　考
255-49	7010	遺構外	X－L－19		有溝	7.9	5.3	1.5	80.4	片面の半分のみに長軸の溝製作途中？
255-50	7131	遺構外	X－L－19－7	Ⅲ層	打欠	4.9	6.1	1.5	65.7	長軸の端を敲打半分欠損
255-51	10237	遺構外	X－L－12－9	Ⅲ層	打欠	6.5	5.6	1.1	71.4	長軸の端を打欠半分欠損
255-52	9940	自然流路		Ⅲ層	打欠	5.9	4.2	1.4	58.5	長軸の両端を打欠
255-53	7009	遺構外	X－L－12		打欠	7.9	5.3	1.5	80.4	長軸の両端を打欠
255-54	9337	遺構外	X－L－14－15	Ⅳ層直上	打欠	7.2	5.2	1.0	66.4	長軸の両端を打欠
255-55	9348	遺構外	X－L－12		打欠	6.3	5.4	1.9	89.4	長軸の両端を打欠取り上げNo.4
255-56	10678	第33号土坑		覆土一括	打欠	6.1	5.2	1.0	57.2	長軸の両端を打欠取り上げNo.18
255-57	10662	遺構外	X－L－12－12	Ⅲ層下部	打欠	8.7	7.7	1.2	129.1	長軸の両端を打欠
255-58	10664	遺構外	X－L－19		打欠	7.2	6.2	1.6	109.5	長軸の両端を打欠取り上げNo.10
255-59	10676	第55号土坑		覆土一括	打欠	8.8	6.0	1.3	104.3	長軸の両端を打欠取り上げNo.22

(4)　土製品

土製品には紡錘車・玉・土製円板・ミニチュア土器がある。

紡錘車(第255図1～6)

遺構外から6点出土している。大きさから次の5つに分類した。

1種：6.0cm以上。2種：5.0～5.9cm。3種：4.0～4.9cm。4種：3.0～3.9cm。5種：2.0～2.9cm。

1種は1点(1)、最大径8.6cmと大形である。2種は2点(2・3)、3種は1点(4)、4種は1点(5)、5種(6)各1点である。5・6は土器片を再利用している。2は中央の孔の他にいくつも孔をあけようとした形跡がみられる。詳細は第12表。

第12表　紡錘車一覧

図版番号	整理番号	遺構番号	地　区	層　位	最大径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	孔の直径(cm)	備　考
255-1	104	遺構外		覆土一括	8.6	1.3	119.9	0.7	
255-2	42	遺構外	X－L－13－6	Ⅲ層下部	5.3	1.3	31.9	0.3	中央の孔の他に数カ所に孔を開けようとした痕跡がみられる
255-3	41	遺構外	X－L－13－10	Ⅲ層下部	5.3	1.1	18.9	0.7	土器片再利用
255-4	60	遺構外	X－L－19－12	Ⅲ層下部	4.5	0.9	13.0	0.8	
255-5	44	遺構外	Ⅶ－E－8		3.9	0.9	13.1	0.5	土器片再利用
255-6	61	遺構外	X－L－19－7	Ⅲ層下部	2.2	0.8	4.8	0.3	土器片再利用

玉(第255図7)

1点のみで、1はX－L－12　Ⅲ層下部から出土。直径2.2cm・厚さ0.6cm。土器片を円形に成形してあるだけで、表面を磨いたりした形跡はない。

土製円板(第255図8・9)

2点ある。縄文時代のそれと同様に周縁部の研磨状況から分類した。2種は1点(8)。X－L－19－12Ⅲ層下部から出土。最大径4.5cm・厚さ0.7cm・重さ10.9g。沈線文が施される。色は黄褐色である。

4類は1点(9)。X－L－13－11Ⅲ層下部から。最大径3.9cm・厚さ0.7cm・重さ9.5g。無文。色は黄褐色である。

ミニチュア土器(第255図10～22)

13点ある。出土状況からみると住居址が2点、土坑が各3点、遺構外が8点である。器種から鉢・甕・壺・片口鉢・不明の5種類がある。鉢は5点(10～14)。11は第6号住居址出土。粘土紐の輪積みの跡をはっきりと残している。甕は3点(15～17)。3点とも精巧に作られている。文様や形状から栗林式土器の甕を模倣して作られたと思われる。壺は3点(18～20)。18は第11号住居址出土。これも栗林式土器の壺模倣例だろう。片口鉢は1点(21)。不明1点の22は第37号土坑出土。高坏か壺の頸部の可能性があるが、明確でない。詳細は第13表。

第13表　ミニチュア土器一覧

図版番号	整理番号	遺構番号	地　区	層　位	器　形	部　位	焼　成	備　考
255-10	74	遺構外			鉢	ほぼ完形	良好	無文
255-11	75	遺構外			鉢	ほぼ完形	良好	無文　粘土紐の跡あり
255-12	56	遺構外	X－L－19		鉢	ほぼ完形	良好	無文
255-13	67	遺構外	X－L－13－16	Ⅲ層下部	鉢	ほぼ完形	良好	無文　口縁部破損
255-14	58	遺構外	X－L－20		鉢	ほぼ完形	良好	無文
255-15		第5号住居址			甕	ほぼ完形		無文
255-16		遺構外	X－L－14		甕	ほぼ完形		
255-17		遺構外	X－L－13		甕	ほぼ完形		
255-18	78	第2号住居址		覆土一括	壺	ほぼ完形	良好	口縁部破損
255-19	68	遺構外	X－L－13		壺	ほぼ完形	良好	無文
255-20		第31号土坑		覆土一括	壺	底部～胴		無文
255-21	76	第26号土坑		覆土一括	片口鉢	ほぼ完形	良好	無文
255-22		第31号土坑		覆土一括	不　明	胴部		

4　後期の遺構

(1)　概　要

弥生時代後期の遺構はA区とB区に検出されている。先述したように、A区とB区は別の遺跡と考えるべきであるが、いずれも遺構数が少ないため、遺構各節では一括して取り扱う。

A区では8基の住居址が検出されたが中期とは反対にA区の北側を中心に分布し、かつ住居址の平面が方形となる。B区では住居址が2棟のみであった。

(2)　住居址

第21号住居址(第257図)

位　　置：B　Ⅶ－P－17

規模と形態：約半分が調査区外となるため全形は不明である。一辺、約5mの隅円方形と推測される。

遺物出土状況：わずかに土器が3片、検出されたにすぎない。

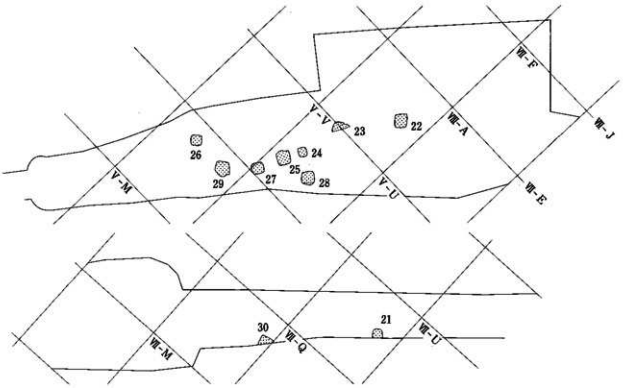
覆土堆積状況：覆土は分層できなかった。

壁　　：明瞭に立ち上がり、20cmほどである。

床　　面：貼床や堅い部分は認められなかったが、概ね良好である。

柱　　痕：検出されない。

周　　溝：検出されない。



第256図　弥生時代後期の遺構配置

炉　　址：検出されない。

第22号住居址（第257図）

位　　置：A　V-U-18

規模と形態：約4.5m×5.2mの不整な長方形である。

遺物出土状況：覆土中から土器が少量破片で出土した。

覆土堆積状況：中央部の攪乱を含めて3層に分層したが、掘りこみが浅く堆積状況は不明である。

壁　　：不明瞭であった。

床　　面：不明瞭であった。

柱　　痕：不規則に分布する。

周　　溝：認められない。

炉　　址：認められない。

第23号住居址（第258図）

位　　置：A　V-P-24・V-U-4

規模と形態：一部の壁と周溝を確認したのみで、全形は不明である。

遺物出土状況：覆土中から土器が破片で出土した。

覆土堆積状況：分層できず、堆積状況は不明である。

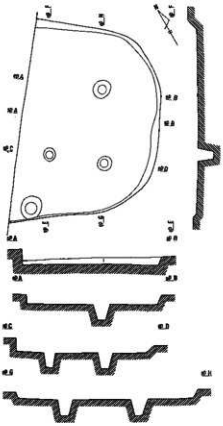
壁　　：不明瞭である。

床　　面：不明瞭である。

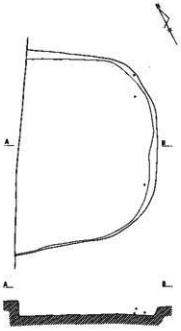
柱　　痕：壁に沿うように5箇所、中央に1箇所確認された他は検出できなかった。

周　　溝：東壁部分に断続的に検出された。

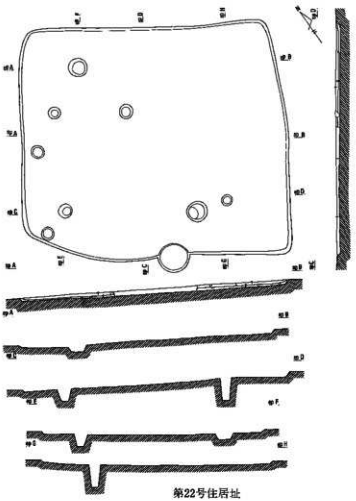
炉　　址：検出されなかった。



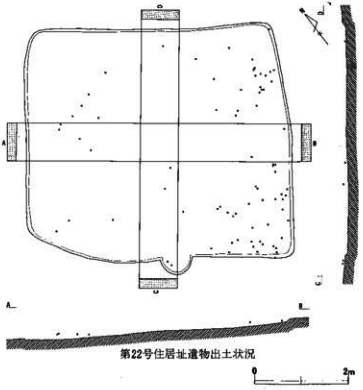
第21号住居址



第21号住居址遺物出土状況

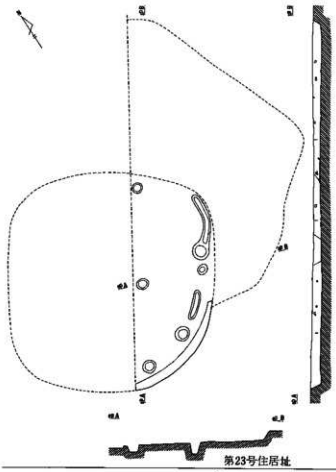


第22号住居址

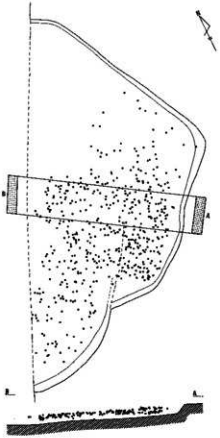


第22号住居址遺物出土状況

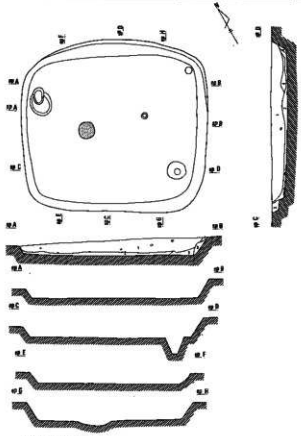
第257図　弥生時代後期の住居址　(1)



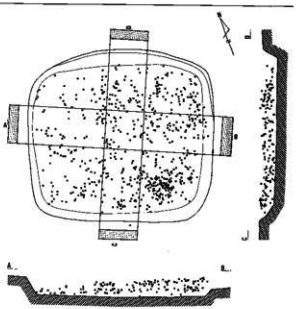
第23号住居址



第23号住居址遺物出土状況



第24号住居址



第24号住居址遺物出土状況

第258図　弥生時代後期の住居址　(2)

備　　考：検出当初、大きな不定形の落ちこみであったため、複数の竪穴住居址の切り合と考えたが、壁の確認が難しく、上記のような遺構となった。遺物の分布をみると、２棟の住居址が切り合っていた可能性もある。

第24号住居址(第258図)

位　　置：A　V-P-14

規模と形態：一辺3.6mの四隅がやや丸みを帯びる方形である。

遺物出土状況：覆土中から土器が破片で出土した。量は多い。

覆土堆積状況：流れこみ堆積である。

壁　　：明瞭に立ち上がる。

床　　面：良好であるが、貼床や堅い部分は認められなかった。

柱　　痕：対角線上に２箇所検出されたのみである。

周　　溝：認められない。

炉　　址：中央やや西寄りに径約40cmほどの円形の地床炉が検出された。

第25号住居址(第259図)

位　　置：A　V-P-10

規模と形態：一辺約5mの方形である。

遺物出土状況：覆土中から土器が破片で出土した。

覆土堆積状況：流れこみ堆積であろう。

壁　　：検出面が西に傾くため、西壁は検出できなかったが、他は明瞭に立ち上がる。

床　　面：貼床や堅い面はとくに認められなかったが、概ね良好である。

柱　　痕：不規則に分布する。

周　　溝：認められない。

炉　　址：認められない。

第26号住居址(第259図)

位　　置：A　V-L-18･19･23･24

規模と形態：一辺約5mの方形である。

遺物出土状況：覆土中から土器が破片で出土した。

覆土堆積状況：掘りこみが浅く不明である。

壁　　：明瞭である。

床　　面：良好である。

柱　　痕：不規則に分布する。

周　　溝：認められない。

炉　　址：認められない。

第27号住居址(第260図)

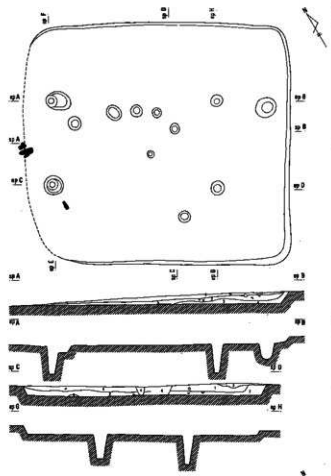
位　　置：A　V-P−05

規模と形態：一辺約5mの方形である。

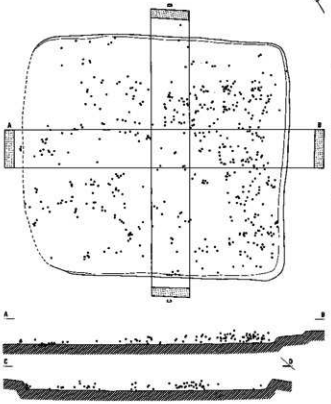
遺物出土状況：覆土中から破片で出土した。

覆土堆積状況：流れこみ堆積である。

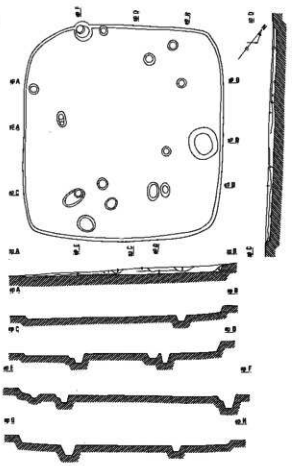
壁　　：西壁は検出面が西に傾斜しているために検出できなかったが、概ね明瞭に立ち上がっている。



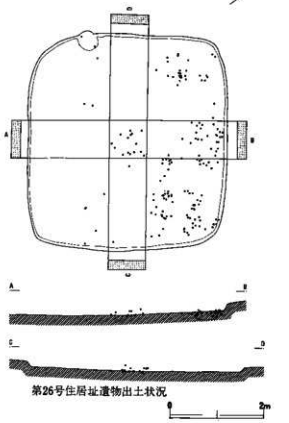
第25号住居址



第25号住居址遺物出土状況

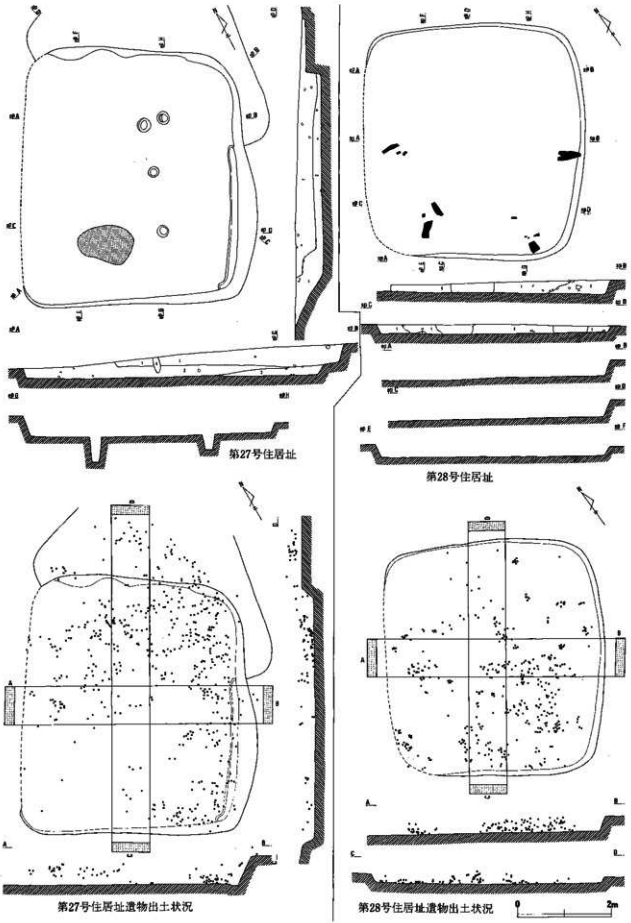


第26号住居址



第26号住居址遺物出土状況

第259図　弥生時代後期の住居址 (3)



第260図　弥生時代後期の住居址　(4)

床　　面：貼床やとくに堅い部分はないが良好であった。
柱　　痕：検出されなかった。
周　　溝：認められない。
炉　　址：認められない。

第28号住居址(第260図)

位　　置：V－P－8・13
規模と形態：一辺約5.4mの方形である。
遺物出土状況：覆土中に土器片が散見された。
覆土堆積状況：平安時代の第45号住居址に切られているため、不明瞭であるが流れこみ堆積と思われる。
壁　　：明瞭に立ち上がる。
床　　面：貼床やとくに堅い部分は認められないが良好であった。
柱　　痕：ほぼ中央に軸線にそって、4箇所確認された。
周　　溝：東壁の南側に偏って部分的に検出されている。
炉　　址：ほぼ中央南西寄りに、120cm×80cmの長円形の地床炉が検出されている。

第29号住居址(第261図)

位　　置：A　V－L－11・12・21・22
規模と形態：複数の住居址の切り合いのため、明確にできなかった。
遺物出土状況：東コーナー付近にほぼ完形の高坏が出土した。
覆土堆積状況：不明。
壁　　：不明瞭である。
床　　面：不明瞭である。
柱　　痕：不規則に5箇所確認されているが、柱穴かどうかは不明である。
周　　溝：検出されなかった。
炉　　址：検出されなかった。
切　　合：複数の住居址の切り合いと考えられるが、その状況は不明である。

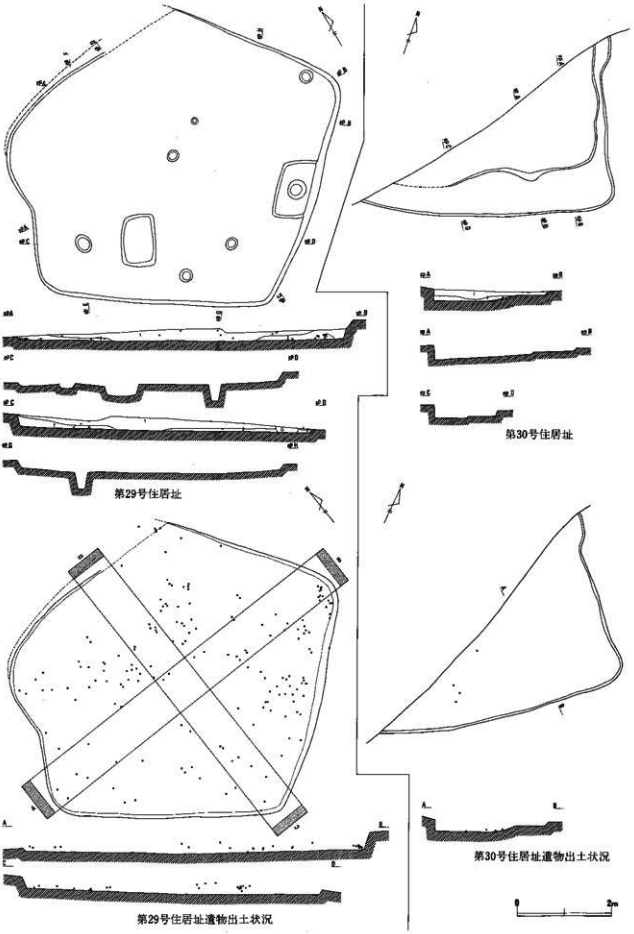
第30号住居址(第261図)

位　　置：B　Ⅶ－L－16
規模と形態：一辺5mの方形と思われるが、1/2以上が調査区外にあり、不明確である。
遺物出土状況：土器片が覆土中から出土したが、その量は極めて少ない。
覆土堆積状況：不明である。
壁　　：検出面では良好に確認できたが、壁の立ち上がりは不明瞭であった。
床　　面：壁から80cmほど内側にさらに落ちこみが認められる。
柱　　痕：検出されなかった。
周　　溝：検出されなかった。
炉　　址：検出されなかった。
遺　　物：土器片のほかにガラス小玉が出土している。

5　後期の遺物

(1)　土　器

壺・甕・高坏・器台・鉢・内湾口縁鉢・有孔鉢・蓋などで構成される。また系統により、箱清水系(A



第261図　弥生時代後期の住居址　(5)

類)と北陸を中心とする外来系(B類)に大別することができる。

壷形土器

A類(箱清水系土器)(第262図1～7)

口縁部が大きく外反する壷。大形品が多く、全形は復元できなかった。口縁部の形態によって以下のとおり分類した。

A－1：口縁端部を面取りせず、そのまま丸く収束するもの(4)。

A－2：口縁端部が受口状のもの(1～3)。口縁帯への加飾は、波状文(2・3)と櫛歯状工具の連続押し引きによる簾状文風のモチーフ(1)がある。

この他、頸部には文様帯が設けられ、いわゆるT字文(櫛歯状工具によって数段の横線文を描いた後、同一工具によって縦に垂線をおろす文様)が施文される。T字文の4個体のうち、T字文直下に波状文や簾状文風のモチーフを施す例が2個体ある。

B類(外来系土器)(第262図8～12)

9・10は、有段口縁を呈する北陸系の土器であろう。8は大形品の胴部である。赤彩され、A類の可能性もあるが、頸部文様帯が欠如している点からB類に含めた。

甕形土器

A類(箱清水系土器)(第263図14～23)

櫛描文を施す甕形土器をこれにあてた。全体の形態の特徴として、胴部の球形化があげられる。とくに21・22は顕著である。また、19は口径よりも胴部径が大きく、球形化の一傾向と考えられよう。口縁端部の形態では、図示中の土器で、丸い仕上げ3、面取り2、受口状2、折り返し口縁1、不明1個体となる。

B類(外来系土器)(第263図24～42)

B類に属する甕のほとんどは北陸地方に系統を求め得る。口縁部形態から以下のとおりに分類した。

B－1：有段口縁を呈するもの(24～26)。

B－2：口縁部が「くの字」に外反し、端部に面をもつもの(30～42)。

B－3：口縁部形態はB－2に似るが、端部は面取られない例(27・28)。このうち、B－3種に属する28は、A類の22と形態的に酷似する。本類を、箱清水系土器の一部と見るべきかもしれないが、櫛描文が欠如している点から外来系土器とした。

高坏形土器

A類(箱清水系土器)(第263・264図43～48)

坏部形態には、坏部中位に明瞭な稜を有するもの(46)、稜が緩く曲線的なもの(44)、稜はなく底部から内彎しながら立ち上がり、端部でやや内彎するもの(43・45)の3種がある。47～49は、A類の脚部である。三角形の透かしが4単位施されるか、無孔かの2種がある。

B類(外来系土器)(第264図54～56・58)

54～56・58は、北陸系の高坏形土器で、口縁端部が肥厚する。

このほか、50～53は、系統が不明瞭である。50は坏底部で、稜部に擬凹線を施す。北陸系の可能性があるが、はっきりしない。51は中期の高坏の可能性もある。52は口縁部がかなり急傾斜で、直線的に開く。

器台形土器(第65図57)

北陸系の57だけである。58の高坏と同一住居址から出土している。双方とも、在地の胎土と変わらない。北陸の編年に照らせば、法仏～月影期に併行する時期の所産であろう。

鉢形土器(第264図60)

60の1点である。平底・無彩で、端部を肥厚させている。

内彎口縁鉢(第264図13)

この器種は箱清水系土器に通有する。13は赤彩され、口縁部の2か所に小孔がうがたれる。

有孔鉢形土器(第264図61～67)

明瞭な平底(61・64～66)と、底部が湾曲するもの(62・63)がある。多くは、ミガキ整形されるが、63はハケ整形である。65は、摩耗が著しく整形不明。

壺形土器(第264図59)

59の1点である。把手部は直上し、外反しない。類例は少なく、系統がはっきりしない。

(2) 石製品

石製円板(第264図68)

第38号住居址の覆土中から出土している。縄文時代の石製円板とちがい、周縁部を打ち欠いて円形に成形した後に研磨している。最大径4.3cm・厚さ1.1cm・重さ36.7g。色は茶褐色である。

管　玉(第264図69～71)

3点ある。69は第15号住居址出土。鉄石英製である。長さ0.9cm・厚さ0.3cm。70はⅦ－Ｅ－12出土。長さ1.0cm・厚さ0.2cm。71はⅦ－Ｅ－12出土。長さ0.6cm・厚さ0.2cm。

(3) 土製品

紡錘車(第264図72)

1点のみ。弥生時代中期の紡錘車と同様に大きさから2類に分類した。72は第7号住居址出土。最大径5.5cm・厚さ1.4cm・重さ44.9g。

ミニチュア土器(第264図73～79)

7点ある。出土状況からみると住居址3点、土坑1点、遺構外3点である。鉢5点(73～77)、壺1点(78)、甕1点(79)である。79は第3号土坑から出土。成形時の接合痕がみられる。詳細は第14表。

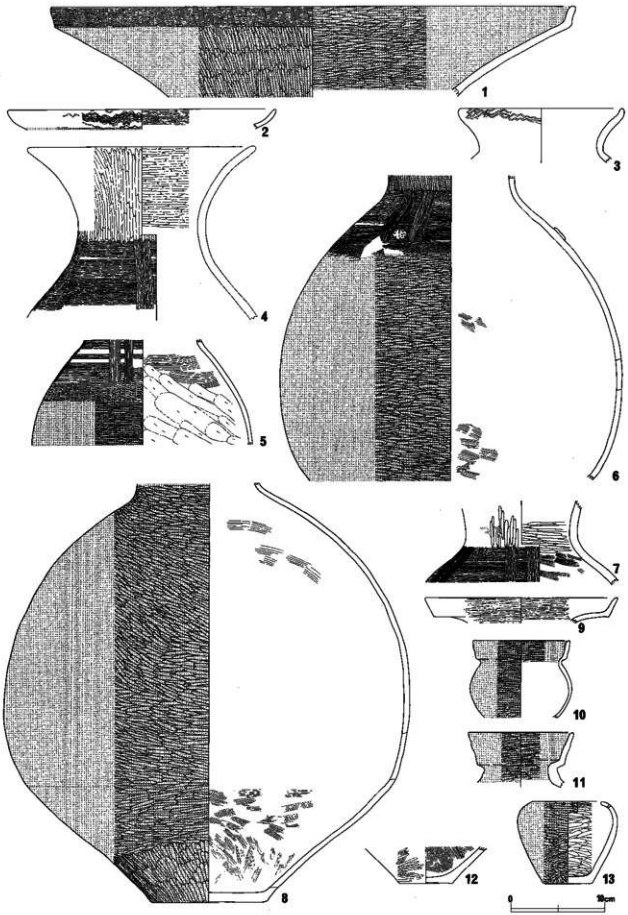
第14表　ミニチュア土器一覧

図版番号	整理番号	遺構番号	地　区	層　位	器形	部　位	焼　成	備　　考
264-73	72	第30号住居址		覆土一括	鉢	口縁～胴	良好	無文
264-74	69	遺構外		覆土一括	鉢	口縁～胴	良好	無文　赤色塗彩
264-75	73	第30号住居址		覆土一括	鉢	完形	良好	無文
264-76	97	遺構外	Ⅸ－Ｙ－20		鉢	完形	良好	無文
264-77	96	遺構外	Ⅸ－Ｙ－20		鉢	ほぼ完形	良好	無文　底部破損
264-78	77	第33号住居址		覆土一括	壺	完形	良好	無文
264-79		第25号土坑		覆土一括	甕	底部～胴	良好	無文　明瞭な接合痕あり

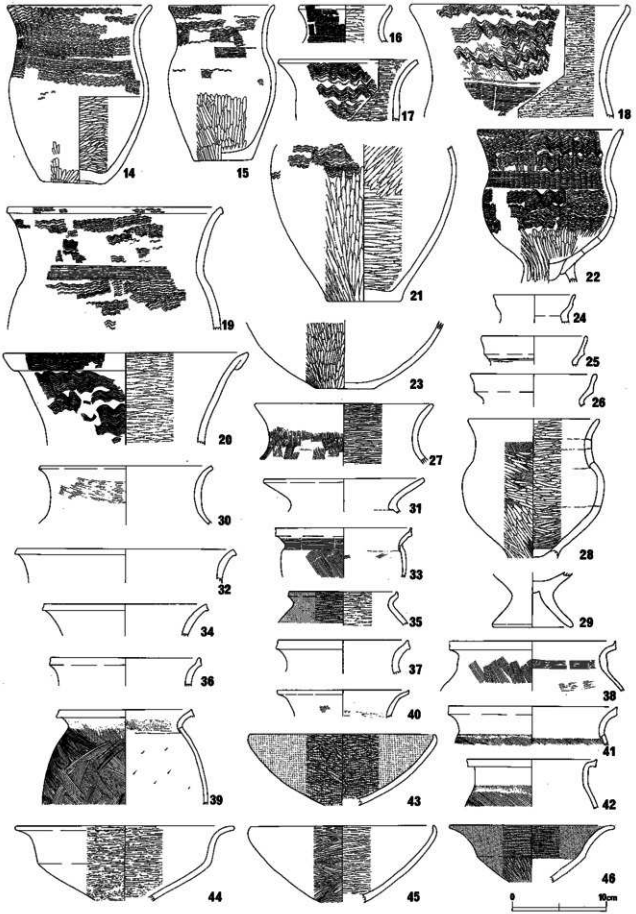
(4) その他

ガラス小玉(第264図80・81)

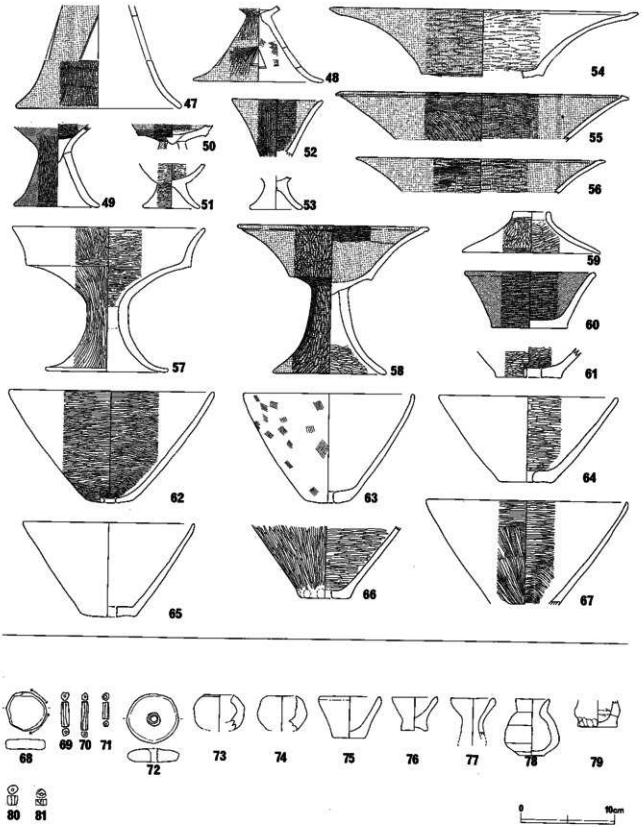
第1号住居址から2点出土している。80・81は同じ装飾品の一部であると思われる。80はほぼ完形で、長さ0.3cm。81は半分欠損している。長さ0.2cm。



第262図　弥生時代後期の土器 (1)



第263図　弥生時代後期の土器　(2)

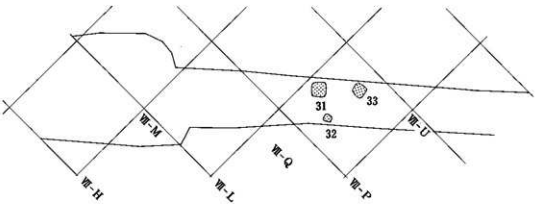


第264図　弥生時代後期の土器 (3)・土製品・石製品

第5節　古墳時代

1　概　要

この時代の遺構・遺物はA区とB区で検出されている。B区では前期の住居址が3棟、A区では中期の住居址が3棟検出されている。両区は別の集落址と考えられる。



第265図　古墳時代前期の遺構配置

2　前期の遺構

(1)　住居址

第31号住居址(第266図)

位　　置：BⅦ-P-14・15

規模と形態：一辺約5.6mの方形。内側に4m×3mの長方形の落ちこみがある。

遺物出土状況：覆土中から土器が破片で出土した。

覆土堆積状況：流れこみ堆積であろう。

壁　　：明瞭に立ち上がる。

床　　面：貼床やとくに堅い部分は認められなかったが、比較的良好であった。

柱　　痕：四隅に4箇所検出された。

周　　溝：北壁および東壁に認められる。

炉　　址：ほぼ中央北壁寄りに50cm×30cmの長円形の地床炉が検出された。

第32号住居址(第266図)

位　　置：B　Ⅶ-P-8

規模と形態：壁がほとんど検出されず全体の様相は不明である。

遺物出土状況：覆土中より土器破片が出土した。

覆土堆積状況：南東隅の土坑上面から折り重なるように検出されている。

壁　　：不明である。

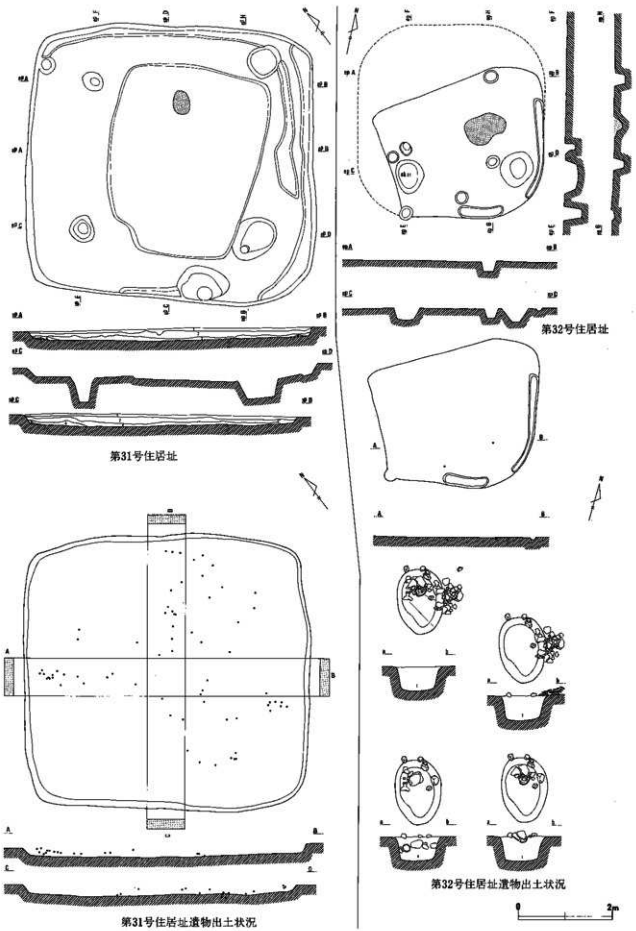
床　　面：貼床、とくに堅い部分は認められない。

柱　　痕：5箇所検出されたが不規則である。

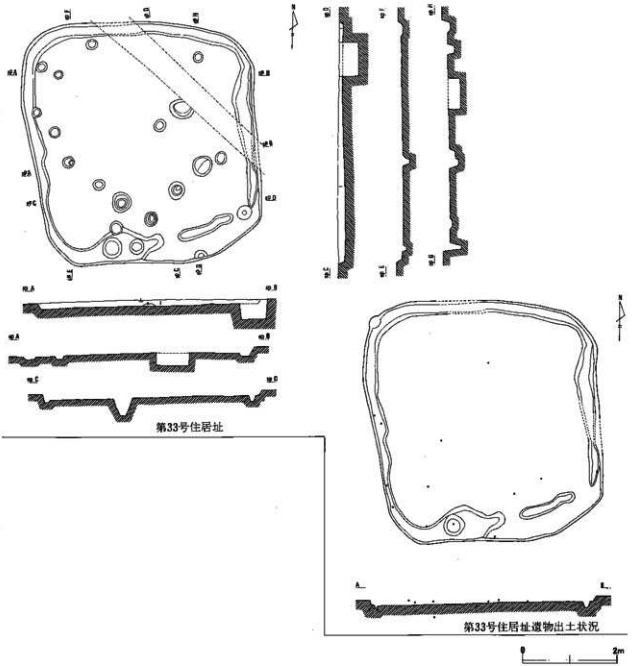
周　　溝：東壁に沿って、部分的に検出された。

炉　　址：ほぼ中央東よりに80cm×60cmの不整形な地床炉が検出された。

備　　考：大半が失われている。



第266図　古墳時代前期の住居址　(1)



第267図　古墳時代前期の住居址　(2)

第33号住居址(第267図)

位　　置：B　Ⅶ-P-18

規模と形態：一辺約5mの方形である。

遺物出土状況：覆土中から土器が破片で出土した。

覆土堆積状況：分層できず、不明である。

壁　　：比較適明瞭に立ち上がる。

床　　面：貼床や堅い部分は認められないが、良好であった。

柱　　痕：複数検出されているが不規則な配置である。

周　　溝：南壁はではやや内側に入るが、他は壁直下に認められた。

炉　　址：認められない。

3　前期の遺物

(1)　土　器

壺・甕・高坏・器台・鉢・有孔鉢・蓋・ミニチュア土器で構成される。時期的には、4世紀後半の所産と考えられる。

壺形土器(第268図1～12)

1は球形の胴部からつづく口縁部が短く外反して立ち上がり、端部を折り返す。11・12も球胴形の壺の底部と思われる。2・3は二重口縁壺の口縁部である。4・5は口縁部が大きく外反する類であるが、端部形態は異なる。7は丸底壺で、8～10も同類である。6の口縁部はやや内彎しながら立ち上がる。

甕形土器(第268図13～34、第270図35～44)

口縁部の破片が多く、全形がわかる資料は13・35のみである。口縁端部形態から、端部が丸く仕上げられる13～25・30・31・33・34と、面を有する26～29・32に大別できる。頸部の屈曲度や口縁部の外反度は多様だが、全体として、口縁部のハケが残される傾向を指摘できよう。

36～44は底部あるいは台部である。35は最大径が胴上半にあり、口縁部が直立する形態をとる。外面のハケメは体部のみナデ消され、口縁部から頸部にかけては残される。それに対し、内面は口縁部のハケが丁寧にナデ消され、体部でも上半でややハケメが残るが、全体にナデが入れられる。

高坏形土器(第269図45・46・49・53～56)

49は浅い坏部を有し、脚部は裾で内彎しながら外へ開く。53～56は脚裾部のみの破片で、器台形土器の裾部も含む可能性があるが、本類にまとめる。

器台形土器(第269図47・48・50～52)

50は直線的に開く小さい脚部に深い埦形の受部が付く。51と52は受部と裾を欠くが、形態的には高坏形土器と共通し、とくに51は49に類似する。

鉢形土器(第269図61)

半球形の体部に内彎する口縁部をもつ。頸部は明瞭で沈線状のくぼみが施される。

有孔鉢形土器(第269図58～60)

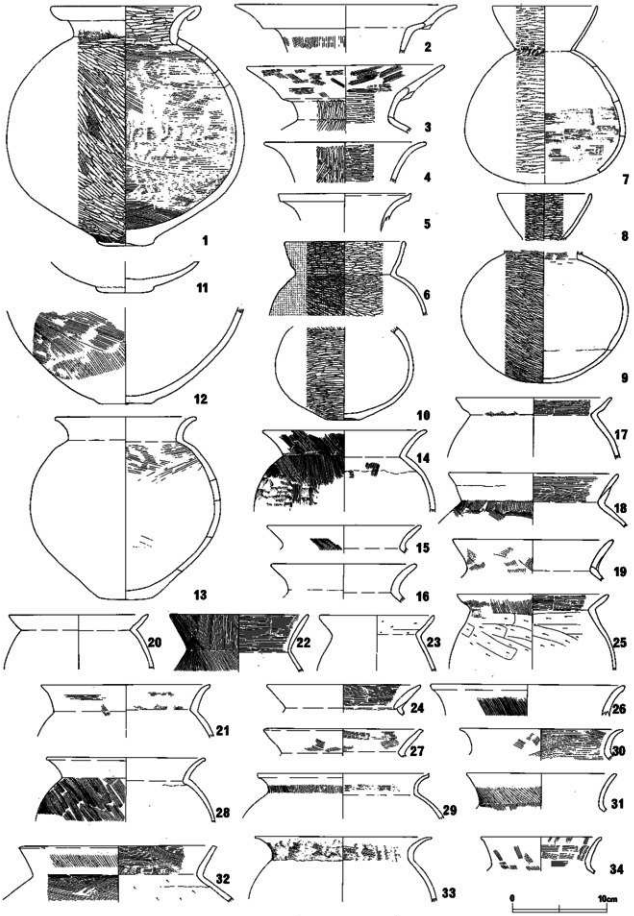
58は大形品で口縁部は折り返される。59も折り返し口縁状である。擬口縁に粘土帯を付加して口縁部を成形し、明瞭な接合痕を残す。58と59が平底で、穿孔もほぼ中央にされるのに対し、60は底部が歪み湾曲する点で、前二者とは異なる。整形もハケ整形で、全体に粗雑な感を受ける。

蓋形土器(第269図57)

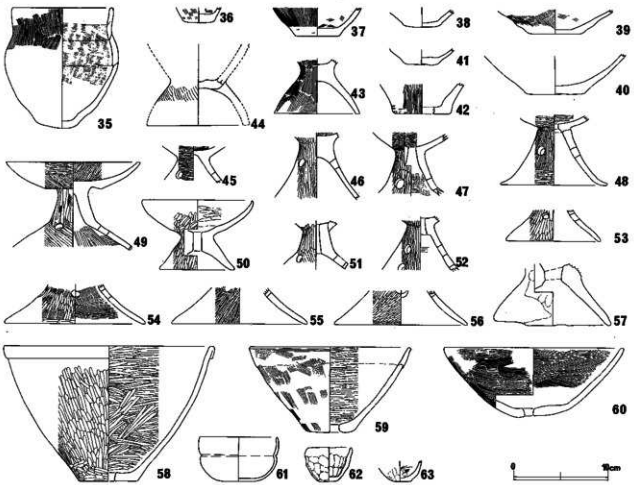
1点出土している。手づくねで全体にかなり歪んだ粗製品である。

ミニチュア土器(第269図62・63)

第31号住居址から2点出土している。器種は鉢形で、成形は手ずくねの完形品である。62は口径4.6cm・底径2.1cm・高さ3.7cm。口縁部が欠損している。焼成は良好であり、内面にわずかにハケでつけたような条痕が認められ、ハケで整形した可能性がある。



第268図　古墳時代前期の土器 (1)



第269図　古墳時代前期の土器　(2)

4　中期の遺構

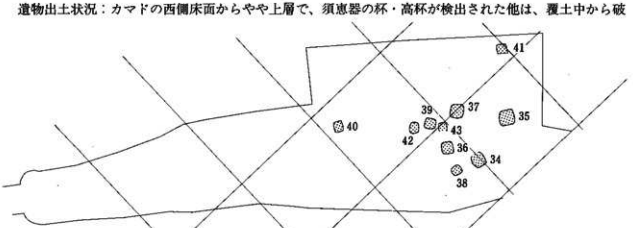
(1)　住居址

第34号住居址(第271図)

位　　置：A　Ⅳ-Y-23、Ⅶ－E－3

規模と形態：一辺5mの方形である。

遺物出土状況：カマドの西側床面からやや上層で、須恵器の杯・高杯が検出された他は、覆土中から破



第270図　古墳時代中期の遺構配置

片で出土した。

覆土堆積状況：2層に分層されたが、流れこみ堆積と思われる。

壁　　：明瞭に立ち上がる。

床　　面：やや柔らかであったが、明瞭に検出された。

柱　　痕：北西隅と南西隅に検出されたが、東壁側は平安時代の住居址に切られており不明である。

周　　溝：検出されなかった。

か　ま　ど：北壁のほぼ中央に、粘土構築のかまどがある。攪乱があり遺存状態は悪かった。

遺　　物：須恵器杯と高杯が出土している。

切　　合：平安時代の住居址が内部に構築されている。

第35号住居址(第272図)

位　　置：A　Ⅶ－E－13・14

規模と形態：一辺6mの方形である。西側に大きなL字状の落ちこみがある。

遺物出土状況：覆土中から、土器が破片で出土した。

覆土堆積状況：流れこみ堆積である。

壁　　：明瞭に立ち上がる。

床　　面：やや柔らかいが明瞭に確認される。

柱　　痕：四隅と中央に検出された。

周　　溝：北・西・南各壁に部分的に検出された。

か　ま　ど：西壁のほぼ中央に焼土が検出された。

第36号住居址(第273図)

位　　置：A　Ⅳ－Y－24・25

規模と形態：やや西壁が湾曲するが、一辺約4.6mの方形である。

遺物出土状況：覆土中から土器が破片で出土した。

覆土堆積状況：2層に分層された。流れこみ堆積と考えられる。

壁　　：検出面からの掘りこみが浅く、やや不明瞭であった。

床　　面：やや不明瞭であった。

柱　　痕：四隅に一対ずつ検出された。

周　　溝：認められない。

か　ま　ど：西壁の中央に焼土のみ検出された。

第37号住居址(第273図)

位　　置：A　Ⅶ－E-5・10、Ⅷ－A－1・6

規模と形態：一辺5.4mの方形である。

遺物出土状況：覆土中から土器が破片で出土した。

覆土堆積状況：流れこみ堆積と思われる。

壁　　：明瞭に立ち上がる。

床　　面：やや柔らかい。

柱　　痕：四隅に検出されている。

周　　溝：認められない。

か　ま　ど：東壁中央に検出された小さな土坑がかまどの痕跡であろうか。焼土は認められなかった。

第38号住居址(第274図)

位　　置：A　Ⅳ－Y－18

規模と形態：一辺4mの方形である。

遺物出土状況：床面上に密着したり、やや上層で、完形土器が約20点出土した。また、カマドには甕形土器が二個並列して設置された状況で検出された。

覆土堆積状況：不明である。

壁　　：東壁と北壁は明確に確認できたが、西壁と南壁は不明瞭であった。

床　　面：比較的堅く良好な床面である。

柱　　痕：四隅に検出されている。

周　　溝：東壁と西壁、北壁と南壁の一部に検出されている。

かまど：北壁ほぼ中央に粘土で構築したかまどがある。

切　　合：弥生時代中期の第18号住居址を切っている。

備　　考：原因は不明であるが、各土器が使用、あるいは置かれていた状況をそのまま示すような出土状況であった。床面中央に径約1.5mの浅い土坑が検出された。土層断面では土坑が住居址を切っているかのようである。しかし、極めて分層しにくい堆積状況であったこと、遺物の出土状況はむしろ逆の状況を示すこと等、判断に迷う点があるが、本来住居址に伴う遺構と考える。

第39号住居址(第274図)

位　　置：A　V－U－21

規模と形態：一辺約4.4mの方形である。

遺物出土状況：覆土中から土器が破で出土している。

覆土堆積状況：流れこみ堆積である。

壁　　：掘りこみは深く明瞭である。

床　　面：やや柔らかい。貼床やとくに堅い部分は認められない。

柱　　痕：四隅に検出されている。

周　　溝：認められない。

かまど：西壁のほぼ中央に立石があり、かまどの芯に利用されたものと思われるが、周囲からはわずかに焼土が検出されたのみであった。

第40号住居址(第275図)

位　　置：A　V－U－4

規模と形態：一辺約3.6mの方形である。

遺物出土状況：覆土中から土器が破片で出土した。

覆土堆積状況：分層できず不明である。

壁　　：掘りこみは浅いが、明瞭に検出された。

床　　面：貼床やとくに堅い部分は認められなかった。

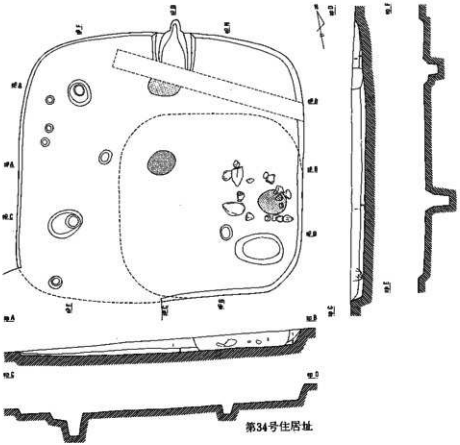
柱　　痕：5本あるが、不規則な配置である。

周　　溝：認められない。

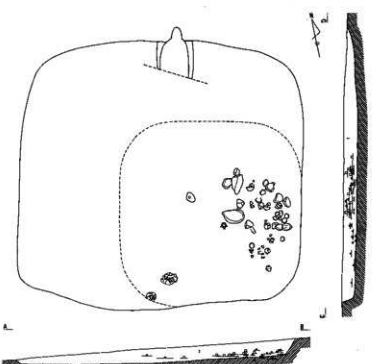
かまど：確認できなかった。

第41号住居址(第275図)

位　　置：A　Ⅷ－A－21



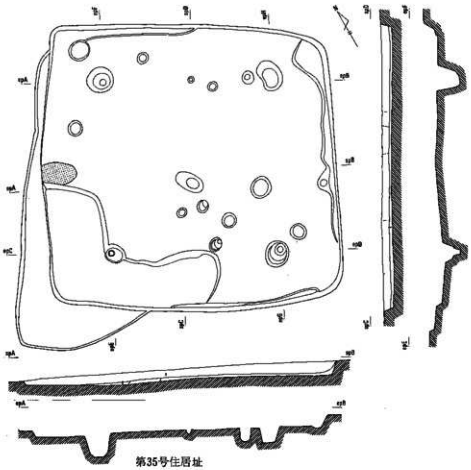
第34号住居址



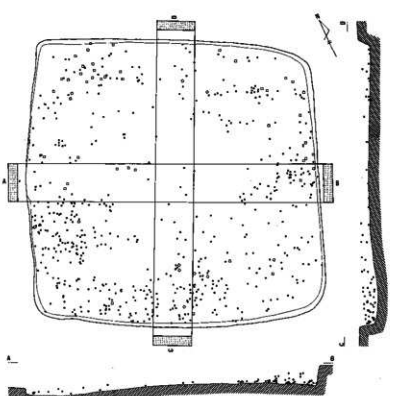
第34号住居址遺物出土状況

0　2m

第271図　古墳時代中期の住居址　(1)



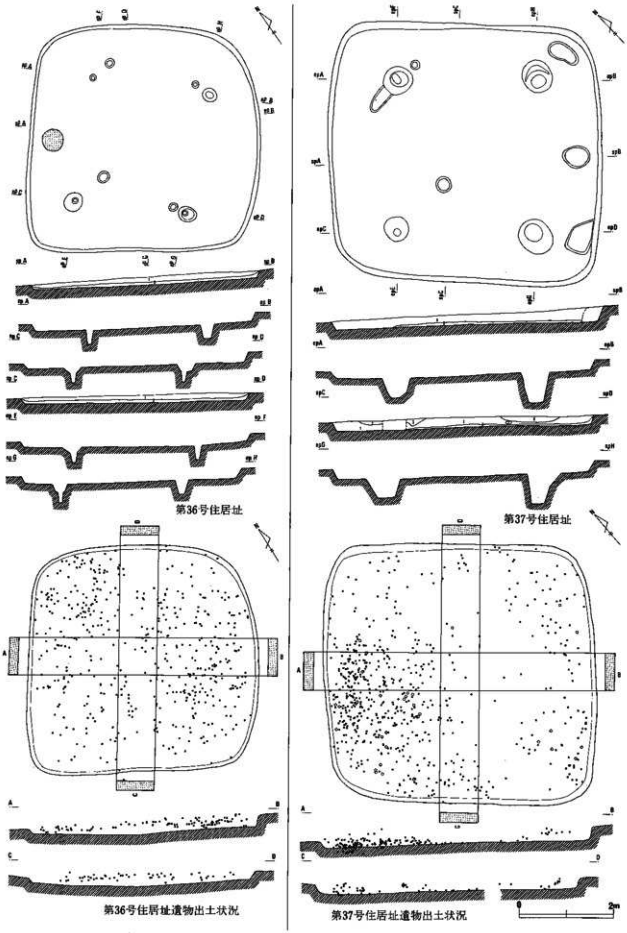
第35号住居址



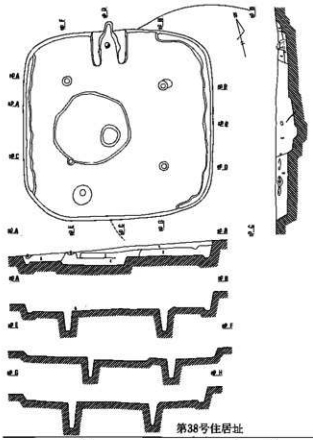
第35号住居址遺物出土状況

0　2m

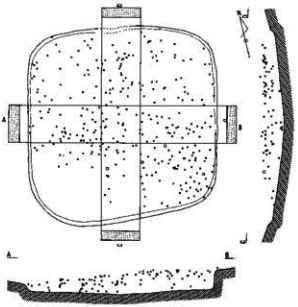
第272図　古墳時代中期の住居址　(2)



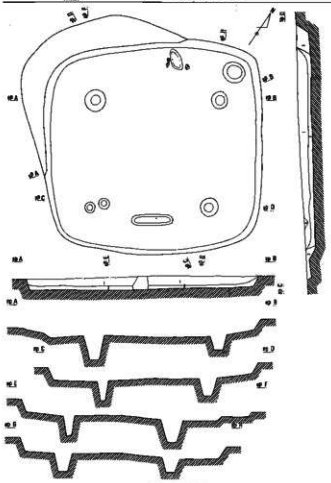
第273図　古墳時代中期の住居址　(3)



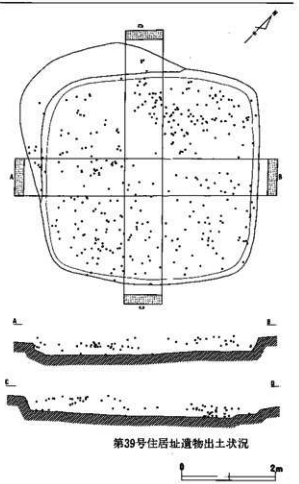
第38号住居址



第38号住居址遺物出土状況



第39号住居址



第39号住居址遺物出土状況

0　2m

第274図　古墳時代中期の住居址　(4)

規模と形態：西壁部分が壊されているため全形は不明である。東壁の長さは約4m。
遺物出土状況：覆土中から土器が破片で出土した。
覆土堆積状況：流れこみ堆積と思われる。
壁　　：掘りこみは浅いが、明瞭であった。
床　　面：やや柔らかい。
柱　　痕：合計で6箇所の柱痕が検出されているが、うち4本はほぼ四隅に対応する。
周　　溝：認められない。
かまど：認められない。

第42号住居址(第274図)

位　　置：A　V－U－22
規模と形態：南壁のみ検出された。
遺物出土状況：覆土中から土器が破片で検出された。
覆土堆積状況：不明である。
壁　　：不明瞭である。
床　　面：不明瞭である。
柱　　痕：隅に対応する部分に検出された。
周　　溝：認められない。
かまど：検出されなかった。

5　中期の遺物

(1)　土　器

この期の器種は、甕・壺・鉢・高坏・坏・埦・鉢・甑・甕・壺などで構成される。時期は5世紀中頃から6世紀初頭の所産と思われる。

甕形土器(第277図1～7・9、第278図11～28、第279図29～39)

胴部形態とその最大径の位置から、1類：胴部最大径が上半にくるもの(1・4)、2類：同じく中位にくるもの(2・3・6・7・9)、3類：同じく下半にくるもの(5)、4類：長胴のもの(11～23)、5類：その他(24～39)に分類できる。1～4類は、胴部の球胴化から長胴化という、時間的な関係としてとらえることができよう。

壺形土器(第279図50～54)

出土量は少ない。51は丸底壺で、52～54もその一部と思われる。

高坏形土器(第271図44～49・101・102)

44～46は坏部の外傾度が大きく、整形も粗雑である。和泉式期の高坏が崩れた形態ともうけ取れよう。101・102は須恵器で、99・100と同一住居址からの出土である。

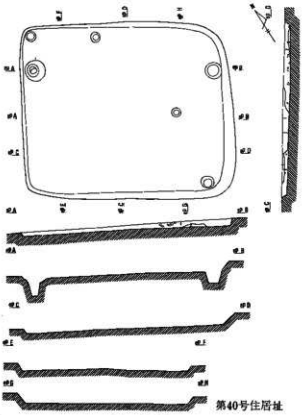
坏形土器(第280図55～71)

須恵器模倣の55～62と、口縁部が短く外反する63～71がある。60～62・71と83の鉢は、同一住居址から重なった状態で出土した。底部に放射状の暗文を施す点も共通する。

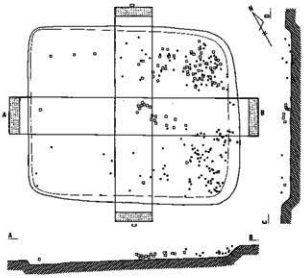
埦形土器(第280図72～77・79～81・第281図84～87)

球形あるいは半球形の体部に短く外反する口縁部を有する。体部が球形の前者には73～77・80・81が、半球形の後者には72・79・84～87がある。

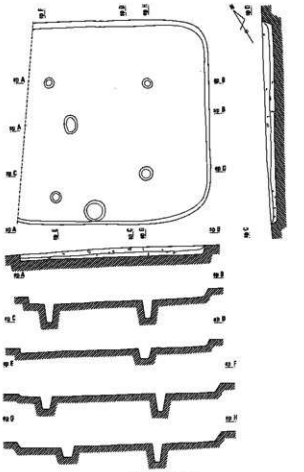
鉢形土器(第277図10・第280図78・82・83・第281図94～96)



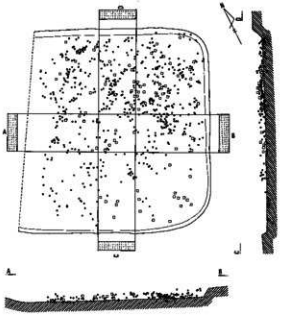
第40号住居址



第40号住居址遺物出土状況

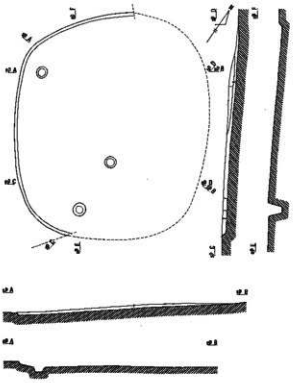


第41号住居址

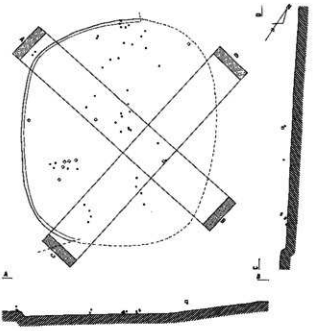


第41号住居址遺物出土状況

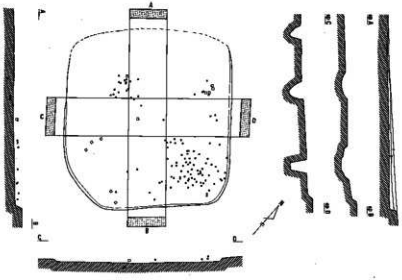
第275図　古墳時代中期の住居址　(5)



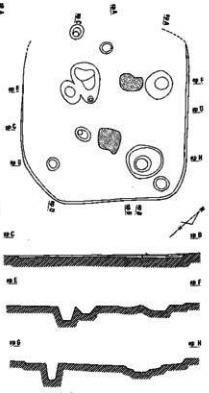
第42号住居址



第42号住居址遺物出土状況



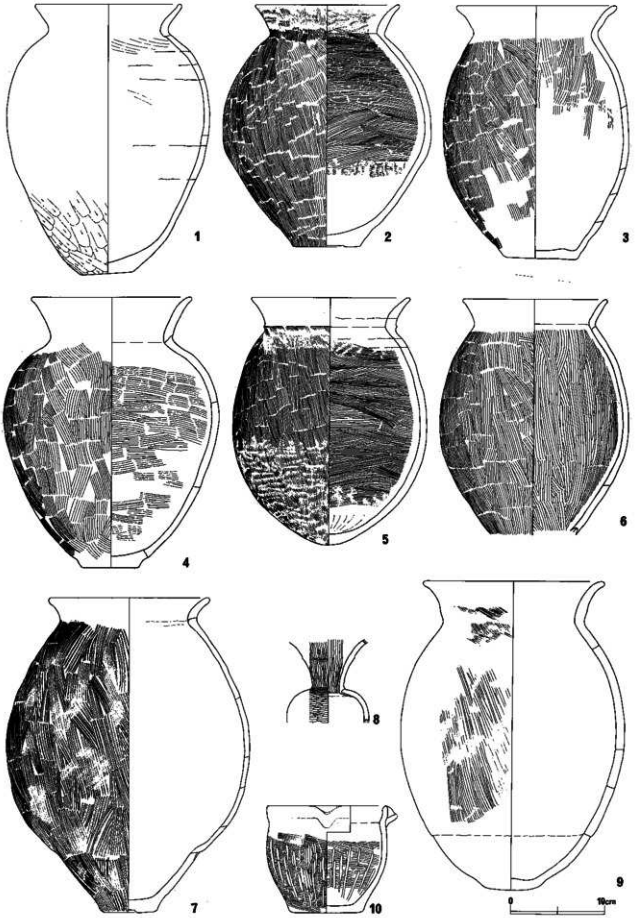
第43号住居址



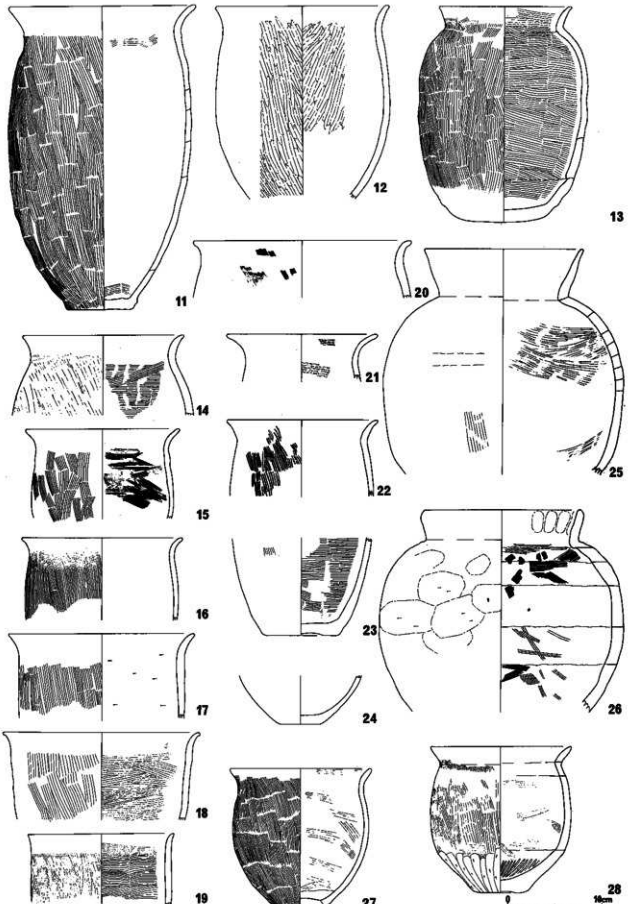
第43号住居址遺物出土状況

0　2m

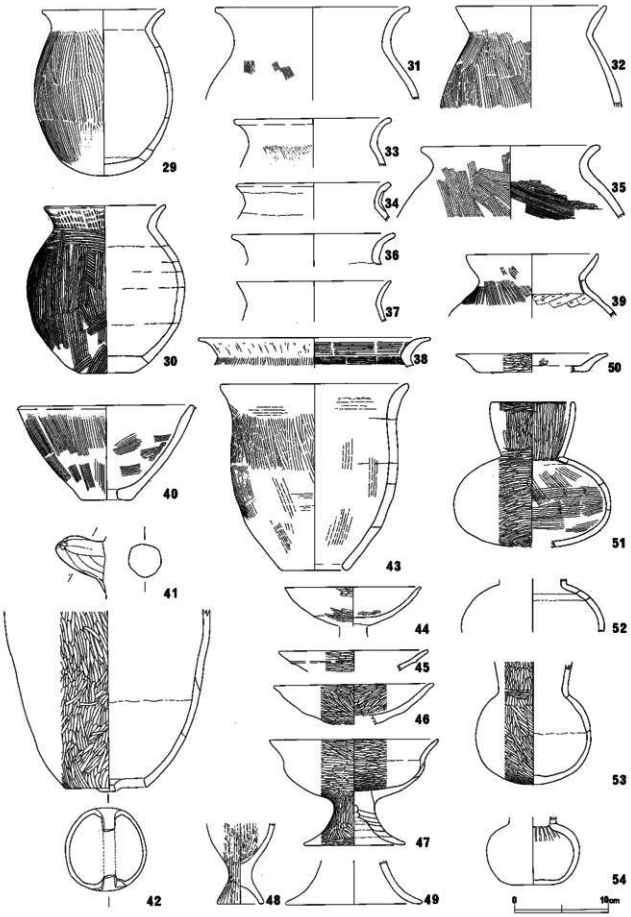
第276図　古墳時代中期の住居址　(6)



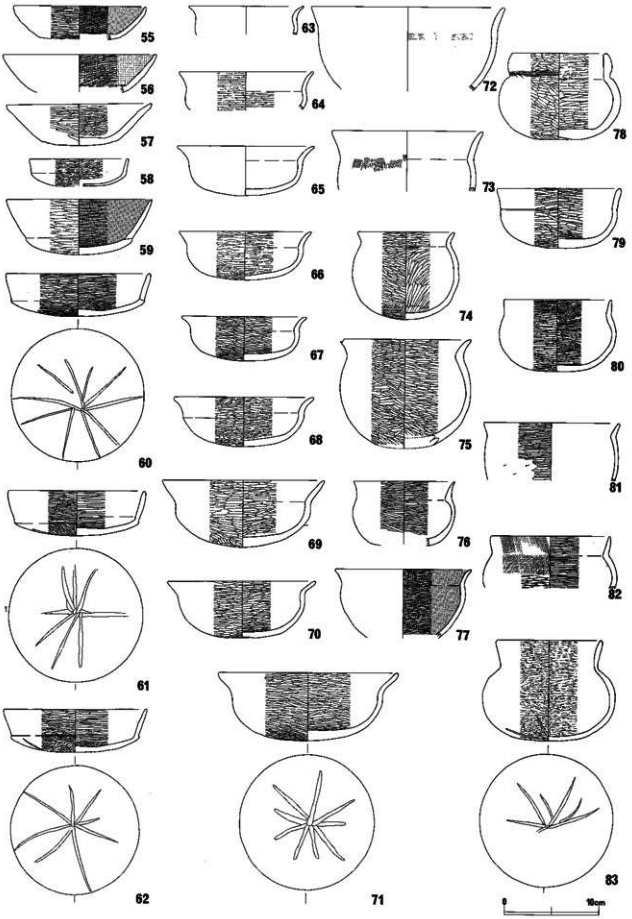
第277図　古墳時代中期の土器（1）



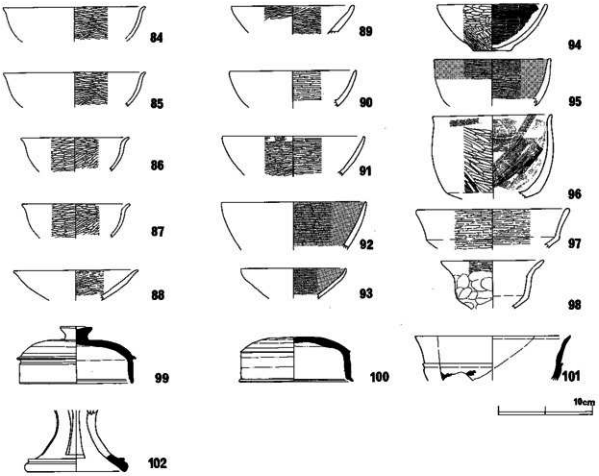
第278図　古墳時代中期の土器　(2)



第279図　古墳時代中期の土器　(3)



第280図　古墳時代中期の土器　(4)



第281図　古墳時代中期の土器 (5)

球形の体部に直立する口縁部を有する類(78・82・83)、口径と底径の差が小さく、底部から内彎気味にほぼ直立して口縁部にむかう類(95・96)、口径と底径の差が大きく、内彎しながら口縁部にむかう類(94)、片口を有する類(10)に分けることができる。

甑形土器(第279図40～43)

42は中央部が橋状になる。

甕形土器(第277図8)

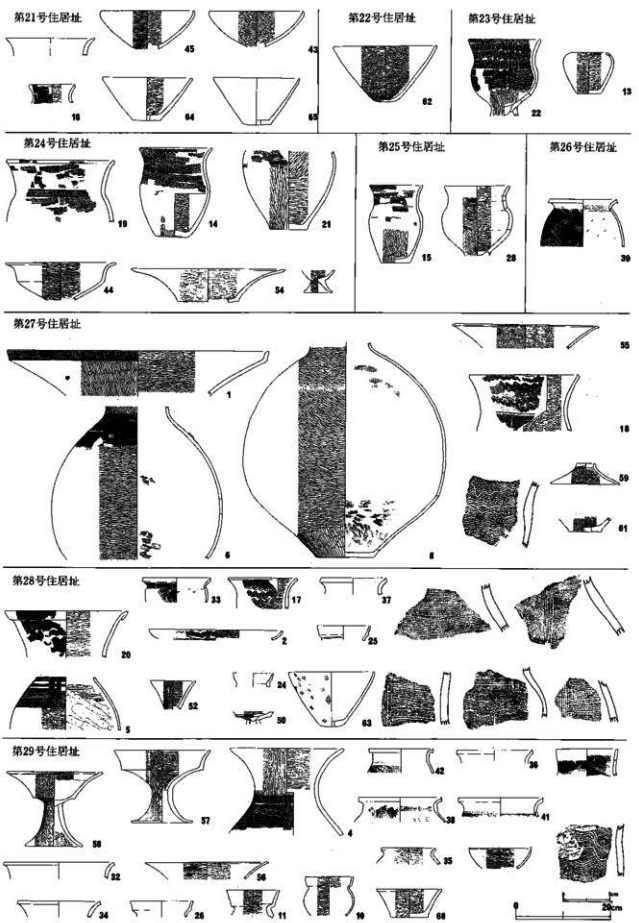
8は土師器であるが、丁寧にミガキ整形された精製品である。

壺形土器(第281図100)

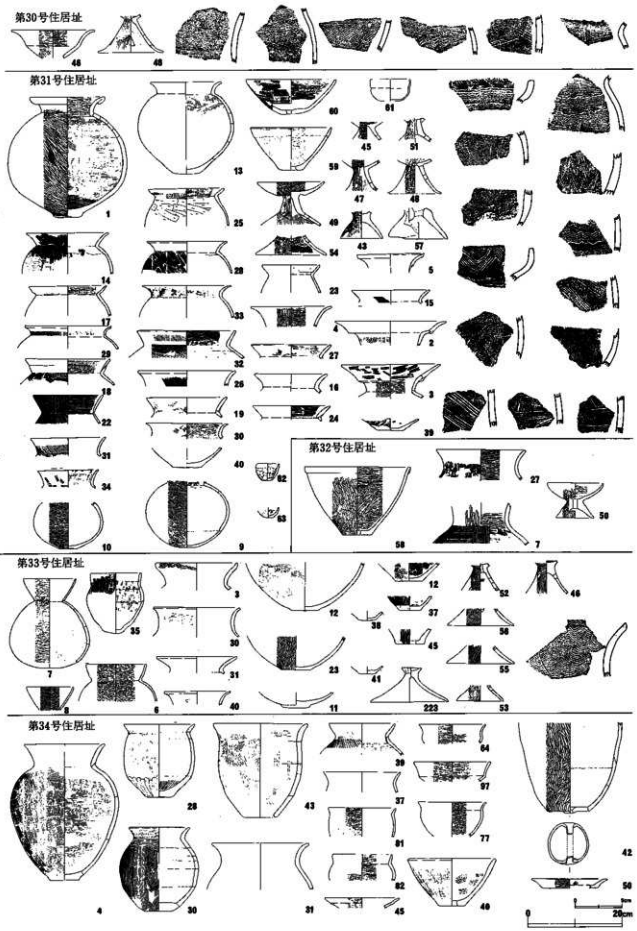
99・100は第38号居住址から出土した完形品で、TK208前後の時期の所産と考えられる。

その他

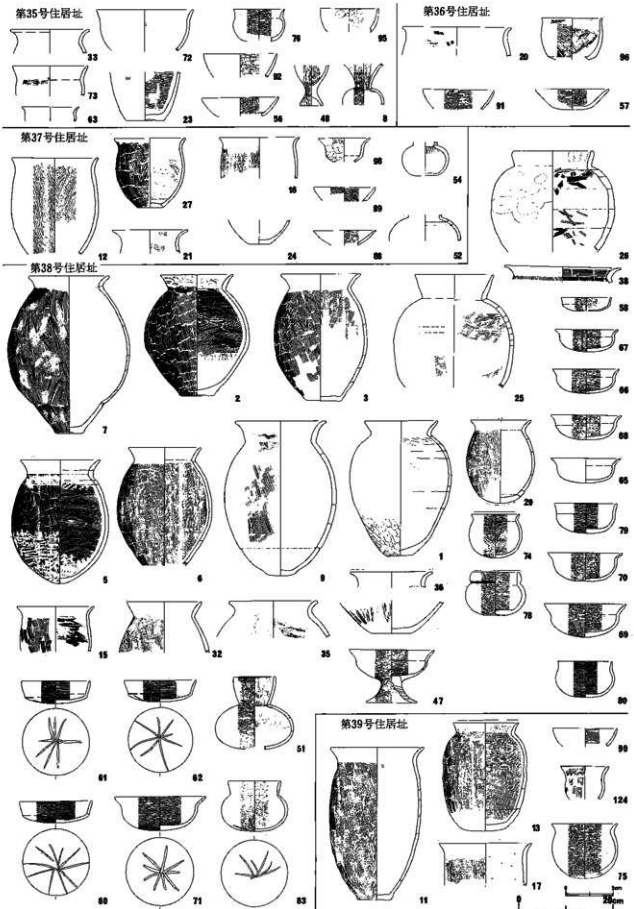
この他に破片が小さく器種が不明な土器や、類例が少ない土器をまとめた。(88～91・93・97・98)



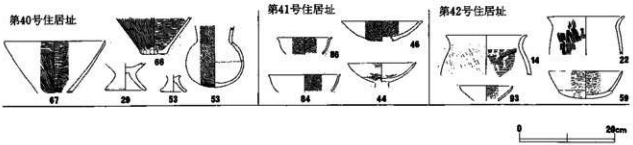
第282図　弥生時代後期遺構出土の土器



第283図　弥生時代後期から古墳時代中期遺構出土の土器



第284図　古墳時代中期遺構出土の土器　(1)



第285図　古墳時代中期遺構出土の土器　(2)

第6節　平安時代

1　概　要

平安時代の遺構・遺物はA・B・E・F区から検出されている。いずれも独立した遺跡と考えられる。

A区では住居址が距離をおき2棟、B区では近接して4棟が検出されている。E区では土師器焼成遺構1基・土坑6基、F区では住居址4棟・土師器焼成遺構2基・土坑5基・土器集中地点1基等が検出されているが、後世の攪乱が著しい。土師器焼成遺構の検出は注目すべきであろう。

2　A区の遺構

(1)　住居址

第44号住居址(第287図)

位　　置：Ⅳ－Y22・23

規模と形態：一辺4mの方形である。

遺物出土状況：覆土中の破片で、出土例が多かったが、甕が南壁に1個体、こわれたかまど付近からほぼ完形の小形甕形土器と杯が出土した。

覆土堆積状況：不明。

壁　　：掘りこみ深く、明瞭に立ち上がる。

床　　面：とくに貼床や堅い部分は認められなかった。

柱　　痕：検出されなかった。

周　　溝：認められない。

か　ま　ど：東壁のほぼ中央に河原石を芯とした長さ160cm、幅60cmのかまどが検出された。焼土は若干認められる程度で、粘土等は認められなかった。

切　　合：古墳時代の第34号住居址を切っている。

第45号住居址(第287図)

位　　置：V－P－8・9

規模と形態：一辺4.4mの方形である。

遺物出土状況：覆土中から土器が破片で出土した。また、八稜鏡が一面出土したが、特異な出土状況ではなかった。

覆土堆積状況：流れこみ堆積と思われる。

壁　　：明瞭に立ち上がっていた。

床　　面：良好である。

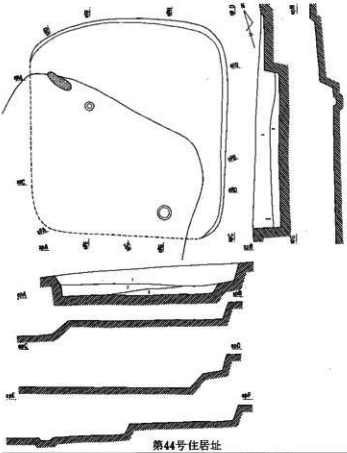
柱　　痕：認められない。

周　　溝：認められない。

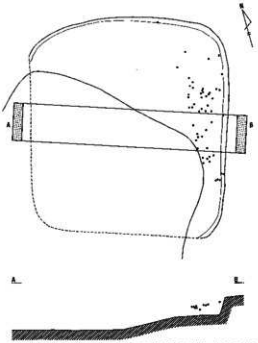
か　ま　ど：南東隅に石組かまどが検出されたが、弥生時代後期の住居址を切って、同期の床面に構築されていたため、陥没し原形をとどめていない。

遺　　物：八稜鏡・土器。

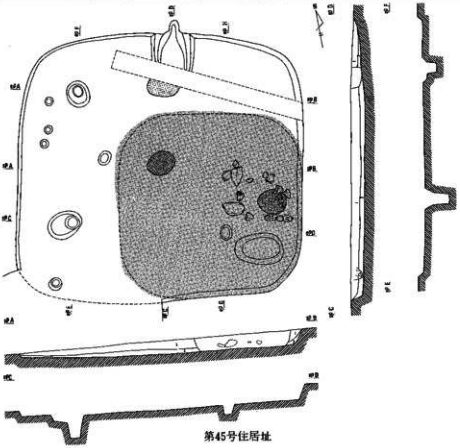
切　　合：弥生時代後期の第28号住居址を切る。



第44号住居址



第44号住居址遺物出土状況



第45号住居址

0　2m

第287図　平安時代の住居址　(1)

3　B区の遺構

(1)　住居址

第46号住居址(第288図)

位　　置：Ⅶ-L-21・22

規模と形態：一辺約5.4mの方形である。

遺物出土状況：かまどの南側にある土坑中よりほぼ完形の杯が約10個休出土した。他の遺物は覆土中から破片で出土した。

覆土堆積状況：掘りこみが浅く、攪乱があるため不明である。

壁　　：掘りこみが浅く、やや不明瞭であった。

床　　面：軟質であった。

柱　　痕：不規則ではあるが四隅に対応しているようである。

周　　溝：認められない。

かまど：北壁ほぼ中央に、かまどの底部分のみが検出された。

第47号住居址(第288図)

位　　置：Ⅶ－L－24

規模と形態：壁は確認されず全体の形態は不明である。おそらく、一辺4m前後の方形になるものと思われる。

遺物出土状況：住居址のほぼ中央部のピットから出土したのみである。

覆土堆積状況：不明である。

壁　　：検出されない。

床　　面：軟質であった。

柱　　痕：6基検出されているが、西側壁にそって3基が並ぶ他は不規則である。

周　　溝：検出されなかった。

かまど：検出されなかった。

第48号住居址(第289図)

位　　置：Ⅶ－L－24

規模と形態：一部を検出したのみで、全体像は不明である。

遺物出土状況：覆土中から土器が破片で出土した。

覆土堆積状況：単層で不明である。

壁　　：明瞭に立ち上がる。

床　　面：軟質である。

柱　　痕：不規則な配列である。本住居址に伴わない柱痕も含まれていると思われる。

周　　溝：認められない。

かまど：検出されなかった。

第49号住居址(第289図)

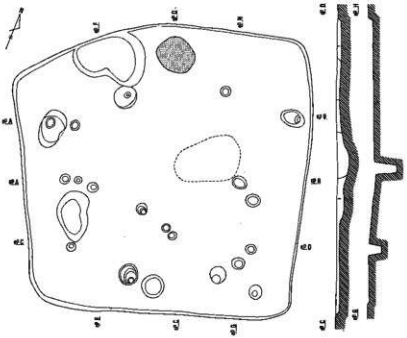
位　　置：Ⅶ－K－25、Ⅶ－L－21

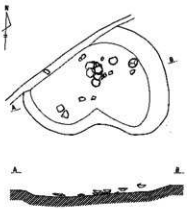
規模と形態：一辺3.6mの方形の遺構を、径2.6mの円形の遺構が切っている。

遺物出土状況：覆土中から土器が破片で出土した。

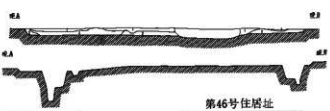
覆土堆積状況：流れこみ堆積と思われる。

壁　　：不明瞭であった。

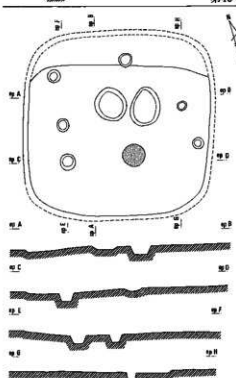




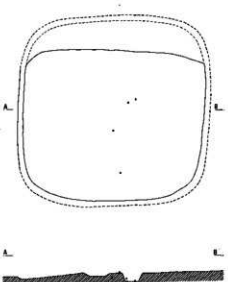
第46号住居址遺物出土状況



第46号住居址

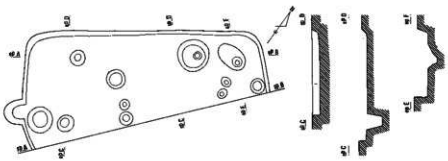


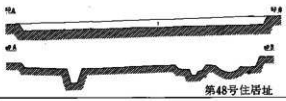
第45号住居址



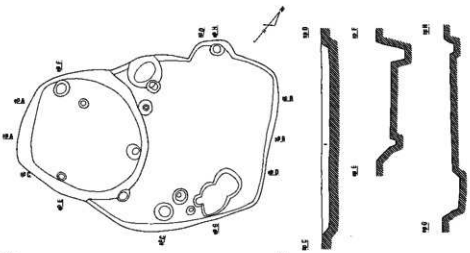
第47号住居址遺物出土状況

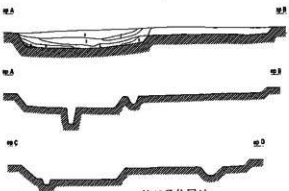
第288図　平安時代の住居址　(2)





第48号住居址





第49号住居址

第289図　平安時代の住居址 (3)

床　　面：方形遺構の床面は軟質であった。
柱　　痕：不規則な配置で検出されている。
周　　溝：検出されなかった。
かまど：検出されなかった。
切　　合：円形遺構が方形遺構を切っている。
備　　考：２つの遺構の切り合いである。いずれも性格が明確でないが、方形の遺構は住居址の可能性があるため、ここで説明した。

4　Ｅ・Ｆ区の遺構

(1)　住居址(第290図)

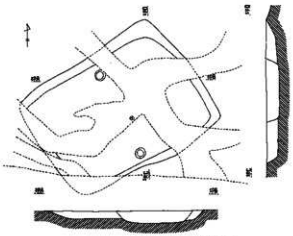
Ｆ地区では平安時代の住居址が５棟検出されている。いずれも段丘斜面下部のテラス状平坦面に位置する。テラスは水さらし場状遺構のある小谷を境に東・西に分かれ、東側テラスに３棟、西側テラスに２棟ある。いずれも遺存状況は悪く、検出面から床までの掘り方は浅かった。かまどが明確に検出できたものは第53号のみである。東・西テラスともに、検出面の上には平安時代以降の遺物が包含される層が存在しており、かなりの撹乱をうけた様子が認められた。東側テラスのうち、第52・53号は切り合い関係をもち、少なくとも住居址の存続時期に２段階があることを示している。

第50号住居址(第290図)

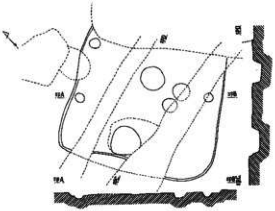
位　　置：ＸＶ－Ａ－３・４・８・９。テラス状平坦面上にあり、縄文時代第２号住居址に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。第２号溝に切られ、南西隅を暗渠配水により消失していた。
規模と形態：358cm×279cmの隅丸長方形を呈し、深さ18cm前後をはかる。
遺物出土状況：南東隅床面に土器がまとまって出土した。全体量は少ない。
覆土の堆積状況：黒褐色土の単層。炭・焼土粒子が若干まじる。
壁　　：立ち上がりは緩やかであった。
床　　面：地床で堅緻でない。
柱　　痕：東西壁際に各１基検出された。
周　　溝：検出されなかった。
かまど：不明であった。
備　　考：遺物の出土状況から、本址かまど位置は東壁中央にあったと推測される。

第51号住居址(第290図)

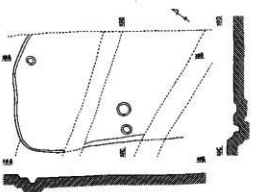
位　　置：15－Ａ－８・９。テラス状平坦面上にあり、第50号住居址に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。第52号住居址に切られ、中央部を暗渠配水により消失していた。
規模と形態：276cm×330cm。隅丸方形を呈すと推測される。深さ７cm前後をはかる。
遺物出土状況：南西隅床面に土器がまとまって出土した。他全体量が少ない。
覆土の堆積状況：暗褐色土の単層。炭粒子が若干まじる。
壁　　：立ち上がりはやや緩やかであった。
床　　面：地床で堅緻でない。
柱　　痕：北壁ぞいに２基検出された。
周　　溝：検出されなかった。



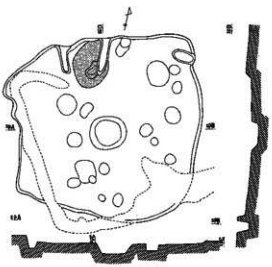
第50号住居址



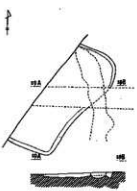
第51号住居址



第52号住居址



第53号住居址



第54号住居址

第290図　平安時代の住居址 (4)

かまど：北壁部の焼土分布がそれにあたると考えられる。

備　　考：第52号住居址との切り合い関係は、平面では判断が困難であった。南壁のピット１基が出入り口施設に関連したものと判断される。

第52号住居址(第290図)

位　　置：ＸＶ－Ａ－９。テラス状平坦面上にあり、第50号住居址に近接する。

検　　出：Ⅶ層上面。第51号住居址を切り、第２号溝に切られる。東側をトレンチにより、中央部を暗渠配水により消失していた。

規模と形態：274cm×250cm。形状は不明。深さ７cm前後をはかる。

遺物出土状況：検出面よりも上層の、北東側で土器がまとまって出土したが、本址に伴うものか判断できない。覆土中から少量の土器が出土した。

覆土の堆積状況：暗褐色土の単層。炭粒子が若干まじる。
壁　　：立ち上がりはやや緩やかであった。
床　　面：地床で堅緻でない。
柱　　痕：ピット3基検出されたが柱穴かどうか不明であった。
周　　溝：検出されなかった。
か　ま　ど：不明であった。
備　　考：やや小形で、かまどなどの諸施設も検出されていないが、ここでは住居址とした。

第53号住居址(第290図)

位　　置：14－E－9・10・14・15。テラス状平坦面上にあり、第54号住居址に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。第5号溝と重複するがその前後関係は不明瞭であった。時期不明の多数のピットが床面を抜いているので全体に攪乱が激しかった。
規模と形態：平面382cm×382cmの西側が狭まる隅円台形を呈し、深さ17cm前後をはかる。
遺物出土状況：検出面上下で出土した。
覆土の堆積状況：黒褐色土の単層
壁　　：立ち上がりはやや緩やかであった。
床　　面：地床で堅緻でない。
柱　　痕：ピットは2基確認されたが、柱穴か不明であった。
周　　溝：検出されなかった。
か　ま　ど：カマドは北壁中央やや西寄りで検出された。火床部は壁内に納まり、袖は地山を掘り残して造られていた。

第54号住居址(第290図)

位　　置：XIV－E－19。テラス状平坦面上にあり、第53号住居址に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。検出面で土器の集中が認められた。第3号溝に切られる。本址西側は排水路及び調査区外となる。中央部は暗渠配水によって消失していた。
規模と形態：現況で平面256cm×108cm。形状は不明。深さ5cm前後をはかる。
遺物出土状況：帯状に土器の集中が中央部で認められた。南側で人頭大の礫が出土した。
覆土の堆積状況：黒褐色土の単層。
壁　　：立ち上がりはやや緩やかであった。
床　　面：地床で堅緻でない。
柱　　痕：検出されなかった。
周　　溝：検出されなかった。
か　ま　ど：不明であった。

(2)　土師器焼成遺構(第291図)

F地区に2基とE区に1基、合計3基が検出された。いずれも焼土が顕著に認められ、多量の土師器片が出土しているところから、土師器焼成遺構として報告する。

形状は、1・2号が方形をなすと推測され、3号は不整な楕円形である。立地は2号が斜面上の他は平坦面で検出されている。また、1号を除いて周囲に平安時代の住居址が存在する。底面の状況は、2号を除いて焼土の広がりを認めず、焼土自体は覆土中にあるといった状況であった。また、炭は3号で確認されたものの、小粒あるいは炭粉である。2号の焼土は底から南壁面にかけて広がっており、とくに壁面の

焼け方が著しく、斜面下からみて奥の方に燃焼が広がったことをうかがわせる。出土した土師器は、３号で甕・坏類があったものの、大半が甕の破片である。焼成技法については検出状況の制約があり不明瞭である。１号の周囲に認められるピットは、遺構に伴うものか判然としないが、ピット内から土器の破片が出土している。

現段階の研究では、土師器焼成遺構の形態の主流は円形・楕円形などになるという。その点では、１・２号の方形状の形態は、本遺跡に特徴的といえるであろう。

この他、工房跡・粘土採掘坑などは今回検出されていない。また、粘土採掘に関しては、本遺跡の発見の端緒が現代の瓦粘土採掘場所からであったことからみて、周辺に存在する可能性は極めて高いと考えられる。

第１号焼成遺構(第291図)

位　　置：ⅩⅡ－Ｒ－13。

検　　出：Ⅳｃ層中位。検出面で土器が散在していた。東側の平面形状は不明である。

規模と形態：150cm×150cmの正方形と推測される。

遺物出土状況：土器片が多量に出土した。これらは火をうけたため、表面が薄く剥離したものがほとんどであった。

覆土の堆積状況：黒褐色土の単層。焼土の含有量が著しい。

備　　考：検出面の関係から、浅い掘り方を確認した結果となった。本来の掘り方は不明である。

第２号焼成遺構(第291図)

位　　置：ⅩⅣ－Ｊ－３。段丘斜面上にあり、テラス状平坦面への変換点付近となる。

検　　出：縄文遺物包含層上面。黒褐色土が落ちこむ。部分的に焼土が帯状に認められた。

規模と形態：160cm×160cmの方形と推測される。突出する北西隅は傾斜にそって遺物と焼土が流れこんだもので、掘り方はほとんど認められない。部分的に壁が火熱により赤化し、北幅で著しかった。底面も部分的に欠けるものの、薄い焼土の広がりが認めれた。

遺物出土状況：南側に偏って遺物の集中が認められた。大半が甕の破片で、敷かれたようにあった。

覆土の堆積状況：黒褐色土の単層。焼土ブロックは一部で認められたにすぎない。

備　　考：第１号のような土器表面の剥離などは認められない。第１・２号とも炭がほとんど検出されていない。

第３号焼成遺構(第291図)

位　　置：ⅩⅤ－Ａ－４。テラス状平坦面上にある。

検　　出：Ⅶ層上面。検出面で土器が散在していた。時期不明のピットに切られる。

規模と形態：160cm×68cmの靴底形。深さ13cmの断面皿状を呈す。

遺物出土状況：土器の大半が１層から出土した。

覆土の堆積状況：１・４層で焼土粒が多く認められ、炭の混入も顕著であった。２層は黄褐色土の塊が混入するところから、埋め戻された可能性がある。

備　　考：第１・２号と比較して、平面形状や坏類の出土、炭の混入といった点が異なる。

(3) 土　坑(第291図～第292図)

Ｅ・Ｆ地区からの検出で、計11基ある。立地状況から、以下のように３区分される。

高位段丘面上で検出されたもの－１～３号(Ｆ区)

後背低地面上で検出されたもの－4～9号(E区)

段丘斜面下部のテラス状平坦面上で検出されたもの－10・11号(F区)

3号については住居址の可能性もあるが判断しがたい。分布密度は極めて薄いが高位段丘上に該期の生活の場があったといえよう。後背低地面上では検出状況の制約もあって、掘り方がほとんど認められない。やや離れるが1号土師器焼成遺構が存在することから、相互の関係が推測される。11号については第2号溝に伴うものと考えられる。

第1号土坑(第291図)

位　　置：14－O－14。高位段丘面上にある。

検　　出：Ⅷ層上面。暗褐色土に耕作による攪乱土がまじる。

規模と形態：50cm×50cmのY字状形、深さ10cmの断面すり鉢状を呈す。攪乱土がまじることから本来の形状をとどめていないと考える。

遺物出土状況：覆土内に溜ったようにあった。土器に混じって礫が1点出土した。

覆土の堆積状況：暗褐色土に耕作による攪乱土がまじる。

備　　考：土坑状の遺構、性格は不明。

第2号土坑(第291図)

位　　置：XV－F－17。高位段丘面上にある。

検　　出：Ⅷ層上面。検出面で土器のまとまりが認められた。掘りこみはない。東側を攪乱される。

第3号土坑(第292図)

位　　置：XV－F－11。高位段丘面上にある。

検　　出：Ⅷ層上面。検出面で土器が散在していた。焼土や炭の分布・掘りこみは、土器を取りあげた段階で明瞭となった。

規模と形態：掘り込みは110cm×70cmの楕円形、深さ5cmの断面皿状を呈す。

遺物出土状況：土器は掘りこみより上層で出土し、掘りこみより西側の遺物のうち炭の分布範囲内のものは炭の上端部での出土であった。

覆土の堆積状況：掘りこみ部分は地山Ⅷ層に近似し、若干締まりのなく、焼土粒が若干まじっている程度であった。

備　　考：住居址のかまどの残存の可能性も考えられるが、判断しがたい。

第4～9号土坑(第292図)

位　　置：XII－R－17。

検　　出：IVc～V層。6地点で土器のまとまりを確認した。掘りこみはほとんど確認できず、覆土と判断した暗赤褐色土の残存により検出した。

規模と形態：第11号を除いてほぼ30cm～40cmの円形を呈す。

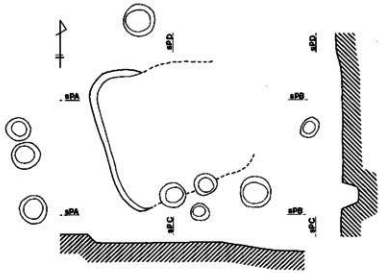
遺物出土状況：土器片がまとまって出土。

備　　考：周辺の該期の遺構は溝・焼成遺構などがある。

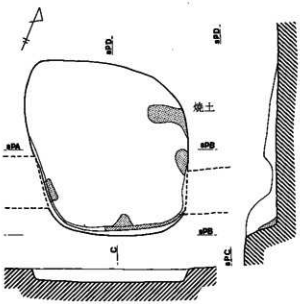
第10号土坑(第292図)

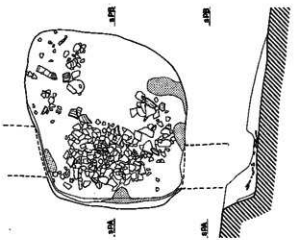
位　　置：XV－A－3・4。テラス状平坦面上にあり、縄文時代第2号住居址の推定範囲内にある。

検　　出：Ⅷ層。黒褐色土が落ちこむ。



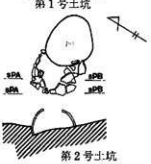
第１号土師器焼成遺構



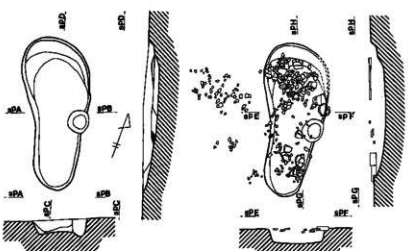


第２号土師器焼成遺構

第１号土坑



第２号土坑



第３号土師器焼成遺構

第291図　平安時代の土師器焼成遺構・土坑　(1)